
女學世界
第七卷
第十三號
博文館發行

◉美顔水は天下唯一の美白光艶剤なり◉

化粧用美顔水は品質最もよろしく方今満天下の貴婦人令嬢作入争ふて之を用ひ賞賛の聲靨すし色を白くしきめをこまかに光艶をだしうつくしくなる殊に化粧に用ゆればおしろい意のまゝにのりむらにならず常に用ふれば「花の顔せ雪の肌となり」眞に玉を欺く美しき顔となるべし

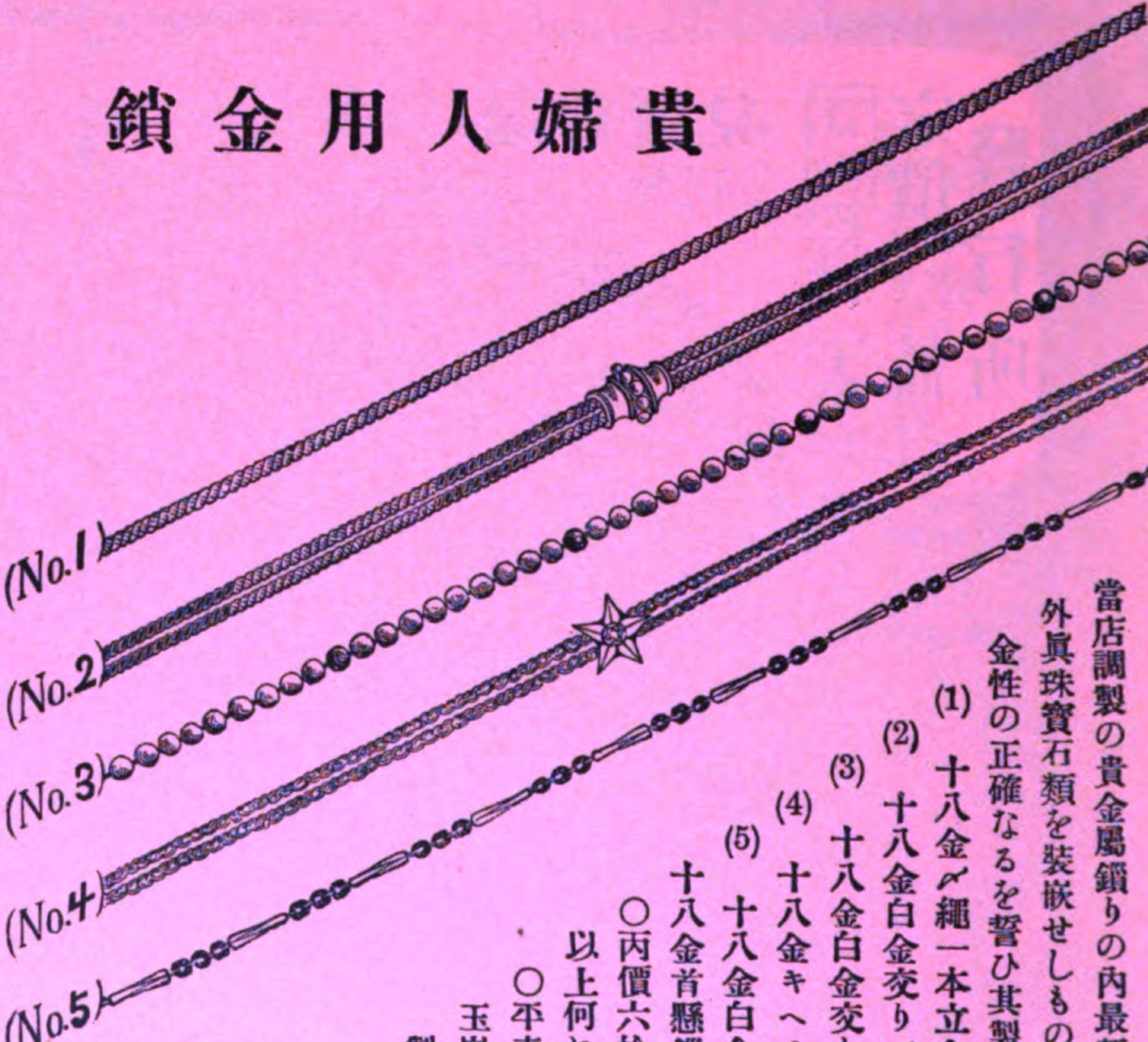
〈本品御購求の節は化粧用美顔水と御指名を乞ふ〉

▲東京市内は勿論日本全國各地いたる處の有名なる小間物店にて販賣す



女學世界 第七巻第拾參號 目次

貴婦人用金鎖



當店調製の貴金屬鎖りの內最新の樣式に成る四五種を爰に記載致候此外眞珠寶石類を裝嵌せしもの及首懸鎖り等も各種出來致居り何れも金性の正確なるを誓ひ其製作も精巧を極めし物に御座候

(1) 十八金〆縄一本立金拾六圓(1)十四金製〆縄一本立金拾四圓
(2) 十八金白金交り〆縄二本立胴〆總眞珠入……金五拾六圓
(3) 十八金白金交り玉ツナギ一本立……………金貳拾七圓
(4) 十八金キヘイ二本立星形ルビー入胴締…金貳拾八圓
(5) 十八金白金交り八重子持飾り付………金參　拾　圓

十八金首懸鎖り飾り付 甲價壹百圓 ○乙價七拾五圓 ○丙價六拾圓 丁價五拾圓 戊價三拾五圓 巳參拾圓

以上何れも證明書を相添へ申候

○平素の御愛顧に酬ゆる爲め貴金屬製品寶石玉嵌入の御修覆品有之候はゞ丁寧迅速に調製可致候間御下命被下度候

東京市京橋區南傳馬町三丁目
大西白牡丹
特 電話本局三十番
振替貯金口座九二二九三番

女(いの二)

三十八年一月創立

毎月壹回發兌

((外に年四回増刊(二月五月八月十一月))



毎號 東宮妃殿下賜上覽

◎三巻第十三號 十月一日發兌

選評家

文學士沼波先生。 廣津柳浪先生。
巖谷小波先生。 河井醉茗先生。
佐々木信綱先生。 山中古洞先生。
其他編輯局諸氏

▲懸賞 投書募集項目 (毎月十五日〆切)

◎叙事文 ◎抒情文 ◎評論文 ◎俳句
◎小説 ◎新體詩 ◎書翰文 ◎和歌
◎新歌謠 ◎短文 ◎笑話 ◎圖書
◎文藝遊戲 (其他誌友諸孃の思ひ〳〵の事)

賞品

●甲種● 一等 拾圓 二等 参圓 三等 八拾錢
四等 五拾錢 五等 四拾錢

●乙種● 一等 五圓 二等 壹圓 三等 六拾錢
四等 三拾錢 五等 廿錢

◀詳細の事は本誌に就て御覧を願ます▶

口繪 三宅克己先生揮毫 水彩畫(石版数度密刷) 繪端書、繪手本、寫眞 光澤紙刷挿入

定價 最廉無比 壹册(大判百卅頁) 金拾錢 郵税壹錢

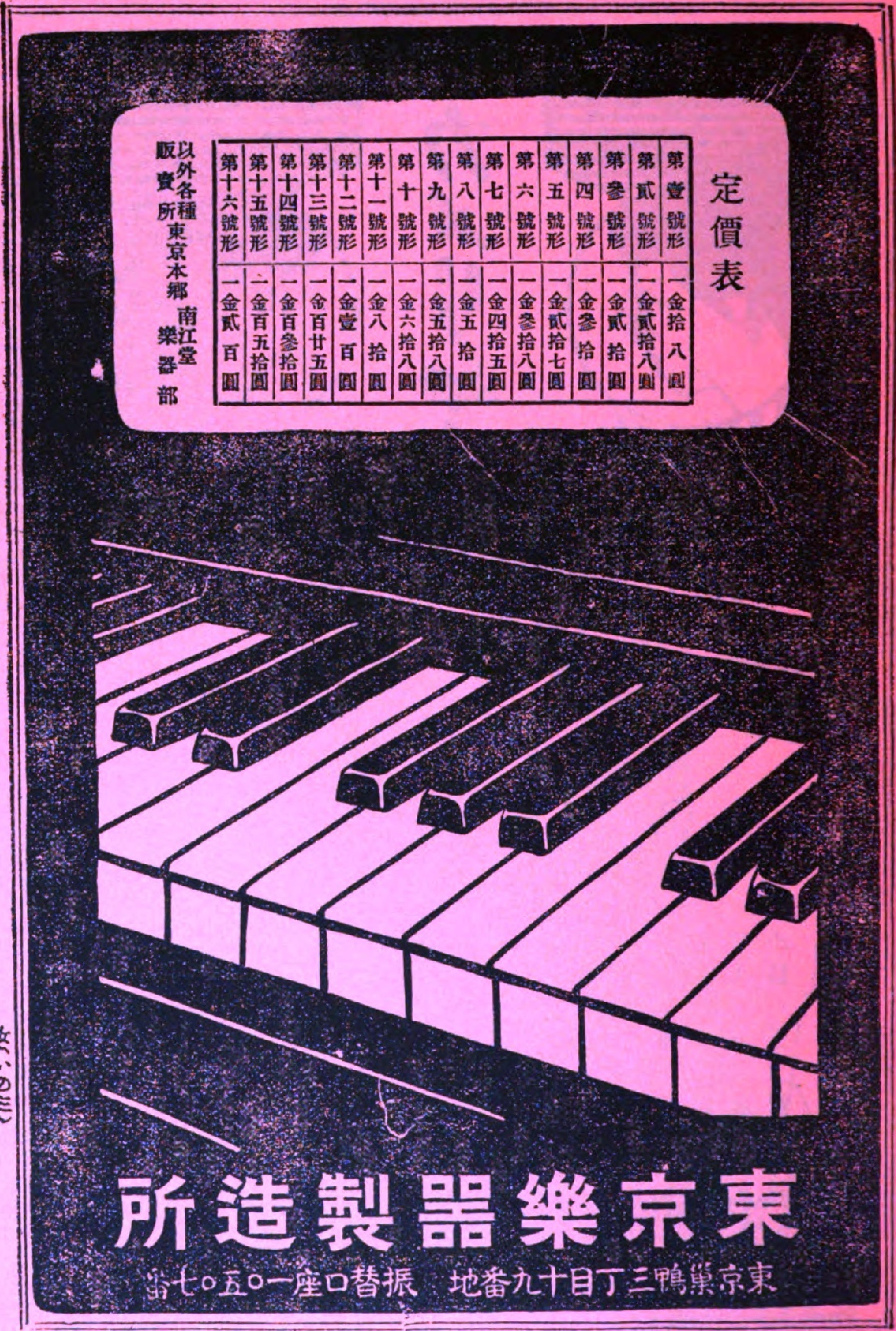
●半年分(増刊共八册)郵税とも前金八拾四錢

●壹年分(同 十六册)同 前金壹圓六拾錢

發行所 東京市京橋區大鋸町十一 振替口座第壹七貳九番 (電話本局六百七番) 女子文壇社

▲賣捌所は各地到る處にあり、若し最寄に取次販賣店なくば發行所へ購讀御申込を乞ふ

女(いの二)


定價表
第壹號形 一金拾八圓
第貳號形 一金貳拾八圓
第參號形 一金貳拾圓
第四號形 一金參拾圓
第五號形 一金貳拾七圓
第六號形 一金參拾八圓
第七號形 一金四拾五圓
第八號形 一金五拾圓
第九號形 一金五拾八圓
第十號形 一金六拾八圓
第十一號形 一金八拾圓
第十二號形 一金壹百圓
第十三號形 一金百廿五圓
第十四號形 一金百參拾圓
第十五號形 一金百五拾圓
第十六號形 一金貳百圓
以外各種
販賣所東京本郷 南江堂樂器部
東京樂器製造所
東京巣鴨三丁目十九番地 振替口座一〇五〇七番



カメリヤ洗粉
カメリヤは色を白くし
艶をよくする最新最良の洗粉なり
カメリヤは優美なる香氣を
有し一度之れを用ゆれば芳
香永く身邊に薫りて自から
心氣爽快ならしむ
殊に貴紳淑女の
高等化粧料とし
て大に社會に高
評を博せらるゝ
本邦唯一の洗
粉也
定價
大瓶 廿五錢
瓶入 十二錢
袋入 五錢
小袋 三錢
發賣元 ライオン齒磨
本舗 東京神田
小林富次郎

女(いの四)

時世粧



河崎蘭香筆

(その二)

本誌は全國各女學校の教育方針に依りて編輯す

記事清新

婦人世界

内容豐富

十月一日發行 毎月一回 二巻 拾一號 一冊 拾五錢 郵税一錢五厘 六冊郵税共九十錢 十二冊同一圓七十五錢

◎婦人社會の大評判となれる **男女戀愛論**……村井弦齋

◎辨當料理談（弦齋夫人）

◎少女奇談 風船物語 本號より掲載

◎私の感心せる奥樣（藤生貞子）

◎齒痛應急手當（志村ドクトル）

◎我家にて實行せる家庭懇親會演說會（加納子爵嗣子）

◎萩を詠じたる古來の名歌評釋（渡邊白水）

◎女學生パン屋開店の實歷（相馬良子）

◎私が父母より受けたる教訓（後閑高師敎諭）

◎本號には千圓を讀者に頒つ懸賞新案募集あり

◎女子事務員の實歷談

◎子守は如何に選擇すべきか（女學館 藤崎つね子）

◎小兒に肉類を與ふる注意（加藤博士）

◎我が家の子供の育て方（竹越夫人）

◎棚橋絢子刀自面影（胡桃樂石）

◎問答 婦人病…△育兒△齒科……△質問隨意

口繪

△伯爵柳原義光氏夫人…

△松方侯と松平伯の一族

△名家の令孃と新婚寫眞

△彩色石版……跡見花蹊

◎安產するには如何なる攝生をなせば宜きか……醫學博士 榊順次郎

發行所 東京京橋南紺屋町十二番地 實業之日本社（郵便振替貯金口座參貳六番） 全國賣捌書店

女(ろの三)


ゼム
THE GEM
衛生家必携
懐中良藥
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用ひて終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渴を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり
ゼム定價
七十五粒入 十錢
百六十粒入 廿錢
四百卅粒入 五十錢
九百粒入 一圓
容器入ゼム 二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會

(ろの四)

中秋



大下藤次郎筆

女(はの一)

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグネシヤ、苦味劑の如き一時おさえムチスカシ的舊式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ眞藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發見せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絶し無病強健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價)壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容料

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證ある劑價は普製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓八拾錢

以上貳藥專賣元　東京市神田五軒町拾九番地　**日新館藥房**

血塊流下

通經劑

本……經す……する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三……もキレーに流下す又特別製分を用れば半年……**血塊にても**必ず立處ろに流經す且つ久しく經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するを確證す但し本劑は其奏効極めて**確實顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効な**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて一手賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證新發見藥

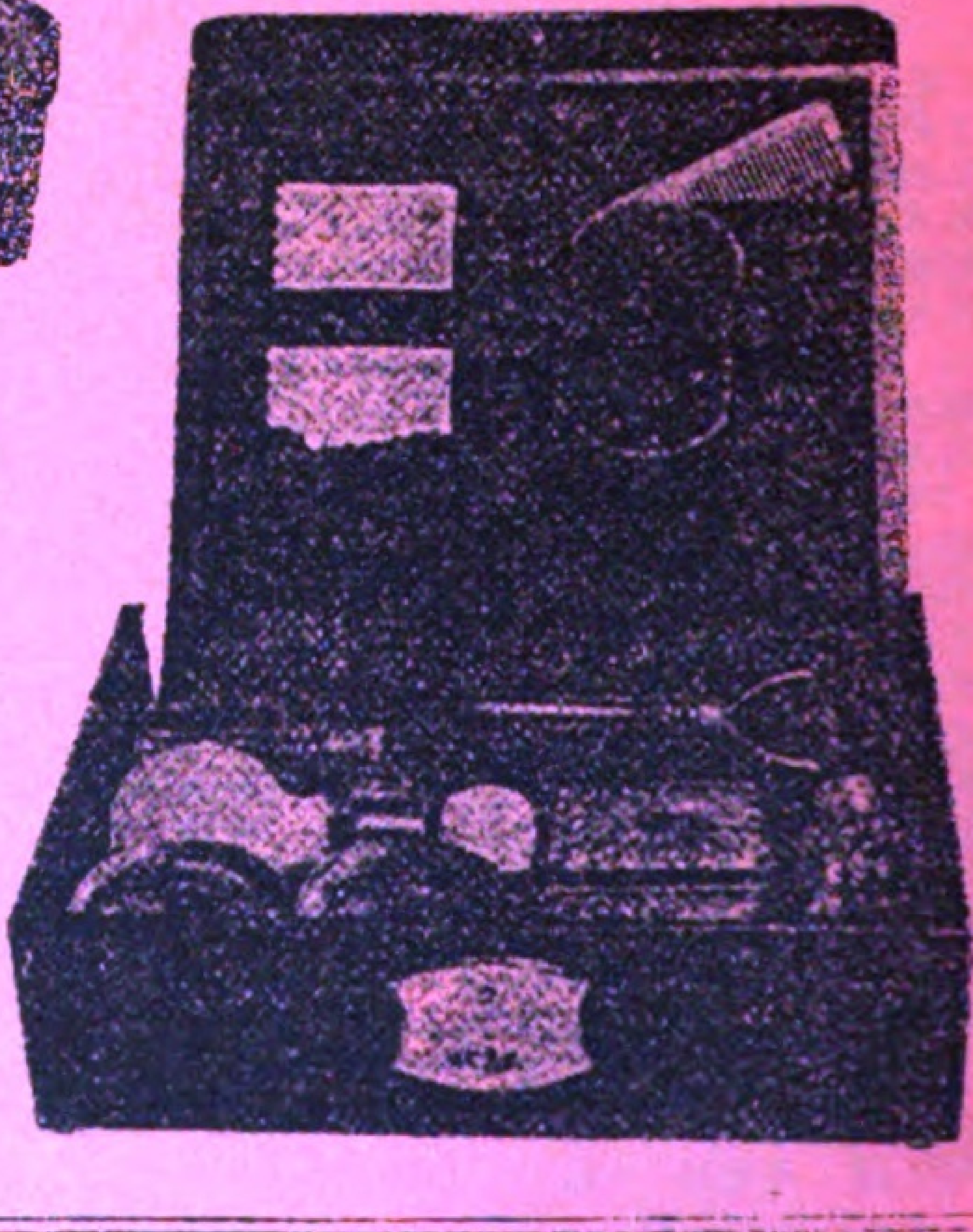
醫療實驗百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に用ひ苦惱を脱せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增のこと

以上貳藥專賣元　東京市神田五軒町十九番地　**日新館藥房**(電話下谷五四六番)









女（にの三）

東京勸業博覽會

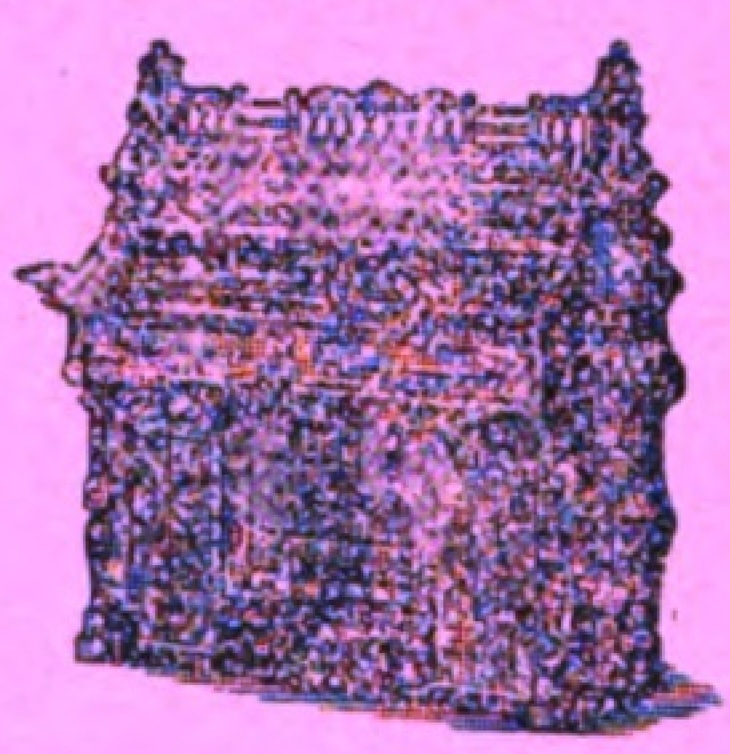
名譽銀牌.壹等賞牌受領

山葉風琴

（保險付）

品名	價格
第壹號	一八、〇〇
第貳號	二八、〇〇
第參號	二五、〇〇
第四號	三五、〇〇
第五號	二七、〇〇
第六號	三八、〇〇
第七號	四五、〇〇
第八號	五〇、〇〇
第九號	五八、〇〇
第拾號	六八、〇〇
第拾壹號	八〇、〇〇
第拾貳號	一〇〇、〇〇
第拾參號	一二五、〇〇
第拾四號	一三〇、〇〇
第拾五號	一五〇、〇〇
第拾六號	二〇〇、〇〇
第拾七號	三〇〇、〇〇
第拾八號	三五〇、〇〇
大和オルガン壹號	四八、〇〇
同貳號	八五、〇〇
座敷用オルガン壹號	二一〇、〇〇
同貳號	二七〇、〇〇



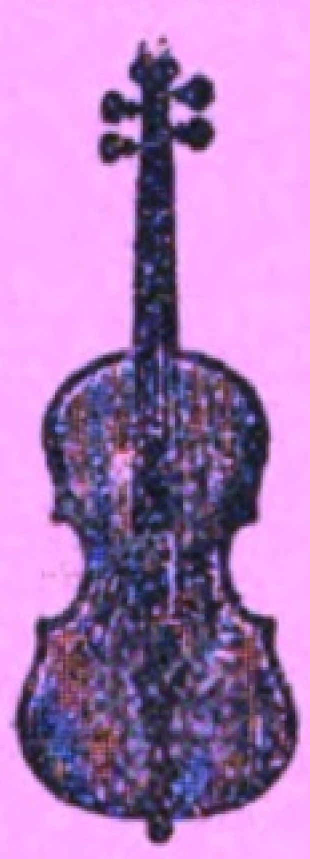


○山葉洋琴　金參百參拾圓以上金千參百圓迄各種

◎舶來洋琴　參百圓以上參千圓迄各種

◎舶來風琴　百圓以上千五百圓迄各種

○鈴木ヴァイオリン　金貳圓以上百貳拾圓迄各弓七拾錢以上箱壹圓五十錢以上各種



◎舶來ヴァイオリン及弓箱等各種

◎樂隊用陸軍々樂用吹奏樂器各種

◎戰捷紀念國旗印銀笛數種

◎八人組織簡易吹奏樂器一組金參拾圓

右の外手風琴、ハーモニカ、舶來フラジョレット各樂器附屬品、和洋音樂書各種郵券弐錢御送附あらば詳細なる目錄進呈す

北村季晴編

長唄樂譜第六編

道成寺



大形顯美本　定價金壹圓　不要郵稅

ピアノオルガン

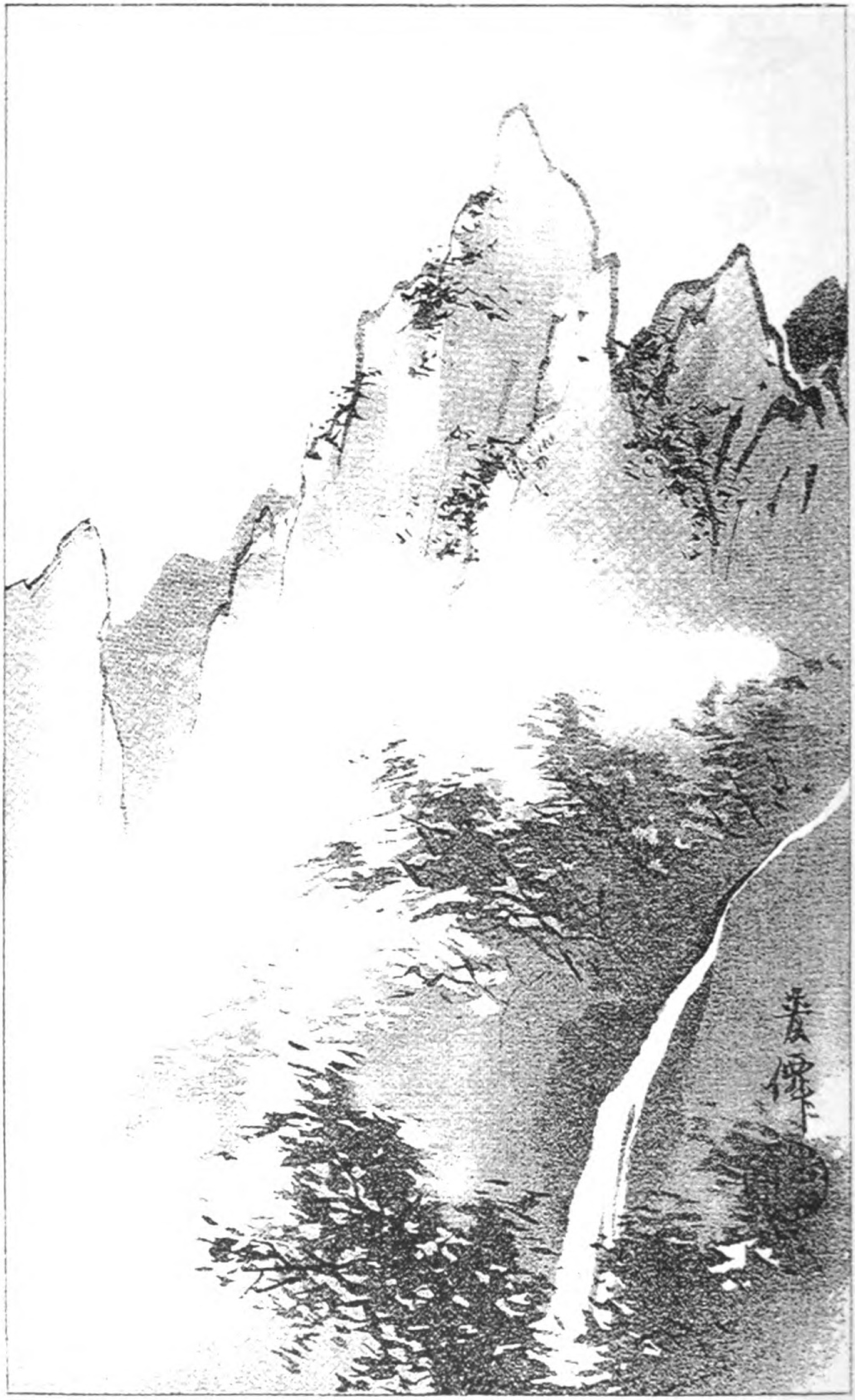
調律修繕

（振替貯金口座壹五八〇番）

（女はの四）

東京市京橋區竹川町十三番地　合資會社　**共益商社樂器店**　電話新橋五二九　電報略號キヨ

初秋



福田麦仙筆

秋の日



加藤南山筆


1
2
3
4
5
6
6
7
8
10

生徒募集

●美術部（日本畫科・西洋畫科）
●技藝部（裁縫編物科・刺繡造花科・繪畫圖案科）
●美術部豫科
●選科

東京市下谷區谷中初音町四丁目（元美術院跡）

私立日本女子美術學校

校長　子爵　秋元興朝
監督　小山正太郎
校主　福島甲子三

月刊美術文藝雜誌

ハガキ文學

十月一日發行 四卷第十一號 ●一冊十錢郵稅不要 ●八冊前金七十五錢

▲内容概目▼

●秋十二句　久保天隨
●富士川と江川坦庵　白露庵主
●地底の二日間　漂浪生
●坪井博士訪問記　健脚生
●小品二篇
○予の中學生活（四）　窪田通治
●畑あらし　腕白入道
●北信濃路より　太田三郎
●秋風吟　太田寶水
●二日目　かげろふ
●奇士喜劒　孤堂生
●健全有趣味生活　佐治實然
●秋ぐさ　豬狩水村
●羅馬の黄昏　日野春水
○諸國珍話奇談（應募）
●怪蛇　齋藤氏
●濡草履　蓮牛醉
●嘉畔漫筆　坂井犀水

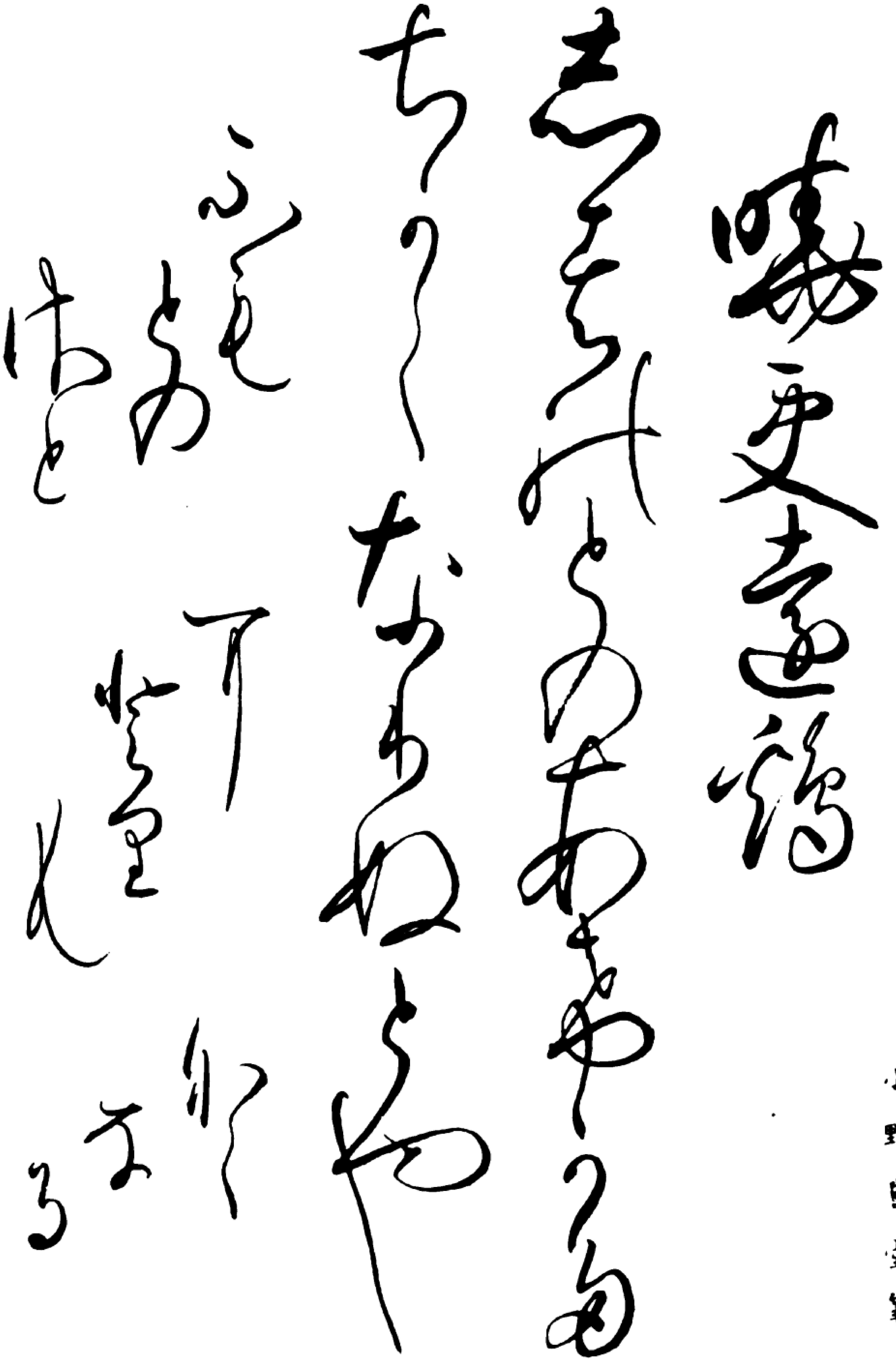
●雲の峰　野尻抱影
●新英文和譯　僞嬌生
●普通文　久保天隨選
●新體詩　兒玉花外選
●ハガキ文　橋本春郊選
●和歌　窪田空穗選
●俳句　内藤鳴雪選
●新川柳　窪田而笑選
●讀者通信　●如是錄　●文藝界時報等
●表紙（みゝづく）佐藤生集筆
●繪葉書（秋のつや）和田三造筆
口繪木版（〇諧十二題ち十）太田三郎筆●挿繪（木版）太田三郎、岡野榮、佐藤生集筆●寫眞版口繪數面
●懸賞應募スケッチ、繪葉書圖案、漫畫、等面數誌上に爛熳たり

發行所 東京小石川 日本葉書會 ●賣捌 全國各書林


於內外博覧會名譽大賞及金銀牌受領
元和二年創業
ヒゲタ印醤油
HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK
Patronised by the Imperial Household Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad
The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN
宮內省御用達
千葉縣
田中玄蕃釀造
銚子港
ヒゲタ印醤油


造花及半製品
造
器具材料卸小賣
造花裝飾用達
花
東京市九段坂
吉住商店
營業目録は御申込次第御送付可仕候

(二の四)



小野鵞堂筆

れふしみちこゝろ重御こゝろこう飛
ゆめゝにあそばし御遣め、
あまり書候秋くれあさしと、
此ぞくまゝふ見科と逢
ゑさ候ゑ代々てにまは
こゝろ免ときみちまの
了ゝ候あらんし ぐしよ

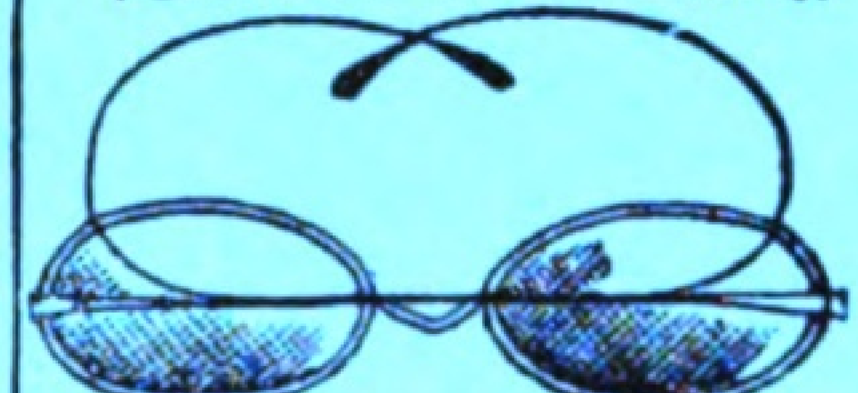
女(ほの二)

◉純金張新製品の完成

技術之進歩化學之發展

弊堂專賣の左に揭ぐる金張新製品は專門技師が多年苦心慘憺の結果遂に大成功せし重量及金光は毫も眞正の純金に異ならざる物即ち特種の金屬に純金を以て外部卷たる物故如何に磨擦するも永久不變色は本品の特長

(獨乙玉入眼鏡)



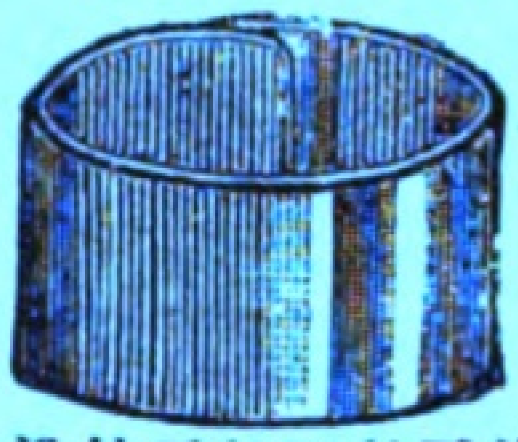
美麗サック付(素透し)
甲價 金參圓
乙價 金貳圓
近眼老眼の度付は卅錢
上り色玉隨意
送料十錢

印面付指輪



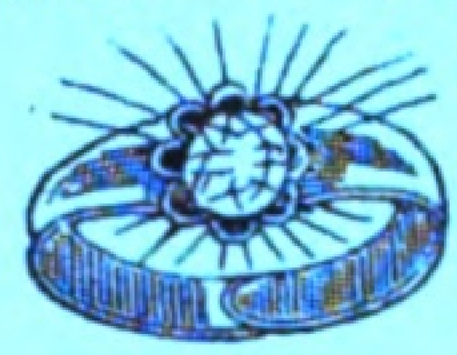
美麗サック附き
四匁附 金參圓
大減價
五匁附價 金參圓半
貴名彫刻料壹字每廿錢註文の際指廻寸法知らせ
名義彫刻註文前金の事
送料拾錢

平打指輪



美麗サック入
三匁付價 貳圓
四匁付價 貳圓半
五匁付價 參圓
送料各拾錢

寶石入指輪



壹號 參圓半
貳號 參圓
參號 貳圓半
四號 貳圓
五號 壹圓半
箱入送料拾錢

弊堂は各國時計中品質精良にして最堅牢確實なる物のみ撰拔して廉價に發賣す



金張時計 甲卅五圓 乙廿五圓 丙十五圓
同婦人持 甲三拾圓 乙二十圓 丙十貳圓
銀側時計 甲拾七圓 乙拾圓

合 腕 歌
丙八圓 丁六圓
成金時計 甲八圓半 乙五圓半
銀上八圓 鐵上五圓
入置時計 甲四圓半 乙三圓半

上記懷中時計は總て三枚蓋各卅ヶ年保險證付添送料各拾貳錢

註文切手代用必一割増

貴金屬雜貨御用達

◉大阪市東區和泉町二ノ三

金賞堂

一中邨不折君畫

水彩繪手本

花卉 山水 人物

第一輯(一組六枚)
定價五拾五錢
郵稅四錢

目次
(一)鳥歌花舞(春の景色)
(二)暢神養素(栗)
(三)萬濃香雲(梅咲く花)
(四)空濛幽清(雨の日)
(五)富貴安樂(牡丹)
(六)間店養志(夜の景)

博文館發行

最近 自宅療法

子宮病

全一册

▲如何にせば子宮、血の道の難病を根治し▼
▲子寶を擧ぐべき健女性となるを得べきか▼

◉本書は著者が多年の實驗より得たる成効と、最近の學說を基礎とし、親切叮嚀に自宅の療法を記述せるもの◉郵券貳錢を送れば當分の內無代進呈す

申込所 東京市築地新榮町四丁目一番地 笹岡省三

秋草



久保田金僊筆



女(への二)

園藝辭典

農學博士横井時敬先生序文
農學博士澤村眞先生
福島縣河沼農業學校長 片山熊太郎先生著

口繪 ○菊花○蘭美人草○パンジー○ダーリヤ○アラセイトウ○康樂園（石版、三色版、寫眞版）

附錄 園藝家の錦囊（實益富贈）

▲新入上製全一册定價金壹圓五十錢▼

特價金壹圓廿錢（郵税八錢）

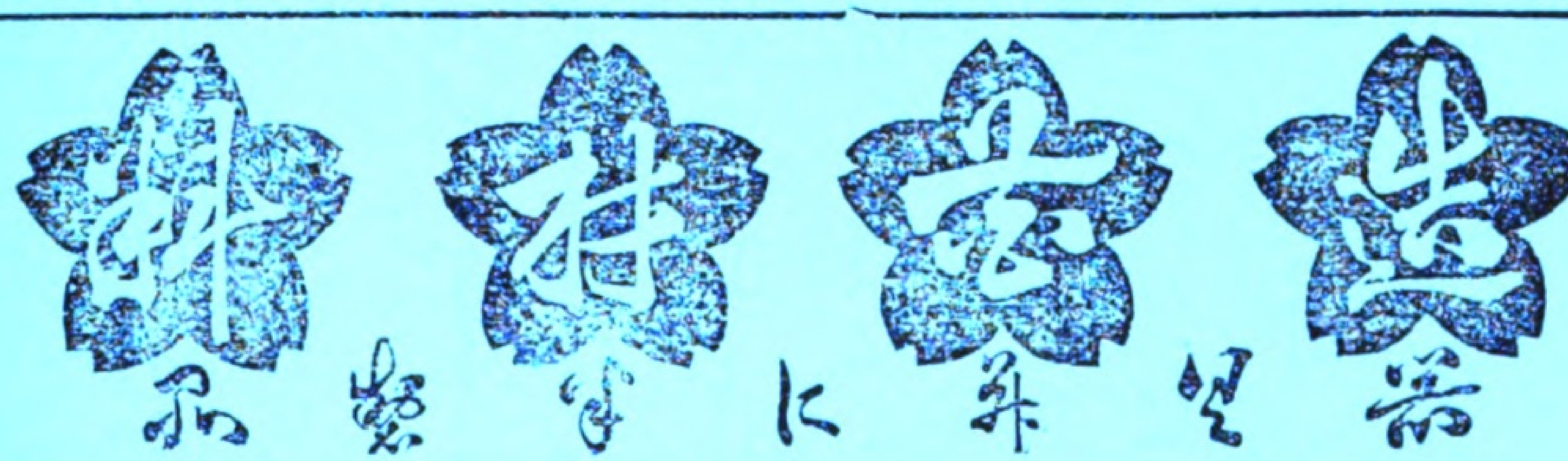
▲十月卅日限り期限後は定價に復す▼

地球上にがける各種の**園藝植物**は勿論其の**栽培耕作の方法・器具・肥料・氣象・土壤・害蟲**等より活花の餘技に至るまで凡そ園藝に關する事項は**最大洩らさず**之を本記四百頁の裡に收め補ふるに百數十個の**挿畫**と各種植物に關する古今の詩歌とを以てせり、されば其の解說の**精確**周到なるは勿論趣味津々として飽くる所なし加之索引の方法亦一新機軸を出し價格低廉にして裝釘完備**携帶至便**なれば之を閉ぢポッケットの小天地に收め得べく之を繙けば**五大洲の植物**は燦として眼前に開展せん實に**美**にして**家庭園藝**の好指南たり農事講習の好資料たり**學校園**開設及保護の好指針たり各種農學生の好參考書たり一般中學生博物研究の好師友たるなり。

（十月十日製本出來）

發兌 東京神田猿樂町二 振替口座八五七〇 **建文館**

◉大賣捌所 東京神田 同文館 大阪備後町 寶文館



○**刺繍用器具**並に**材料**

○**袋物器具**並に**材料**

○**摘ミ細工**
壜細工材料

○**造果用材料**並に**木型**

其他御婦人用美術技藝品一式

地方御注文の節は代金引換小包郵便にて御送申上候

切取線

此切取線を添へ御注文の御方へは送料半減にて御送申上候尚技藝材料の栞定價表御申越次第無代進呈

（女學世界）

東京市本郷區弓町二丁目 **倉持商店**

女（への二）

本品を愛用せざる方は流行界の進歩に後る

新案美顔器

英國博士の發明大流行の輕便自由美容具

顔の美しくなる器械

本品は近才子流社會及花柳界に於て大流行せる最新式美顔具にして發賣以來各新聞紙及實驗者の賞賛を博せる事は爰に喋々を要せず使用法頗る簡易輕便にして婦女子兒童と雖も隨意に即席に應用し得て如何ほど色黒き醜き人にても忽ちに艶美白色驚くべき佳麗の美顔に變化す所謂烏を鷺に變ずとは本器の効能ならん論より證據一度試用せば奏効の奇絶瞬速なる眞に驚くの外なし

器械美顔コップ壹 美顔ロール組 壹圓貳拾錢

附屬化粧美顔クリーム美顔ポーター、ホワイ 一五拾錢

送料拾貳錢代金引換廿八錢

本器には使用方法 美顔術秘傳書 無代添呈

花柳袋

黴淋病毒の感染を防ぐ又女子月經中必用なり

▲假拾弍個五拾錢▲廿五個壹圓▲五十五個貳圓送料各參錢

本品はルーデサックを再三精製したる珍品にして男女〇〇の際之を裂らせ用ふる時は避姙及黴

いもりの黒焼

男女和合の藥

本品は男女なれそめ藥と云ひふしぎの特効あり

價 別製一双壹圓 並一双五拾錢 秘密送料八錢

子宮サック

月經の際經水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむ故に男女交接の際と雖も用ゆる時は汚物の附着せず且つ黴毒淋疾及子宮なきづする憂なく又懷姙なし

▲價金上製壹圓▲並製七拾五錢▲秘密送料拾錢

製造 專賣元 大阪東區農人橋壹丁目 錦花堂

當今一番よくきく月ざらへは何か

諸孃姉方に急告す

月經閉止月やく滯りの如何に恐るべきかは今更言ふまでもなし然るに從來の月ざらへは其原理を極めず各々大同小異にて殊効ある良藥なし本劑は其病理病症を各專門大家に習得し實地經驗と最新學理とに係るより普く特効藥を蒐集し直接大醫と同一の効力を有す即ち効能は婦人月經不順月やく閉止月經滯りを子宮も痛めず快よく下す妙藥也二三ヶ月以上の閉止も一二週分三四月以上又は血塊にても特製分服用せば必ず流下す十七八歳に至り月經なき人は二週分毎月月經困難は三日分服用せられよ

理想的最良藥

改良月さらへ 女月丸



◎本劑は其奏効極めて峻烈なれ共身體には少しもさわる事なし眞に有効無害の奇藥也

藥價			
一週分六十錢	特製	四週分二圓廿錢	送料各四錢宛
二週分一圓十錢		六週分三圓卅錢	

調劑本舖 東京々橋區東仲通中橋和泉町一番地 小宮愛生堂

女(への三)

男女兩用毛髪用煉香油

ビューテーオイル

大瓶四十五錢
送料十錢



近頃化粧と云ふ事が進歩したのにも拘はらず毛髪油は更に改良が出來ないので舶來の油を用ゆる事が盛んになつたが舶來の香油は西洋人に適當する樣に出來て居るので永く使ふ中には毛が赤くなるとか又は折れる樣になる事が有るので種々研究して日本人の毛髪に適當なる椿油に含める毛髪の發育と光澤を助くる主成分を採り之れに高尚なる芳香と油の通油性を去るべき藥品とを配合して日本人男女兩用の煉香油を製出し之れをビューテーオイルと名付けて發賣せり

井筒油本舗 井筒屋香油店
東京日本橋區蠣殼町水天宮前

發賣元
象印齒磨本舗 安藤井筒堂

見本御入用の方は女學世界愛讀者に限り郵券四十五錢を御送附になれば特に送料を要せずして一個御送り可申候

最上醬油
天下一品

萬

釀造元
千葉縣野田町
茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

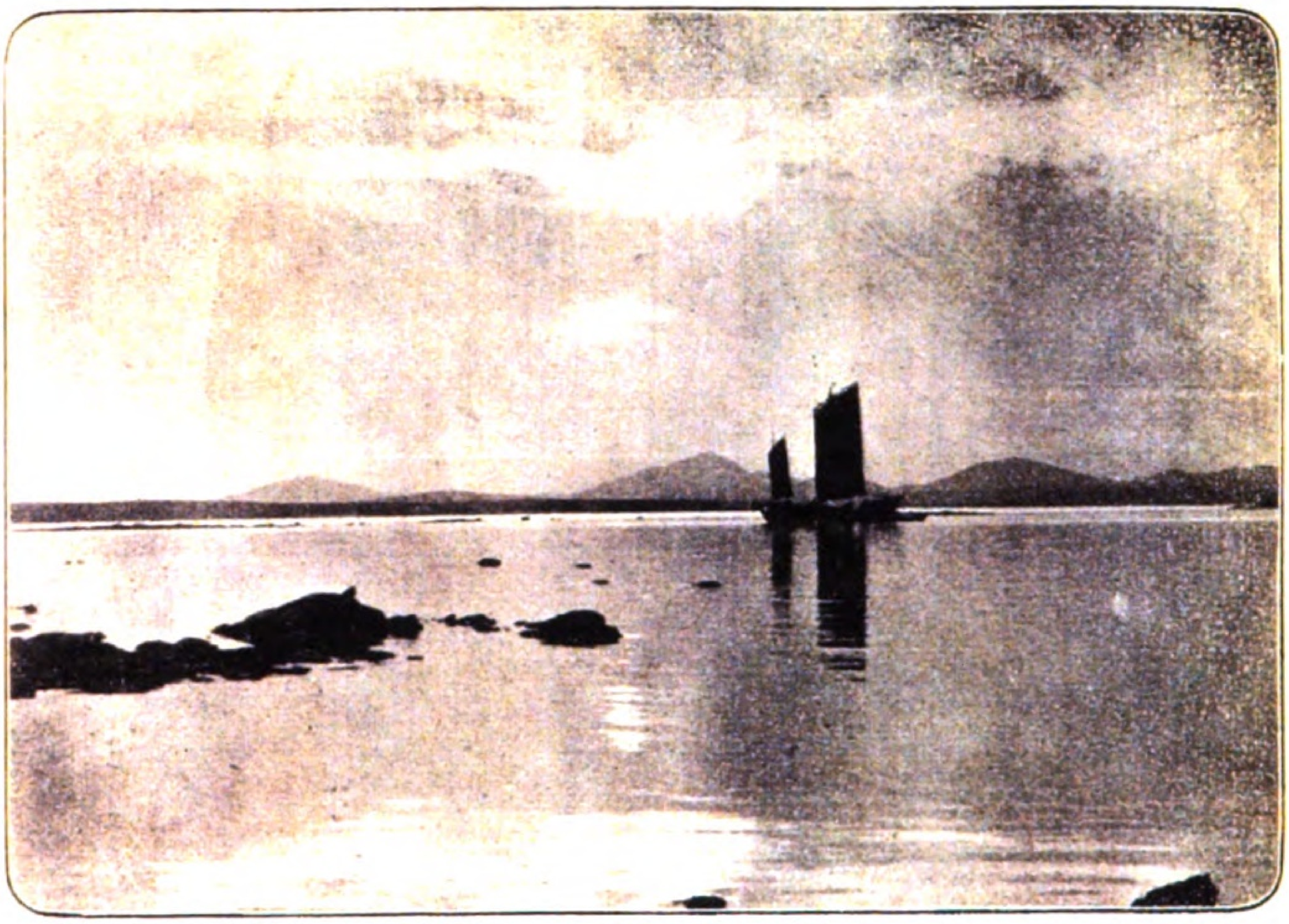
女(への四)

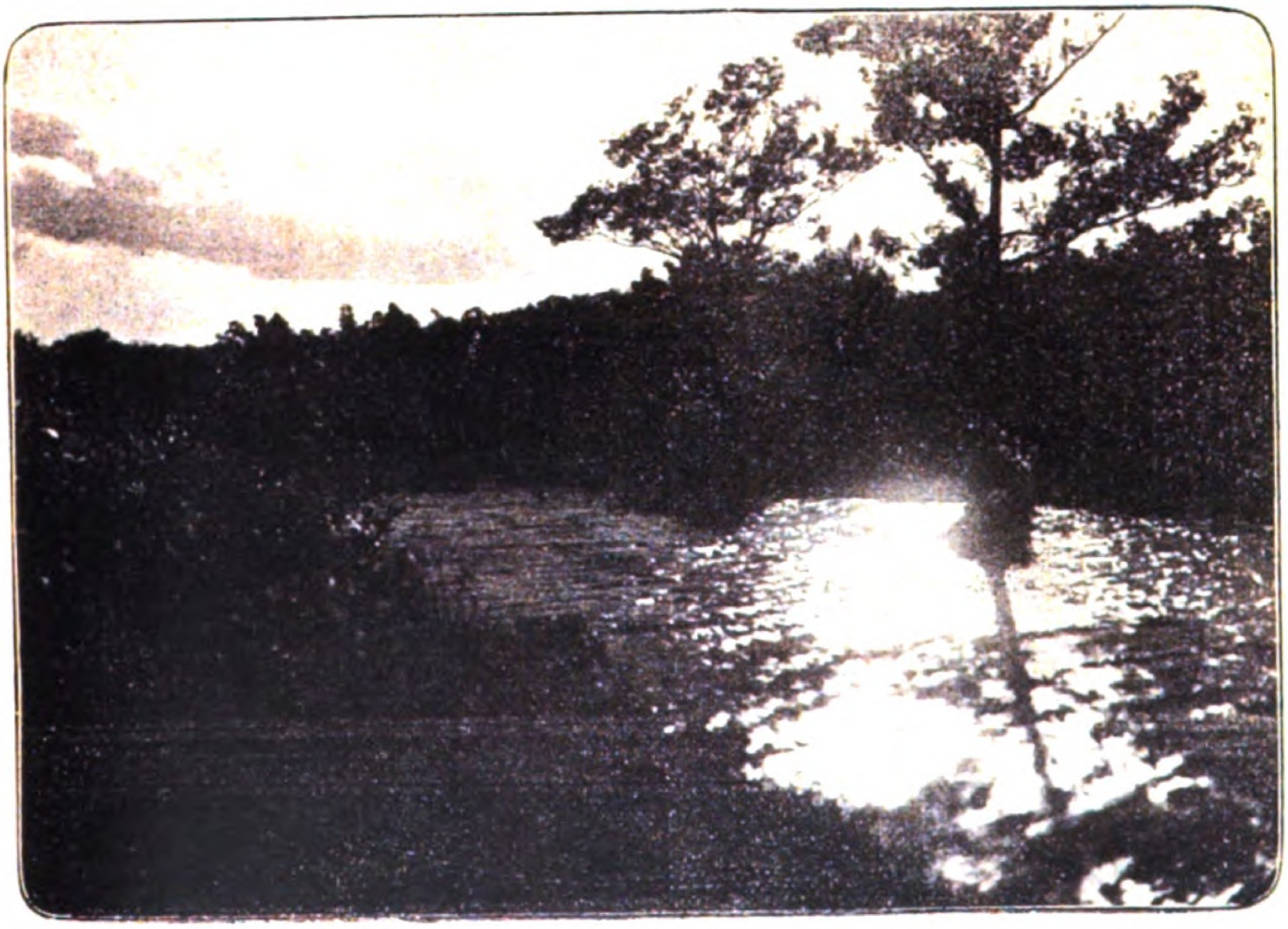
丁抹王フレデリッキ陛下　同妃ルイス陛下





秋の海





秋の山



毛はへ

最新藥ハロールは歐米各國にて造化の妙工を奪ふの奇効ありとの賞賛好評を博したる絶妙藥にて弊主が醫科大學醫院在職中深奥なる學理と老練なる技術とを以て專門的に多年苦心研究の後其有効成分を檢明し之に最近の發見に係る生毛に關する新説を參考し最新藥を配合したる世界無比の學理的最新藥なれば其効能の非凡確實なる事世間に有觸れたる技術と學理に暗き輩が山師的に無責任の廣告を爲して販賣する瞞着品の比に非らず左れば普通に醫師の處方する莞苹丁幾、レゾルチン、サリシール酸昇汞等の在來の生其他粗惡の賣藥にて效なきとて落膽せず是非本劑を試みよ頭髮、はへぎはまゆげ、ひげ陰毛等の薄くしあるべき所に毛なきを生じ禿頭病其他の病氣にて脱毛するを防止し拔毛の再生を早めヤケド、デキモノ、ハツポー、キリキズ等の禿に生毛せしむる事請合藥價送料共一劑八十錢二劑一圓三十錢郵券代用二割增の事

取次所ナキ地方ハ直接本舗へ注文アレ

毛はへ藥〜東京市本郷六丁目赤門前　瓜生藥局

取次所〜名古屋市鐵砲町　谷田藥局

らい病

此のらい病藥は數種の有名なる癩病治療藥を化學的の方法にて分拆し其主成分に更に最近の發見に係る治癩新藥を加へ且つ當館主が醫科大學在職中研究したる成績に考へ配劑したる新藥なれば一度使用して其効驗の確實なることを實驗せらるべし古來癩は不治の病と稱し今日と雖も之を根治せしむる事は難事なれども初病勢の甚しからざる中に參圓分を四ヶ月服用するか或は病勢甚しく進みたる人にても二藥を六ヶ月併用すれば病原菌を脱力死滅せしめ漸次輕快に趣き一生醜貌を免れ得る事は確實なり本劑は安價に不幸なる病者を救護せんとする主趣に基き發賣する者にして無々なる藥品に非常なる高價を貪り大言を吐て其効能の著大なるらしく見せかけ不幸なる病者を陥れんとする瞞着主義の賣藥に非ず

最新藥　ザノサール　一ヶ月分　貳圓

複方ザノサール　一ヶ月分　參圓

三河國碧海郡刈谷町濟世館藥局主

醫科大學卒業藥劑士

本舗　從七位勳六等　中島龜之丞鑑製

（その一）

◎十月一日より例年の通り染織競技會開催仕り
幷によせきれ見切反物日々澤山取揃へ置申候

◎參考品として　奈良朝　藤原氏　豊臣氏　德川氏　今様

右の時代を區別し女粧の變遷を一目し得る様標本人形を作り店内各處に陳列御縱覽に供し候

東京日本橋

白木屋呉服洋服店

大（その四）

佐藤(新男爵)醫學博士の一族



名家の令嬢



岩崎海軍少將令孃靜江子



渡正元氏令孃きみ子



靜江孃令妹春江子


東宮妃殿下御買上ノ榮ヲ得タル化粧水ハ本品ノミ
牛乳ヲ主成分ニテ製セル
レート
定價
大金五十戔
小金三十戔
内地郵送料金八戔
台湾清韓郵送料金三十戔
乳白化粧水
素顔の艶美なることを望まば
乳白化粧水レートを用ひよ!!!
レートは皮膚に卓効ある牛乳の主成分にて製せし最も進歩せる化粧水
發賣元 東京市馬喰町壹 大阪南久寶寺町 平尾贊平
◎販賣店は到る所の和洋小間物店及藥店

女(ちの二)

●●● 修養は婦人の生命なり ●●●

故學習院教授
獨逸協會學校々長 大村仁太郎先生著

●定價金七拾錢
●郵稅金八錢

教育叢話 子供と家庭

●●最新版發賣●●

卷頭寫眞版 著者肖像！筆蹟!!!

白鳥博士の草せられたる著者の詳傳を見られよ!!!

子女を愛する父母……
兄弟を愛する男女……
未來の母たる處女……
幼兒を愛する保姆……
家庭を司どる主婦……
諸君は本書を可讀……

●子供の涙 ●愛想よき子供 ●少女の戀愛 ●照子の不平 ●子供の小言 ●子供の小遣錢 ●自他の區別 ●新學年開始 ●育兒片々 ●父母の改良 ●一心同體 ●家庭の物語

●時期の教訓 ●良習慣の養成 ●名譽心の養成 ●同情の教育 ●母親某の與書 ●繼母と繼子 ●母親雜觀 ●日本の家庭 ●富豪の家庭 ●新年の希望 ●時の利用 ●成功と失敗

●家庭教師 ●教師の疑念 ●教育問答 ●食事中談話 ●子供教育法 ●子供唯一器

追想錄執筆者 ▲芳賀博士 ▲白鳥博士 ▲澤柳次官 ▲巖谷小波 外數名◎

約三百五十頁の中には以上の外金科玉條は充滿せり

▲教育寓話 我子の惡德（第十七版）價六十錢 郵稅八錢

▲教育寓話 我子の美德（第十三版）價七十錢 郵稅八錢

▲太郎は如何にして教育すべきや（價六十錢 郵稅八錢）

▲家庭教師としての母（價七十五錢 郵稅八錢）

女（ちの三）

東京神田 同文館 表神保町

純粋椿
三宅油



婦人世界第六號（昨年六月三日發行）婦人の日常生活中「十五」の條に弦齋居士が（髪の油は何を用ゆべきか）の題目の下に其の効能を確認せられし賛辭あり參照あれ

◎近來僞物販賣する商店あり御買求の節は三婦人の商標に御注意を乞（外賣は本舗のみに御座候）

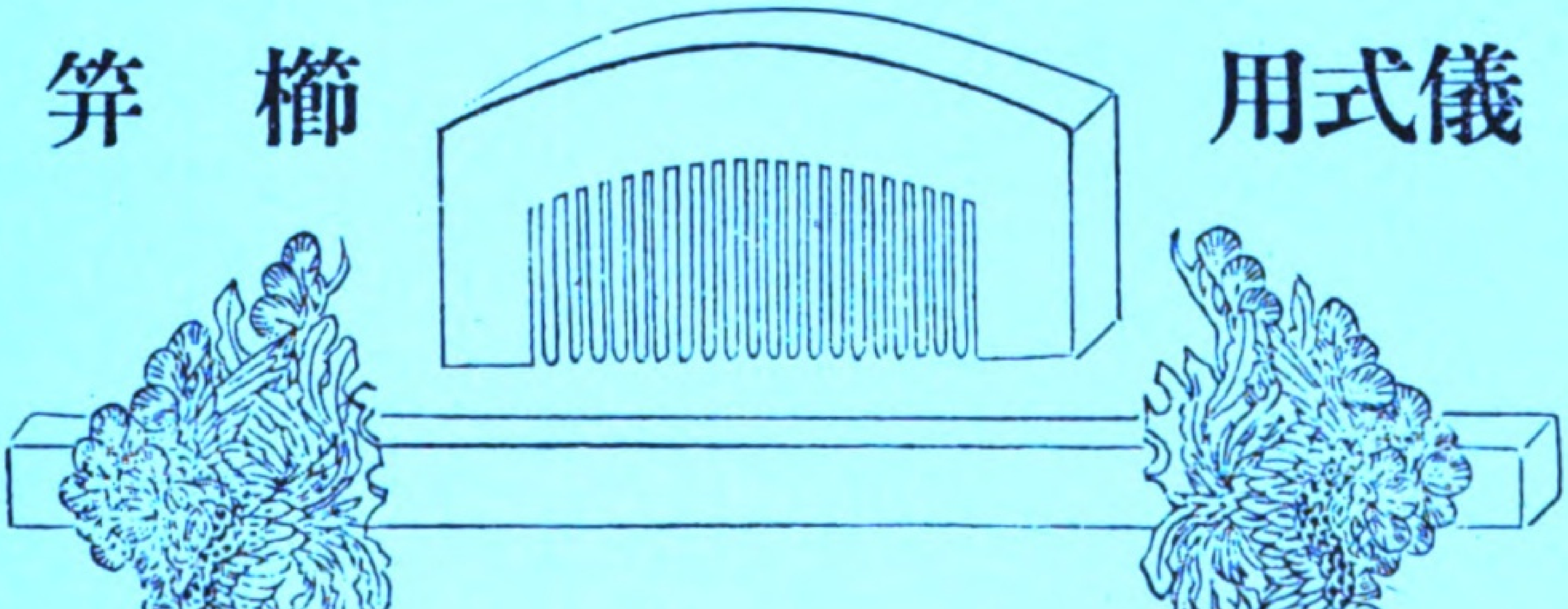
定價
改良大瓶一壜金八拾五錢　小）拾二錢　卅五錢
中瓶一壜金四拾五錢　包（內地）拾二錢（滿韓 卅五錢
小瓶一壜金貳拾五錢　料（八錢（臺灣）三拾錢

◎爲替は東京蛎売町郵便局宛郵券代用壹割増

本舗　東京市日本橋區人形町通り水天宮際　閑宮三宅堂（電話浪花六二一〇番）

◎其外みやけ香水・みやけおしろいみやけ油製すき油發賣仕候

儀式用　櫛笄



此儀式用櫛笄は本鼈甲又は四方張卵甲等の良質を撰び都下の名工をして製作せしめし物なれば永久御使用に堪ゆる佳品なり

◎本鼈甲兩花付
金五拾圓以上各種
（壹組之價）

◎四方張兩花付
金拾參圓以上卅圓迄
（壹組之價）

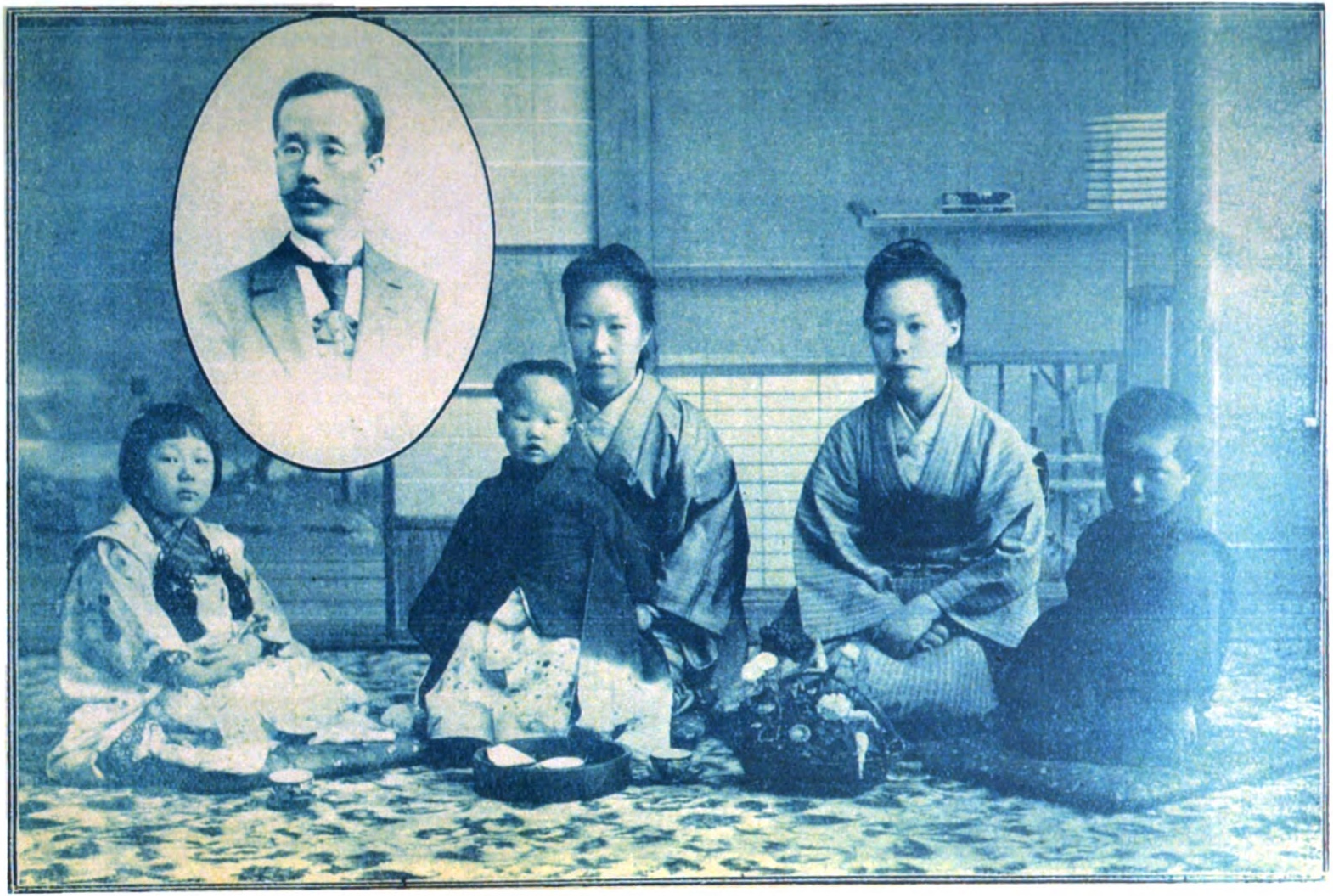
◎卵甲製兩花付
金八圓以上拾五圓迄
（壹組之價）

右之外新案の御婦人用裝飾品各種取揃有之候間何卒御來車之上御用命あらんことを

東京市神田區鍛冶町
白牡丹中西
電話本局二〇四〇番

女（ちの四）

大西博士の家庭



（記事參照）

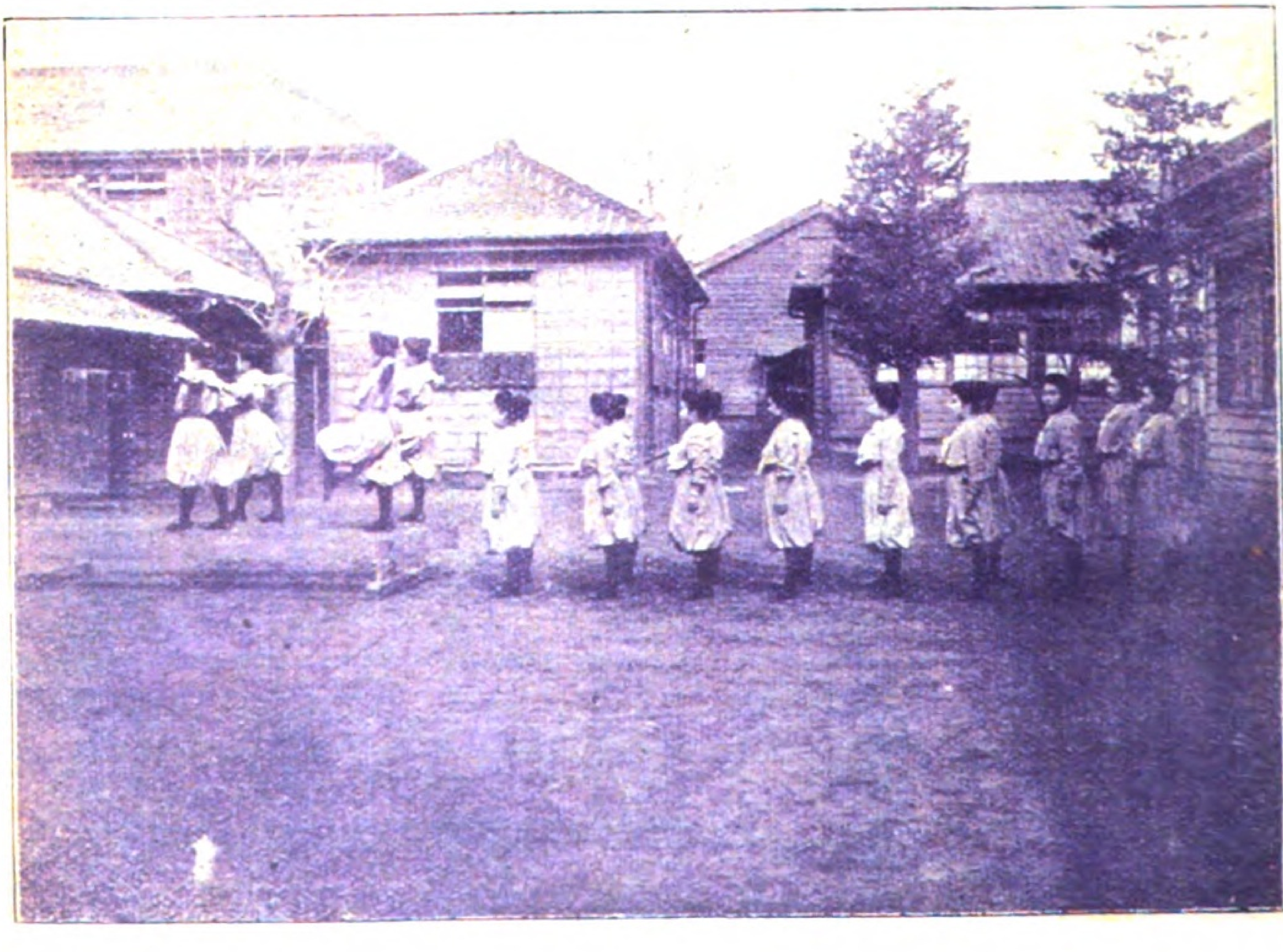
瑞典式體操

第四調和運動



全身の節の調和を謀る目的の運動にして之を能く練習する時は姿勢を好くし體度を正うし且つ優美となる

同上乙



此の運動に平均臺と云ふ臺の上に姿勢を正しくして演ずる所なり

女(りの一)

都新聞記者 羽山菊醉 山人序
小倉楓軒 譯述
（第七版）



本書の内容は…今玆に諸君一本を購ひて讀み玉はゞ其妙味は言ひ難し卷を措くこと能はざるの妙味あらん神祕〳〵ゆめ人に告げ玉ふな。

全一冊
洋裝美本
正價金卅七錢（送料共）
●切手代用一割増

～發行所～
東京芝區愛宕町二丁目
春海書院
大賣捌●東京堂●上田屋

進呈

婦人重寶
秘密嚢

一名ちゑ袋とも云ふ。嚢中知らず果して何等の重寶かある▲右本誌讀者に限り望の人は只往復端書にて御申越次第直ぐ送呈しますから諸嬢兎に角御一覽
◎大阪東區釣鐘町 松雲堂

醫科大學藥学専攻 藥学學業士金澤巖著

肺病患者の福音

著者肺病全快の經驗と最近の學説に基き親切叮嚀に根治の法を詳述せし物也●郵券二錢封入申込者に無代施本
東京市下谷區上根岸町 衛生書院

懐姙避姙自由自在

子なき人は本書を讀みて懐姙の法を知るべく又子が出來て困る人は避姙の法を知るべく實に本書は懐姙避姙を望むが儘に自由ならしむる秘訣書なり郵券代用必一割増
大阪東區谷町四丁 精美堂

全壹冊
拾五錢
送料貳錢

リウマチス全治秘訣

妾儀多年リウマチス病に罹り百方手を盡すも更に効なく困難の處不思議の神藥の奇効に依り忽ち根治全快し喜悅に堪へず依つて人助のため同病者に事實を告げ救濟せんとす御希望の方は郵券二錢封入申込次第詳細に御通知申上可く候間御遠慮なく申込あれ
東京府下大森停車塲東大畑
河奈とめ女

女（りの二）

醫學士 佐藤得齋先生監修

大增補（體裁變更）第十五版發行

實用問答 生殖器篇

總ふりがな付紙數三百餘頁

正價郵稅共 金五十六錢

目次大要

增補生殖器篇は何を增加せしや

左の項目は皆是れ今同增補せるものなり

結婚に就て思ひ煩ひ子寶なきを憂ふる人陰部の疾に苦み生殖の健全を欲する人よ、又萬事控目なる御婦人方の爲めに本書の愛讀を勸む幸福なる家庭は此一冊より生れむ

實用問答 男女美容篇

衛生新報編輯局編纂（忽ち再版發行）正價金五拾錢 郵稅六錢

實用問答 養生篇

醫學士 佐[illegible]之助 先生監修（第三版）

價送料共 金四十六錢

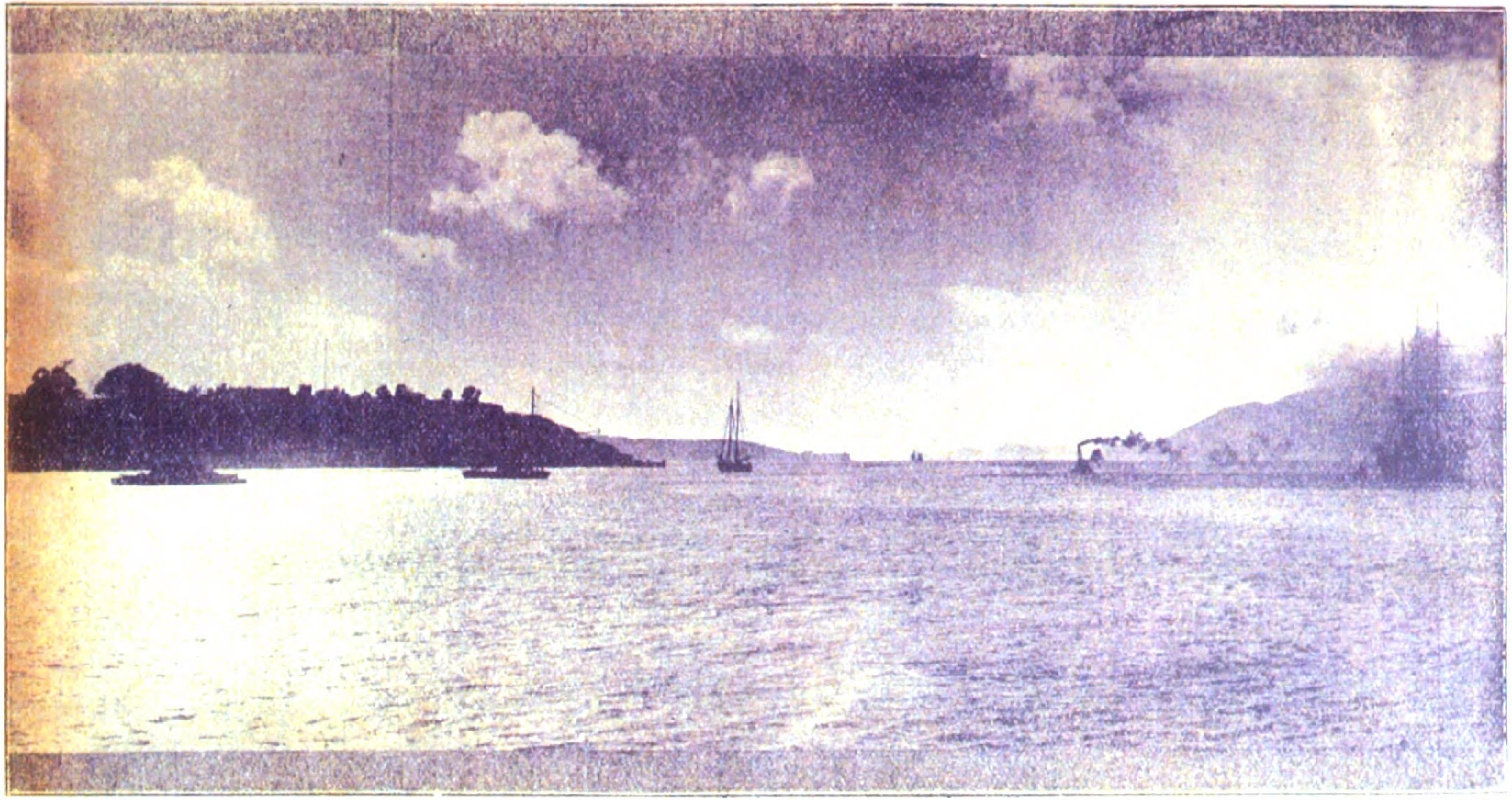
發兌元 丸山舍書籍部

東京日本橋箔屋町十四番地
（振替貯金口座五八九二番）

（りの三）

女（りの四）

秋晴



臺灣公學校教員及生徒



報知新聞家庭記者　天野誠齋君著

家庭寶典 臺所改良



既刊

全一册　菊判和裝美本
紙數　約二百三十頁
口繪　彩色石版畫壹枚
挿畫　數十個
正價　金四十錢郵稅八錢

衞生的食物を料理するには、即ち衞生的臺所の設備を要すべし、薄暗く不潔なる天保時代の臺所を改良すべきも全く之れが爲めにして、其の改良の神髓は實に清潔と便利と彩光の如何と爲す、左れど物には順序方法あり『如何にして臺所を改良すべきか』是れを知らんと欲する者の爲め、丁寧懇切玆に本書に於いて詳に説明を下せり、今其の内容を擧ぐれば下の如し

◎食物は如何なる臺所にて料理すべきか◎何を第一に改良すべきか◎清潔の應用法◎窓の構造◎臺所の位置◎食物と黴菌の關係◎釜の動力◎蒸籠の動力◎遠山式消毒蒸籠◎洗流しの水使ひ方◎完全濾水器◎竈の改良◎改良竈の便利◎料理ストーブの改良◎布巾の取扱方◎布巾掛の位置◎流し元の改良◎把藥の取扱方◎臺所日記の附け方◎料理臺の置き方◎臺所の掃除◎臺所の規律◎米國の實例◎掃除の仕方◎塵拂の懸け方◎雑巾の懸け方◎床下掃除◎鼠不入の掃除法◎鼠不入の改良◎臺所の模範（實例）◎下水の掃除◎下水の改造◎下水の清潔法◎流し元の臭氣止◎下水と傳染病◎塵箱の改良◎塵の處分法◎飲料水の位置◎壜の洗い方◎堀井戸の水と魚類豆腐類◎女中の使ひ方◎女中部屋の整理◎臺所の經濟◎改良の臺所道具等其他數項

東京　博文館　本町



波多野刀自と令息



右より一、三男貞夫氏、二、四男達夫氏、三、波多野刀自、四、長男精一氏、五、六男喜雄氏、（記事參照）

米國製

束髪前髪じん

○一大注意 **ヘヤロール**は今や歐米に流行しつゝある束髪前髪じんなり、從來の毛製品は彼の忌むべき癩病患者又は肺病患者の遺髪の交りある憂ひありて衛生上恐るべきは勿論、常に鬱陶しく頭部に痒みを起し果ては禿げる心配等ありて知らず〳〵一生の不幸を來す恐あり注意すべけんや。

REGISTERED

TRADE MARK

ヘヤロール



○本品の特長 **ヘヤロール**は細微なる金線にて製し輕きこと鳥羽の如く空氣の流通至極宜し

故にフケを生ぜず伸縮自在なれば大小の前髪になづみ最も上品の容姿を装ふべし。

且、腦病又頭痛の方には衛生上最も有益の新輸入品と謂ふ可きなり

外部を優美なる絲網にて覆ひ毛を損じスベリ出す憂なし。

（類似品續々現わる 米國製に御注意）

輸入元 東京々橋區鎗屋町一 日加商店 振替貯金八六六九

特約店 東京日本橋區橋町四 大阪東區南久寶寺町 御園おしろい本舗 婦人小間物問屋 丸見屋商店 小栗小三郎

女（その一）

毛のはへる藥

多年實驗の生毛劑にして特効驚くべき奇藥

一圓●一圓半●濃厚二圓半●三圓半送料十錢

美容散 やせる藥

●血ぶとり、あぶらぶとり、酒ぶとり、顔赤く、のぼせ症等總て肥胖質の人用ひて害なく身體美容となる保證藥なり

●定價(一週)七十錢(三週)二圓五週三圓廿錢送費十錢



皮膚病專門藥

おまづ	いんきん	たむし
あか鼻	ざくろ鼻	あぶく
ぜにがさ	ひぜん	わきが

本劑は獨逸國皮膚病研究所專用法劑にして特製一瓶にて全治保證又おいこむの憂なし

小瓶五十錢中瓶一圓大瓶一圓五十錢特製二圓送料十錢

專賣本舖　東京本郷區本郷三丁目　新宮藥館

●十月號は大光彩を放つて出でんとす●



寫眞畫報



毎月一回八日發行　一冊正價二十錢郵稅二錢

寫眞畫報を見ざるは社會以外の仙人のみ。何人にも面白き好雜誌なり

三色版の艶麗は天下無比なり鮮明新奇なる寫眞版十數面。全世界の活劇を洩らさず、時事の眞を傳へ、猶ほ第一流の名畫あり、演藝あり、美人あり、絶景あり、諷刺あり、實に珍中の珍、奇中の奇たり彩色石版畫は現代大家の傑作を收む。記事は常に奇拔と愉快とを主とし、旅行奇談あり、冒險小說あり、社會照魔鏡あり、滑稽珍談あり、當世穴探しあり、演藝評判記あり、其面白きこと限りなし、坪谷水哉氏世界周遊の途に上り爾後毎編最新最妙の通信を寄せらるべし毎編奇拔の大懸賞問題あり來號の問題は如何?

九月號發行即日賣切となる。御購讀は急を要す!

發行所　東京日本橋區本町　博文館

女(ろの二)

(ろの三)

博文館女學世界　編輯部新案

明治四十一年

家庭日記

總クロース金字入類美本紙數五百餘頁　正價參拾八錢　郵稅十錢

家庭日記は最も進歩したる。且つ最も文明的なる日記にして新家庭の要求に應じたるもの也、苟も我家の規摸を知り我家の地位と品格と勢力とを知らんとする人の机上に缺くべからざる重寶日記なり其の目次左の如し。

家庭日常の寶典

○貨幣度量衡比較表
○內國郵便大要
○郵便爲替貯金大要
○郵便電信大要

▲收入明細表
▲支出日計表
▲家計分類出納表
▲年中行事豫記
▲家庭重要記錄
▲我家の家族
▲家庭紀念事項
▲戶籍表
▲祟廟祭祀日錄
▲通學要錄
▲兒童生育要錄
▲健康要錄
▲衣類目錄
▲財產目錄
▲貸借關係錄
▲音物贈答日誌
▲通信日誌
▲親族名簿
▲傭人名簿
▲知人名簿
▲備忘錄

附錄

世帶の要訣
器物取扱法
衣服保存法
勝手元の憲法
日常心得草
一年中の仕事配り
臺所百事便
衞生心得草
看護の心得
育兒の大意
新年料理
總菜の栞
日々の獻立表
洋食の心得
產兒一週間の心得
魚類と野菜の季節分
挿花水揚法
音物贈答の心得
訪問の心得
日用品買物の心得

▲本書內容の一斑▼

本書は始めに一年三百六十五日の日々欄を置き、七曜を順記し、天氣、寒暖の各座を設け、以て日々の事項を記入するに適せしめ更に月の始には其月の行事、季節、家事、食品、遊樂の心得を抄記して月令の栞となし、次に此の日記の特色ともいふべきは他の日記簿に類例なき「記錄表」なるもの約二百頁とを設けこれには前表家庭重要記事を始め、交際、通信、音問、祭祀以下日常諸般の事項を分類し兼ねて財產、衣類等の品目を掲記して以て複雜なる家事を整理して一目瞭然たらしむ。猶前掲附錄十數次は家事當局者の心得にして朝夕必要なる家政智識を網羅せり。

家事政理の墨繩

○滿年求月表
○年數早見表
○印紙稅法大要
○名所舊蹟案內

家庭日記は日常の家事を整理する金針にして又家運振興の指南車なり、其內容は從來有觸れたる日記簿とは全然面目を異にし統一あり、秩序あり、教訓あり、趣味ある日記にして眞に一家の重寶たる實質を具備せり。

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

女(その四)

北 海 道 の 土 人 と 其 救 濟 會 員



女（その一）

◉吉田博先生著　日本葉書會發行

（最新刊）

アフリカ ヨーロッパ アメリカ

寫生旅行

洋裝全一册

定價（特製）一圓五十錢
（並製）一圓二十錢　郵税各十二錢

著者吉田博氏が太平洋畫會の重鎭として令名あるは既に天下萬象の知悉せる事實也。今春令妹ふじ子女と共に第二回世界周遊の行を終へ畫嚢を満たして歸朝せられたり噫年若き兄妹畫家の世界大旅行如何に珍稀にして趣味深き事柄なるを弊會茲に此壯擧を不振ならしめんが爲め氏の快諾を得て上梓を企てたるもの即ち此書なり世界の大都邑長川高山は勿論、特に邦人の足跡未だ到らざる名所舊趾蠻地の光景實況を詳くこと極めて周密、加ふるに著者兄妹の親しく實寫し來れる繪畫三十餘面を三色寫眞版木版として挿入せるが故に文と畫と相俟て讀者は坐ながら多感なる兄妹畫家と共に其地に遊ぶの感あり時下燈下讀書の季に入れり何人も繙くべき一快書たり

◉丸山晩霞先生著述

（高好評）

水彩画法

女性と趣味

菊版洋裝全一册

定價金二圓　郵税八錢

本書は我國水彩畫家の泰斗丸山晩霞先生が現代の青年に殊に女子の爲めに美的趣味の養生を目的として著はされたるものにして前半には微に入り細に亘りて繪畫に採るべき美しき自然及び自然現象を説き後半には斯道研究者の爲めに水彩畫法を述ぶること頗る懇切を極め而かも行るに平易なる言文一致體の文章を以てす。是れ畫家の自然觀と及び如何にしてその自然と自家藥籠中のものとすべきかの方法とを合せ記せる趣味實益兼備の良書なり斯の如きは蓋し此書を措いて他に索む可からず單に女性といはず斯道に志さす人は速に一本を座右に備へらんことを薦む

發行所　東京小石川　日本葉書會　◉　發賣元　東京本町　博文館

博文館發行明治

博文館出版の當用懷中日記の正確にして實用的なること世人の既に認容する所今敢て喋々を要せず唯遺憾なりしは從來年末に切迫しての需要者には初刷雜誌準備多忙の爲め再版を企て難く充分なる供給を爲し能はざりしにあり是を以て本年は特に紙質を精選し印刷を鮮明にし部數を增加し一點遺憾なき計畫を立てたり然れども日記の需要者は年と共に增加する傾向あるは從來の實驗に徵して明なるを以て弊館の發賣豫定數が果して年末迄持續し得るや否や保し難き所なり乞ふ賣切れとならざる內速に購求あらんことを

明治四十一年 當用日記



◉卷頭 皇室皇族の御繁榮歷代の天皇大祭祝日日曜表等を色刷とし揭ぐ

大形（菊判）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）▲正價金五拾錢　郵稅拾四錢

中形（四六判）**特製**（舶來洋紙脊皮美製金文字入）▲正價金五拾錢　郵稅拾貳錢

中形（四六判）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）▲正價金三拾八錢　郵稅拾錢

小形（菊判半截）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）▲正價金三拾錢　郵稅八錢

紙數各約五百四十頁

〔附錄〕金錢出納錄●知己人名簿●雜錄●諸統計表●米價換算早見表●諸稅則摘要●郵便電信諸規則●新式萬年曆●徵兵規則

▶▶賣捌所は全國各地の書籍雜誌店

▶▶取次希望の方は御申込次第

女(その四)

四十一年度日記類

本懐中日記卷頭には皇室皇族の御繁榮歴代の天皇大祭祝日日曜表を色刷として掲げ新形は背面に他の二種は腹部に鉛筆挾みを設く



新形

（船來洋紙頗美本總クロース）（金文字入細長形携帶至便）

▲正價金貳拾錢　郵稅貳錢

上製

（船來洋紙頗美本總クロース）（金文字入紙數三百餘頁）

▲正價金拾八錢　郵稅貳錢

並製

（船來洋紙總クロース表紙）（金文字入紙數三百餘頁）

▲正價拾貳錢　郵稅貳錢

博文館日記の特色

用紙　印刷　製本　趣向　體裁

何れも海外製紙會社へ特に注文漉製せし特別上等紙を用ゆ日記印刷の爲新鑄せし活字を以て注意印刷す頗る鮮明なり弊館が特に英國より輸入せし新機械を以て堅牢美麗に製本す

（當用日記）日々欄には過去同月日の重要歷史、七曜、干支等を錄し天候、寒暖、發信欄の外往訪及起床時就蓐時の記入欄を新設す尙各月の初めには、其月中に行ふべき事項を豫記すべき欄を新作し、每日の記入欄には細罫を附し秩序ある記錄たらしむるに適せり。附錄としては紙數十二頁の補遺金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、農家年中行事、露伴先生旅行の心得、某醫學士の衞生心得及び最新重要統計及日常必須の諸規則を網羅せり。

（懷中日記）每月の初に當月の行事、食品月令、遊覽案內等を揭げ日々欄に過去同月日の歷史、七曜、干支、天氣、寒暖、起床、就蓐時欄等當用日記の如く卷末には日記補遺錄日常用の事項諸稅則及最新重要の統計表等百頁を附す

紙數三百〇六頁

〔附錄〕◉雜錄◉統計表◉利子早見表
◉諸稅規則摘要◉郵便諸規則
◉徵兵規則大要◉年齡早見表

及紙類文具店等到る所にあり◀◀
精々御便利に御相談可仕候◀◀

婦女必讀の大全書發行

第二編

四季料理

宮中臣民兩流料理師範
大日本割烹學會々長
石井泰次郎君著

第三編

裁縫指南

女子高等師範學校教授
喜多見佐喜子女史著

●第一章　裁縫用具の名稱及用法○運針法○針留及糸結び○縫方種類○風呂敷、糠袋、紐前掛、雜巾刺方等○衣服の名稱●第二章　一つ身襦袢○三つ身襦袢○四つ身襦袢○大人襦袢○長襦袢●第三章　女大人物單衣○男大人物單衣○一つ身單衣○三つ身單衣○四つ身單衣○前衿裁單衣●第四章　袷綿入寸法○袷綿入り積り方○袷綿入裁方○袷縫方○綿入縫方○羽織寸法○單羽織○袷羽織○綿入羽織○襠高袴○馬乘袴○小供袴○被布○男帶○女帶○シャツ○ズボン下○布團○夜具○小袖○重帷子○比翼○股引○脚袢○足袋○小供前掛●附錄　裁縫に就て心得べき事項

續刊

和洋菓子製造法

東京治庖會講師　龜井まき子女史著

茶の湯と香道

水原翠香女史著

本町　博文館

女(その七)



女學世界

第七巻第拾参號
十月五日發行

煩悶は人の寶なり

鳥は空に翔りて一生滿足し、魚は水に棲みて生涯を畢る、これ自然の法則なり、故に鳥は水を羨まず、魚も又空を望むことなし、されど靈ある人は決して然らず、水中にありても蒼空に翔らんことを望み、空中にありて又水を羨むことなしとせず、蓋し現在に滿足せず、自然の法則を破らんと望む、斯に於てか煩悶あり、焦慮あり、慷慨し、又憤懣し、一歩たりとも現在の己れを開かんと試むるものゝ如し人の禽獸と異る所以即ちこゝに存す。

されば、煩悶、慷慨は人の人たる所以の精粹にして、尤も尊むべく、尤も敬すべきものにあらずや、人に斯の悶へあり、この憤りありてこそ人間世界は日に活きつゝあるなり、嗚呼煩悶よ、汝は神の呼吸にあらずや。



婦人の獨立旗

藏原惟郭

△日本婦人の特長

我國の歴史を見れば昔の上流の婦人には却々活動的の人物が居た。遠く遡つては天神大神、天鈿女尊、稗田阿禮の如き、下つては衣通姫、或は土肥兼平の妻の如き平政子の如き、又徳川時代に至つては大庭夫人或は春日局の如き、實に當代婦人の標本的の人物で、孰れも皆働いて居る。又見よ、文學の方面にては藤原氏の時代より奈良平安の朝へかけて赤染衛門、紫式部、清少納言など云ふ文藻才識共に備つた名媛が出て一世の文運を指導して居たし、政治方面にては藤原氏時代の如きは殆んど名家の奥方が其の實權を握つて居たと言つて可い程で、一家一門の消長は偏に婦人の左右する所であつた。徳川氏の時代も亦然りである。當時の大名なるものは皆崇め上げられて殆んど空位を占めて居たが、婦人は決して然うでは無い。彼等は實に今日の外交官のやうな任務を盡して居たのである。蓋し當時は政治を爲すに就て政略結婚が盛んに用ゐられて、將軍家から諸方の大名へ御姫樣を遣れば、諸大名からも遣し、又大名間に於ても互に遣り取を爲て居たので、其の縁組の目的を果す者は即ち其の御姫樣なり或は御側附の女中であつた。斯かる事柄は恐くは他の

時代にもあつたらう。特に注目すべきは武を以て立つて居る封建時代に於てすらも我が婦人は數々活動をしてゐることである。板額の如き、常盤御前の如き、或は巴御前若くは靜御前の如き、其の節操等に就ては色色議すべき點もあらうけれ共、兎も角も一世の女傑であつた、飜つて我が中流下流の婦人を見るに、從來戸内に於て或は戸外に於て、農業に、工業に、商業に、或は家庭の整理に對し、其の勞働を以て至大の貢獻を爲しつゝありし事は敢て余輩の辯明を俟たない。即ち去過に於ける我國の婦人は上中下流を通じて皆働いてゐる。勞働が彼等の特長である。思ふに我國の婦人が支那朝鮮婦人の如くに墮落せずして今日の地位を保つてゐるのは全く之れが爲であらう。

△現今の上流婦人

然るに近來の傾向を見るに、中流下流の婦人は相變らず働いてゐるが、上流となると遺憾乍ら甚だ懶惰になつて來た。着物の出入、臺所の監督、家の裝飾や拭掃除の事、或は日用品の注文、其他一家經濟の事等一切執事や下女に任せて自分は些も働かない。彼等は何等の常職を持つて居らぬ。そして一方に於ては夫人令孃と言はれる者の華美な姿で市中を徘徊するのが著しく目に附くやうになつて來た。勿論今日は昔と違つて婦人は室内よりも戸外で働く範圍が廣くなつたからでもあらうけれ共、其のぶらり〳〵と歩く、樣子を見るに、物見遊山的にたゞ歩くものと外思へない。上流の婦人にして既に然り、中流下流の者の之を見倣ふは自然の勢で、勞働や勤勉を痛く輕蔑する風を波及しつゝあるのが我が婦人界の現狀である。是れ豈に日本婦人の墮落にあらざるか。斯くては婦人が男子よりして藝者扱ひにせられ玩弄物視せられても誠に致方が無いであらう。

△注目すべき現象

小人閑居して不善を爲す、勞働勤勉の輕蔑せられつつある反面に於て、奢侈淫靡の風の増長しつゝある事は、是又注目すべき現象である。見よ、今日上流社會の婦人に依て公益とか社交とかと云ふ美名の下に數々

行はれる種々なる集會の有樣を。婦人會は或は文明社會に無くてならぬものかも知れない。會其のものは決して惡いとは申さない。が其集會は如何であらうか？宛然服裝の共進會である。斯う云ふ會へ出やう爲に家を其方のけにして飛出して行く、其れで一家の整理が果してつくか。それ丈ならば尙だ可いが、慈善會だ音樂會だと處々の集會へ出步く間には種々なる藝人共に親近が出來て、遂には內所で自宅へ招くとか或は茶屋へつれ込むと云ふ事になる。或る事情通の話に依れば、婦人會の盛んになるにつれ其樣云ふ者が益々多くなると云ふことである。色々詳しい事を聞いてゐるが兎も角も華族富豪の夫人令孃達に斯かる行ひがあるとは實に驚くべきの現象で、之れが爲に愉快であるべき家庭內に斷えず波瀾を起してゐるとは何と淺猿しい話では無いか。折角婦人を尊重する思想の養はれつゝある矢先に、又婦人の活動範圍を擴むる事に十分同情を寄せられてゐる際に於て、婦人が斯る墮落の兆候を示すのは、自ら求めて獨立を失ひ奴隸の境界に陷るもので、男子が警戒して婦人に抑壓を加ふるとするも、自業自得の結果で如何とも出來ない譯だ。

△道は勞働に在り

要するに上流の婦人に一定の仕事の無いと云ふ事は我が婦人界の一大缺點である。上流中流下流を通じて婦人の品位、品格、自由、獨立、威嚴、勢力を保つ所以の道は他なし、たゞ勞働を爲すに在る。此の道を外るれば即ち墮落である。故に余輩は言ふ、百姓の如くに働けと。我が家庭に於て婦人の手を要することは決して尠くは無い。室內の掃除、子供の教育、客の接待家の裝飾等は皆其れである。恁う云ふ仕事は澤山にある。臺所用の品物を買ふにしても、之を下女委せにせずして、安價で而かも美味いものを買ふやうに一々自分で手にかけるが宜い。尙ほ進んで外國婦人の遣るやうに奧樣が下女にバスケットを持せて親しく市場へ行つて買ふことを樂むやうな習慣が出來るならば益々結構なことである。婦人が健康にして此種の事に勉むれば如何しても敬愛せざるを得ないのである。

△掃除と快樂

そこで勞働の習慣を養成するには如何すれば可いかと云ふに余は室内掃除の習慣を養ふのが最も必要であらうと思ふ。掃除は秩序の本である。掃除さへも出來ない者は迚も他の働きの出來やう筈は無いのである。加之此は一面に於て住む者の精神を愉快ならしめ、品格を高め、一家の快樂を増す力を有つもので、實に大切な事である。婦人に於ては特に然りで、掃除の不行届の者は、身始末も十分ならず、精神上にも何處か缺點があつて、且つ其樣云ふ處には必ず不和がある。故に余は我が婦人に對し、上中下流を問はず一家中の掃除は必ず自ら手を下すべしと勸めたい。而して之を以て日本の國風とすべしと主張する。

△襷と前垂

去れば婦人に取ては襷と前垂が最も肝腎である。文豪カーライルは其著に於て、勞働は神聖なり、而して之れと共に前垂を忘れてはならぬ、そは外は罪惡を祓ひ、内は活動勞働を標榜すると云ふやうな事を言つて居るが、余は前垂の外に尙ほ襷を忘れてはならぬと言ふ。前垂は婦人の獨立旗である、襷は其の統轄の紐である、心神を堅固に結び上げる綱である。婦人の覺悟獨立、勢力等は皆此の二つの物に依つて示される。然るに上流婦人は動もすれば之を忘れやうとする。是れ即ち墮落の兆である。余は重ねて言ふ、襷と前垂は每月破れる程に每日之を用ゐよと。

△今の女學生

併し乍ら今日處々の女學校に於て果して家庭で能く働くやうな婦人を養成してゐるかと顧みるに、是れ大に疑はしい。學校出の婦人を見るに第一掃除する事を知らない。裁縫は駄目である。應接は無茶苦茶で客の機嫌が取れない。生花は上手かも知れぬが座敷の裝飾などは一向に構はないから其の不調和なる事驚くべしだ。女の先生と云つたら茶碗を蹴飛ばして歩く人達だから生徒も矢張り其の風がある。學校から歸ると衣服は脫ッ放して其處らへずつと土用干のやうに掛けて置く。女學生の室は皆之である。奇麗にしてゐるものは

リボン位で其他は皆不潔である。足袋は洗濯せずして穴の明く迄穿くし、髮は五日も六日も洗はないから其の香は實に嫌な氣持である。扨又料理法を見るに六ケ敷いビステキの製法などを習つて來て牛肉を無暗に使ふ。が恁んなものは我々の家庭では殆んど不用で家で製ると云ふ事は生涯にあるか如何か分らない。其れよりも寧ろ大根や午蒡の煮方を教へて貰ふ方が何れ丈爲になるか知れない。萬事が此の流である。今日の女學校が胡座をかいて小說を讀むやうな者を作る目的ならばいざ知らず、然も無い以上は今少く敎育方針を改良して實際に於て役に立つ者即ち働くに耐へ且つ勤勉なる者を作る樣に力められたいものである。（文責在記者）

服裝と處世

三輪田元道

人の服裝如何は處世上に大關係のあるもので、今日の如き繁忙な世の中では、服裝を見て直ちに其の人を判斷する場合が多いのみならず、實際服裝は能く其の人物を代表するものであるから、此は餘程注意を爲なければならぬ。併し服裝に注意するからと云つて、殊更にそれを表面に現はしてはいけない。表面は何處までも自然的に、所謂斧削の痕を見せないやうにしたいものである。

△服裝と品格

世間には徒らに服裝に浮身を窶してゐる人が澤山あるが、若し自然の美を發揮して自身の品格を保たうとならば第一に身分相應と云ふ事を顧みなければならぬ。然らずんば往々不利を招く事がある。今日は昔服紗や重掛のみを用ひて珍重した鹽瀬、綾錦の如きものは下駄の鼻緒となし空氣草履の表となし、修業ざかりの學生がお召を着て琥珀の袴を穿くやうになり、髮の道具も、金銀寶玉を裝飾として用ゐ、夏も贅澤な肩掛を引き廻して、金の指環にダイヤモンドの留針と云ふやうな誠に豪奢な時世であるが、他の目から見たなら、嘸ぞ不快の感が起るであらう、それに就て或る女

學生が飛んだ失策を來したる話がある。先頃大學を卒業した新法學士が友人の周旋で在學中の女學生と婚約を結ぶ事になつて女學生の學校よりの歸途、媒酌人と共に見合をしたのです。所が其れが濟むと突然學士から破談を申込んだ。で、どうしたわけかと學士に掛合つて見ると、縹緻も態度も申分ないが、只困まるのは不相應な服裝をして居る事だ、給料なら僅か四五十圓しか取らない僕はとても圓滿に暮らして行く事は出來まい、といふのであつた。此は今日の婦人の悪弊に對する痛快なる一打擊ではあるまいか。

△最も見苦しき姿

又四十以上になつて、子供の三四人もあらふといふ人が赤い裏をつけたり、派手な半襟を掛けたり、白粉を濃厚に塗り立てるなど云ふ事は、餘りに見苦しいものである。當世紳士の夫人などにはよくある事だ。髪は流行の廂髪に結つて、白粉を厚く塗り、柄の大きな若々しいものを着て、半襟をけば〳〵しく赤と青との模樣を出したものを掛けたりしてゐるが、それで年齡を聞くと四十幾歳と云ふ實に驚かざるを得ないのである。

△色合の選擇

色に就ても注意を拂はねばならぬ。西洋の人は、日本人を色を着て居る國民と云つて居る。誠に適評である。單に白とか黒とか、單純なものではなく。少くとも三四色、多くは七八色を以て、染出したものを着て居る。例へば中形の單衣でも、青、白、黒、水色、と云ふやうに配合をしてゐる、然るに西洋婦人は白、黒或は赤と云ふやうに、たゞ一色或は二色を用ひて居るに過ぎない。斯く我が服裝の配色の多いのは惟ふに日本は世界中でも山水明媚の國であるから、自然それが國民性に影響をしたのであらう。併し色は必ず各々特性を持つものである。白色は純潔を意味し、赤は陽氣で人を引きつける力を有つて居る、黒は陰鬱な感を與へる。紫は地味で奥床しいものである。西洋にては紫を謙遜の色として菫を愛し、是を胸間に挿し又贈物の籠を飾るのである。夫れば婦人の衣服の色合を選擇す

るには此等の點を酌量して餘りに俗に流れ淫風を惹き起すが如きものは、斷して避けなければならぬ。例へば女學生ならば、腰卷に赤色を用ひずして白色を用ゆるやうにして行けば、男子を誘惑するやうな事も無く隨つて誘惑される事もないのである。頰を彩り、口紅濃くつけて、赤い腰卷を裾から覗出して歩くやうでは、決して品位ある女學生の服裝とはいはれない。

△流行の逆潮

流行は、上流より下流に及ぶが例であるが、日本では常に、下流より上流に及ぶがやうな有様である。藝妓の服裝は四季を通して、流行の魁をして居る。上流の婦人は藝妓を眞似るのだから日本現時の婦人の服裝は即ち藝妓の服裝と云つてよいのである。誠に怪しからぬ譯だ。されば上流に立つて、多くの人に尊敬を拂はれつゝある人達は今少しく注意して自ら斯う云ふ服裝が善いと云ふ標準を立て、流行の魁を花柳社會に制せられざるやうに力められたいものである。

△服裝と富の程度

次には服裝の品質に就て注意しなければならぬ。日本は西洋に比して、富の程度が十分の一位であるから、服裝もそれに相當して西洋人が一人に付き百圓の費用を掛けるとすれば、日本人は十圓位でなければならぬ譯である。然るに今日の有様を見れば西洋人と殆ど同じ位の費用を掛けて居るに至つては、贅澤も又甚しいでは無いか。此頃或る呉服店の人に聞くと、何でも安價な物は賣れないが高價な品物は仕入れて置けば、直ぐ賣れて行く、現今商法の秘訣は實に高價な品物を仕入れるに在ると言つて居る。此の一言で現代の服裝の程度が知れるであらう。日本人の今負ふて居る處の、經濟的負擔は、一人に付き平均十三圓である。隨分莫大な高である。是れは國家の經營費で、個人の費用は此の以外である。先日私が或る支那人と面晤した時に、日本は戰爭には強いが金が無い。私の國は戰爭には弱いが金が有ると言つた。世界一の強國たる日本人が支那人如きに侮られてはならぬ。それには我々國民は家庭の費用を節約して、國の富を殖やす考へをしな

ければならぬ。其の家庭の費用はまづ衣服の料であらう。(曉生筆記)

若き婦人の弱點

宮崎湖處子

嘗て松村介石君と共に、同君の宅にて帝國通信社員倉永氏の婦人界の實驗談を聞きたる事ありき。頃しも日露戰局僅に收まり、軍人遺族慰勞會の到る處に行はるゝ際なりき。倉永君曰く「自分は當時到る處の遺族慰勞會に臨席して現狀を視察したるが驚きたるは此等の慰勞會が豫想外なる會合に終りしことなりき。慰勞する所の將校夫人も慰勞せらるゝ所の下士卒の妻君も皆今日を晴と着裝り、其の美服を粧し立てゝ練りこみ、其の美服の他を壓倒する者は自然稠衆の前に進まんとし、其の壓倒さるゝ者は自然に羞ぢて後に退らざるを得ざる態なりき。是に於て折角親切盡しの慰勞會が美服の競爭場となり、慰勞せられんとて骨を折りて遠路を來り會せし下士卒の妻女等は生涯忘るべからざる沈痛を受けて悄々と引き退れりき。傍觀したる自分は憤慨胸を衝て來るを強て制へて默視したりき。此れ獨り軍族慰勞會の情實なるかと云ふに、然らず、有らゆる婦人會と云ふ婦人會は其名こそ慰勞、慈善其他何々など云ふ美名を冠したれ、其實は渾て美衣美服の共進會に外ならざるは淺猿しとも淺猿しからずや」と、長き溜息を引き語れり。

斯て倉永通信員は更に語を繼いで曰く、「大凡今日中の官吏、會社員又は敎育家等に頻々として官、公金消費罪、收賄罪の起り來る所以は、一として其の妻女たる者の美服の慾求、之が素因たらざるは無し何故と云ふに、男子は男子だけに「知足安分」と云ふ金誡を服膺し實行することを得れども、女子は然らず「知足安分」など云ふことは、極めて下らぬ事に思ひ居れり。結婚前の大問題は美服、結婚後の大問題も美服、一も美服二も美服、三も四も美服なり。是故に男子に嫁して其の男子より美服の供給を得ざるときは、此の如き男子

を能なき者に思ひ、此の如き男子に嫁し身の不幸を悔ゆ。偶々「知足安分」の講釋を聞かざれば、道理には口を鉗む、乃ち口を鉗むといへども、心服したるに非ざれば、忿色に顯はれて如何にも氣まづい顔をして、口癖の樣に其の朋輩の幸福など羨む。是に於て男子の理性も遂に一婦人の前に屈し、最愛の妻の事にしあれば、如何にもして一度其の願望を遂し與りて、久しぶりに其の喜び笑ふ面も見たく、又斯くして男の一分をも立てゝ見せんと、遂に罪と知りつゝ罪を犯すに至るなり。淺猿しとも淺猿しからずや」と、又更に大息を引きたりき。

之ある哉之ある哉、世間何物か女子ほど必要なる者あらんや。而して世間何物か又女子ほど危險なる者あらんや。世間何物か男子ほど强剛なる者あらんや、而して世間何物か又男子ほど脆弱なる者あらんや。嗚呼。

倉永通信員最後に曰く夫の逆旅の下婢等が客の請に乘じて其の枕席に侍する者何が故か。其の得る所の金錢を以て朋輩に誇り見すべき、美服を購求せんが爲なり。更に此の輩が逆旅を賤み出でゝ料理屋に轉ずるは何か故ぞ。より高價に色情を鬻ぎ、より高價なる美服を購ひ、以て前に同輩たりし逆旅の下婢に誇り見せんが爲なり。彼の頻々として女學生の墮落する者、世間は之を悉く色情の餓鬼と思へり、豈料らんや其の大半は實は美服餓鬼の外ならずとは。

大凡女子の父兄にして此の實察談を聞く者誰か心を寒ふせざる者あらん哉。何が故ぞ。此の實察談が世間の事實に當つて、一々其の實察談なるを證するが故なり。試に其の一二例を擧げんか。

甞て讀賣新聞の「男女の愁訴」欄に「僕の女房」と題したる匿名の一法學士の投書の掲げられたるを見しに、其文中に曰く「翻つて否か女房の佛頂面の因果關係は果して那邊に存するか、僕は探究した、成程母も居る、弟共も多いので、思ふ存分愛情の交換が出來ないからか、否……然らば毎晩僕の歸宅が晩いからか、否……然らば僕の容色の衰へたからであるか、否……はて何が原因だらう？と、種々考へて見た揚句、僕の會社か

らの收入は、たつた三十圓、母と僕と女房と弟二人とで暮して居るのだから、思ふやうに頭の物寒くなつてもショール一つ買へないから、それで妻がくよ／＼して僕の働の無いのに愛想が盡きたので在るまいか……。僕とても滿更憎い女房では無いのだから是非あゝも爲てやらう、斯うも爲てやらうとは思ふが出來ない」。然し「女房よ、今は成程僕の給料は三十圓だ。併し何時までも三十圓ぢやないんだぜ！。苦樂を共にするのが嫌で樂をしたい良い着物を拵へたいと思ふのは夫りや餘り我儘ではあるまいか云々」。と理せめて哀ならずや。然も是れ豈に匿名の一法學士の內事たるに止まらんや。彼は適以て其の社會其の階級の家庭の苦情を代言せるものに外ならざるなり。

僕の知る所の一法學博士は其の細君が交際場裡に出入して、被服其他の裝飾品の調度費、常に其の收入に超過するが爲に、昨年の暮、遂に明治四十何年までの給料を質入して、其の誅求に應ずるの已むを得ざるに至れり。

又僕の遙に知る所の一醫師は隨分職業柄勉强もし流行もせしものなるが、其の妻女は一時一部の婦人社會の大立物として活動し、當時屈指の政治家某、某、某の人々を女權擴張の運動に使役して、自身其の上に立ちて采配を打ち振り、天晴れ花役者の役目を演じたりき。然れば其の良人の所得は悉く其の妻女の被服費乘車費、交際費を惜氣もなく、紙片の如く使用せられぬ、然し性來の好人物にて好く不平なしに妻女の運動費の爲に營々と稼ぎたりしが、遂には稼ぎ疲れたりと見え、一夕パッタリ仆れて終に復た起たざりしかば、有髯の女傑も乘馬を乘り倒しては身動きならず、折角の女權擴張も他人に渡して、虚榮の末、哀れ浮世の秋風と尾羽打ち枯し、僅に良人の醫術器械や、其の祕藏に係りし模造人體などを賣代なして露命を繼くの悲境に陥りつと聞えぬ。

又或る文士の妻は其の良人の收入寡少して其の虚榮心を滿すを得ざりし爲め、陽には不平を言はず、唯浮世が厭はし、尼になりたしとのみ怨みたりき。而も到

底其良人に由りて其の慾望を遂ぐる能はざるを見るや却つて粗服主義を唱へ立てゝ、儀式の席などに良人への面當に、特別目立つ粗服を纏ひて出席したりき。有繋無頓着なりし文士も、心中大に哀を催し遂に筆を拋つて轉業するに至れりと云ふ。

然らば宗教上の會合には婦人連の身の廻りも清楚なるべきかと云ふに、苟も婦人の會するところは其の世間的なると出世間的なるとに拘らず必ず美服の會するところなり。現に近頃某婦人會に於て、仰山にも唯一人白襟、紋付、金時計、而して寶石入の指輪の二本までも指先に耀かし、巳んごとなき上臈の如く粧し立てゝ來會したる婦人を見うけぬ。

又近頃ある地方にて新に「母の會」を設立せんとするに名流の婦人を推し立てゝ會長としたらば出席者多からんとて、其の候補者に某男爵夫人、某高等官夫人など云ふあたりを發起者より名指せしかば、其の中なる婦人連には疾くも衣服の詮議に氣を廻し斯かる上流の夫人たちが臨席せらるゝとあれば、正か有り合せの物にては、羞しければとて其の良人に被服新調の議を提出する向などあり、良人なる者怒つて「母の會」とは、いづれ賢母を作るべき會合なるべし、賢母會にして斯の如くならば、無い方が良いと曰へるなどあれば、其の成立覺束なしなど、友人の書信の端に見えたり。

古人は女は繋累なりと嘆じたるが女は獨り繋累なるのみならず、又實に重荷なり。男子が生涯女子を伴ふは重を負ひて遠きに行くに異ならぬなり。世間何物か女子ほど必要なる物あらんや、而して世間何物か又女子より重き荷物あらん哉。

是に於て幾百萬の女學生が日夜に思慕理想する所の「良妻賢母」とは、須らく如何なるべき物なるやの疑問は、既に自ら氷解せられたるべしと思ふ。他なし「知足安分」の謙德を以て、能く良人を助くる者、妻として良妻たり。之を以て能く其の子女を訓練する者、母として賢母たるなり。美服の飢渇を能く其の眼中より抉り出すもの、妻として良妻たり、母として賢母たるなり。能く必要を先にして裝飾を後にするもの、妻と

しては良妻たり、母としては賢母たるなり。彼の良人をして妻女の不平を天下に愁訴せしむるが如き者、良人をして清貧の職を抛ちて濁富を追ひて轉業せしむるが如き者、良人の未來の收入を典して己の衣裳室を飾る如き者、己の交際費を得るが爲に、良人を追ひ使ひ、彼をして終に疲れて斃れしむるが如き者、是れ決して良妻に非ず、是れ決して賢母に非ず、是の如き妻を有てる良人は禍なるかな。

斯く記し畢りて、將に筆を擱んとする時、讀賣新聞報じて曰く、三宅文學博士の田邊花圃女史を娶るや、翌日債權者執達吏を駈り來りて、悉く女史の嫁具に封印し去る。女史の親戚大に怒りて、三宅氏に言ふ所あらんとせしに、女史は少も意に介せず、却て親戚を和めて事無きを得たりと。僕又嘗て自ら聞く、始て三宅氏を訪ふ者女史を以て下婢と誤らざるものなしと。其の謙徳の美想望すべきかな。

現代女學生の欠點

加藤男爵の談片

胡　劒　生　筆記

一日男爵加藤弘之氏を訪ひ、現今教育界の趨向に就て聞く處あり左は即ち博士の談片なり。

今日の女子教育の勃興は、我國に在りては實に空前の盛況で、喜び賀すべき傾向には相違ないが、此の盛況の中に矢張り一得一失を免れぬのは誠に嘆しい次第である。

▲生意氣がる事

舊幕府時代の女學生と、今のとを比較して見ると、昔しの女學者に碌な者はないと云つてもよかつた、單に和歌位詠んで、樂しんで居る者は格別、少し漢學でも、學んだ者と來ては、氣位が高くて高慢不遜で、動もすれば人を眼下に見ると云ふ風があつて始末に終へなかつたものであつた、さう云ふ婦人に限つて卑近の事には御先き眞闇で、何とも手がつけられなかつたものである、併し今の教育を受けた、女學生は、世間一般に

智識の度が進み、女學生等の持つて居る位の智識は誰れでも持つて居るから、昔のやうな獨り天狗の高慢者はない代り、ハイカラと云ふ忌むべき惡風が、一般に浸み込んで來た、一例を云ふと、高貴の御孃樣であるが、昔しならば深窓に生ひ立つて、東西も分らぬ程の方まで、世間並みの教育を受ける結果として、却々初心兒でない代り、甚くハイカラになつて來て、昔のやうに大人しくない、このハイカラといふのはムツカシく言ふと輕佻浮薄平たく云へば厭な御轉婆で、何の考もなく妄動すること、即ち女子の美德として數へられた、貞操とか、淑德とか、奥床しいとか、優やかとか云ふことの反對で、女子に取りては、最も忌むべき惡風である。

▲過渡時代の產物

總じて物の俄に興ッた當時には色々の弊害があるもので、維新後、西洋の學問が俄かに這入つた際なども矢張り此のハイカラと同じやうな弊風が、非常に行はれた、併し多くの年月を經た結果として、男子の學問は、餘程落ちついて參つたが、何しろ女子教育は、今が勃興の最中で、熱氣のホヤ〳〵と來て居るから堪らない、隨つて弊害も其の頂上に達して居るやうである、併し此のハイカラの惡風なども、年月の經つに隨ひ、だん〳〵落ちついて來るには違ひないが、そうかといつて打ち捨て置く譯には行かぬ、是非矯正する必要がある、夫れには今の女學生自身が銘々氣をつけるに越したことはない、殊に女子は、先天的男子よりも餘計ハイカラになりたがる傾向を持つて居るから、尚更ら、氣をつけねばならぬ。

▲家事に暗し

學生上りの細君は、理屈を捏ねたり、外國語を操つたり、又は議論をする等の事は却々えらいが、日常の仕事、飯を炊く洗濯をする子を育てるなどの事は、全く不調法であるとは、今改めて言ふまでもない、此の缺點も、つまり前のハイカラ風と同じく、過渡時代の產物であるからだん〳〵亡なるには相違ない、十年前には、「師範學校出の婦人は、女房に持つ勿れ」と云ふ、

諺が流行した、夫れは何う云ふ譯であるかと云ふに、つまり學問はいくら出來ても、良人を助けて行く事が出來ぬと云ふ事を諷したもので、實際十年前の女學生と來ると、何學校出に限らず、家事向きのことは、一切御先眞つ闇で、手がつけられなかつたものである、然るに今日では、世間の攻撃が強いので、教育をする方でも、又受ける方でも、互に氣をつけるから此の弊風も、年々に薄らいで來て、教育のない婦人を女房にするのが、優しだなどと云ふ亂暴な事を云はなくなつた、是れは誠に喜ぶべき現象である。

▲小說の惡感化

今一つ女學生の氣をつけねばならぬことは、惡小說の感化である、夫れも其の筈、新聞には大抵、如何しい小說が載つて居る、社界教育の機關を以て自ら任ずる新聞紙に彼あ云ふ小說を掲げると云ふとは、一般の教育の上に非常の害毒である、殊に婦人は情的に出來て居るから、其の感化を蒙ることが強く、隨つて其の害毒も一層で彼の厭世煩悶は、大抵小說の中毒から來るやうである、故に吾輩は、孰れかと云へば、女學生の小說を讀むと云ふことには、絕對に反對である、吾輩は餘り讀まぬから何れが有害で何れが無害だと一一指示する譯には行かぬが、蘆花の小說などは、比較的害がないやうに思はれる、兎に角只今のやうに、所謂大家と云はるゝ人々が、彼あ云ふ如何しい小說を書いて平氣で居るのは、誠に心外千萬で、女學生などは現今の小說なる者に對して、常に警戒を怠つてはならぬ。

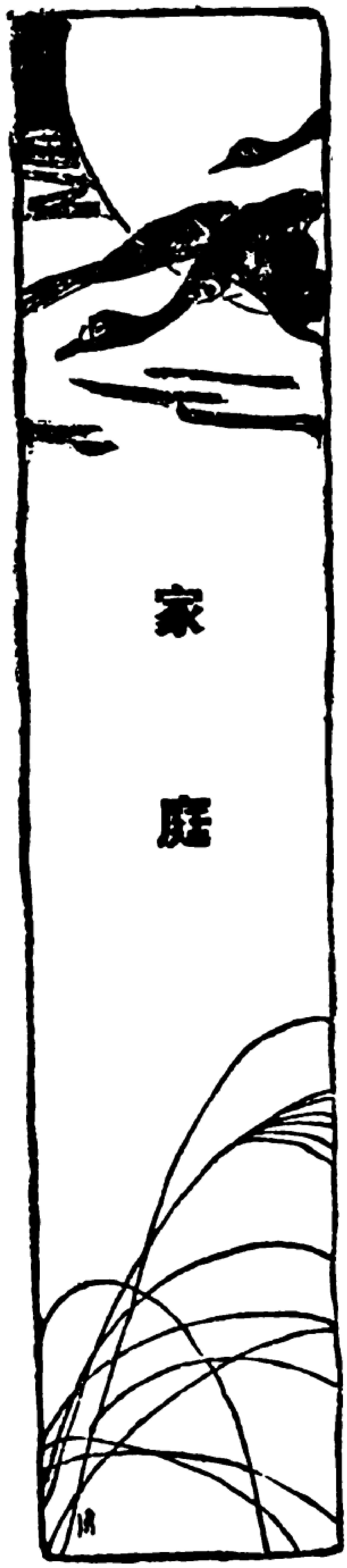
▲小說化れの一例

終りに惡小說の惡感化について、一つの實例を御話し致さう、去年房州の生れだと云ふ、一人の女學生が吾輩の所へ舞ひ込んで來て、私は最初醫學研究の目的で、東京へ出て來たが、醫學はどうしても嫌ひであるから、代りに文學を研究して、女作家にならうと思ふが、鄕里の兩親は醫師にならぬ位なら直ぐ歸つて來いと、非常の立腹で、兩三日の中に、叔母がわざ〳〵連れに來る筈であるが、鄕里へ歸るのは厭であるから、

どうか私の身の上を保證して國の親達に安心させ依然東京に止まつて居られるやう取計つて吳れろと賴むのである、併し何故に、最初の志望たる醫學を嫌つて、文學を遣る氣になつたのかと詰問をすると矢張東京へ出て來て暇のあるに任せてあらゆる小說を讀み耽り、餘程惡小說の惡感化を受けて居るやうである、當人は假令文學者になつても現代の小說家のやうな浮華淫靡のことは書かぬとか、又た文士志望でも如何しい小說は手にしたことはないとか、立派のことを云つて居るが、よく心的狀態を觀察すると、星とか菫とか、煩悶とか、不健全の思想に化ぶれて、空想ばかり描いて悶えて居るらしい、其處で吾輩は、初對面の者の身の上を保證することは、出來ぬが、兎に角叔母を遣せ、さうすれば一應協議して見るからと云つて歸した所が、二三日經つて、叔母から當人の人と爲りや其他のことを聞て見ると、愈よ駄小說の惡感化を受けて、煩悶して心的狀態が變になつて居るのがよく分つたそこで其叔母に、勸告して、國へ連れ歸らせた。兎に角之れは小說の惡感化を受けた一實例である、幸ひ早く歸國したから好かつたが若し依然東京に止つて居たならば乾度一身を誤つたに違いないと思ふ、夫れにつけても、矢鱈小說を耽讀すると云ふことは、戒めなければならぬことである。

米國の下婢

米國の家庭に於て下女を多く使はないのは、第一用事の規定が整然して居る、應接日にさい客受の仕度をして居けば、間の日にさまりなく客の來るといふ事はない、縱令極懇意な間柄で來ることがあつても、料理など出すに及ばず、出した處ろがお茶位が關の山ですから手數が懸りません、第一、我國の人のやうに不規律に食事をする事なく、皆一緒に同時刻に濟みますから自然臺所の用事も少く、嘗て私共の雇入ました。下女は却々立派な物で金時計を所持して居りました、此女などは始終下女を職業として勤むるので、月給も高く、四十弗づゝ拂ひました。日本のやうに主從の關係とは異つて、月給取といふ意氣組もあり、夜分と日曜には主人の要用に關係せぬのが習はしで威張たものです、其代り日本の下女の三倍位は働きます。（某外交官夫人談）



理想の生活法

佐治實然

△無趣味なる生活

簡易生活といふとは解釋の爲やうに因つては甚だ趣味のない貧乏生活と一緒にされる事がある。例へば僅に一室か二室の家に、親子兄弟がゴタ〳〵住居をして、そして來客の際などには火鉢が一個しかない處から、昆爐に火をおこして、それで湯も沸せばお菜も煮る、又衣服はと云へば、不斷着にも晴着にも寢衣にも唯一枚切りで、寒くさへなければそれで可い、と申すやうな形ちに誤解されるので有が、こんなのを簡易生活だと心得て居る人は、偶ま餘裕でも出來てくると、直ぐと贅澤三昧に流れるのであつて、之を簡易生活と謂はんよりは、寧ろ單調生活と名けた方が適當かと思はれる。で此單調生活の實行者は、如何なる階級に多くあるかと申せば、主に下層社會の勞働者とか、又は鑛山の坑夫の如きものにある、殊に後者の生活に至つては實に吾々の想像も及ばぬ處であります。一年三百六十五日、東から出る朝日、西に入る夕陽、それさへ見る事が出來ぬとは何たる無慘な話でせう。晨に星を戴いて出で夕に月を踐んで歸る、といふ農夫の生活なら未だ這個に或る趣味もあらうけれども、彼の坑夫に至つ

ては地下何百尺の坑の中で勞働するのだから、恰んど夜と晝との區別がないので、却々趣味どころの話では無い。自分の子供が三歳か四歳になるまで顏を知らぬ者すらあるといふ樣なことで、朝の出掛には早いから眠つて居る、夜歸つて來る頃には、又既うスヤ〳〵と夢路にあつて、薄暗いランプの光では瞭然其貌が分らぬ。と申す樣な生活狀態は、所謂簡易ではなくして憫む可き單調生活と云つた方が至當でせう。

△不幸なる財産家

翻つて財産家の側を見るとこゝにも又單調生活がある、即ち單に貧民ばかりでなく、既に巨萬の富を有して、悠々たる生活をなし得る身分でありながら、尚ほ此無趣味なる單調生活を脱する事の出來ぬ、不幸なる金持がある。例へば高利貸の如きが即ちそれである、家には羨まれる程の財産があるに關はらず、朝に夕に金の利息を勘定するとか、期限の滯つた處へ催促に行くとか、只管もう金を殖やす事にのみ苦心して、心には一寸の餘裕もなければ趣味もない、と云ふ風で五十年六十年の永い一生を全く憂目の中に送つて居る。是等も亦た一種の單調生活に外ならぬのである。

併し財産家には今述べたやうなのは至つて少數であるけれど之と反對の繁雜極る暮しをして居る者は比々皆な然りで、其結果簡易生活の必要も起つたわけであるが、私は今日の富豪者の家庭を、繁擾生活と云はんよりは、尚一歩進めて煩悶生活と名けたいのである。

△富める人の煩悶

先づ貴族とか富豪とか言はるゝ人の家庭に就て見るに、家族の外に雇人やら食客やら、其他種々の人が混雜して居て、始終波瀾の歇み間がない。而して其主人の職業はと云ふと、區會議員から市會議員、或は衆議院議員にもなつてをれば、銀行會社の重役も務めて居るといふ風に、肩書ばかり幾つあるか分らない。けれども何の職務にも、格別趣味も持つて忠實に盡さうとはせず、唯だ其名前を以て、利を射るか、名を釣るか

した上で、世間に對して大に幅が利くやうになればよいと考へて居るのである。單にこれだけの繁雜なら未だ可いとしても、或は多勢使ふ雇人の中には、偶々不良のがあつて、銀行へ金を預けにやる途中から、それを浚つて持逃げをする、ソレ警察へ告訴しろといふやうな騷ぎも持上れば、或は主人自身が不品行をせぬまでも、家族の者が不埒を働けば其尻拭ひもしてやらなければならぬ。やれ息子が綺麗な女中に關係をつけて、其間に子が出來た、子供は金をつけて里子に出す、それが又成人して戻れば、又々家庭を騷がす種になる、と云つた樣な譯で、其繁縟と煩悶との度は實に馬鹿々々しい程である。けれども世間多くの盲昧者流は、恁那煩はしい生活を羨むばかりでなく、是が人間として最も愉快で且つ光榮で、加之又幸福であるかの樣に思ふて居る。



△他手を籍りない手段

嚴めしい冠木門へ馬車を軋らせて這入ると「お歸りー」との威勢ある聲で馬丁が怒鳴る。其聲が玄關まで聞えるか聞えぬ程の大きな廣い邸宅に住つてゐるのがえらい人であると世間の盲昧者流は信じて居るから、自然上流の奥さんや孃さん達は、年中爲す事もなくぞろ〳〵と曳裾しながら、大枚五百圓もする指環の三つも輝かして、要らぬ人間でも餘計に雇ふておくのが高等の家庭

だと考へて居るらしい、そこで小間使が二人、仲働きが三人、炊婢どんが五人も居て其上に、書生やら庖丁人やら、何でも人を多勢使へば使ふほど、偉いとしてある。

　每日植木屋が二人も三人も詰めて來る、それが必ずしも大きな樹を移すとか、又は高い垣根の手入をするとかいふのではなく、ホンの少々ばかり落葉が散つて、家の娘さん達が一寸箒を持てば、直ぐ淸潔になる仕事であるのに、ハツピを着た大の男が、忙がしさうな顏其實閑でならぬ顏をし乍らノソリ／＼と掃いて居る、それが即ち家の權威である、見榮であるとおもつての凡て此樣な生活は、只に煩はしいのみでなく、人道の上から見ても、自分で行れば幾等でも出來得る仕事を、態々他人にやらせて、乃公は主人公で候と威張つてるなぞは甚だ宜しくない習慣である、韓國流の習慣であるから簡易生活を實行しやうとするならば、先づ一家族で仕事の分擔法を定めて、如何に大家の主人公でも令夫人でも、乃至若樣でもお姫樣でも、朝夕のお掃除とか、器物の整理とか、それ／＼適當の任務を受け取つて、なるべく他手を借りぬ用意が肝腎である。

　人間には自然に巧妙な手といふものが附いて居る、前にも伸びれば後へもまわる、上下左右、自由自在に動く按排しきは、どんな上手な器械師でも、こううまくは出來ない、つまりこれは天が人間に對つて、何でも爲せと云ふ意味なので、之を使へば胸廓も開けば運動にもなる、然るにこの手や足を多く動かさず、凝として頭腦ばかりを費つて居る人は、顏色は蒼白くて、三度の食事さへお旨く食はれない、爾那風で財產ばかり山ほど積んで見た處で、何が愉快でありませう。

△簡易の生活と經濟

　次に簡易生活に伴ふ經濟の問題であるが、簡易生活と繁雜な生活との間に於て一は其財產を安らかに維持し他は危い方法によつて運轉せしめると云ふ相違があるので、從て其生活の有樣に於ても大分樣子が異つて來る。假に茲に一萬圓の資產があるとすると、之を儲

け主義に依て巧みに運轉させたならば、一年に千三四百圓の收入がある筈であるが、それは餘程骨が折れる上に、五月蠅い手數を掛けなければならぬ。けれども左程澤山儲けなくとも寧ろ餘り面倒な事がなく、唯だ財産を安全に維持さへ出來れば可いと云ふのならば、先づ八分位の利子と見積つて、一年に八百圓しか收入のないことになる。

で私は思ふに趣味のある向上的生活と、慾張主義とは到底兩立するものではありません。『人はパンのみにて生くるものに非ず』とは如何なる場合にも應用され得る言葉である。明けても暮れても金錢の爲に頭を惱まして、貸金がドウの證文がドウのと言つて訴訟沙汰に及ぶとか、或は家賃や利息の取立に行つて、種々煩雜な懸合をしたりして、漸く年に千三四百圓の金を儲けて生計て行くのと、又爾那煩はしい手數なしに、一萬圓の財産に八百圓位の利を得て安らかに暮して行くのと何方が良いかと言へば、私は簡易生活の立脚地からして、設令收入は少くとも、それだけ精神に餘裕のある八百圓の方を取るのである。或はそれだけでは足らぬと言ふ人があるか知らぬが、不用な器具を二つ購ふ代りに一つで濟ませ、要らぬ女中を二人も三人も使つて見榮を張る事を廢して一人で間に合せ、一年に三枚新調する衣服なら、一枚だけ拵へて置くと云ふ風にやつて行けば、結局八百圓の金と雖も煩悶生活をして居る家庭の、千五百圓或はそれ以上にも對當ふ譯で何も不足はあるまいと思ふ。加之此樣に身分以下の生計をして居れば、借金取に苦しめられる虞もなければ遣繰算段に頭を痛める必要もなく、常に心は悠々として、愉快に暮される道理である。

△八分目主義

尙ほ簡易生活の理想を言へば一家經濟の標準を我が身分以下におくと共に、其の仕事の標準を自分の力量以内に置と云ふことも亦必要なことかと思ふ、例へば縣知事にも成れる力量を具へた人が、郡長位のところに滿足して居れば、氣が樂な上に決して失敗を招く樣な事

は無い。然るに大抵の人は爾うではなくて郡長の職務さへ如何かと思はれる者が、一躍縣知事の椅子を覗ふといふ風だから兎角躓き易いので、手一杯の仕事は多くの場合に於て危險である。一日十里の道を行く脚力を有する者が、八里位にして止まれば一向疲勞を感じないと同じ譯であらう、之を要するに簡易生活と云ふ事は之を言換へれば萬事八分目主義と云ふことになるのである。故に家庭に於ける婦人にしても能ふ限り雇人を節約し大抵の事は成るべく天より與へられたる各自の手足を以て自ら處理する樣に致したい、斯くすれば、第一失費を省くばかりでなく、運動にもなるから、自ら健康を助けて、それが軈て精神上にも多大の快樂を齎す結果となるのである。

△茶室的の裝飾法

簡易生活の勁敵は例の虛榮心で、主婦が見榮坊であると是の理想的生活は決して行はれません。私共の知合の中に、要りもせぬ雜多の道具を飾り立てゝ外見を張つて居る者が少くないが、爾いふ家は槪ね內政は火の車である。殊に笑止なのは、其家に娘でもあると、態々客室の隅にピアノを据ゑたり、床の間へ琴の二挺も立掛けたり、其他贅澤な器物を處狹いまでに陳列して、生活の餘裕を見せびらかさうとする家庭であるが、而もそれに相當した財產があるかと云ふに、決して然うではない。實は自ら賴むところが弱いから、成べく客間を立派に飾立てゝ、先づ來客を驚かさうと云ふ魂膽からやつて居るので、其家の內幕を知つた者の眼から見ると、如何にも主人の腹が見透いて、恁那に表面を飾るのは未知人を惑はす氣だと思ふと、寧ろ淺間しく感じるのである。

又何處の家でも空屋でない以上は、それ相應に室內を裝飾する必要はあるが、さりとて同じ樣な物を幾個もいくつも列べ立てるにも及ばない、此點からいふと彼の茶室などは餘程ヨク出來て居る、茶を點て喫むとか、或は主客共に食事をするとかに就ての器具は、一通り揃へてあつて、不足する物は一つでもないが、其

代り又重複する物も更にない。普通の家に於ても凡ての家什や裝飾等を此と同じやうな具合にしてをけば、出すにも方附けるにも至極便利で、且つ何時でも清淨になつて居やう。ところが大抵の家では、日用品の外に、寧ろ邪魔になる不用物が、不規則に列べてあつて、それが爲め却て室內の裝置を害してゐる、是等は掃除をするにも手數がかゝる上に、美的方面から見ても、亦決して感心したもので無い。

△富豪の嘆ち言



『一簞の食一瓢の飲、回也其樂を改めず』、恁云ふ風に質素な考を以て、世に處すれば、貧乏も怖からず、富貴も羨むに足らぬのである、世人は、兎角前に述べたる如き煩悶生活を一種の成功と誤認して質素で小潔洒と暮して行くのを、如何にも見榮のない寂しい事であるかの樣に考へて居るのは誠に笑止な話である。思ふに其種の人は、未だ煩悶生活の地位に進んで見ないからで一見嘸ぞ愉快で娯しい事と見えるであらうが、サテ實際其境涯に到つて見れば愉快でもなければ安樂でもない。寧ろ苦痛と煩累の塊を錦襴の嚢に

包んだ樣なものである。或時私の知つ居る一富豪が、嘆しながら『此上の希望は、種々の家族的係累を去り、複雜な身代を斷乎改革して、小綺麗な小さい家に、清く安らかに暮して見たい。』と語つたことがある。いかさま金錢の貴とさも心の苦痛には換へられぬと見える。それを知らずに只管富貴を的として、其方へのみ驅けて行くのは、恰も夏の蟲が焰の中へ飛込むのと同じ譯柄ではあるまいか。それで私の理想とする所謂簡易生活主義を極く簡單に申せば、三室か五室位の小淡洒とした家を構へ、夫婦の間に子供の二三人位も養育して、萬事節約を旨とし、『月おぼろ藁屋にこもる笑ひ聲』と申すやうな平穩な家庭を望むので、其れ以上は左程希望すべきものでは無いと信ずるのである。（蒲瀧生筆記）

賢母の面影

（波多野精子刀自が事ども）

芙蓉生

波多野精子刀自が賢母として世に知られたるも道理なり。長女環子（三十四）は女子高等師範學校を優等にて卒業し、在仙臺の辯護士又代議士なる村松龜一郎氏に嫁し、先妻の遺子を愛育すること我兒の如しとて賢妻の譽高く、長男、文學士精一氏（三十一）次男、步兵大尉壽雄氏（二十九）三男、海軍大尉貞夫氏（二十七）は共に學校卒業の際成績優等にて揃ひも揃ひて恩賜の時計を拜受し、四男、達夫氏（二十二）は目下猶早稻田大學商科に修學中前途に多大の望ある人、斯く同胞五人まで揃ふて成育を全ふせし刀自は如何なる人ぞ。

刀自は信州松本の藩士岡田正豁氏の娘で、十五六歲の時同藩の波多野敬氏に嫁し、維新後夫婦共々に上京されたのである。精一氏の直話によると刀自は淨土眞宗を深く信じて居られたさうな、刀自は七歲位から寺詣りをよくされたもので、後々も親戚の若い婦人などに自身が說教を聽聞して來ては、夢中になつて其話をよくされたといふ。夫敬氏の歿後も、全く死に事ふるこ

と生に事ふるが如しといふ風で、新らしい物、珍らしい物到來物などは必ず先づ靈前に供へて居られた。

△良人敬氏

これは今から八年前に歿せられたが、この人は維新の風雲に乘ずるといふ樣な事も出來なかつたので、「これは最う何でも子供を善くするより外に仕方はないと言つて、全然精神を子供の身の上に注ぎ込んで了はれた。精子刀自も又夫の意を何處までも守つて、一生懸命にやられたのである。二人にも朝暗い内から起きて敬氏自らバタ／＼と掃除などをして、子供達の復習をも未だ薄暗い内にしてやるといふ風であつた、良人は漢籍の素養も可かり深く且つ算術が達者でした。何でも

△子供を叱つてはならぬ

といふのが主義で、二人とも什麼事があつても決して子供を叱らない。處が又精一氏初め男の子が三人も續いてあつて、皆究竟の勢と來てゐるので、一通りの暴れ方ではない。客が來てゐる時、兄弟で卵の抛げ付け合ひをしてゐる。卵が襖に打當つて、割れて、襖は卵だらけになる。それでも笑つてゐるといふ風。或時親族の人が訪問してゐると、子供達は座にあつた茶托を庭へ持出して、それをコツ／＼石に敲きつけてゐるそれでも唯笑つて見て居られたのでお客は感心して「なか／＼眞似の出來ない事だ」と歸つてつく／＼話したそうな。着物などを泥塗れにして歸つて來ても、刀自は無論叱るどころではない、「おゝよく遊んで來た」と褒めるといふ風であッた。何でも伸びるだけ伸びさせるといふ考であつたのだらう。

△下婢に對しても

同じ樣で、叱ることなどは絶えて無かつた。「おゝよく爲てくれた、よく爲てくれた」と何でも褒めてやり、お前が居てくれるから、恁ういふ風に都合よく行くのだといふ風でした。そして又

△客あしらひ

の善い人でした。十八年間一本の火吹竹を使つたと傳へられてゐます、さういふ大儉約の風は、親しく出

入する親戚の人などにも見えなかつたといへば、これは唯節儉の意味を極端に形容したものでもあらうが、それとも又或は内でさういふ工合にしてゐられたから、客をよく待遇することが出來たのかも知れませんが、兎に角客には最う十二分に滿足するやうにされた。まだ時刻は早くても、もう時分だからと言ふて食事を勸める。辭退しても、箸を椀に突込んで、「もう箸を付けたから、食べておいでなさい」といつて勸められる。其麼にせずともの樣であるが、さうせねば氣がすまなかつたといふ風でした。されば波多野家へ出入りする程の人は皆心持よく思つて居たもので、子供達の友人でも、尋ねて來た時、若し不在であつても母堂と話し込んで、悠如遊んで歸るといふ風でした、よし子供が在宅でも、母堂が居らない時は却つて其友達も淋しく思ふ位でした。で波多野家では子供と友達は同時に又母堂のお友達のやうでした。精一氏洋行中に親戚知人が訪問し世話してくれたことを、歸朝後に話された樣子なども誠に感が深くて其の親戚友人等として十分滿足せしめたといふ。這麼に客をばよく待遇された然も

△家　計

は餘り豐かではなかつた。以前波多野家は餘程富裕であつたが、維新後、士族授産場といふやうなものへ人に勸められて資産の多分を投じた爲め、餘程損失をして、後には良人敬氏が役所へ通勤する樣な事にもなつたのである。さりながら左迄窮乏に迫つたなどいふわけではありません、彼の十年一日の如く梅干の握飯を携帶したなどと傳ふるは、矢張りこれも極端過ぎた想像說で、固より節約は守られたのであるが、子供の修業中の書物などは十分に與へられ、西洋から舶來品を取寄せてやられた事などもある。さて又刀自は

△實によく舅姑に

事へられた。舅は中風症で七年間病臥して居られたのを、刀自は我が體格の大きいのを幸に、毎日午前に一度午後に一度、必と舅御を脊負うて庭などを散歩された。食事の世話も大層善く盡されたもので、實に親

類中の賞め物であつたそうな。一時は襁褓が三人前要つたといふ位、これは舅御のと子供二人のとでそれを毎日洗濯したり乾かしたり、そればかりでも大抵な事ではなかつたのです。然も舅御のは毎晩それを揉んで柔かにしてさしあげられたといふ。ですから時によると。往々午前二時三時頃までも起きて居て、萬般の家計を手一つにやられたのである。舅御の老病は半ば無感覺で、炬燵に火は焦げる程あつても、もつと入れろとせがまれ、それを嘗つて一度も逆らつたことはない直ぐに十能に一杯火を入れて來る。無論炬燵には十分あつて、其上に入れ樣はないので、前にある火と入れ換へる樣にして兎も角も舅御の命の儘にされたのが常であつた。何事によらずすべて此の通りで、實によく柔順に事へたものです。つまり柔順なのは刀自の性



質であつたと見えます。元來刀自は嫁入當時夫敬氏の氣に入らなくて結婚後多年の間、室を異にして、優しい言葉も懸けられなかつたといふが、それを能く堪へ忍んだのも、畢竟父母の吩咐を柔順に飽くまでも守つて、決して二夫に見えまい、舅姑に十分よく事へやうとしたもので、之が爲に夫妻の間も次第に解けて、遂には同心協力して、世にも愛でたき子女の敎育を仕遂げられるやうになつたのである。姑は舅よりも先に殁せられたが、これも中風症で、一時は二人一緒に病臥して居られた。かくも柔順に事へられたので、其孝心に感じた舅御は折々刀自の顔を撫でゝ、よくして呉れる。嬉しいと言ふ意を表された程であつた。然し舅御は寢てゐるのが、飽き〳〵するので、朝は三時頃になると、もう四時が鳴つたと言ふて起される、すると刀自は直ぐに起出るが習でしたから、其の時分は平均二三時間より外眠られなかつた。あれでよくも身體が續いたものだと知る人は皆感心してゐたそうです。

△體　格

寫眞を一見しても分る。偉大なもので、本來は健康な質でもあつたでせうが、老來は多病で、まづ見懸け倒しと言はるゝ方でした。今回殁なられたのは肝臟病でしたが、二十年程前に一度肝臟を病つて、其時は十日間、水も通らず、苦しさに手拭を幾筋も食裂いて了つた程で、隨分烈しかつたさうな。それ以來どうも弱くなられた樣で、壯年の頃あまりに身體を虐く使はれたので、或はその爲かも知れません酒は寧ろ好きの方でした。尤も四五年前からは、ほんの卵酒位なものでしたが、一體に

△元氣で快活な人

でした。「今日は芽出度日だから私が唄を謠ひませう」といつたやうな調子で、親戚の一婦人に向ひ「私が死んだらどうか賑かにやつて下さい。陰氣な事は厭だから、唄でも謠つて賑かに……」と始終言つて居られたさうな。記者は母堂の事を波多野家へ質して、然も強つて辭退せらるゝに逢ひ、一時當惑しましたが、

幸に此婦人御夫婦が居られて、せめてもの思ひやりにとて、記者の問に應せられましたのでかく、「賢母の面影を」見る事が出來ました、今度の病氣で赤十字社病院へ入院の時も、途中では苦しく嘔氣など催うして弱つて居られたが、愈々其玄關へ着くと、車の上で兩手を擧げて萬歲！とやつてをられた、精一氏洋行の時も萬歲をやり、二子の出征の時も矢張萬歲をやられた。親戚の某氏が高等商業學校を卒業した時には、母堂が前からお祝ひに踊を踊つて、賑かに祝はれたといふ。這麽風で人を勵ますことなどは上手でした。二子が出征の際も實によく勵まして居られた。然し子供を思ふことは非常なもので、海軍の方の、即ち貞夫氏が戰地で加減がわるかつた折など、ヘモダロビンを送ると言うて大層騒いでをられた、末子達夫氏は殊に可愛がられた樣です。



刀自は「私が死んだら坊さんを澤山呼んでおくれ」と言はれると傍から末子が「それなら坊さんを百人呼んで上げやう」と言つて直ぐに又「這麽事を言つても死んで了へば分らないから、何うするか知れませんよ」と言はれた、こういふ風で、この末子は一風變つてゐた故、別て可愛がつたらしい。

△よく泣く人

刀自は悲しい折にも嬉しい折にも直ぐに涙が出る質

で奮て親戚の熊本謙一郎氏が(學習院教授)が令息を田舍に預けて育てようとした時。母堂は强つてそれを止めて、「私が頼むから、何卒伸ちやんを田舍へ遣らずに置いて下さいと涙を浮べて言はれる。それで其事は止して了つたといふ、亡夫敬氏の事を言出しては。大好きな碁も碌々打たずに亡くなつて了つたといつては、其の粉骨碎身の樣子をよく泣いて話された。

子供本位

刀自は全く子供を本尊として、一生懸命になり、それで夫の志を助成せられたのである。又結婚後十四年間も絶えて子供が無くて、三十歳頃にもなつて初產をした爲に、一層子供に熱中された譯もあらう。兎に角一も子供二も子供、何かと言ふと直ぐ子供の話で、人に笑はれる位子煩惱でした。精一氏洋行中、母堂の病氣が甚だ心配なので、氏の友人達が留學先へ打電しようとしたのを、遮つて止めたなど、實に美談ですが、これが皆子供本位から來たことです。あれほど人に善くする、愛想のよい母堂も、今度の病氣にかゝつてからは「どうも癇が立つて困る」など言はれた事もあるさうだ。精一氏不在中の病氣の時と、今度とは餘程耐へ方が違つて、今度は餘程甘へられたさうな。「なに今度は子供達も皆歸つてゐるから」といふ心持らしかつた。さればこそ令嬢令息達が皆非常に孝心で、精一氏は勿論、陸軍の壽雄氏海軍の貞夫氏など、阿兄の不在中は二人とも出征して、後には母堂が達夫氏と女中一人とを相手に然もずつと病中で通されたのを、二人が貢いで居られたといふ、同胞五人何れ劣らぬ孝心に、所謂父母を顯はされた。精一氏が留學から歸つて第一に奉じたのは、父の墓を立派に建てたことである今度母堂を失つて、まづ奉じた事は、美麗な佛壇を新調された事である。



大西博士 夫人の懷舊談

一記者

一代の學者として天下の崇拜を受けたる故文學博士大西祝氏の遺族が故鄕岡山へ歸棲せらるべく、今までの熱海の假住居を始末して、入京された事を聞及んでお尋ね致しました。赤坂臺町の閑靜な處、渡邊氏方の一室に、遲淑に語り續けらるゝ夫人の懷舊談に、坐ろに昔の面影が偲ばれて。その家庭の容子、博士と夫人との間柄、まことに床しさに禁へませんでした。廻り緣に沿うた二方の庭には、秋海棠鳳仙花など優婉い色に匂うてゐます。

○先月中に歸國の積りのを、出水のために延引致しました。卅三年に夫に別れてから、一年半程岡山に住ひましたが、どうも神經衰弱で始終身體が勝れずに居りましたので、「さういふ病氣には氣が變はると良いから。東京へでも行つて見たら」と申されます儘に、少し用事もあつたので出て參りまして、つい三年程東京に居りましたが、長くなる内に身體も又思はしく御座いませんので、子供を連れて熱海へ引移りました。熱海にもつい二年ほど居りましたが、長女（道子）が今年は高等女學校へ入ることになりましたので、鄕里の方の伯母の、長らく女學校に從事してをる者の方へ賴む事に致して、この四月に道子だけ先へ歸國致させたのでございます。さうなりますと、別れて居るよりはと存じて、一同また鄕里へ參ることに致しました。二番目の定彦も末の安子も、岡山の方の小學校へ賴む筈に致しましたが、九月からはもう學校が始まつてをりますから、早く參らねばならないのでございます。

夫人が令孃令息達の教育に專心せらるゝことが話の樣子にも思ひやられます。定彦さんは見えなかつたが、安子孃は茶菓などを運んで來られる。ごく邪氣ない中に淑やかな處があつて、いかにも可愛らしいお孃さんです。やがて話は其の昔の家庭の上に移りました。

○良人は極く柔和な氣質で、家内の者を叱つたことなどは一度もございません。女中が粗忽をして詫言を申しても「後を氣を付ければいゝさ」と輕く申す位な事です。私が「詰らない事をした」と自分で悔んで居る時など、毎時却つて慰められるので御座いました。

○そして極くの成行任せで、向次第運命次第。學問以外の世事には薩張頓着致しませんから傍で見てをりましてももう少し進んでやつてくれたらと思ふ樣で御座いました。大西の母は――兄の方に居りました――それは才の利く、非常な敏腕家でしたのに、どうして彼麼無頓着な人が出來たかと思はれる程でした。さういふ人にはせめて私が母の半分も氣の付く者ならばと始終存じました。

○恁うも向次第にしてゐられるものかと、それは可笑しい樣な事がありました。一度若い女中で遠慮のない元氣なのが居りまして、其女が書齋の方へ幼さいのを抱いて參つて、やがて唯獨で此方へ出て來て、何か致して居りますから、子供のことを尋ねますと、「旦那樣に預けて參りました」と平氣で申して居ります。良人は身も心も唯々學問に向いて居りますので、子供には關はない方で、抱く事などは極くの下手、又滅多に手に取つたことも有りません。ですから「まあ」と申して行つて見ますと、膝の上へ幼さいのを載せて、抱くのでもなく、まるで作り付けの置物かなぞの樣にして當惑した樣子で居ります。「とんだ事をしてお氣の毒さまでした」と早速抱き取りましたが、下女にでも抱かされゝば其儘子供を抱いてをるので、御座いますもの。食事などには決して好も嫌も申しません。ですから餘程此方で氣を付けねばなりませんでした。

○來客の時、女中に誰人かを聽きますと、「おや其のお方ならば私も御挨拶に出ねば濟まないのに」と申してお目に懸りに出る樣な事が往々ございました。さういふお客樣の時、「一寸來るやうに」とも何とも一向申してくれません。ですからお客樣のお名前は皆聽くやうに致して居りました。又時刻ゆゑ、晝飯の用意など致してをりますのに、お歸りになると仰しやれば其儘

お歸し申して了ひます。「何とか仰しやつて下されば
よいに」と後から申しても追付きません。後には其の
都度お留め申すやうに賴んで置きました。恁麼風に、
お客樣の事などは一向話してくれませんので、どれ程の御交際か、どの樣にお扱ひ申してよいか分らず、不在へ入らつしたのをお待ちを願つてよいか惡るいかも分らず、困ることがありましたので、參考のために來狀を皆開封して讀みますからと申すと、「何でも見るがよい。別に秘密な事も何もないから」と申します。
それ故、子供はあり、忙しうは御座いましたが、一々來狀を讀んで置いたので、大層好都合で御座いました。



○用事以外に人を訪問することは無く、運動は嫌ひで學校へ參る外は大抵宅に居りましたが、例の如く讀書をするか筆を執るか致して居りますから、家内で雜話など致すことは少なう御座いました。あまり默つて居りますので「私が何か申さなければ貴方は何時迄でも默つたきりでいらつしやるでせう」と申したら「なに其れならば此方から話しかけるさ」と申しますから、試しに二三日默つて居て見ようとした事もありましたが、良人の柔和な氣質と致して、私が少し默つて居ると、何か怒つては居ないかと氣にする樣子ですから、それが氣の毒になつてつい又此方から話しかけるので

ございました。それでも何か學問がゝつた話には、書物を讀みながら相手になつて居りました。そして理窟の話ならば幾何でも致しまして、よく戯談半分に論を仕合ひました。「此頃は大分上手になつた。然しいくらでも持つてお出で、なか〳〵負けないから」などゝ申して、毎時色々な方面から何とか彼とか申して、私を言ひ詰めて了ひますので、「けれども私はまだ心から然うと承服して居りませんから、貴方のはまだ眞正に人を服させる力は御座いません」などと私も申しましたが、然し毎時負けて了ふので御座いました。

○前申す運動嫌ひで身體によくあるまいと存じて、日曜毎には必度外へ出るやうにと勸めて見ますと、勸められゝばそれを斷りは致しません。一二度は出かけますが、やはり「今日は風が吹くから」とか「雨が降りさうだから」とか申してやめて了ひます。それ故子供を連れて出た事は一度もなく、私共々旅行した事なども御座いません。すべて世事には一向無頓着でしたが、それでも大抵の爲すべき事だけは、ちやんと致してくれましたから、私は何も心配は要らぬので御座いました。

○三十年の暮、多分十二月の初旬でした。私は身體が惡いため、鎌倉に參つて居りましたが、その不在に良人は腸加答兒を病みましたので、それを何とも申して遣しませんから、私は少しも知らずに居りまして、年末になつて翌春の準備もあるので歸りますと、「お腹か痛んで困つた」と申すのです——前後とも能く斯ういふ事がありましたので、私が少しでも家を明けて歸りますと「何處が惡かつた」とかよく申されました——それでも最う快い樣ですから深く心にも懸けずに居るとその二月（三十一年）歐洲留學の爲出發となつて、大層忙しくなりました。その頃他から歸つて來ては「疲れた〳〵」とよく申しましたが、「貴方は衆中がお嫌ひですから、それで宴會の後などは疲れたと思召すのでせう」と申して居りましたが、後に思へば病後の疲かあつたのでせう。病狀を私が見ず、又鎌倉への手紙にも何にも申して遣さず、歸つてからほんの手輕な事

に聴いて居つたので、其處へ氣が注かなかつたのは殘念で御座います。それでも西洋へ參つた當座は宜しかつたのですが、つい肓腸炎インフルエンザなどを病みまして、とう〳〵神經衰弱を起して、三十二年九月に歸朝致しました。病氣が病氣ゆゑ平生の樣に安靜にして居られませんで、極く些細な事が氣になつて氣になつて、始終居處を移して居りました、東京に居たり、鎌倉に居たり、鎌倉でも借りて置いた家が氣に入らず、すぐに又引移り、困りましたが、以前私の居た寺の座敷を借りて見ますと、それが、氣に入つて暫く落着きました。翌年(卅三年)の三月京都へ參つてからも同樣で困りましたが、幸に下加茂の奥の方の家が氣に入つて又暫時落着いてゐました處、折から麥を刈取つた後が、一面に水田になつたので、蛙の聲が喧しくていけないと申しますから、已むを得ずお知合の方のお座敷を、それは良人が氣に入て居りましたので、無理に願つて引移るやうな事でした。元來に耳が鋭い方でしたのに、病氣になつてからは愈銳敏になりましたゆゑ、些細な事でも喧しくて堪へられなかつたので、一度なぞは枕元に侍いて居りますと、夜の事で極く寂然して居るの



に、「何だか喧しくていけない、何か鳴いてゐる」と申します。私共にはどうしても其れが分りません。よく〳〵調べて見ると蚊が一匹居つたので御座いました。恁ういふ事には實に困りきりましたが、その外は如彼いふ病中でも穩和な方で、私共の苦勞は餘程少なう御座いました。

○遂に其年の十月郷里へ歸りまして、十一月に歿したので御座います。殘つた私共の困るよりも――その當座は元來甚麽考は浮びません――切角これまで保つて來た廉の、頽れて了ひません樣にと、そればかり思ふので御座いました。少し落着いてからは又、良人が留學中の研究も觀察もありましたらうに、それが全く現はれずに終つたのを、殘念至極に存じました。そして西洋からの手紙の度に「此方へ來てから御交際が好きになつた。よく訪問にも出かけお話もする。今度歸れば全然變るから」と始終申して參つたのに、病氣でさういふ處も現はれずに終りました。これも殘り惜しう存じます。今更愚痴な事で御座いますが、せめて今三年だけでも居りましたら、餘程留學の結果が現はれたらうにと、それが氣の毒でなりませんのです。親戚の者なども「妻子が殘されることは、世間に澤山あつて何でもないが、唯祝さんが氣の毒だ！」と申してくれるので御座います。子供の行末を思ひましては、隨分心配も致しますが、然し私や子供の事は何でもありません。唯々當人が氣の毒だと始終思つて居るので御座います。

令孃訪問

虞美人

當今の令孃がゝみを編みたらば、いづれ屈指の外には洩れない才貌絶群の人を撰びまして、其の生活やら平素のお嗜みやら御交際の模樣やら御友達との關係やらをいろ〳〵取まぜて伺ふことに致しました。これ申すまでもなく、二十世紀淑女の信念は斯もありたしと皆樣の御參考ともなし又世間一般妙齡婦人に對する種々なる誤りを解くのよすがにもとおもひまして斯くは、

實業家の令孃

これは有名なるS實業家の令孃で、昨年或る女學校を秀才として卒業されて、只今は專ら家事專門。甲斐々々しく白のお前掛で、お臺所でお働き遊ばす事も有り。又はカアテンを搖がす涼しい風に、月清き夜など、思はずも道行く人の足を止めさすピヤノの音床しい方です、親しく御目に蒐りましたのは、九月の中浣涼しい日で御座いました。

「兄の部屋で御座いますよ」

と笑ひ乍ら麻の座蒲團をお進め下さいました。直ぐ前が廊下の、庭の植込み近く、石燈籠が松の木の間に見



えさして、何處と無く寂のついたお庭で。お部屋は十疊、卓子に椅子が一脚、本箱には洋書が二段、其の下にはノートが立てかけて御座いまして、シエレーの額が其上に、其れと向ひ合つて水彩書が掛つて居ります。

床の間には容齋の軸。葉蘭が池の坊に活けて御座います。

「兄は容齋が好きで御座いますから、父に云つて無理に彼やつて掛けて置くんで御座いますよ。這麼部屋には不釣合で御座いますわ。」

とお笑ひなさいました。伊勢崎の矢絣のお單衣に、褪紅色の地に大きな蝶が飛んで居る羽二重に。薄色の是も同じ品の打ち合せ帯を少さくお太鼓に結んで被入い

まして、髪は思ひ切つて前髪をお出しなさつた束髪。

「昨年學校を出ましたのに、もう今年の春の校友會に參りましたら、皆樣が夫人にお成り遊ばしてお孃樣で被入る方はホンの數へる程しか御座いません。奈何してあゝ恰で賣物のやうに一ッ時でも早くと云ふ風に遊ばすのでせう。豈夫其結果でも御座いますまいが、私の級の方で是れはと思つた方へ嫁つした方は一人も御座いませんもの。而して一年に春と秋と二度校友會が御座いますが、全く其時には驚きますの、皆樣ソレはお澄しで御座いましてね、私の方の學校の方は餘計お洒落で被入るのかも知れませんが。丸で着物の競爭で御座いますよ。

指には幾個もキラ〳〵光らして被入います。お時計は首からお下げ遊ばす。千代田草履か何かで靜々とお庭を歩いて被入るのでせう。是が去年迄御一緒に居た方かしらと思ひます位に變つてお終ひになりました。圓遊の落語で御笑ひ遊ばす時も、芬と香水の強いお半帕で口を押へて一寸御笑ひ遊ばす限り、ソレは誰樣も〳〵氣取つて被入つて、放心笑談でも申しませばソレコソ大變で彼の方は下品だ事の何のと仰在います。ですから眞個に不滿らないんで御座いますよ。而して皆樣方も面白くつて被入るのか不滿らなくつて被入るのか一向に分らなくつて困つて終いますの。(尤も其時は私が幹事を致して居りましたから餘計心配致したので御座いますよ。)もう少し面白ければ面白いで、もつと愉快らしく遊ばして下さつても佳いと思ひますわ。僅た半日で御座いますもの。奈何でもして面白く致したいので御座いますが全くあゝ澄して被入つては手の付けやうも御座いません。外の學校の方はもつと活潑で被在いませうが、何しろ私共の學校は溫和し向きと銘を打つたので御座いますから致し方も御座いませんが、夫れでも澄まして被入る方は那麼で、又夫うで無い方はなか〳〵の方も被入います。でもまア概して澄して被入る方の方が多う御座います。而して皆樣少し集まつて被入る處は何で御座いますよ。「貴女は眞實にお奇麗で被入います。白粉は何をおつけ遊ばす

の。なんてお話し許しですの、ソレは何も駈け出したり何か遊ばさないでも結構ですが、駈け出したり遊ばせばソレコソ切角の白粉も黛も頬紅も汗と一緒に流れたり、剝げたりしてお氣の毒で御座いますが、ソレよりもつと御召物が汗で濡れやうものなら大變で御座いませうから那麼にして頂かないでも宜敷う御座いますが。え〻此秋の會には是非とも〻つと皆様と樂しく遊びたいと考へて居ります。唯御召物の競爭や御縹緻自慢では堪りま



懸賞繪さがし(1)

せんもの。其様ら事の事音樂なんて事を御自慢遊ばして下されば又彈いて頂けて嬉しいので御座いますが是れ又皆様隠し切つて被入つて、吉田様是非奈何かと申ましても否、私些少も存じませんわ。なんて白ばつくれて被入る。眞實に奈何して皆様あ〻だらうと不思議に思はれますよ。

私に音樂と仰在るのですか。ソレコソほ〻〻存じませんの組で御座いますが、ピヤノを少しと琴を致して居ります。琴では「臼の聲」が好きで御座います。ピヤノですか未だ二三年にしかなりませんもの。ソナタなんかは難しくつて夫れに手が込ん

でゝ旨く行きませんが、皆樣がソナタが佳いと仰在いますから見樣見眞似に彈いて見ます。其代り音樂會では大抵參ります。自然と切符が手に入るやうになつて居りますから、又夫れに友達が誘つて下さいますから。はア靑年會館で御座いました皐月會の演奏會へも參りました。皆樣ナカ〳〵お上手で御座いますわ。學校を出ましてからもう一年半にもなりますが考へるとお耻しい位で何にも致した事は御座いませんので。お茶にお花。琴にピヤノ。ソレカラ此頃英語の先生の許へも參りまして少し宛致して居ります。何をして居るかと仰在いますの、まアイヤナ極く優しい物しか出來ませんもの、もつと上手になりましたら。小說なんぞは餘り讀みません。でも不如歸や乳姉妹は讀んで見ましたが夫れも友達から讀め〳〵つて進められまして仕方が無しに讀んだので御座いますから、自分から進んで讀まうと思つた事は御座いません。然うで御座いますね、私の級で小說を讀む方は少なう御座いました。餘程文でも捻る方か、何かならお讀み遊ばします。又作文の先生がお好きだもので小說なんぞ讀む方も御座いまして可笑しいんで御座いました。まア一級に四五人位しか小說を讀む方は御座いませんね。尤も先生方が一切小說は讀むなと堅く禁じて御座いますからでも御座いませうが。芝居で御座いますか、新派の方へは二三度しか參つた事は御座いませんが、舊俳優。歌舞伎座へは大抵變り目每に參ります。誰が佳いと仰在るんですか。ほゝゝゝまア羽左衛門が佳う御座いませう。私の方でも皆樣よく被入いますが大抵羽左衛門が佳いと仰在る方が多う御座いますね、中には高麗藏、梅幸なんかゞ佳いと仰在る方も御座いますが。お能へも二三度參りましたが、餘り面白いとは思ひません。私の存じて居ります方で、あの水野の多佳子さん。あの方は何日でも屹度被入いますつて、母が申して居りました母で御座いますか。もう好きで御座いましてね、大抵かゝさず參ります。多佳子さんも却々御熱心だそうで御座いますよ。あの方は皆樣がハイカラの束髮にでも遊ばす時は、故意とお品のよい高髷か何かで御出でに

なりますよ。何日でしたか歌舞伎座の慈善會の時などども、佳い色の御紋付で、お島田で、ちやんとお扇子を持つて被入いましたから私と御一緒に參りました先生が、まア恰でお人形樣のやうだつて仰在つて被入いましたよ。誰樣だつて仰在るんで御座いますか。困りますね、お名前は一寸申せば直ぐに知れて了ひます。有名な方で御座いますもの、何でも二三度雜誌にお顏が出た方で御座りますよ。私の級の方は軍人の許へ嫁つた方が多う御座いますの、私に何が佳いと仰在いますの。まア。ほゝゝゝ友達の中には以後は實業家が佳いの農業が佳いのと仰在いますが。然うで御座いますね、大學の中でも法科や工科の方か佳いと仰在る方が多いやうに存じますね。文科や理科へ被入る方は少なう御座いますよ。夫れでも法科だの工科だのと仰在つた方が軍人だの醫學士の許へ御出でになりますから。實際分らなくなつて終ひます。まア私共は外交官等が佳いと存じますね。派手で佳いぢやア御座いませんか。私の友達に外交官のお孃樣が被入いまして、外交官なんて嫌やだと仰在るんで御座いますよ。父樣や母樣とはお少さい時にお別れ遊ばして。只今でも御親類の處に預けられて被入いますが、時々歸朝つて被入いましても又直ぐに何處かへ御出で遊ばして、二年や三年は御歸朝が無いから、眞實に詰らない。なんて仰在いましたが私共の考へでは全く外交官は佳いと思ひますわ。八月の頃には外交官夫人の月旦。と云ふのが出て居りましてねえ。拜見致しました。あゝ云ふやうに出ると眞實に佳いと存じますよ。でも外交官には夫人が大切だ然うで御座いますから奈何して私などはなかなか。語學さへも碌すつぽ出來ないんで御座いますもの。雜誌で御座いますか。只今は女學世界に、ムラサキ、婦人世界を見て居ります。論說等は讀みませんが大抵外の處は目を通します。學校で致しました本等はもう見も致しません。ほゝゝ現金で御座いませう。大方かびが生へて居るだらうと存じます。もう畫も致しませんから畫筆も何も何處かへ飛んで行つて終ひましたでせう。誰樣でも以前はお琴がお上手な方でも夫人

にお成り遊ばしてからは些少もお彈き遊ばした事が無いと仰在る方が多う御座いますよ。私なども毎日。然うで御座いますね。ピヤノに琴。英語、お茶とお花。其中で英語丈を一週に二度私が參りまして、後は一週に一度宛先生がお出で下さいます。割烹も少しは致します。夫れに奈何やら斯うやら平常着丈は自分で縫ひますから是でなか／＼多忙しいので御座いますよ。夫れに皆樣方は、ほゝゝ皆樣の惡口許り申すやうでは御座いますがなか／＼贅澤で被入るんで御座いましてね、一寸致した簪のやうなものでも、關口、か八木屋其處迄お求めに被入るのですつて。而して御寫眞は是非とも丸木に限りますつて仰在つて被入いました。ほゝゝゝ。」

と輕く笑つて被入いますと、女中が山田樣とか仰在るお友達が見えた事を申して參りますと、「一寸御免ん遊ばせ。」と、仰在つてお立ちになりましたが間も無く今度は襖の處で。さや／＼と絹擦の音。續いて輕い咳拂や。「厭よ。」「佳いぢやあ御座いませんか。」「だつて極が惡いぢやア御座いませんか。」「宜敷う御座いますよ。」などゝ仰在つて被入いましたが聽て御客樣は伏向き勝ちに入つて被入いました。

御召縮緬のお單衣に、牡丹色の地に派手な形の博多の單衣帶、絽の絹ちゃみの半襟には眞珠の入つた襟止めお時計は襟に光つて、謹しまげに象牙骨のお扇子をお持ちになる繊細なお指には。紅寶石入りの指輪に、もう一つは唯の浮彫の指輪。お髮は桃割れにお結ひ遊ばし強いヴァイオレットの香りが芬と私の方へ迄薫つて參ります。切角お話しにお出て遊ばしたのに私が御邪魔を致してはと、思つておいとま致して歸りました。一寸御話にお出で遊ばすのにさへ斯のやうなお化粧やお召物ではなか／＼堪るまいと存じました。

博士の令嬢

父君は當時名高いB博士で其令嬢を訪問致しますと快よく直ぐに御自分のお部屋へお通し下さいました。

お居間は廻縁になつた八疊で、入ると向つて左手のお戸棚が二段に仕切つた硝子戸になつて居て、上には雜誌類や洋書が行儀よく並んで其傍に少さな象牙の人形と洋服を着た西洋人形とが置かれて、キヤビ子形の寫眞が二三枚見えて居りました、お机の上には朱塗の硯箱、インキ、英和辭典、讀みかけらしい御本がふせて有りまして、一輪ざしに吾亦紅が五六本すい〳〵とさして御座いました。

やがてしと〳〵と廊下に其方らしい足音が近づいて障子を下の方から開けて入つて來らつしやいましたのは令孃で、飛白のメリンスのお單衣に大きな蝶の形の羽二重のあまり巾の廣くない帶を少さくキチンとしめてお髮は前髮を大きくとつた桃割れに結つて居らつしやいました。

「私なんかは唯だもう父や母の傍に無事で暮して居ると申す位な事で、諸孃方のやうにやれ某の會の幹事で多忙しいの、やれ音樂會の慈善會のといふやうな事も御座いません全く以て平凡な事を繰り返して居るので御座いますよ、」

令孃は可愛いお聲で仰有りながら絶えず微笑して居らつしやいました、始めてお目に懸つた記者を全然親しいお友達とでも云ふやうな、隔のない、打ち解けた御樣子なので、記者も何だかもう以前からお親しくでもして居る方のやうな心地が致しました、平常の御教育の程も知られて流石はと首肯かれました。

「學校に居ります間はまア大抵なお轉婆も宥して呉れますけれども、最う卒業でもして仕舞ひまして、全く家庭の人となりますと却々以前のやうな眞似も出來ませず、一寸着物を着ますにもお袴なしだと長く着なければなりませんし、種々な事が有りますので始めの内は隨分窮屈で不滿らないと思ひました、學校へ行つてる方が甚麼にまア氣樂で面白う御座いませう、諸孃と御一緒に遊んだり勉强したりしてと幾度思つたか知れませんが、最う卒業して仕舞ふと皆散々ばら〳〵に分れて仕舞ひますから偶々學校へ行つて見ても何だか淋しくつて妙な氣持が致しますの、最う一遍あんな時代に歸つて見度いとつく〴〵思ふので御座いますよ、

何時迄も那麼事ばかり云つてゝ仕方がないと終始申されますけれども、夫れでもまア私等は幸福なんで御座いますよ、中には隨分御家柄の良い嚴式な御宅なんかでは夫れは〳〵お可哀想なんで御座いますよ、愁つか新しい敎育をお受けなすつたゞけ餘計に辛く思はれるんで御座いますね。

御姬樣ですから却々滅多には遊びになんか行らつしやる譯には行かず、お友達の御交際も思ふやうには御出來になりませんし、酷く束縛されて仕舞ふので御座いますから、別けてきびしいお宅なんかお友達から來たお手紙でも一應開封なさる方が幾程も有るんで御座いますよ、ですから出す方だつても人に見られるんだと思ふと迂かりした冗談も書けませんし、遂い然ういふ方へ出す手紙は是れは最う誰れが讀んでも差支がないと云ふやうな生眞面目なものにしなければなりまんから眞個に詰らなくつて別に大した用事でも出來なければ手紙を上げるのも止すやうになるんで御座いますよ、いゝえ、決して自分の都合がいゝからぢや御座いませんよ、でも餘り束縛なさるのは畢竟お父樣やお母樣が御信用なすつて下さらないからで御座いますわ、私なんか自分の事を思ひますと、父や母が私を信用して呉れて居ると思ふと甚麼事が有りましたつて父母を心配させるやうな氣にはなれませんよ。

否え夫れは幾程放任主義なお宅でも、そんなに放つて置かれると、何んでも自由だから勝手な眞似をしやうなんて氣は起りませんわ、反つて何でも彼でも皆自分にかゝつて來ますから自然責任が重くなつて迂りした事は尙更致せなくなりますの、出來るだけ自分で氣を付けるやうになりますから反つて其方が宜しいかと思ひます。

音樂で御座いますか、私は何でも伺つて居るのは大好きですが自分で手にとつては何も出來ませんから駄目ですよ、學校に居ります時少し致しましたが夫れも眞の眞似事で音樂會へ參りましてもお上手な方のを伺ひますと眞個にもう何とも云へない氣持になりまして宅へ歸つて參りましても目の先にちら〳〵して何も出來

なくなりますの。

私は日本の音楽よりも西洋の方が好きで御座います、けれども日本のだつて捨てたものぢやァ御座いません、一體お姫様向きでお琴にしろ何にしろ極く優美で御座いますからやつぱり今迄のやうなお姫様方がお彈になつて獨りで慰みとして居らつしやるにはよろしう御座いませうが、今後の方にはどうで御座いますかしら、あの下品だと申しますけれども私は夏の夜なんかに外を流してゆく新內なんか聞えますと、あゝいゝと思うて耳を澄まして聞くんで御座いますよ、反つて眞面目なお琴なんかより彼の方がよつぽど風情が有ると思ひますよ。

懸賞繪さがし (2)



小說、はァ時々讀みます、學校では勿論讀ませませんし、大抵おやかましいお宅ではお禁じになつて、宅では讀ませませぬと仰在る方が多いやうで御座いますね、けれども何も小說を讀んだから不可ないの奈うのつて云ふ事は有るまいと存じますよ、小說がいけなければ演劇は尚更惡いでせうし新聞の三面だつても不可

ますまい、私は自分さへ確然してるなら何を讀んだつても差支へないと思ふんで御座いますよ、夫れもまだ心の定まらない内は不可ませんけれども、最う好い加減な年になつたら構ひませんわ、夫れを讀んで奈う斯う思ふやうなら何をしても倘且同じ事で御座いませう。

私の理想、まア大變、理想なんて那麼事は申上げられませんわ、夫れは諸嬢隨分種々な理想の有る方も御座いますけれども私は何か一つ勝れた事の有るのがいゝと存じますわ、普通の人では不滿りませんもの、非常な交際家といふのも結構ですね、でも却々那麼事は出來ません、男の方なら勇氣の有る方が私良いと存じますの、何事でも遣り通せるといふだけでも宜しう御座いますね、諸嬢方のやうに何も風采ばつかり云ふんぢやア御座いませんわ、夫れは諸嬢だつて表面では彼麼ハイカラなんてつて仰在りながら其實倘且然う云ふ方をお望みになつて仰在るんですから恐れ入りますわ、又御自分でも、ハイカラは嫌ひだと仰在りながら恐しい程の廂髮にお結げ遊ばすので御座いますね。

交際も隨分好きな方ですが却々難しう御座いますね。諸嬢は極くお仲の好いお友達が二三人位でコソ〱お談遊ばしたり、他の人の居る前で其方の分らない事を仰在つたり、何だか面白く御座いませんね、夫れで居て御自分では一ッぱし交際家を氣取つて居らつしやるんですからね、而して又隨分お談話なんかも定まりきつて居て、大抵はお友達のお噂で、又それでなくては面白くないといつたやうなわけ考へて見ますと隨分不滿りませんね、ですから知らぬ方の多い會なんかへ迂つかり參りますと全く孤兒と同然で其寂しさつたら御座いませんの。

かと申して自分ばつかり別な考へを持つて居りましたら倘更淋しくなつて仕舞ひましていよ〱獨り坊主でお仲間をはづされて仕舞ひますからね、倘且諸嬢方と一緒に進んで行かないと不滿りませんよ、奈うかして最う少し趣味の有るお話でも致合ふやうになりますとお互に進歩も早く新しい時代の婦人らしくなるだらうと思ひます。

女子の判任官

平山遞信省貯金課長談

△女子判任官は何處　こゝ一兩年の間に、目出たく、成功の花を咲かせた、女子の判任官は、爲換貯金管理所の外、他の管理支所にも採用されてある、又一等郵便電信局や、電話交換局にもあり、又本省では、電信調査所に二名丈任命されてゐる。

△女子判任官の採用法　役所によつて、幾分か相違もあるが、我が管理所では、雇の上にある通信手を、判任官としたもので。通信手の上には、亦通信屬といふ者があつて、矢張判任官である。通信手の採用は、雇を二ヶ年以上務めた者より選拔し、又、小學教員の免許狀を有する者を、試驗の上、採用することがある而して通信屬は、二ヶ年以上通信手を務めた者より任命するが、只今の處、通信屬と申す者はない。通信手は。初めが十三圓で、最高級が二十五圓、只今在職の者は、十八圓が最高級となつてゐる人數は、管理本所で、判任官が三十三名、雇員が四百九十名ある。

△雇の採用法　女子判任官となるのは、前述の如く、小學教員の免許狀でもあれば、頗る好都合だが、然らざれば、何れも雇より、漸次昇るのである。この雇には、如何なる資格が入るかといふに、高等小學校の卒業證書、又は高等女學校の卒業證書さへあつたら、無試驗採用が出來るのですが、さうでなかつたなら、高等小學校卒業に準ずる讀書、作文、習字、算術等の試驗が要る而して、採用志願者は、所定の願書に履歴書幷に戸籍謄本を添へ、本所に差出す、本所では、明きのあるに隨つて、之を採用することゝし、初めは見習として、種々なる事務上のことを傳授するのである。

△雇の俸給　見習の期間は、人によりて長短もあるが、凡そ一ヶ月を以て、限度とする。その長いのは二ヶ月もあり。又あまり成績の悪い者は、見習中職を免ずることもある。この見習中の手當は、一日僅に金拾錢ですが、愈々雇に採用された時は、日給十七錢より貳拾錢位が普通です。高等女學校でも卒業して、成績の好いのは、二十五錢位まである。初めは誰れでも見習として、日給拾錢だから、馬鹿々々しいやうだが、何の事務でも、習はれば出來ないものでその代り、成績の好いのは、ヅン／＼昇給して行きます出勤時間は、普通官衙同樣で、午前八時より午後四時までゞすが、暑中は午前中(日曜は休暇)。併し爲換貯金の事務は、忙しい時は馬鹿に忙しい本所あたりでは、その日その日の仕事と、一ヶ月に亘る仕事とを、程よく調和させて遣らせます。何しても貯金などゝ來ては、勘定時が忙しいのです、勤務時間の規定は、凡そ前に述べた通りであるものゝ幾分か時間外にも、事務が出る事もある。

△判任官の模樣　判任官は、今は大分出來たが、孰れも一方の頭となつてゐる。管理所に於ける三十三名の女子判任官は、二十歳より二十四五歳のもの多く、(稀には三十歳前後もあり)多くは、獨身者で稀れに夫を持つてゐる人もある平素品行正しく、事務に勉强である。　(田中生手記)

乃木大將の訓言

別項の如く學習院女子部に於ては皇后陛下の思召を畏みて學生服に大改良を加へたるが、其當時新學期始業式に乃木大將は臨席して、左の訓示をなしたり。

「貴孃方が暑中六十日間の休暇中に能く健康を保たれ今日茲に相見るに至つたは誠に喜ばしい事である、休暇中は定めて學校の科目を復習し傍ら家庭の手傳ひをして教師の訓戒を遺憾なく實踐されたであらうと思ふ、いや勿論さうなければならぬ、殊に喜ぶべきは學校からの通知により皆様が質素の扮裝で今日此校堂に登られた事である云ふ迄もなく本院は畏くも兩陛下の御思召で建つてゐる事だからお互に反省して他の學校の模範となる心掛けが肝要である、それで表面の衣類ばかりが質素になつたればとて他の物を以前のやうに華美にしては所詮駄目である、附屬品の總てを服裝に準じて改めなければならぬ否服裝や携帶品等人間の形式に屬するものは寧ろ末で人格は人間として生存する唯一の條件であるから日に〳〵省みて我が精神を高めればならぬ（一語茲に至つて大將は森嚴犯しがたき態度もて一段聲に力を籠めつゝ次の句を繼ぎぬ）貴孃方が内に歸られたらば學校で習ひ得た教訓を資として麗しき家庭を感化しなければならぬもし貴孃方の力で所詮及ばぬとならば學校から出張して直して遣る、また學校の教訓を守らないで疎にする生徒があるならばこれ教師の不德にあらずして其人自身の不所存である斯る輩はどし〳〵退校處分をするから左様心得られたい、此輩は恐多くも兩陛下が本院御設立の思召に背く不忠の人であるから私は充分の責任を以て處分します、皆様其積りで能く教訓を守るがいゝ」

と忌憚なく述べられたので並居る姫達はいづれも恐縮して聞かれたりとなん。



ロイド夫人の家庭談

前田雪子

青葉がくれの蟬の音も今日は少し曇りてやみぬ、微風はさと繁れる小枝をゆらがせど砂塵の道にたゝなくて身をも溶さん此頃の暑さにまたなくよき日でありました記者は朝飯を終りてお約束の時間迄にと麻布飯倉なるロイド博士の邸宅に參りました、門を入れば並み立つ樹木は濃き綠の色したゝるばかり梢はなまめかしくお住居の屋根に垂れかゝつて居りました。

夫人に面會を請ひました所やがてさと戸を開いてお入りになりました、擧止端然として快活らしいお方です記者が訪問の主意を申上ると「私共の家庭の事などは何れの雜誌にも出したことはございませぬ」との仰「それでは尙珍らしう御座いますから」と言ひつつ記者は先づ

日曜日を如何に過さるゝか

と云ふ問題を出しました夫人は「私共の家庭では日曜日は禮拜を第一にいたしますから、良人は朝七時に近所の會堂（アンデレア教會）に參り、私共家族は少し後くれて八時に參ります、歸宅後朝食を致して良人は又九時頃麻布飯倉町の教會に參り私共はまたまた十一時頃アンデレア教會に參ります、日曜日には先づ此のやうに敬神の道を第一に盡して居りますが、午後には日本在留の外國人でまだ家庭を有つて居ない年若い男の方や女の方を集めまして、良人を初め私共一同がどうか斯う云ふ方々に家庭の快味を供給したいと云ふ精神から茶を飲みつゝ種々の清話を致して、淸く面白く暮します、ですが其時は別段宗教上の話などは致さずたゞ〳〵温きホームの快味を傳へ、未だ家庭の眞味を知らない方々の慰安になるやうに致したいと云ふ微衷でございます、世にはホーム程嬉しきもの

はありません、一堂に集りまして和氣藹然として睦じく語り合ふのは實に此世のパラダイスではありませんか、斯ういふ快味を人にも分け、皆さんと共に嬉しく樂しむのは、單にホームのない者の心を慰むるのみならず又將來家庭を有たれる人々の準備にもと思ふのが私共の日曜日に於ける暮方でございます、そうして若し他に用事もない時は五時半頃當日集まつた方々を伴れて又々會堂に參ります、それから晩になりますと子供達私共は子供が多う御座いまして横濱などにも行つて居りますから、皆んな集りまして純然たる家庭團欒の樂みを以て互に平生の勞を慰めて居ります、序に申上げて置きますが私共では元來山海の珍味を堆く盛り大御馳走を致してお客するなど云ことは餘り致しませんが其の代りにお友達のお集りの時でも、家族の者と同じ食事を致して樂むのでございます、愛ある所にはどんなものでも甘味く食べられます、徒に虚禮を以て集るとか或は盛宴を張りて驕奢を極めるなどは致しません、つまり心が一致しませんければ何をしてもそんなに嬉しいものではありません。」

記者は更に夫人の

日常の生活法

を伺ひました「私共は皆銘々内外にそれ〲職務を有つて忙はしう御座いますから、朝は早起の方であります、良人は五時頃、私共は六時半までに起きます、朝食は七時に致します、それから學校に出る者は學校に行き、家に居る者は種々の仕事に取掛りますので、家の掃除寢臺の始末なども皆自分で致します、平日は別段樂しき遊は致しません、テニスなども餘り好みません、娘の中でメリーは庭園を作つたり、種子を蒔いたりすることが好きで、ノラとマーチャンと申ますのは私の手傳を致して居ります、私は人樣のお世話することが大好きでございまして、在留の西洋人など何か六箇敷い事があると皆んな私のところへ持つて來ますから私はよろこんでそれを致して上げますが一人では致し切れない時など二人の娘に手傳つて貰つて遣るのでございます、平日の生活と申して別に

珍らしいこともございません、夜は十時半か十一時頃臥床に就きます、良人は五時に起きますから少々早く眠みます。

記者は更に

暑中は如何にして暮さるゝか

とお尋ね致したれば「暑中でございますか、今迄は箱根に避暑して居りましたが、今年は初めて猪苗代に參りました、毎年家族一同で行くのでございますが、今年は結婚した娘が臨月になつて家に來て居りますから私は參りませんでした、良人だけはもう歸宅しましたが、娘三人は未だ猪苗代に居ります、



懸賞繪さがし (3)

私共の娘は皆んなボートが大好きで、一番末の娘（十四歲）だけは加奈陀の學校に居りますが今家に居るのが非常にボートが好きですから每年それの出來る所に參ります、ノラとマーチャンは水泳を上手にやりまして恰で男のやうでございます、二三年前には富士山にも登り、當年は盤梯山に登つたさうですが一體登山だの乘馬など大好きなのでございます、……別莊はございませんが、御承知の通り彼邊の旅館

は鐵道が出來ましてから以來、客が尠くなりましたから殆と買切りに致して其處の旅館を恰で自分の別莊同樣に致して居ります、……ハイ戸の口と申す處です、良人は今度彼地へ避暑しましたのを好機と致して白虎隊の事を研究して英詩を作つて來たと申して居ります……イエ、今直ぐ世に出す譯でもございますまいが何れ公にすると申して居ります。」

夫人の經歴

「私の經歴ですか何も珍らしい事はありませんが、日本に來まして一時困難しました事があります、私はロイドの家に來ましたのは實は私連子をして再婚したのであります、私の先夫はフォン、ファルロットと申まして、今より二十二年前でしたが日本に參り海軍省のお雇となりまして目黑の火藥製造所に勤めて居りましたところ僅三ケ月の後に急に死去りました、それで私は異鄕に寡婦となり、三人の子供を遺されまして此後如何致さうかと實は思案に暮れて居りましたが兎に角子供に相當の敎育を授けて一人前にしたいと思ひまして慶應義塾に敎鞭を執ることに決しました、其時私は女の力の有り丈けを盡しまして精勤致しました福澤先生も大層に感心されまして……ハイ、福澤先生とは極懇意になりまして先生の家族の方にも日に二回ほど英語を敎へるやうになりました慶應義塾には前後七年間敎師をして居りましたが、只今私は可哀相な方を見ますと非常に同情の心が起りますのは自分が實際困難を嘗めた經驗があるからでございます、其後幸ロイド家に嫁きまして子供は連子を加へまして八人今では嬉しき家庭を樂んで居ります、それで先刻申ました通り其の幾分なりとも未だ家庭をお有ちなさらない方に共通致したいと思つて居るのでございます、……ハイ慈惠病院にも關係して居ります、愛國婦人會の會員にもなつて居ります、それから未だ規模は小さうございますが、圖書室を銀座の敎文館の三階に置きまして廣く讀書家の便に供したいと思つて居ります、良人は矢張敎文館の三階に「亞細亞協會」と云ふものを置て其方を司配して居ります成る可く新刊物を取寄

せて衆人の閲覧に供するつもりです、一時に澤山は貸しません三冊限として、閲讀料は年に六圓として置きます、私の方のは元と東京女學館に在りましたし良人の方のは築地にあつたのですが、昨年敎文館の普請が立派に出來ましたから、其の三階を借りて其處へ移しましたのです、私讀書が好きかと仰しやるのですか……ハイ歴史物が大好きでございます、……アの何ですか私が貴族であると云ふ事は何處からお聞になりました……貴族なんと云ふことは只今では考へも致しません、さう仰有れば實は貴族ですがマア日本で申す貧乏華族のやうなものですよ、今私

懸賞繪さがし(4)



共は全く平民的の生活をして居ります、私の先夫ファルロットの家は元は佛國ブルゴーギュの華族でありましてルーテルの宗敎改革などの時にも名は出て居りますが後にナント令撤回の時獨逸に追出されましたから獨逸の華族であります……私の寫眞ですか、私は寫眞は大嫌いて取りません……娘のですか、それはございますが何處にしまつて置きましたか分りませんが避暑から歸りましたら差上させませう。」

談話轉じて令孃達の嗜好にうつりました「家に居る娘は三人です一番小さいのは先刻申しました通り米國の學校に居ります、嫁いたのは臨月で此頃家に

來て居りますか、其外の三人は未だ結婚せずに居りますから其等の事でも申上げませうか、男の子も二人ありまして一人はアラスカに、一人は横濱に居ります、アラスカのは三十歳、横濱のは二十三歳、何れも未だ獨身ですが、三人の娘の中ノラが二十六歳、メリーが二十五歳、マーチャンが二十二歳で、ノラは昨年迄東京女學館に敎師をして居りました、五年間敎鞭を執つて居りましたから日本の事情には能く通じて居りますお友達は澤山ありまして卒業生の方なども時々お出になり、山本海軍大臣の令孃などもよくお出になりますハイ洵に親密にして居ります、メリーの方は今年十一月に結婚の約がありますので嫁入道具を殘らず自分で調ひました裁縫は皆自分で致したのでございます、三人共皆な彫刻物が好きでございます。」

とて記者を別室に伴ひ、鏡臺の彫刻を示され「此等は皆娘共が致します」と云はれましたから記者は彫刻師も及ばぬ手際に驚き「何所でお學びになりました」と問へは「日本の彫刻師に就て學びました」と申され其室にはピヤノなどもありましたから「お孃樣は音樂がお好きと見えます」と尋ねますと「ハイ、一人だけ非常に好きですが、外の者は餘り好みません」それから又令孃の嗜好など伺ひますと。

「三人共日本料理が大好きであります、若三人共內に居るやうなことがあれば、每日日本料理にするなどゝ言つて居ります、先刻ボート登山が好きだと云ふことを申上げましたが、其外にもノラは犬猫なども大層好きで、メリーは水彩畫を能くします、彫刻だけは三人共堪能です、ノラは又慈善の方に熱心で癩病人などまで善く世話致します、御承知のあの九州のミス、リーデルの方へは一人の患者を養ふだけのものを心配して送つて居ります。」

因に申ますが夫人は今年五十八歳なれどお見受け申たところまことに健かなる御容子、英語は言ふも愚か佛語獨逸語をも能くせられます「佛語の方は娘が上手ですが私は忘れました」との御謙辭、けれども記者は夫人が佛語を流暢にお話になるのを承り語學の堪能なのには驚きました聞けば夫人の父は今年八十五歳の高齡なれども今猶矍鑠として在すとかや、先祖代々長壽を以て名ある家柄とは目出度き事にこそ。

庖廚

懷石料理

龜井まき子

以前は十月の初旬から口切と唱へまして、爐開きの懷石を點茶をする家では催ましたが當今では季節がずつと遲れますから當月はまだ口切の懷石料理を申し上る事が出來ませんから別れの風爐の懷石料理を申し上げませう。

獻立

一汁（三州味噌）　燒茄子　水からし

一向（汁酢かけ）　鯊作り身　木口胡瓜　むしり海老　わさび

一椀　鯛の切り身　たゝき鶏　さき松茸　口柚

一燒肴　鱸のあげだし

一吸物　こまく\ 澤庵

一取肴　むすび鱚　ふくめ栗

一香之物　味噌漬大根

一菓子　栗の友

一薄茶菓子　栗みどり

製法

汁の製法

一汁は三州味噌を一人前六匁づゝの割合で細かにたゝき煮出し（一人につき一合の割）を煮立てたる中へ入れ又煮立たせてうら漉にてこすべし。

茄子（此頃の茄子は秋茄子にて小さきものなり）をあらひ金網を火の上にかけよくやけたらば（へた）をきり小口よりさきて椀にもり前の汁をかけ出すべし出すとき芥子を水にてとき其箸にて此汁の中をかき廻すべし。

向ふの製法

一 甘酢は味淋一合を半分に煮切りよくさまして酢を三勺程加へ又醤油を一勺程入れませ合すべし。

沙魚の鱗をふき頭と腸をとり三枚に下ろし薄身をそぎ小骨をぬき鹽をふり一時間もへたらば之をあらひ片身を三ツ位にきるべし。

木口胡瓜（此頃の胡瓜は終り初物とて船に入り極小なるものなり）は胡瓜の瘤をそぎとり上下をきり木口より薄くきり鹽をふり置後一時間もへたらばよく水洗ひしてかたく絞り酢につけ置き三十分も經たらば酢をしぼり皿にもるべし。

むしり海老は車海老にてもさゐまき海老にても沸騰せる湯に鹽を入れてゆで皮をむき背腸と頭と尾をとり箸にて細かくさきて鹽少々と酢をかけ置き三十分をへたらば皿へもるべし。

右三品を皿へもり上へ山葵のおろしたるをのせ其上より甘酢をかくべし。

椀の製法

一 椀の汁加減は煮出し（一人に付八勺位）を鍋に入れ鹽を五人につき茶匙（咖啡匙の事なり）一杯程入れ煮立ちたらば水を五人分につき五勺も入れ又煮立ちたらば醤油を一勺程も入れ直に鍋をおろすべし。

鯛の鱗、鰓、腸、頭をとり三枚におろし薄身をとり小骨をとりよき程にきり鹽をふり一時間もへたらばよく水洗ひしてむすべし但しむす時は皮を上に向けおく事とす。

鶉の毛を引き毛燒をなし骨より肉をはがしよくたゝきて鹽醤油煮切等を少々ふりかけ玉子の黄味をませ丸めて沸騰せる湯の中へ入れざつとゆでるべし。

松茸を鹽水につけ石突をとり皮をむき手にてさくべし此三品を椀にもり柚を洗ひてそぎたるを入れ上に前の汁をかくべし。

燒肴の製法

一 鱸のあげだしの製法は鱸の鱗、鰓、腸、頭をとり三枚におろし薄身をそぎ小骨をぬきよき程にきり水洗ひして布帛にて水氣をき

りそき胡麻油を鍋に入れよく煮立てたる後前の魚を入れあけて西洋紙の上にのせ油をきり皿へもるべし。これにかける汁は煮出し三杯に醤油一杯を煮立ておろし生姜をそへ出すべし。

吸物の製法

一吸物の汁加減は二番出し一杯に水一杯の割にて塩少々を加へ煮立たゝすべし古澤庵大根の皮をむき薄くきりて又夫を細かにきざみ水にてよく〳〵あらひ炮烙にて一寸いりて水氣をぬきごく少少を茶椀に入れ其上に前の汁をかけ出すべし。

取肴の製法

一取肴の鱚は鯵鰮腹頭をとり三枚におろし薄身をそぎ小骨をとり鹽をふりをく一時間もへたらば鹽をあらひ結ひて一寸むすべし。



懸賞繪探し (5)

ふくめ栗は栗の鬼皮も澁皮もよく奇麗にむきとりよく水洗ひして沸騰せる湯の中へ入れ茹でべし暫くして此湯が澁にて黒ずむやうになる時湯をこぼし水を入れかへて又茹でべしかくして又此湯が色づく時は又とりかへて水を入るべしかくすること四五度にて栗は茹だるなりしかしこれを茹でる時は文火に限るとしるべし又茹だりたるを知らんとする時は此中の一個をとり出して針を通してやうやく通りたる位の時鍋を火の上よりをろしあく引砂糖（白砂糖のあくを引たるなり）の中へ入れ半日位

つけ込み蓄らんとする時栗を此さとうと共に鍋に入れ一寸煮るべし分量は栗一升に白砂糖百五十目のあくを引たる中につけるべし又之をつける時鹽を食匙一杯丈入れるべし。

香之物製法

一味噌漬大根は大根を十日位よく乾して鹽につけ置き水が上りたらば之をあらひて三時間位乾して味噌に一年間位つけ込むべし味噌は田舎味噌に限ると知るべし之を出して味噌をそぎとりよき程に切りてもるべし。

菓子の製法

一栗の友栗の鬼皮丈むきて之を軟らかくゆで中より實をとり出してうら漉をなし此こし粉百目に白砂糖五十目の割にて之を煮てさまして後微塵粉二十目を加へよき程に丸め此中へ並餡（小豆を煮てこしたる粉百目に白砂糖六十目を入れて煮たる餡）をよき程に丸めて入れ其上へ栗の鬼皮澁皮をむきてゆでたる栗を砂糖と鹽と水にて煮たるを三個程のせ出すべし此懐石の蒸菓子は一個づけ故普通より二倍程大きくこしらへるやう心懸くべし。

一栗みどり白砂糖百目をうら漉にかけよくねりて食料黄粉を少々まぜ水を茶呑茶碗に半分程まぜ夫より新びき粉五十目と微塵粉十匁をまぜてよく捏ね四分位の厚さとなし巾五分長一寸五分位にきり兩面へすり蜜（白砂糖五十目に茶呑茶碗に一杯の水をさして火にかけよくとけたらば擂子木にてよくすりばら〳〵になりたらば湯煎にかけて用ゐるものなり）をつけべし。

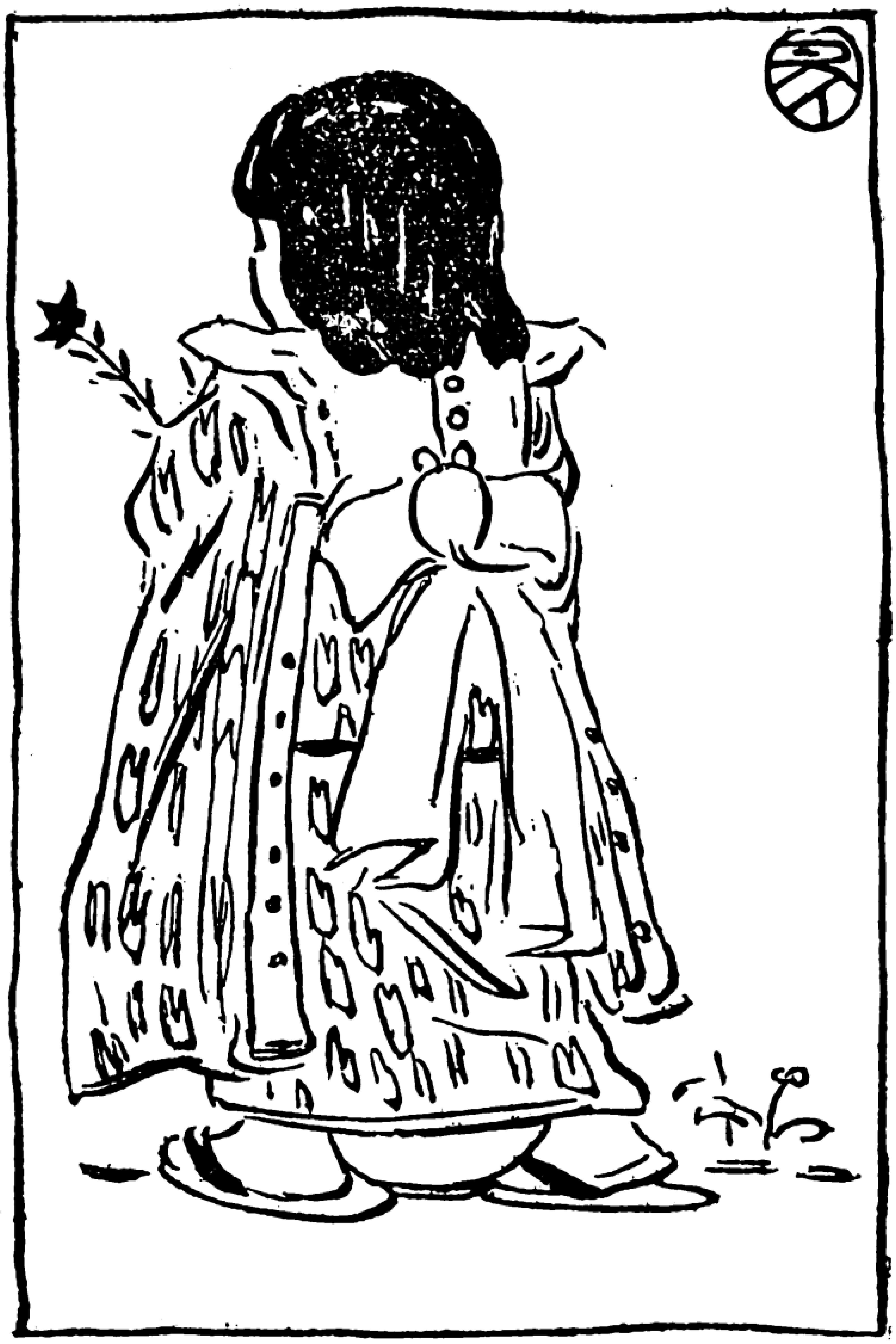
秋の庖厨

△味噌汁仕立のいろ〳〵

○冬瓜のそぼろに茗荷の子の小口
○鯊の片身おろしに銀杏大根
○燒鮎に根芋に口青山椒
○新里芋に十六さゝげ
○松茸に冬瓜の大賽
○初茸につまみ菜放し口柚子
○鮑の薄切に青昆布の短冊

○身しゞみに萵苣こま〳〵
○百合根に新牛蒡さゝがし
○芝海老に茄子の銀杏に粒松露
○寒餅子にしらが牛蒡
○茄子の大賽に葉人参こま〳〵
○藷の角切に莢いんげん
○あられ豆腐にこま〳〵菜
○鮑素麺に新芋茎そろへて干山椒
○銀杏大根にほうれん草たゝき切り
△清し汁のさま〳〵

懸賞繪探し　(6)



○黒鯛の切身に粒初茸に防風
○むすび干瓢に刀豆のせん

○鰶斜切りにして十六さゝげ
○ゑその骨切に松茸、へぎ柚
○蛸ひら〳〵に切り小茄子四ッ半に切り粒椎茸
○海老のたゝきに冬瓜のそぼろに生姜
○むき蛤に青昆布のひし切り

○鶉のたゝきに摘み菜に口柚子
○よせ慈姑に、しらが牛蒡
○鯛の骨付切の茗荷の子こま〳〵

○鯉の毛切りに松露の輪切
○結ひきす子に淺草海苔もみて
○蝦くづしに松茸に三つ葉こまぐ\
○鯒の角切に午蒡のへがし

△鱠と刺身

○針魚の細作り貝の柱（生姜酢）
○葛引鯛平作り蓮芋そろへおろしわさび（煎り酒）
○鯊の細作りに紫蘇のそろへ（山葵醤油）
○鰯ひき裂き大根の短冊に（生姜酢）
○鯉細作り茗荷の纎（芥子酢味噌）
○鯖の薄作り海月の纎（二杯酢）
○いなだ皮作り（蓼酢）
○きわだ鮪にもみ大根（土佐醤油）
○鰡の薄作り茗荷のせん（芥子醤油）
○鯉の作り身は煎酒に浸け置き解きたる子に山葵を加へ交せる
○葛引鯛は三枚卸し刺身を作るやうに木どり葛粉にくるみざつと湯にくゞらせ水に浸し、そして平作にするなり

△拌物の種類

○身蜆に葉人参の五分切山椒味噌
○小芋四つ半に切り松茸の笠薄切柚子味噌あへる
○よまき扁豆、生姜味噌あへ
○海老の味噌あへ伊勢ゑび茹で、肉を劊き脳漿を取り味淋に塩から加へ酢にて解きて海老の肉をあへ
○盛り分蛸の黒胡麻あへ、身蜆の靑あへ、松茸和あへ
○人参のほろあへ、葉をしごきて根を短冊にきざみ葉も根も分けて湯煮し葉を細かに叩き絞り白胡麻を煎りて摺り、白味噌入れてよく摺りてあへる
○赤貝へぎて茗荷のせん山葵醤油

△煮物のいろぐ\

○鰯のあんかけ頭を取り三枚にへぎ器に入れて蒸し水氣をしたみ、おろし山葵あんかけにて出す、又丸のまゝ腸を取りて蒸し生姜酢にて出すもよし
○燒鮒の煮びたしに新蓮根の堅煮

○鹽煮初茸 蕊を去り笠に鹽をふりかけ空鍋にて炒り付け青海苔をかけて出す

○湯松茸 短冊に切りてさつとゆでおろし柚子、葛掛にて出す

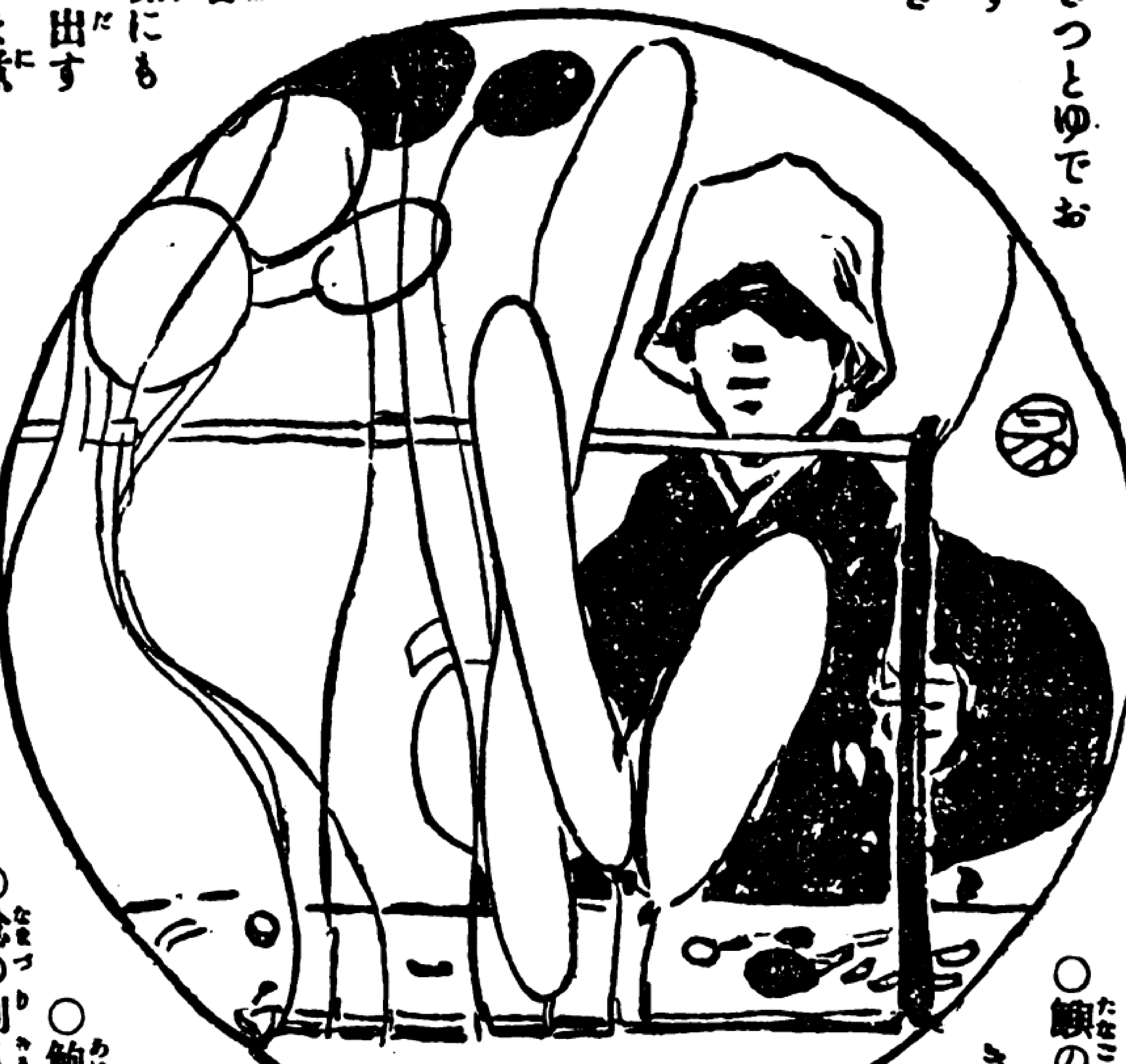
○いなだの酢煮に干ずいきの煮しめ

○干海鼠の寄せ羹 干海鼠を水に浸し茹でゝさく〱に切り俎板の上にのせよくたゝき銀杏、木茸、慈姑など細く切りてたゝきませ卵の白身を交せ合せ器に入れて蒸し如何様にも切り胡椒の粉ふりかけて出す

○蛸の柔か煮に自然薯のうま煮

△焼物のしな〱

懸賞繪探し (7)



○鱧の骨切胡麻の油附焼

○鮊の拔き、白焼にしておろし生姜

○鯛の土藏焼 脊より割きて中骨除き味噌を龍め紙にて胴を巻て焼くなり

○きはだ鮪の傳法焼 葱の白根をせんに打ち焙烙に敷き火に掛て少し焼けたる時、鮪を刺身のやうに作り上へ並べ焼て色の變りたる時器物に取り、煮返たる醬油をかけて出す

○鶉を焼きて大根おろし煮返し醬油

○鮑角切串にして山椒味噌魚田

○鯰の利久焼生醬油に粉山椒を交へて付焼にす

○松茸の笠を亂切にして柚子醬油附燒
○子持鮎の色附燒唐がらし味噌附燒
○鰤の一夜鹽に午蒡の太煮

△揚物の種類

○海老の皮を剝ぎて天麩羅
○鮃薄く仕立、衣なし天麩羅
○莟松茸を立てに薄切精進あげ
○鱧骨切薄身にして天麩羅
○藤豆の筋を取り四つづゝ寄せて精進揚
○紫蘇の實の莖を殘し一本づゝ精進揚
○茄子の皮むき薄切精進あげ
○さつま芋薄切精進あげ
○新蓮薄くはす切精進あげ
○生姜の根を四つ割莖を一寸ほどつけ精進あげ
○鰶の骨を取り身をたゝき寄せて天麩羅
○鮃の薄鉾仕立、鮃の肉をたゝきて山の芋と饂飩粉と鹽少し入れてすり交せ、銀杏、木くらげの數細かに切りて交せ、丸湯皮の大きさに取り、衣を被せずに揚げ小口切にするなり

△浸し物は何

○蓮芋を小口切にして酢醬油、ふり胡麻
○水菜を湯煮してからし醬油
○餘まき隱元を斜に切りて酢醬油
○藤豆を茹でゝ黑ごま醬油
○茄子を裂きて胡桃醬油
○萵苣を亂切にして生姜醬油
○紫蕨の太き莖をそろへて辛子酢

△香の物いろ〳〵

○冬瓜の味噌漬（冬瓜を皮共に斷ち腸をよく取り一鹽して輕く押石をかけ一夜水を取り布にて水氣を取り味噌につけるなり
○達摩瓜（瓜の末生を二ツに割り中實をとり甘鹽にして壓漬にするなり
○茄子の芥子漬（末生の小さき茄子の蔕を去り鹽を辛目に二三日つけさつと日に干し茄子を漬けたる鹽水にて芥子をかけし麹を入れよくねりませ壺につけ込む

なり

△飯の種類

○鱧飯　骨を去り薄く小口切にしよく湯がれ飯の火を引く時上に並べ清汁の加減をよく葱の小口切卸し生姜香料にて出す

○栗飯　さつと焼きて澁皮を取り三ツ四ッに割り飯の上に並べ鹽を振て炊く

懸賞繪探し（8）



○きば飯　十六角豆を煮て薄く小口切にして飯にまぜるなり

○初茸飯　莖を去り味淋醤油にて味をつけ亂切にして悶ませにす

○刀豆飯　豆を水に浸し皮を去りて米に鹽少し入れて炊きこむなり

○ごもく飯　飯を強目にたき鯛の肉を細く切り松茸を薄く切り、さから麩を斜に切り、鹽と味淋にて煮、玉子を煎り慈姑と蓮根を茹でゝ薄く切り、鹽と味淋にて煮、赤漬生姜を細く切りいづれも飯の上に並べて出す

△松茸の土瓶むし

之れは松茸を洗つて引さき、土瓶へ適宜に詰め、松茸二本に付酒一匙（珈琲匙にて）醤油一匙、砂糖半匙と鰹魚節少々を加へ、土瓶の口を紙で塞ぎ、強くない火へ暫らく掛けて置き煮へた時土瓶の儘で膳に具へる。尚此添汁には柚を搾り、並の酢を同割に交せ、醤油少々加へたものがよし

奧羽の女學界

東京幷に東北各地の女學校を巡視して歸りたる大阪の某女學校長はいへり。奧羽地方は一般に生活の程度低ければ、學校の如きも定めて不完全ならんと豫想せしに、事實は之に反して實に意外の感ありき、殊に太平洋に面せる仙臺、盛岡、青森の各縣等早くより交通の便開け比較的繁華の地方に比して交通の便なき日本海沿岸の秋田、山形兩縣が著るしく發達せることにして東京府第一、第三兩女學校を除けば東京および近畿の各地方にも見るべからざる最新式の校舍を此僻陬の地に發見せり、就中山形高等女學校の如きは女子師範學校と同構内にあり校舍の建築其他萬般の設備周到にして庭園の一草一木の植方に至るまで女學校の特色を呈したるは感嘆の外なく、生徒の監督法も能く行屆き居れり山形縣は屢々飢饉などあり、面積人口は少なき方なるに拘らず縣立女學校四あり、女子教育の盛なる事は全國に比類なし又奧羽地方の女生徒は都會に比して智情鈍き代りに意志堅固なり、感念の流動甚だ遲鈍なるを以て機敏に立働くといふ點において及ばざれども、精力を一事に集中して大成を期する點においては他地方の女子が企及し能はざる所ならん、又眼前の出來事に對して臨機の處置に出づる事は拙なれども、大體を看取するの明を有せる如し、夫の秋田市が田舍にも似合はず電燈事業を起し、電話を有し、シカも市中淸澄なる河流の貫通せるにも拘らず、傳染病の流行を恐れて水道を布設せるが如きは他において見るべからざる所にして、此氣風は女生徒間にも遺傳的に傳はれるが如く、今後漸次交通盛となり文物普及して智情の發達する曉とならば、此等の女子を母とせる將來の東北人は一大飛躍をなすべく、或は我國勢力の府が奧羽地方に移る事となるやも圖り難し、又女生徒の擧止は概して粗野なれども、眞摯にして都會において見るが如き勞働を賤しむの風なく、學校の掃除の如きは小使を要せざる程なり、而も流石に美人系に屬する處だけありて容貌概して美にして甚しき醜婦とてはなきも、姿勢不正にして背の屈めるもの多きは寒冷なる土地柄の故にてもあらんか云々。



磯の神女

杉浦翠子

（上）

土用干しの一日、森田眞哉は本箱の底から、虫食んだ古いノートブックを見出した、インクの染や、手の垢で、眞黒くなつた表紙は（蝶の部）と書いた文字さへ、見覺えのある人でなければ判らぬ位である。

『何だ是は大學時代のだな、蝶の部と書いてある、あの時分はよく昆虫を研究したものだつけ。』

眞哉はかういひ乍ら、若かりし昔を忍び、懐かしそうに、丁寧に頁を繰り初めた。

蝶の圖解種々なのが、紫インクで、網羅されて居る頁の端に、一際目に立つて朱書されて居るのは、（小間使ひ千代子蝶の化身？）

といふ文字。

眞哉は其を目戍て、暫時思案の樣であつたが、求むる物の見當りしか幾度か首肯いて、ほゝ笑んだ。

今でこそ理學博士の冠を頂いたものゝ、まだ眞哉が大學生で、伯父柳原子爵邸に寄宿して居た頃、お千代といふ可愛い小間使ひがあつた、或日千代は自分の室に來て、何百と採集された蝶の箱を一つ一つ見て居たが、

『若様隨分集りましたね。だけれども私の國にあるやうなのは一個も有りませんね。』

と云て猶も眼を放さない。

『甚麼蝶なの？　一體お前の國は何處だい？！』

と聞くと、

『ホヽ、私の國！　石見の國の波子の濱で、それは淋しい邊鄙な處ですよ、其所には木の花蝶て、この位大きな（指と指で直徑を示し）蝶で、純白な翅に金と銀との、波紋がありますの、孔雀の尾のやうで、ピカピカ光つて、それは奇麗なのですよ、そして夜見るのと晝見るのと、光が違ひますのよ、何でもこの村にしか無いのだつて、神主さんが申しました。』

とお千代は頻りに説明する。

岐阜には特產の岐阜蝶といふがあり、琉球にもダナイダ蝶といふのがあるから、或はそんな特產の物があるかもしれぬ、そんな邊鄙な地で、未だ誰にも知られないのかもしれぬ、こは聞き棄てにならぬ事と。

『それは欲しいね！お前捕つて來て呉れないかね、お願ひだから。』

自分は等閑ならず問ふて見る。

『それでも危なくて、却々捕れないのですよあゝ蝶々に私も生れてくればよう御座いましたね、恁うして若様に大切にされて。』

千代は自分の机に凭たれて、笑もせず眞面目にこんな事を言て居る。

『なあに！　蝶に生れなくとも、その蝶さへ捕て來て呉れゝば、何でもお前の願を聞いて上げるよ。』

と自分はたゞ蝶々が欲しいばかり。

『でも若様は華族様だし、私は百姓の娘ですもの。』

何だか判からぬ事を言て居る。

自分と尺をも隔てぬ處に、お千代は坐つて机の上に散つた薔薇の花瓣を挘りながら。

『若様 私 の願ひを御知り遊ばして？』

眼ばかりを自分にむける何となく情を含だ、流眄であつた。

『あゝ知てるとも、着物が欲しいのだらう。』

「まさか衣服なんか。」

と云て千代は澄まして居る。

「それでは指環か?！　ダイヤモンドの！」

「あら、なんぼう女だつてそんな物ばかりが命では御座いませんよ。」

と今度は邪慳にいふ。

「それでは何?　言て御覧な、お千代！」

自分はその繊弱な肩に手を懸けた、友禪染の半襟に包まれた、お千代の優しい胸の小琴は此時亂調の響を傳へて居る。

「あのね……あの……」

といひかけたが却々後を言はないで猶花片を拗つて居る。

「さゝ誰も聞いては居ないから、



早く御言ひよ、遠慮などする柄でもあるまい。」

此頃はもう主從の關係を離れて、馴れ親んで居たの

だから、自分は構はず肩を揺つて見る。

『では申しませう……あの蝶々は乾度捕て參りますから……そうしたら若様の……御傍に一生置いて……
…。』

あとは何やら口の中で言たが聞きとれなかつたよほど云ひ惜くかつたと見え、頰を眞赤にして兩手で顔を蔽ふて終た。

『何だ、そんな御安い御用か、ハヽヽヽ。』

自分は寧ろ冗談半分に哄々と笑た。

何を言ても、まだ十六の少女、前途にどんな障害があるといふことも、思ひ及ばさない、その可憐の唇から洩るゝ言葉だもの、思慮や分別の上、固い根據があつて誓た譯でもないと思たから、自分はこの無邪氣な問ひに。

『いゝとも』と直ぐ答へた。

『乾度ですね！　若様。』

と言て千代は自分の膝に俯伏しになつた。

御千代さん、御用ですよ、

と廊下の方で仲働きの呼ぶ聲がすると、お千代は慌てて膝より離れ、亂れた鬢をかき上げながら、小走りに出て行つた。

自分の膝の上は濡れて居た、涙であつたのだらう、何故に泣いたのか判らなかつた。

思ひ起せば、其折机に擴げてあつた、ノートにこんな落書をしたのであつたと、博士は猶も追懐の夢に憧がれた。

其後間もなくお千代の姿は、邸の内に見えなくなつたが、器量よしの事とて、日頃から絶えず朋輩どもに嫉妬されたり、讒訴されたりして居たが、多分そんな事で暇をとつたのであろう。

あの時とて、元より冗談に過ぎないのだから自分とても、心に懸けては居ないが兎も角も、外の女中共よりは最も親しくして居たのに、暇をとつてからはたゞ一度の音信もしない、人に聞くのも心が咎めるので、自分は獨で色々の事情を判斷しても見たが、時移り星變ると共に、自分の頭からは漸々とお千代の事が遠ざ

かつて、もう全く忘られてから七年も經た、もう今頃は子供の二三人も持て居る事だろう、自分にさへ妻もあり子もあるのだもの、今年の夏は行て見やうかしらどんなに變たか見たい氣がする何だかお千代に逢ひ度くなつた、そして其の蝶を採集もして來やう。

博士はかゝる好奇心を起したが、常から旅行好きの事とて、直ぐに旅立つ日を思ひ定めた。

（中）

斯も開けた文明の世にも、まだこんな未開の地があるかとばかり、石見國波子の濱は、人口一萬ばかりの城下に出るさへ二日もかゝるといふのだから、勿論汽車も通よはねば、汽船も着かない、從てかゝる勝地にも別莊一家なく、都人士の汚れた足跡もとゞめない土



地の人は、心までがいつまでも太古めいて正直で質朴であるから、漁どる人も、藻取る女も、皆結髪時代の俤が殘てるやうな氣がする。

もとより旅人宿とては無いから、博士は農家に宿を借り、昨夜は暗い行燈のもとに、波の音きゝつ、一夜を明して、今日村の物識かであると云ふ、鎮守の社の神官を訪ふべく今宿を出たのである。

名にし負ふ日本海に面したる海岸の事とて、浪は洋洋として涯を知らず、島影一つ遮ぎる物なきに、仰げば蒼穹また曠く、悠々として見渡すに涯なく、實にこの宇宙はたゞ海と空とによつて二分されてるかの如くである。

實にこの大なる自然に對してはあまりに人の子の小さく微々たるを、思はしむる。

『あゝ良い、實に大きな景色ではないか、心までが大きくなる、須磨や明石もいゝがこれほど景色が大きくない、そして肺病患者が澤山居るが、こゝの空氣の清らかなこと、お千代はこんな處に生れたのか、自分も一生こゝで終りたい。』

と云て博士は大空を仰いだ。

風一陣、白雲の峰が崩れて、碧空に片々飛ぶのが、この大きな水鏡に映るのか、白波の花が紺青の波に砕ける、遠い〱昔から、打よせ來る幾萬尋の怒濤の陣を防ぎ止めて、がつきと立つた巨巖は鐵の扉、城壁のやうである。老松は儼として神將の如く巖の上に、今も猶翠黛鮮かに鎬を削て居る、幾千萬の遠い昔、創世の頃から依然として猶そのまゝなる、此海、この岩、この松を見ては誰しも神代時代の頃に。思ひ及ぶので、其處の岩崖に寄るは丸木船ではないか、彼處に釣する人は浦島太郎ではないかと思はれて、博士は今是れから龍宮にでも召されるやうに思て道を急いだ。

河原撫子の薄桃色や、濱菊の紫は乙姫樣の簪の花とも咲いたか、紅玉紫玉首輪になるのは櫻貝か、梅貝か磯の小路は美しい。

もしお千代がこゝに居たら、今の自分の眼には乙姫樣とも見えるだろう、と、博士は空想しつゝ、向ふに見

える鎭守の森をさしてゆくゆけば、朱塗の鳥居がある正面には、古金泥の色嚴かに、木花神社の文字朧げなる額が懸つて居る、それを潜つて苔に靑き石段を登るとまた鳥居がある。

このあたり赤松空を蔽ひて、地は一體の零れ松葉、その代赭色したる處處を、咲いたは紫色の龍膽の花色彩が妙である。

境内は左程廣くはないが、御堂の後は一帶の松林、さほどの風もないが松籟颯々と韻をなして、遠い龍宮から浪を傳てくる箏の音の樣なのが、この寂寞の分子を靜かに剗で居る。御社の建築は隨分古く、崇嚴ではあるが、丹塗りの柱、花欄などが姫神を祭たゞけに何となく懷かしい。

尋ぬる人の家はと見れば、傍に小家があるこゝよと思たから博士は、

『賴む。』

と案内を乞ふ出て來たのは、丈高き人頰より顎に生えた白髯はながく、胸にまで下がつて白衣の上に銀色なのが澤々しい、この處にこの人、博士は何となく尊さに恭々しく頭を下げた。

神官もこの洋服姿を珍らしく思ひ、他國の人よと思たから親切に席をすゝめて。



「御姓名は。」

と靜かに問ひかける。

理學博士森田眞哉の名刺を見せながら。

「私は東京の者で御座いますが、少々この土地に御尋ね致したい事がありまして、かく御閑居を驚かせ申ました。」

眞哉はまたお叩頭をした。

「それはようこそ、まあお掛けなさい。」

それではと會釋して博士は、敷居ごしに腰をかけた。

八月半であるのに、松風の冷たさ麥稈帽が急に輕く思はれた、松の木の間に見え透く海が銀色に光て居る。

「あの……此村に坂田千代といふ娘がありませうかな？」

かゝる人に女の名とふはと我ながら恥かしかつた。

「おゝ、お千代か？！ そして貴郎はお知己かな、おゝ東京の……それでは千代が勤めて居つた御邸の方かな？」

問ふ事は答へで、反て聞かれる。

「ハイ、左樣です。」

と答へると、老爺は急に顔の色を和げて。

「左樣か、お千代の御主人か、是は珍らしい彼に就ては色々と話がある。

實はお千代は七年前に亡くなりましたよ。」

「エエ！ 奈何して死だのです！？」

博士は驚いた、こは餘りに思ひがけぬ人の身と、茫乎したが、何だか信じられない。

「矢張り姫神の祟りでな、まあお聞きなさい彼の子の親が兒が無いので、この木花樣に祈願を懸けた、萬望子をお授け下さい、もし男が出來れば神官にさせ、女が出來れば巫子にして一生御傍に御仕へ申させる、と願たらあのやうに美しい娘が出來た、此村にも彼程、奇麗な娘は無いので、毎年此宮の祭禮の時には、あの黒い髮を下げて、紅の水干を着て、稚子姿になる時の美しさ、誰しも見惚れない者はない。

お千代さんは姫神樣の再來だ。



怪我させるな勿體ないとまで、漁師の子などは言つたものだ、すると母親は慾う考へたあんな美しい娘を、この儘にして置いてはこの田舎に埋もれて終ふ、女は氏なくして玉の御輿とやら器量次第で如何な出世も出來やうに、と思つて私等の制めるのも聞かす十五の年かに、東京の伯母の處へ預けたとする、何でもそれからある華族へ奉公に上がつたとか云たが、それでは貴君の御宅でしたか？」

と神官は更めて博士の顔を瞶めた。

「其後十六の年でした、歸て來たが以前とは悉皆異つて、顔に白粉塗たり紅さしたり、何となくこの田舎を嫌ふやうな樣子であつた、是は困たわい、東京などへ出した故、あの罪もない清淨な魂を汚がされて終たかもうあれの身の平和は破られたかと、私は一方ならず心配した。」

此時老爺は眞白な蛾の樣な眉を顰めて澁茶をグット一呑み。

『そして不思議な事を申ました、蝶々が欲しい若樣に上げるのだから、となo』

神官はこの三十越した、髯男の博士をば千代が戀した若樣だとは氣がつかない。

博士はこの言に悔として、當時を思ひ遣つた。
「是は滅相な事を思ひ出したものかな、お前あれは命がけだよ。」
と私は幾度か制ました。
「ハ……、どうして命がけなのです。」
こは不思議な事を聞くものよと博士は問ひかけた。
「それには色々理由が有るのじや。」
老爺はその長き髯を撫でながら、またも話の糸を繰る。
「抑もこの石見の國は、出雲と同じに日本でもよほど前から開けて隨分不思議な話があるが、まづこの村の由來を話せば、いつの御宇かは知らないが、よほど昔だつたらう、ある大暴の日この海岸に一つの藁包みが流れ着いた、
その時に磯に釣して居た若い漁師が見付て早速藁包を解いて見ると、こはいかに黃金作りの立派な御輿が現はれた、見ると扉が兩方にあいて、美しい姬が出現ましく\たが其れから、この濱を統御ましまされて、漁どる道や、機織る業を敎へ給ふたので今此社は姬を祭たのである、御名は木花姬。」
此時博士は御社の方を顧みる。
「ところが姬はその漁師に思ひを懸けられて、切に御愛しになつたのを、是は人間の子矢張り漁師に懸想した娘が、それを聞くと嫉妬の炎を燃やし、烏頭の花の毒を姬神に飮ませたといふ、姬は飮でから其を知つて、あゝ人間の世は汚がれたものかな、恐ろしや、もう自分は龍の宮居へ歸ると仰つて靑海原の底へ御隱れになつた、御姿が海の底へ沈だ時、波の上に水煙が立つて、其の中から翩々飛び出たのは、その木花蝶、何しろ古い話で當にはならぬが、言傳へでな。」
美の神ヴイナスは海中の泡から生れたといふ、西洋の神話があるが、こはよく似たる事を聞くものよと博士は何となく興が乘つて猶其先きを促がす。
「それがお千代の死と、關係があるのですか!?」
「まあお聞き! ところが滅多にその蝶が居るのではない、毎年祭禮が九月だが其一月前頃から來るので、

澤山居るのではない、まあ一疋か二疋だらう、いつも磯邊を片々するので、山に花が咲いても香がしても陸には來ない、岩蔭だの波打ち際だの、捕るに危ない處に飛で居るが、あまりに奇麗な大な蝶ゆへ、つひ子供などが目に付けて、追ひまはしては浪に呑まれた者が幾人もある、其故この蝶は姫の化身だ、捕ると罰が當るのだと申事で。』

仙人のやうな人が、かゝる神秘めいた事を語るのだから、博士も成程と思つた。

もし理學博士の頭腦から割り出して見れば、こんな理に合はぬ物譚めいた話は信じられないが、何しろこの沖には潮流が帶をなして流れて居るといふのだから、或は熱帶の風に吹かれて、異國の蝶が此邊を彷徨のかもしれぬ、其故澤山は居ないのだらう、如何にし



ても一匹欲しいと思た。

『それでお千代は、とう〳〵捕れずですか。』

『否、千代の姿が見えなくなつたから、是は大變だ、乾度海へ沈だのだろうと云て村中の騒ぎは一通でない何卒行衛が判りますやうにと、一同が御社にお籠りしたらその七日目、この海岸に死體が漂着した。八月廿五日であつたらう。』

『エー、それでは明日ですね！ 七年前の。』

博士は偶然とも思はれなかつた。

永く忘られて居たお千代の事が偶と思ひ出されて、急に懐しく、會ひ度さの情切なるまゝに、孤筇漂然三百里の遠きに來て見れば、其の人はもう亡き跡であつて、落膽したもの〻今七年目而も冥日に遭遇して、お千代の物語りを彼に緣深かき、神前に於て期せずして聞く。

幽冥所こそ別にして居るが、何だか因緣が結ばれてるやうだ、自分の脳の底に深く封せられて終た、二人の歴史の卷物を繰りひろげて見よと云て、お千代の靈が自分の胸を敲いたのであろう。

『恰度月の晩であつた、見れば蒼白い顔に黒髪が縺つれて、唇の色は褪めても居るが、何の苦もない、面色は恰度眠てるやう、起したら何とか物でも言ひ相だつた、緑の髪や玉の肌の潮に浸したのが月に輝されて澤しい、名匠が手になつた大理石の御像を拜むやうで、夏の晩だが冷たい色は見て居る人の腸まで泌むやうだつた。

大概だつたら夜女の土左衛門を見るのだもの、幽靈が出る位に云て厭がる若者までが、此死體を見ると眼に涙を浮べ、いひ合した樣に皆合唱した、口の惡い漁師等が寄てるのに誰ひとり徒口聞くものはない、浪の調松風の音ばかり、亡骸を前に見ながら私は如何しても死だと思はれない、矢張りある稚子姿して、姫神に何處かの國でお奉仕申して居るやうに思つた。

漸々と世の中が開けるにつれ、この土地なんかも人氣が汚がれて來る故、お千代などは其に染らずして、天にでも昇た方が幸かもしれない、噫今頃は清浄らか

な雲にでも乘つて蓬萊にでも居る事であろうが。悲しい事には戀の曲者、その爲に命まで棄たか、その蝶が懷に。」

「エー」

博士は意外なる大きな聲を出したが、暗涙を堪えて居た。

「御老人！　實はお千代が其時若様と云たのは私だつたのです、蝶の事も約束したが其れまで熱心であつたとは夢にも知らなかつたです、忝じけない！」

お千代の至情の切なるを聞いて、博士が胸には青春の血再び燃えて、熱き涙は潸然として頰を流れる。

この長物語が終たとき、ふり返つて見ると、藻しほ燒く濱村も、磯の松も、家根も廂も葉も幹も、落暉の影にあか／＼と、燃ゆる如な夕近き汀を展げて。

望めば金色輝く西の世界、沼々として果しなき、波濤の末に、水晶宮の崩るゝは雲の峰が蓬萊の如く聳えたあたり姫神も在すところ、お千代も居やう。

今しも彩雲の㡌は五色の紙を撒いたやうに燦とし波上に輝いて居る。

感慨多き胸を抱いて、博士が頭を垂れた時、紫の雲波の彼方に崩れ落ちて、祠の軒にハラハラと落つる松の雫。

其夜は社の扉、開ひて燈明の灯あか／＼と、博士は神前に端坐して、お千代の靈に感謝の祈禱を夜もすがら。

（下）

お千代は逝つたが、魂は永くこの蝶に留まつて博士が研究の資料となつた。

森田眞哉が多年盡瘁した、研究の結果は昆蟲學……と云ふ大卷と成つて、世に産れた、勿論斯界に貢献する事の大なる爲に、東都の紙價を高めた理由であろふけれ共、其卷頭に血の滴りのやう眞紅の色鮮に刷出された。

『蝶の化身千代子の靈前に捧ぐ』

といふ不可思議なる辭が大なる呼物となつたのであらう。（完）

選　一　等

社會

消費組合の話

有磯逸郎

（一）小給者の生活難

自分に一人の友人が居る、大藏省の役人で、月給五十圓を取つてゐる。

月給五十圓といへば、我國では普通の收入で、世間體では、むしろ良い方に數へられてゐる。けれども、世帶向はといふと如何して〳〵、キユー〳〵言つて何時も困つてゐる。なら贅澤な男かといへば其樣でもなく放縦な男かといへば這樣な評判も無い、家族が多いかといへば、夫婦に子供に老母、それに女中が一人、先づ少人數だ。それで困つてゐる、世帶話が初ると、遣り切れない、と何時も泣言だ。

讀者諸姉、卿等は此の友人の泣言に對して如何なる批評を加へんとやする、自分は友人の內情を審にしないが併しながら諸物價騰貴して、生活の昂上せる今日の如き時節柄では、五十圓內外の收入では、活計に困難を覺ゆるのは、至極最もであらうと竊に同情してゐる。啻に此の友人ばかりでなく、五十圓以下、三十圓以下の小給者は、官吏といはず、銀行員といはず、會社員といはず、誰も彼も生活難を訴へてゐるのが今日の現狀、前の友人の如きは、女中を簡略すると、たつた四人の少家族であるが、若し之に人數が多いか、或は病人等あるが最期、忽ち失算が出來て眼も鼻も明かなく爲る。

だから常に生活狀態に注意してゐる經濟學者なども、或研究者の如きは、生活の窮乏は體力勞働者よりも精神勞働者――官吏、學校敎師、會社銀行員中の小給者に在り、といつてゐるのも無理はない、で、生活に悶へ苦んでる、小給者は、その家計の不如意に對して如何なる處置を取つてゐるかと言ふと、此奴は亦た案外、何等の方法も手段も執らず、手を懷ろにしてボ

カンとしてゐるのが不思議な位だ。なるほど其の中には小遣帳に緊縮を加へてゐる者もあらう、世間體を棄てゝ女中を勘辨してゐる者もあらう。けれども直ぐ其の後から雑費が生じて、小遣帳の整理も緊縮も破壞はれて仕舞ふから情ない、依然として月末には細君との間に押問答が繰り返へされてゐる。

といふのは一體我國の家庭では、整然と豫算を組んで生計を立てゝゐる者が極めて尠いのが缺點である。最も不足勝の收入では、豫算を立つるに由ないといふ異論もあるが、兎にかく一國に豫算あるが如く、秩然と豫算を組んで之に依つて家政の方針を立てゝゐる者が尠いやうに見受くる。豫算が立つて居らぬほどだから、貯金の遠圖なども有りやうが無い。中にもその不



如意を緩和すべき社會的設備の無いのが最も遺憾とすべきだ。だから遠慮なく言へば、少給者の家計なるものは突き當りばつたり、その日〳〵の收入に依つて生計を遣つてゐる日稼人足の類と異らないのだ。爾して前の大藏省官吏の如くに年中キユー〳〵してゐるのだ。けれども節儉せよ、豫算を立てよといふのは、道理は道理であるが、不足勝の經濟を持つてゐる者に對して百日說法してゐても何等の効果が無い。節儉せよなどいふ常切文句を並べる代りに、自然に豫算が立ち、節儉され得る方法を案出するのが、寧ろ實際に適切ではあるまいか。左に小給者家計改善の方策――即ち如何な小給者にも豫算が立ちて、且つ節儉され得べき方法を掲げやう。

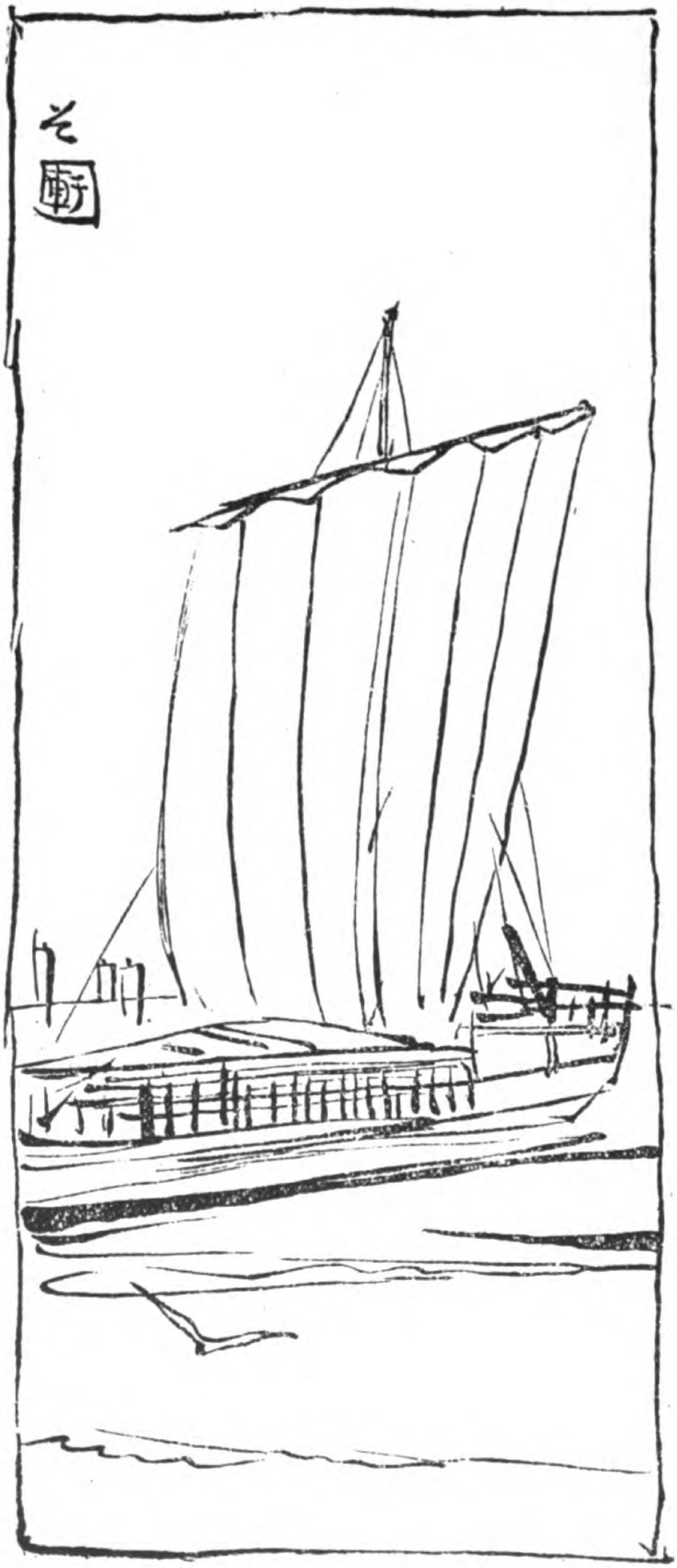
此の小給者家計改善の方策とは、天魔不思議の秘法でも妙計でもなく、すでに我國の一部にも行はれてゐる「消費組合」をいふのである。

（一）消費組合とはどんなもの

消費組合とは如何なるものであるか。先づ最初は四角に出でゝ、組合の性質を紹介すると、消費組合といふのは、「組合員の生計に必要なる品物を共同に購入して、之を組合員に賣捌く組合」である。即ち共同に購入することと組合員に賣捌くこととは消費組合に缺くべからざる二大目的で、爾してその品物は生計に必要なるものでなければならぬ。なほ共同の精神といふのも、消費組合には必要條件と爲つてゐる。

一體吾人の日用品は生產者より我れ等の手許に遣つて來る迄は、幾人の手を經てゐる。例へば米穀としやう。米穀の生產者は百姓である。若し直接に百姓の手より玄米を買ふものとすれば、一石十七圓の米も十三四圓で買へるに相違ない。現に地方に居る人は、仲買或は小賣商の手を經ずして、都下で石十七八圓の白米も、石十三四圓で買つてゐるのは珍らしく無い。けれども東京或は大阪のやうな都市生活の者は、百姓より直接に買ふ事が出來ないから、地方で十三四圓で買はれべき米も十七八圓で買つてゐる。

で、此の十三四圓と十七八圓との差は、如何したのかといへば、成程運搬費も掛つてゐる、精米所の勞力も掛つてゐる、また米屋町の影響も受けてゐるが、その大部分は仲買小賣商の手に其の割前を取られてゐるのだ——併しながら仲買或は小賣店が利益を壟斷するのも無理は無い、かれ等も商賣であるから利益を見るのは普通の話であるけれども消費者の方より言へば直接生産者の手より買へば十三四圓で購はれべきものを十七八圓で買つてゐるのは、業腹な譯だ、特に諸物價の騰貴せる今日の如き時節柄では、愚痴も出る。けれども之は今日に初まつたのでないから詮術ないとしやう。併しながら、小賣商の手を經た物品は、二割も三割も値の高い上に、品物の粗惡と來ては堪らない



小賣商に依つては隨分酷い物を持つて來る、中には升目を盜んで、九升の米を一斗にして持つて來るのも多い。

斯うである。小賣商を通つて來た品物は値の高い上に、品質惡るく、尙その上に升目を盜まれる。消費者こそ良い面の皮である。左樣、生活難を稱へてゐる小給者は、收入が時節と伴はないばかりでなく、商人連より右の如く良い面の皮に爲れてゐるのである。

收入が時節に伴はないのは已むを得ないとしやう、けれども商人に良い面の皮に爲れる丈けは、如何かせねばならぬ。——消費組合は斯うした理由から起つたのである。卽ち生產者と消費者との間に種々の人物加はり、利益を取られ、弊害のあるを削除して、生產者と消費者と、ぴつたり直接の關係とする社會制度で、斯くて小給者の家計を改善して、家庭の進步を謀らんとするのが、消費組合の目的である。

（三）英國の消費組合

で消費組合に二種類ある、一は英吉利風で、他は大陸風である。購買價格は市價と略ぼ同じくして、中間者——問屋、仲買、小賣商などに取らるゝ利益を組合員相互の貯金に當てんとするのが英國風で、その利益を物價に示して、出來べき丈け廉價の品物を販賣して消費者の便宜を謀つてゐるのが大陸風である。卽ち消費組合を貯蓄の一機關とするので、組合員は其の消費を節約するとなくして、消費の結果は自然と貯金と爲るのが英國風で、貯蓄などは第二のことゝして、何んでも品質が能くて廉いのが好いといふのは大陸風であるのだ。

爾して消費組合の出產地である丈け夫れ丈け英國の消費組合は非常に盛大を極めてゐる。特にマンチエスターの中央消費組合の如きは規模の宏大なると世界第一の稱あり。といつた丈けでは讀者に明確なる印象を與へまいが、同中央消費組合事務所は、販賣部、製造部、運搬部、銀行部の四部に分れて居り、販賣部、商品陳列所あり、製造部にはチヨコレートビスケツト製造場

磨麥工場、ソープ工場、靴工場、毛織物工場等の製造工場あり。

商品陳列所には、附屬工場にて製造した物品や、卸店より仕入れた物品の見本を陳列してあるが、一大商品陳列館の觀がある。啻に陳列所ばかりでなく、製造工場の如きも、堂々たる一大工場で、使役して居る職工は、三千七百五十人の多數に出てゐるのみならず



運搬部なども矢張大仕掛だ、六艘の汽船を備へて、大陸諸國及米國等の生產地と直接取引を遣つてゐるから豪氣である。銀行部を見ると、百餘名の事務員を配置して金錢の出納を遣つてゐる、英國で此の中央消費組合を巡視して來た友人は一大銀行の風ありと稱贊してゐた。――マンチエスターに在る中央消費組合は、概

然と斯んな風である。

右は中央消費組合の概略であるが、英國に初めて消費組合の起つたのは、一八八四年、今より二十年ばかり前で、然かもロッチデールといふマンチェスター附近の一小都市に、二十七八名の毛布職工が、僅に一ポンド宛の少額を集めて創めたのが濫觴。斯くて一八九〇年には、

△組　合　數　　千二百四十
△組合員數　　九十六萬千六百十六人
△出　資　額　　千〇三十一万〇七百四十二磅
△賣上高は　　二千六百八十八萬七千六百三十八磅

と爲り、九年を經て一八九九年には

△組合數は　　千五百三十一に增加し
△賣上代金は　四千五百十一萬六千七百九十七磅の

巨額を示してゐる。それより八年を過ぎた今日では、更に一層の發達を現はしてゐるだらうと思ふ。

（四）　產業を目的とせるものと生計を目的とせるもの

思はず筆が滑つて、英國の消費組合に暇が取れた。外國の消費組合は暫らく後に廻はして、早速日本の消費組合に入らう。

歐米の消費組合も最近であるが、我國のは更に最近で、學者の間にこそ消費組合の名は行はれてゐたが、實際に行はれたのは、なんでも三十一二年の頃、高野房太郎氏（高野法學博士の兄）等が、砲兵工廠等の職工を集めて創めたのが權輿であらう、當時は共働店と稱してゐた。間もなく政府は、法律第三十四號で產業組合法を發布した。之は三十三年の三月六日である。即ち第一條の第三項に、

　產業又は生計に必要なるものを購買して之を組合員に賣却する事

といふのが其れである。我國の產業組合法では消費組合でなくして、購買組合といはれてゐるのも、此の箇條から出てゐるのである。で、文章は聊か乾燥と爲るが、此の箇條を分析すると、我國の購買組合も二種類を含んでゐる。

イ　組合員の産業に必要なる物を購買して之を組合員に賣却するの目的を以て設立するもの

ロ　組合員の生計の爲に必要なるものを購買して之を組合員に賣却するの目的を以て設立するもの

と係ふ産業を目的とするものと、生計を目的とする者と、購買組合に二タ通りある。その後農商務省吏員や、縣廳當局者の奬勵で、各種の産業組合が起つたやうであるが、他の生産組合等が起つてゐる割合に此の消費組合が比較的盛大でないやうに見受くるのが殘念である。その中、最も自分等の眼に著しいのは、衆議院内の官吏より起つて、今は大藏省、遞信省、内務省、農商務省、會計檢査院等の團體が連合して、それに銀行會社員が加はゝつて、厖然たる勢力を現はしてゐる、芝區南佐久間町一丁目一番地に事務所を開いてゐる『有限責任購買組合共同會』が、着々として、成績を擧げてゐるのが嬉しい。

以下、此の共同會を中心とし、歐米の消費組合を參酌して、消費組合――購買組合の組織、効果、家庭に及ぼす影響を話さう。なほ、購買組合に、前述の如く産業の爲めにせるものと、生計の爲にせるものと二種類あるが、自分は産業的購買組合を省いて、專ら生計の爲にせる購買組合のみに筆を止める。

（五）　都下小給者の購買機關

有限責任購買組合共同會は、定款第一條に、『本會は會員の生計に必要なる物品を購買して之を會員に賣却するを目的とす』と掲げてゐるから、生計の爲に起つてゐる購買組合であるとは無論の事である。

此の購買組合は前述の如く最初に衆議院の官吏傭員等の間に起つた小規模の消費組合であつたが、創立の翌年、即ち三十七年二月、有限責任の法人組織に規模を改め、昨年の六月に今の場所に事務所を開いたので、最初は衆議院の關係者に限られたが、今は大藏省遞信省、農商務省を初めとして、各種の官廳、公署在職者が加入して、宛然として都下小給者の購買機關であるかの如き觀あるまでに發達して來た。然かも大

藏省の如く、農商務省の如く、遞信省の如く、或は會計檢査院の如きは、おの〳〵二十名、三十名、五十名と團體を爲して、加入してゐる。いや、官廳在職者ばかりでなく、丸善書店の如き一私人の商店迄が、一團と爲つて加入してゐるから、加入會員は月一ト月と範圍を擴めてゐる譯だ。

だから加入會員は、年一年に增加してゐる、三十七年末には

△會員數八百名であつたが、翌年末には

△千四百名に增加し、其翌年には

△千九百名と爲り、本年四月末には

△二千六百名といふ數を現はしてゐる。

都下の精神勞役者――官吏、學校敎員、銀行會社員の總數に比ぶれば、九牛の一毛であるが、兎にかく生活難を稱へてゐる官署及會社銀行員の一部分が、購買組合の効果を知り、生計の便宜を謀るやうに爲つたのは、著しい現象ではないか。

爾して一ヶ月の賣上高を聞くに、月に依りて相違はあるが、三萬圓乃至三萬五千圓、多い時は四萬圓に出ることもあり、假に一ヶ月少額に積つて三萬圓とするも一日千圓宛の賣上高と爲る、其處等の小賣店など、近傍へも寄れない。

その取扱商品は、米穀を初めとして、酒、醬油、石油、薪炭、コークス類を初めとして、紙類あり、乾物類あり、小間物品あり、なほ各區の商店と特約を結んで、牛肉、靴、カラー、半襟等の品物まで、會員に便宜を與へてゐる。

購買組合共同會の現狀は、概然と右の如しである。――その會員數は、英國の消費組合等に比ぶれば、規模、組織の如き殆んど兒戲のやうであるが、兎にかく今日のやうに爲るまでには、尋常ならぬ苦心を經てゐるとは、想察するに難く無い。加入者に就て親しく聞く所によれば、加入前と、加入後とは生計費に二割乃至三割の減少があるといふ。値の廉い上に、升目も盗まれず、第一品質が良いんですもの、と稱へてゐるのは、虛飾なき自然の聲であらう。家計整理等の上より、組合の効果を說いてゐるものもあるが、それは次號に詳述しやう。



世界で一番多くの養女を持つて居る婦人の話

樋口蘭林

△二十五人の養女――世界は廣く、人間も多いが、最も多數の養女を持つて、幸福な生活をしてゐる婦人といつたならば、多分、佛國のジレンチリー孃でせう。最早四十に近い年だが、まだ未婚のお孃さんであるのに、十五年前から、貰ひ集めた養女の數は二十五人に達したといふは驚くべきではありませんか。

△氣狂か――此の人は何せ此んなことを始めたのでせう？、自分で話さぬから、精密なことは分らぬが、十五年前といへば、二十一二の頃から貰ひ始めた勘定になるまだうら若いお孃さんが、七つ八つの子供から、自分の直の妹といつてよい年恰好の者までを、養女にして世話をしようといふ氣になつたと聞かば氣狂ひではないかと思ふ人もありませう。所が狂人で無いのみならず、學德兼備の賢婦人であるです。

△絶世の美人――然らば生來の醜婦かなどで、此の世の一方面を見限つて、愛の滿足を他の方面に求むるために、此んなことをでも爲出したのかと考へる人もありませう。併し此も大の見當違ひで、丈のスラリとした、皮膚の飽まで白い、双頬を櫻色で染めた、絶世の美人であります。

△貴族の生れ――其れに陸軍に勤めて、大將を奉職してゐる伯爵を父とし、他の貴族から嫁入つて來た母に育てられたゞけあつて、氣品の高い、しかも愛嬌のある婦人ですから尋常なら立派な華族の所へ緣付いて巴里の交際社會の花ともてはやされるべき運命を備へて居る人であります。

△佛蘭西式の天才――其が田舍の別莊に引き籠つて、此の頃まで世間からも餘り注意せられない生活をしながら、殆ど古今に例のない興味のある事業を始めたのは、不思議といへば不思議であるが、佛國にはよく此様な突飛なことをし出す天才が男にも女にもあるのです。ジャンダークを御覽なさい。ナポレオンを御覽なさい。ルーソーを御覽なさい。サンシモンを御覽なさい。サンシモンの門弟中には孃の生活に類似の共同生活をした者もあつたが、其の精神が潔白でなかつた爲め永續しなかつた此のジレンチリー孃も慥かに佛國式の頭腦と、感情とを以て、思ひ込んだことを遣り通してゐるのだらうと思ひます。

△同情の婦人――孃は巴里に近いアーク、レグレーといふ所の住居に、青春の時機を過したのですが、何時とはなしに、貧民の少女等に同情を寄せ始めて、工場から出て來る女工等を待ち設けては、何くれとなく話しかけて、自分の家に連れて來て、物をやつたり、御馳走をしたりするのを樂みとしてをりました。

△巧妙な敎育――長い間に、一人慣れ二人慣れて、仕舞には八人、十人の極親しい者が出來、其れ等は夜と日曜とを孃の家に過すことを何よりの快樂とする樣になりましたが、孃は四方山の話をしながら、普通の智識を敎へ込んでやる樣にし、殊に婦人に必要な道德上の敎訓を談笑の間に與へてやらうと心がけました。威嚴のある敎師としてゞなく、同情の深い友達として肩のこらない樣な話をするのが、其れが直に敎育となつたのでありますから、實に巧みな方法といつてよからう。

△少女等の救濟主――其の中に父の大將がアルゼリアの駐屯軍の一方の長となることを命せられましたので、孃も之れに從つて行くことになりました。所が、

此まで遊びに來てをつた工女等は、孃との別れを非常に悲しがつて、泣くものがある、恰で小さな子供等が慈母と別れる時の樣な騷ぎなのです。親でも兄弟でも、無くなる時、又は無くなつた後に、眞正の價値や、有難味は分るものでありますが、家庭にあつて樂の少ない貧家の娘等が、愛すべく敬すべき朋友と仰いでゐた孃に、俄かに遠國へ行かれるときいて、今まで朋友と思つて居たのは誤りで、母とも師とも仰ぐべき、此の世の救濟主で有つたことが會得された。

△家庭生活の始め――から慕はれると、只さへ愛情の



權化である孃が、彼等を振り切つて立つに忍びなくなつたは無理も無い話しで、とう／＼戀しい父母に分れ、自分丈け本國に踏み止まつて憐れむべき少女等の犧牲となる決心をして親の許しをも得たのである。其處でチエーといふ巴里につゝいた村に、大きな樹が繁つた廣い庭園を持つてゐる別荘づくりの家を買つて、十人許りの少女と共に家族的の生活を始めたのが、孃の新事業の眞の紀元である。

△養女の資格―― 此等の十人や、其の後に集めた養女

の資格はどういふ家の子であるか。どんな性質の者であるか。といふに其の資格は極めて簡單である。只孃の一家と仲よく暮さう、自分の出來る丈けの仕事をして、一家の生活を支へよう、人の世話になる代りに人の世話をも喜んでしよう、一言にいへば血統の違つた人を母とも、姉とも、妹ともして、眞正の家族生活をしようといふのでさへあればよい。父母がないとか、有つても養つて貰へないとかいふ者は子供でも何でも養育してやるのです。從つて孃の養女は多く、巴里の貧民窟や、近所の職工の家などから貰はれて來るのである。

△孤兒院でない――かういへば、一寸孤兒院などに似てゐるが、決してさういふ性質では無い。此の家に來た上は、全く一家の子女と同樣に扱かはれて、長幼の序のある外は一切平等の取り扱ひを受けるのである。而して孃も亦全く、勞働も休息も、艱難も辛苦も養女等と共にするのである。

△隱遁者の生活――孃は決して、宗教的庵室などにある樣な隱者の生活をするのでは無い。生涯結婚せぬなどいふ窮屈なことを强ひるのでもない。寧ろすゝめて結婚せい。よい機會を見つけて、成るべく幸福な家族をつくらせてやる、既に十人近くの養女を嫁入させた。

△朝の仕事――毎朝五時半に起きて、七時半までに掃除や食事を終る其の掃除や料理番は一個月交替で當番がきめられ、幾人づゝかの組合せを拵へて、長幼相扶助し協力する仕組にしてある。併し自分の役目が早く終つた者は、外の組を手傳ふとか、六かしいことは特定の人に助けて貰ふ。

△晝の仕事――七時半になると、一同仕事部屋に這入つてそれ〳〵の仕事にとりかゝる。午後になると一頭立の馬車を仕立てゝ、前日からの仕事の荷物をのせて、孃自身が、伴をつれて、巴里の問屋へ持つて行つて、新らしい注文を受けて歸るのである。

△夜の仕事――夕食後になると、夏は庭園に、冬と雨の日とは談話室に一同が集つて、話をしながら、讀む本を聞きながら、適當な手仕事をするのである。二馬

力牢の發動機があつて其れで運轉させるミシンで裁縫をするから、晝の仕事の時は話をするひまもない。夜は、同じ事ではあるが、少し肩の休まる仕事をする又此の間に部屋の窓かけなどの手入をしたり、銘々の着物の繕をしたりする。

△日曜の仕事――午前は、談話室の一部が敎場となつて、書取、算術、地理、歴史など學科を敎はる。其のあとで二時間は、少し難かしい文學書、小説などを講釋して貰ふ。午後は散歩もあるし、近所の少女等との談話會がある。が、其會員となつて居る者は四五十人もある。



△學校――談話會員の中から、七歳乃至十一歳のものを集めて十人許りの木曜學校が出來てをる。其の敎師は矢張り養女の中の一人がつとめてをる。課業は、裁方や、唱歌や、料理の初歩などで。あるが、普通は、此家の主義としてゐるとこ

ろの模範と模倣とで教へたり習つたりするので、家全體が一の學校と見られるのである。

△經濟――私の居た頃二十人の職工があつたが、二馬力半の瓦斯發動機が据ゑ附けられてあつて、裁縫機械を運轉する、其の費用が一ヶ月八十法（三十二圓）一個月にこしらへ上げる衣服は四百から五百揃ひの子供着物が普通であるとの事。問屋から來る仕事は皆立ち切つてあるのを縫ひさへすればいゝ、又普通の家から頼まれるのは、一人の熟練した者があつて、寸法に合せて裁ちきる、問屋からの注文は、木綿着物が一着一法半（六十錢）から、二法二十五仙（九十錢）の仕立賃、麻の着物が一着二法二十五仙（九十錢）から五法（二圓）、毛織や絹の物になると、五法以上といふきめで、腕のある者になると、一日九時間の賃錢が三法（一圓二十錢）から五法（二圓）になる。普通の女と十三から十五歳までの少女とは、同じ間に一法半から二法位を稼ぐ。

此樣に稼ぎ方に違ひがあつても一方が威張るとか、僻むとかいふことのないのが、此の家の特徴である。

△建物――二階建の廣い家で、階下にある、大きな部屋が談話室になつてをる。一隅にはピアノがあり、壁には少女等の書いた畫などがゝけてあり、棚には愛らしい置物などもある。仕事と、休息と、遊戯音樂などは此の室でされる

廊下の奥には料理部屋があつて、毎日交替で二人の少女が料理番をつとめる。

階下の、一番立派な部屋は、來客の應接間に備へてある。來客は、此の家の者の養女で、今は外へ嫁入つたものである。

寢室は十一歳以下の子供は一緒になつてゐて、其の他の者は小さく區劃した部屋を與へられてある。其れを各の趣向に從つて整頓し、裝飾してある所、全く各人の個性を重じた證據であらう。

△舊友との關係――立派な部屋と舊友のために開てあるのでも、其の關係はわかるが、尚彼等が旅行先からよこした端書、外國から持つて來た賜物など相互の友

誼を證明するものが多くある。彼等が來訪するときは特別の會合をして、經驗談とか、讀書で感じたことの話とか、外國で聞いて來た珍談とかいふ樣なことを聞くことにしてゐる。

△圖書館――家に附屬した圖書館には五百部許りの圖書があつて中にあるものを讀めば、外の會員にも貸し出すことにしてあり、經費の餘りで次第に買ひ込むことにもなつてゐるとのこと。

△社會的事業――要するに、孃の此の事業は、大きくは無いが貴い意味の深い社會的事業である。すべて此の種の事業は、慈善事業だと思つてゐる中は眞正の發達は六かしい、親が子を愛するに慈善だとは思ひますまい。慈善といふときは一方が、他方を輕侮する心持がある。輕侮すといへば語弊があるかもしれぬが、慈む惠まれるといふ間には、平等の觀念はない。孃の事業の如きも、始めは慈善心から出たのかも知れぬが、今は全く母が其の子に對する考へで他の者を保護して居るに過ぎぬ、此れが此の家のよく繼續する所以で又皆々幸福な生活をしてゐる所以であらう。

△妾よりは書生を養へ――世には外妾などを蓄へて、快樂として居る者もあるが、此れ等は淺墓な考といはねばならぬ。一人の妾を養ふ金があれば四五人の書生に學資を給するとか、其れを家に養ふことが出來る。自分の子供を十七人まで育てるには非常の辛苦と費用とが入るが、既に育て上げられて、身體も強壯であり腦髓の發達も中等以上であるといふ見込のついたものを養子にして其の發達を遂げさせるのは此の上も無い愉快なことであらう。何より高尚な道樂であらう。

可愛らしい小犬

麻布　池田百合子

昨年の冬寒い晩に溝の中で何んだか泣いてる物があるの、なにかと思つてのぞいて見たら小さい可愛らしい小犬がすてゝあつたのよ手も足も泥だらけであまり可愛そうだから家につれかへり御湯をつかわせてやつたのよそれは〳〵美しい小犬ですわ今ではいろ〳〵の藝を覺へてやつて見せますよ本當に可愛わあゝどうしてこんな可愛いものをあの寒い晩にすてたのでしやうか。

文園

秋の美

龍田姫は秋の美を春に劣らしめじとて、まづ牽牛花を咲かせ、萩を咲かせ、桔梗、瞿麥、女郎花、秋海棠など千ぐさの花を咲かせて野を彩れども、人は櫻の如く桃の如く海棠の如くに美はしからずといふ。桂花を香はせども、人はなほ梅に如かずといひ、鈴蟲、松蟲其の他いろ〳〵の蟲に美妙なる音樂を奏しむれども人はなほ鶯の如くに、のどかならずといふ。いでや目に物見せんと、あらゆる木の葉を染めて野にも山にも錦繡を曝らす。さてこそ人は見て二月の花よりも紅なりと賞美すなれ。

嗚呼紅葉はこれ龍田姫が、さは姫に對抗する最後の手段よ畢生の腕を揮ひたる美術よ。見で濟むべきか賞でかなふべきかは。

行く秋や紅葉の中の一軒家　凡光

中の茶屋遙に見えて紅葉哉　鳴雪
千丈の瀧の岩間やむら紅葉　同
牛の子を追ひ〳〵はいる紅葉哉　子規
一つかみづゝ爐にくべる紅葉哉　同
絶壁に夕日うらてる紅葉かな　同
裏表きらり〳〵と散るもみぢ　同
杉暗く紅葉見えけり不動堂　同

しら露のいろは一つをいかにして秋の木の葉をちゞに染むらん　敏行
龍田川もみぢみだれて流るめり渡らば錦なかや絶えなむ
龍田川もみぢは流るかみなびの御室の山にしぐれふるらし
秋はきぬ紅葉はやどにふりしきぬ道ふみわけてとふ人もなし
秋の月やまべさやかに照らせるは落つる紅葉の數を見よとか
吹く風のいろの千ぐさに見えつるは秋の木の葉の散ればなりけり
かみなびの三室の山を秋ゆけば錦たちきるこゝちこそすれ　忠岑
見る人もなくて散りぬるおく山の紅葉は夜のにしきなりけり　貫之
風吹けば落つるもみぢば水清み散らぬ影さへ水に見えつゝ　躬恒

奈良へ遊びて

昨日の祭日に春木樣秋野樣と御一所に奈良へ遊覽に赴き候　南圓堂興福寺の塔猿澤池のながめ今更に目新

しく、一の鳥居より本社までの間、右も左も淡く濃く紅葉したる楓樹と色はかぬ老杉との配合目もさむるばかりにて群鹿のこゝかしこに或は起ち或は臥したる、苔むせる燈籠の上に墜錦の散りかゝれるさまなど畫にも筆にも及ばじと存じ候、本社のあたりまた今を盛りと紅葉して朱の玉垣一しほ色はえ、座ろに神々しきを覚え申候　三笠山



の草黄ばみて寒げなるもまた目さき變つてをかしく手向山のあたりはさながら錦たちきる心地致し候二月堂の廻廊に立ちて大佛殿が脊だかに錦雲の中に立つを見奈良の秋はかくも美しきかと今さらに感じ申候、かくて大佛を拜し帝國博物館を一覧し猿澤池のほとりにて少憩致し六時の汽車にて歸阪致し候ひき次の日曜まではまだ紅葉の色

もうつらふまじと存じ候間あなた樣にもぜひ御遊覽に御越し遊ばされ候やう御勸め申上候（紀行文出來上り候はゞ御添削相願ひ申すべく候かしこ。

菊の花

菊は皇室の御紋章として、いともめでたき花卉なれば、日本國民たる者は戸ごとに此の花を植うるこそよけれ。かくて天長節に、彼の新年の門松の如く、端午の菖蒲の如くに千門萬戸を飾らば、いかに此の大祝日の美觀を增さんか。いかに外人の目を驚かさんか。

菊作らば及ぶべきだけ培養に力を盡すべし。白菊は固より佳し、黄も赤も眞紅も淡紅も大輪も小輪も多々ますく\よし。その花は飽くまで鮮麗なるべくその葉は飽くまで肥えて翠色滴るが如くなるべし。肥料も施さず手入もせざる籬落の菊、せんかたなげに咲き出でて、花瘦せ葉枯れ、いと見すぼらしきを、却て隱逸の姿あり、自然の趣ありなどゝめではやし、美はしき花を富貴の態ありとて卑しむは、世にすねたる詩人の譫語とやいはん。

菊は初春よりの培養によりて晩秋に美花を開き、人は幼時より敎育によりて成人の後に天性の美を發揮す彼の蕭條たる籬落の菊を見ば、亦人生に敎育の缺くべからざることを悟るに足らんか。

白菊の目にたてゝ見る塵もなし　芭蕉
小家つゞき垣根〳〵の黄菊かな　牧童
一いろやつくらぬ菊の花盛り　曉臺
植ゑすてゝ今年も白し菊の花　岱青

冬着を送る

一筆しめしまゐらせ候、此の頃とんと便りこれなく候が、相變らず御機嫌よう勉强成し居られ候や、こゝもと皆々無事に候まゝ御安心成さるべく候、雨につけ風につけ、そなたの噂のみ致し居候中に、祖母上樣わけて御心配致し居られ候間、つぎの便りには祖母上樣へ手紙さし上成さるべく候、綿入一枚羽織一枚、襦袢腰卷足袋、延引ながら送り上候、外に栗少々送り上候間、夜長の樂しみになさるべく候、追々冷氣に向ひ當地などは風邪大流行に候間攝生の注意肝要と存じ候、まづは當用のみあら〳〵



裾野より富士の絶頂へ

輝武夫人　日向欽子

文中輝樣とあるは良人輝武氏の事、柳樣とあるは親戚の一人、これ欽子女史一家の筆法なり、たゞに敍景の文に精彩あるのみならず、旅情の委曲をつくすこまかき筆づかひにめでたきふしあり。

△鈴川より淺間まで

心あてに見し白雲はふもとにて
　　おもはぬそらにはるゝふしの根

來てみればさほどでもなし富士の山

何方が眞の景色であらう、自分は後者でないことをのぞむ、ながく夢みた富士登山を、今や現實にする時は來た、折しも八月廿八日十二時半に新ばしをいでゝ鈴川にむかふ、一行は輝樣と柳樣と自分の三人。

山青く水清き箱根路をすぎ、御殿場、佐野、三島、沼津、原を後に鈴川に着いたのは午後六時ごろであつた。

此處にて夕げをしたゝむる筈のところ、大宮行の馬車が今出る處、是にのらずば夜に入るとのことに、取あへずのる、大宮まで行にはどの位時間がかゝるとゝへば一時間半ほどゝ車掌は答ふ。

むかしのまゝの松並木水田にそふた街道を行く、左富士といふ處を過ぎながら仰ぎ見れば、富士はすこし小さくなつた。「あゝ思はぬ事ぢや無い、機關車を二つもつけて上つた處を、又いく里か下つて來て、目的の富士にはいよ〳〵遠ざかつて終つた、夫を又こんなあはれな馬車にゆられながら、夜に入つてなほ食事もせずに上つて行く、全く後戻りするわけなのだからね。御殿場で下りて終ひさへすれば、何事もなく今ごろは夕飯もしまひ、浴もすんで明日の仕度でもしてゐるであらうに、本當に間ちがつた事して終つた」と輝樣はわざとらしく歎息する。成程御殿場でちかく見えた富

士が遠くなつた樣である、馭者は哀れな馬にむちうつて夜道を遠くはしりつゝある。
同乘の客は職人らしい男二人と古びた絽の黑羽織きた物しりがほの老人とである、この老人富士などは何でも無い、ことに此ごろは五合まで馬もきく、子供にでもあがれますとしきりに通がる、茅葺の低い軒がならんでゐる處を過ぎて、吉原に着く、此處までの割合から考へればさきに車掌のいつた樣に、一時間半位で、大宮に着く譯が無い、先鈴川からは三時間ちかくかゝるであらう「御殿塲で降ればよかつた」と又しても繰かへされる。邊りはやう〳〵暮まさつて、水あしはやいながれ川の音は、雨に似て、涼風は窓に入る、外を見れば九日ばかりの月は、水の面に影さして、草がくれに蛙うたふ、稻葉にすがる螢は、光さしそふ露かとも見えて、おもしろい夜の景色、今のりこんだ五十餘りの男、眼さだまらず、向側に腰を下すや。白い齒を現はして輝樣に
「あなた樣方は富士へ御登山あそばすのですか」と問

「左樣です」
「御宿は最早御きまりですか」と重ねてとふ
「いや未だ」といひもきらぬうちに、車掌は此方へ首をのばして
「夫なら丁度よう御座んす、此方は中村樓といふ旅館の主人、重に登山なさる方をあつかつて御いでゝすから御とまりなさつては如何です」など相づちを打つ。
「まあよく考へて見てから」と輝樣の答へに後は續かなかつた。
輝樣は旅館の主人に「此水は何處から來るの」と聞けば「淺間から參るのです」と答ふ「君の家は淺間に近いのか」と問へば「さやうさ程遠くもありません」と答ふ
「庭に水は流れてゐるかへ」と更に問へば
「流れてはゐませんが井戸にはあります」と答ふ
柳樣と自分は思はず笑つた
「淺間のごくちかくにいゝ家があるだらう」
中村樓の主人が無言なので其隣の若い男が
「あります」といつたが「ある事は」と後につけ加へ

た。隣へ心置たのであらう
「旅館か」
「イヤ料理屋です」
と此度は勢ひのある聲でいつた
「でも泊るだらう」
「どうですか」
無論泊るにちがひ無いと思て心では其處に決した。富士製紙會社は、けふ休日で常はにぎやかだといふ電燈も消えて居た。
八時過漸く大宮へ着た、中村樓の主人下り際に
「如何でせう私し方に御泊り下さりますまいか」と輝樓に哀願する



「淺間に行たいのだから先其方へいつて見てよい家がなかつたら、」
「さうしたらあなたの處へ行きますよ」と自分は氣の毒の樣な氣がしていひそへた
「どうぞ何ぶんよろしく、では私が車を申つけてあげませう」と急ぎ降りた
心が廣いのか又はいまく〳〵しさをさあらぬ體に裝ふたのか、兎にかくにやり方が一種ちがふとおもひながら、其人のすることをよく

見てゐた、其人は今下した自分等の荷物のそばに立てゐる車掌のそばへ行き小聲で何か話してゐたがやがて暗い方に行つて終つた、すこし待つたが車は來ぬ立つてゐる車掌に

「車はこゝらにゐないの」と問ふと

「ありますがその御泊りの宿やがきまらなくつては…………」、さても先刻のたち話しはと輝樣にさゝやくと微笑て

「宿がきまらなくては車が行かないといふのか」

「ハ、……ハイ」

「ではよし、自分等がいゝつける」

殆んど二十分も費して辛うじて三臺の車が出來た最早一臺も出來ぬとの事に已なく荷物は人に背負した。

先の程から一人寄り二人寄り百萬遍の樣に自分等をとり卷た里の子らをわけて車は淺間の偕樂園に向ふ。

先の話しの中村樓の前を過ぎて、猶幾町か往つた頃、右手の細い裏道の樣な處に入つて、其奥の偕樂園に着いた。

先小さい離れ家に通つた、家はきれいで無いけれど、庭を流れる水の音高く、氷の樣な泉は手にも掬へる。

今宵はこゝに宿るときめて、食事するうちに、登山案内者來る、明日の事打合せなどして浴し急いで寢につく、「蚊帳はいりませぬ」と女中がいふ

夢に入るころからたゞならぬ蚊のなのり、女中をよび蚊帳を頼めば、急の事とて慌てまどひ、家の男女寢卷のまゝ金槌と釘とを持つてはしりまわる。

△淺間より茗荷岳まで

家鷄の東天光の告げるにさめて起出ればなほ邊りは小暗く、淺間の水の音澄まさつて哀れなる調べの流れ去り、流れ來る行く水に遠く心をそへやる暇もなくて、けふ山ふみの用意に靜こゝろなしともいふべき有樣である、門にいなゝきの聲高く聞ゆるは昨夜いひつけ置いた三頭の馬の早や用意して自分等を待つてゐるのであらう板戸のひまやう〳〵明り行ころ輝樣も柳樣も起きて朝げ急ぎすまして庭に下りたてばゝや三人の强力はかひ〴〵しくいでたつて自分等の荷物をからげ

つゝあつた。午前六前二十分出發。
心づかぬ程のつまさきあがり煙草乾す藁屋に添ふた細道を進めば、打向ふ天に懸つた紫の富士、仰みれば聲のない歌のおごそかな調べは、心の琴の緒にふれてやさしくひゝく八重の野菊がみちのべに亂れて咲いたゆかりの花を里の子は何と呼であらう、馬子に折らして胸にさした白く小さい、かつらの花のやさしさに、香りもさぞと取つてかざせば、つゆほども匂ひを持たぬ、何となく心劣せられた、木々の小枝のたわむまでまつはつた名もしらぬかつらの實は赤くまた青くその風はあまたなつかしい香を運ぶ、行ほどに道は廣く、女郎花、男郎花、桔梗、ひあふぎのきそひ立つ露のゝ原にさしかゝつた。

晴やかな日の光は、やうやう馬の背を照して、馬上の人はふたゝび夏を思ふのである、先に立つて行く牛車には材木をのせ、草を積んで歸るとの事である、耳なれぬ詞なまりを、其まゝに男も女もわらひ興じつゝゆく、心やすい生活のありさまも見る樣に心にうかぶ。



自分等の後から來る二人連の旅人、かたに小箱かけたは植物採集の人であらう、かけすばたに着く、かきつばたの間違ではあるまいか、妙な名もあるものと柳樣わらふ。(八時半)よしづ張のかけ茶や一軒、山の麓に寂しげに立つ、心は急げど强力と馬子の爲馬より下りて休む、この店の玉子の番する十歲ばかりの女の子腹部甚しく膨脹して血色なく、氣味惡いまで白い齒を無意味に出してウツトリと坐つてゐる、容易ならぬ病氣であらうに、可愛想なと輝樣とかたる、目のまへに高い山をのぼると同時に、富士山中に入ると思へば、何んとなく心も勇んで自分をのせて行く愛らしい馬の鬣のあたりを叩いて「たのむ」よといひきかせた、草の香かほる野を後に、しばしのぼれば高い處に一面の平地がある、處々に年經た大樹の、梢たかく枝ひろがつたのが、風なきに空のみどりに冴えて、虛空に樂の音でも聞えはせぬかと思ふまでのどかな景色を現はしてゐる。妙なるかほり、花ふりてと、松の羽衣の一ふしを、思はずも心に歌つた。

此處をも過ぎてなほ上れば、かへり見るふもとの里もやう〳〵遠く、遠近の山々も繪の樣に浮んで來る、すゝむほどに九時半一合目に着く、こゝの番人は過る日の嵐に家を失ふたとかいつて、假小屋に住んでゐた、强力馬子など食事す。金剛杖を求め十時出づ。

常夏の色美しい花野はつきて、此處からは谷間の百合の香もしるく、かたへ涼しい秋風のたびの衣のそでを吹く、幽にまた靜かな森林の中に入る、老婆が水賣る小屋の前を過ぎ樣とする時

「その坂の上は通れねへだよ」と聲をかける

「何故だね」と馬子は立止る。

「此間木をきつたのが道に覆つたゞよ

「まア行つて見やう」と輝樣は馬を進めた坂の中途に兩方からきり倒した大木が交叉に橫はつてゐる、馬は立とゞまつてどうしてもすゝまぬ。

「賴むよう居ねへだかあ」と幾度か木精にひゞくのは先の荷馬がなをこえ兼てゐるのに困つて、馬子は木こりを呼んでゐるのだと强力は云つた、烟と見える狹霧

は、木の間を縫つて丁度輕い白布がそよ風になびく様に漂つて居る、その銀の様な小さい玉が深紅の肩かげに美くしくまつはつてはさつと吹く風にまろぶ。晴れては曇る林の奥に、子規の一聲、後はもとの寂寥に復つて、なべて行く駒の爪音ばかり高いのである、先に行く輝様の後かげをすこしはなれて樹間を見れば、恰も文晁か探幽の筆になつた山水の圖としか見えぬ、名人の筆にして始めてこの様な幽邃な境を充分にあらはす事が出來るのであると、自分は今更にわれを忘れて



後から來る柳さんの馬の爪音に追はれた、このあたりを過れば程もなく清水涌く茗荷岳である十、一時十分着。「あつたかい御飯も御汁も御座います」とその男は云ふはる〳〵の山路を越えて歸り着た故郷の慈母に迎へられる様なおもひ、この家は極新らしくつくられて湯殿までついて居た、自分らをはじめ强力馬子なども中食す。

△茗荷岳より八合の石室まで

十二時二十分著荷岳を出づ。

水のない谷に添ふてなほ上れば、行ほどもなく二合五勺の馬返である、此あたりには風鈴草とよぶうす紫のしほらしい花が一面に咲き亂れてまた茶室には嫌ふといふ濃紫の兜菊もそこゝに立つてゐる、今上らうとする。坂の麓の小屋に着いたは丁度一時。

今まで自分を大切に負ふて來た愛らしい馬に今は別れを告げなければならぬ、途すがら強力が「けふは先五合目まで〻せう八合目まで行かなければ御來光（旭日）は見られませんが」と云つた事を思出し、どうかして八合目まで行きたいと思つた、一時二十分馬と馬子に別れ強力三人をしたがへていよ〳〵徒士の登山にかゝつた、是からの坂はやう〳〵急である、林の大木縱横に倒れふして、道のない山にわけ入る樣な心地もする、のぼりすゝむほどに、道すがら木苺の實を採り食す、自からの甘味なつかしく、渴いたのどを潤はすに足る、げに紅の露の樣である、自分らに後れ、はた先だつてゆく三人の青年、顏あはす毎に「やあ御早う」「一足御先へ參ります」など聲をかける、顏もしらず、名もしらぬ人、しかし街などで逢ふ樣に、よそ〳〵しくおもはぬは、人もわれも同じなのであらうか。

此趣味多い樹林を過れば、天地はこゝにひらけて中空から斜にながくひき下された崇高なる一線、此山の奇しき姿を今更におもふのである、麓は一面の雲の海ひら〳〵と立つ白浪は、よせもせずかへしもせぬ。

そこゝに立つ、から松の枝は、横ざまに長くさながらつちに這かとばかり、降り積む雪、吹きまく風の名殘をとゞめて、いく世の冬をしのばせるのである、はるかに遠ひ山の上に、白く三角形のしるしが見える。「あれが五合目です」と強力はいふ、時は未だ三時前後、無論八合目までは行かれやうと、自分らは勇み立つた、夫を目標に猶進めば、岩がけに隱れてゐた四合目の石室に着いた、今は山も終りに近いので、番人も下つたとか、こゝには人かげも無い、のぞき見た計りで休ます、やがて五合目に着いたのは三時三十分。先に白く美くしく塗つてあると計り思つた三角形の

しるしは、太陽の光線がさう見せたので實はたゞ無ざうさに立てたもの木は雨風に晒らされた最きたないものなのに驚いたこゝにしばらくやすらへて強力に持たせた鑑をひらいて果實など食す先に別れた三人の靑年も後れてこゝに着く四時出發。さも燒けかたまつた樣に赤黑い砂礫の道には岩を交へて路といふみちは追追に絶えて行くたゞ先に過ぎた人々の履きゝつたわらじの跡、そのきれた緖の片々を栞りに杖にすがつてのぼる。

しばし立とゞまつて麓の方を見れば雲の浪やま風にみだれてたゞよふひまにあらはれた山々の頂はさながら絶え〴〵の小島の樣

　久かたの天の羽衣われもたは
　　むら立雲に入りて見ましを

何だか命の惜しい樣な俗ばなれのせぬ歌と輝樣は笑つたけれど、歌はたゞ幼くよめと古人のをしへ、ことさらの仙人やわざとの英雄豪傑ぶりは、それ御ぞむじの誰やらの樣でといへば、それもさうだと輝樣又わらふ、三十分經て六合目の石室を見た、五合目を過ぎてからは草木は殆んどあとをたつたが、虎杖といふものばかりなほ處々に生へてゐる。うらゝかな日かげは西にかたむき初めて、夕映おもしろい空の横雲に連なつた、一帶の綠は、はてしらぬ海原である、うす紅の雲はやう〴〵黃金の光をそへて、もゆる樣に輝く、五時半七合目につく、此處から暫く道はいよ〴〵險しいのである、強力の壹人は自分の先に立つて、手拭を綱の樣にし後をかへりみて

「これをお曳きなさい」といふ

「ひかなくても大丈夫」とことはると

「でもおつかれで御座いませう、おしてさしあげませうか」と又一人の強力が後から聲をかけ豫て話しに聞てゐた綱びき後おしは此邊からはじまると見える。

「いゝへ未だ大丈夫だから、いよ〴〵あぶなくなつたらどうぞ」

「その位曳いてもらつても矢張一人で登つたといふだから名譽にはかゝはりはしない、曳てもらひなさいよ」

と輝さんが後から笑ひながらいふ。

「本當に大丈夫」

「誓つて他言はしないから」と又しても輝様は惡まれ口「でも自分が知つてゐるからいや一度でも曳いてもらへば氣もよわくなるから倒れるまで一人で登りますよ」とう〳〵夫は辭はつた、柳さんはいつも少しつゝ先へ登つて行く直上に見えてゐる八合目も行くほどに遠くなる様にさへ思はれて、仰みながら登ることおよそ四十五分。

胸突八丁に次での難場と強力のいつた岩角を、よぢ上ればこゝに八合目の石室は、此上もない慰安者の様につかれてゐる自分らを迎へて立つた。自分はたゞ嬉しくて其内に馳け入つた、いや殆んどころがり込んだ、時は六時十五分、氣候は著しく寒くなつた、呼吸もいく分か迫つて來た様に思はれる。例の顏の神經痛がすこしばかり襲つて來た「夫れは山醉の輕いのです」と強力は云ふ。

白髮の老爺爐邊に坐して火を焚く、其光りが「はかない宿」といふ聲のない言の様に石室の中に滿ちた。土についた床に濕つぽいうすべり一枚、ほした事もない様な汚穢い夜具が小暗い隅に積んである。

「こんな處でも寢られるのですかね」と自分は小聲で輝様に云つたのを聞いたのか一人の強力がニヤリと笑つた顏が、パッともえ立つ火に映つて、恐ろしい様にあらはれた、自分がゝつてユージンアラムをひもといた時、心に映つたトノバンのかほに何處やら似て見えた、彼の三人の靑年も又こゝに着いた夕食（しんある粥とかたい魚）を終ひ今までの單衣を袷に替へて戸外に出れば、澄渡る空に懸つた片われ月は、靑白い光をなげて遠い麓の山々が夢の様に浮んで見える、星は燦然として獨月光を浴びて立つ、下界の人をとがめがほに靜かにさびしく瞬いてゐる、かくばかり惜しとおもふ夜をなど歎いても、明日はまた暗いに起きて、此山で御來光とよび、世に又ない壯觀といひはやす旭日を見なければならぬ。外の景色に心殘して石室の内に臥す九時半。

旅寝の夢のやぶれやすくて四時半に起きた。

昨夜この石室に相宿つた人數は强力も合せて十八人、皆來光岩のもとに佇み、又は岩上に坐して肌さむい襟をかきあはせながら、旭日の上るのを待つ、紫の雲の奥にほの見えた薄紅は、やう〳〵ひろく四邊をそめて今は言にも筆にもつくせぬ、曙の色を空一面に流すのである。

「駄目〳〵最早あんなに上つてゐる」と一人の青年はつぶやいた

「丁度あの横になつてゐる鼠色の雲が邪魔だつた」と强力も又いふ

「見えないの今日は」と自分が聞くと



「駄目ですね」と答ふ

仕方なしにふたゝび石室の内に入ると間もなく

「上ッた〳〵」と口々にいふ聲が外に聞えたので内のものは殘らず駈出して見ると、紫とうす紅の雲のそらはうすい瑠璃と黄金に移りながら光り輝く金鴉のつばさ厳かに昇りつゝあるのであつた

「光が出ちやモウいけないたゞ赤い玉の樣に出る時が美しいのだから」と上の岩角に立つた一人の青年のひとりごちたのが何となく常の人の聲とは異なる樣に聞えた

朝食を終つて六時出立。

△絶頂の壯觀

空氣が稀薄な故であらうか九合目の萬年雪（夏も消えぬものと云ふ）はたゞ頭の上と見えて頂上も呼べば答へる程とさへ思はれる、急くのが禁物との强力の言を容れて一足づゝの樣に歩み、しばらくして九合目に達した、先に往つた柳樣が笠にとつて來た雪をすこし平な岩角に腰打かけて食す、昨日は後れがちであつた三人の青年、けふは自分等よりもすこしづゝ先だつてのぼる、昔時冒險の一力士人々の止むるをも聞かず、大風の日に登山して、たゞ一吹に吹つけられ、無慘の最後を遂げた跡といふ、物凄い岩の力士の名を其まゝに京が嶽と云ふのを、左方に見おろし、右方には獅子岩の奇巖を望む、其形狀恰も猛り猛つた狂獅子の吹下ろす怒風に吠えつゝ頂かけて奔り上る樣である、はるかに過ぎた麓の方を顧ながら、屛風の鼻を越え、名に高い胸突八丁の險にさしかゝつた今はやおぼろげながらのみちも絶えて、削りおろした樣な岩角を辛うじてよぢのぼる、仰げば天の戸のひらけた樣に、左右に高い巖の門は、はや頂上の入口である、そことおもへば過來たみちのしるけさも忘られて、心とゝもに足もすゝんでつひに頂に達したのは八時五分過ぎである。

白衣の人のいく組か淺間の社に出入する樣は何となく勇ましく見える、自分等は此處に紀念の……又繪葉書を求めて親せき友どちの許におくる。

社をあとに雄大な噴火口にそふて佇めば、何處から來たか羽美くしい一ッの蝶が風の流れにさからひかねて、地におち樣としては又辛うじて飛ぶ。

名におふ朝日嶽、夕日嶽の競ひたつ中に聳えた劍ケ峯は、富士山上の絶頂である、自分はその頂の一番高い岩上に坐した、眼界は開けて遠く且つ廣く、晴やかな日の光は打渡す雲の海原を照して、ほのかに三保の松原が薄墨に筆そめた跡とばかり、たゞ白い帶の樣な富士川の流れは茫々として大海にそゝぐ、一筋のしら糸の長く風になびくと見えるのは、渚によする浪である、遠近の山は綠の霞に沈んで、本栖、精進の湖は瑠璃の鏡とばかり澄わたる深空を仰ぐ、連り浮ぶうす

紫の雲、黄金の緣うつくしく彩られたのが、七重八重に群り立つ、其形は山に似て又人とも見えるのである此樣な處に住んでこそ宇宙に滿つる靈にもふれる思ひがするであらうと思へば、遙な〳〵雲の下に悶えて送る人の世のはかなさをあはれむ神の御心の萬分の一は推しはかられる。

　空に見し雲はふもとゝなりにけり
　　こゝもつちとかふしのしは山
ことゝはむ富士のみや守みやまより
　　いまいくりにて天の河原そ

　天上の景しき美くしくとも己れなを住むほとは地に思ふことなきにしもあらず。おはちめぐりするには尠なからぬ時を要すとの事に今度はいそぐまゝ銀明水にばかり立よつて直ぐ御殿場への降り口についた。十時三十分。

　此邊りはたゞ奇石怪巖を以て成り崩れ樣としては自ら支ふるかとあやしまれる杖を力に降る事二三丁七八一組の登山者に行きちがふ屈强の男ばかり自分らを仰ぎ見て

「御降りですか御目出度御座います、御盛んですなあ」とさも心からの樣にいつて過ぎたのが、何となく嬉しかつた、十一時四十分八合着、輝樣頭痛の爲めすこし休む、十二時半出發。

　道はやう〳〵石尠く此處にもすこしの雪を見る、七合にもちかくなつた時、俄にのぼる雲のあし疾く、眼下に見えた寳永山もみる〳〵うちにかくれて、下界はたゞ白い霧の海、午後一時七合に着く。

　中食終つて一時半出發。

　先のほとの霧漸く晴れて、右手に高く寳永山の此方、一條の道の帶の樣に見えるのが名に聞いた砂走、一人三足あての草鞋を用意して降る、はるかにのぞめば細い砂地は糸筋の樣になつて、遠く〳〵太郎坊の鬱蒼たる森までつゞいてゐる、ゆくほどに霧は名殘りなく晴れ、麗かな日影に箱根足柄の山々の影が幻の樣に浮んで、麓の野邊も廣やかに、自然の大地圖は、今目のまへに開かれた、三日月の湖。

名にもたがはぬ形さへたゞならぬのを雲の絶間に眺るのは、かへす〴〵もおもしろい、三時二十分三合につく、始めてすこし足の疲れをおぼえたが、二合五勺までゆけば馬があるとの事に疾くそこまでといそがれて三時四十分出發。

△下山

四時二合七勺に着くかけ茶屋の女房は廿二三の半元服さも鄙びた丸髷に結つて襷片々外しながら自分らに茶をすゝめる處々の休み場に愛嬌のつゆだもない男ばかり見た目には、これも却々捨がたく見えた。

「どうだね二合五勺に馬はゐるかね」と强力は問ふ

「最早居ないだよ今がたまで待つてゐたがね、下りがないので空で歸つたよ」

「困つたな一頭もゐないかね」

「乘なさるのかへ、惜しい事したよ、今しがたまで三頭待つてたがそれも今朝からよ」

「追かけても駄目かなあ」といへば「さうさねもう太郎坊へ着いたらうよ」

「誰か一人先へ走つて來るだつたね」と二人の强力は顏見合す

「己れ二合五勺まで走つて行つて太郎坊にまだゐるか聞いて來やう」といふよりはやく荷も輕げに駈けて行つた。

遠く〵太郎坊の方に動めく物は馬であらうと輝様がいへばたしかにさうと茶屋の女房も言をそへる、めがねで見ても猶夫れとたしかにみとめられぬ、程のものが自分の惡る目に見えるわけはない、何れと見定める事は思ひ止つたが、やう〵此方に近くにつれて一人のひとが黑馬にむちうつて一散にかけて來るのだと輝様が見定めた、兎に角に二合五勺にいつた上でとこゝを出たのが、四時三十分、いよ〵馬が無かつたら太郎坊まで歩かなければならぬいや太郎坊にも無かつたら御殿場までか。

あゝ御殿場まで、二合五勺に着く五時。

先に二合七勺から夫と見たのは果して黑い馬であつた、のつて來た人はこゝで下りた、先に來てゐた强力

も上つて來る人が無いので詮術もなく徒らに立てゐた「馬は太郎坊に未だゐるかね」と強力は今來た馬子にいふ重の井の子の樣な馬子は何かと馬の世話しながら「居たが己が來る時歸る仕度してゐた」「いくつゐた」と問へば「四つか五つだ」と答ふ。「もう歸つたゝらうか」と問ば「キット歸つちまつたよ」といふ「その馬えらへ立派な馬だ歸りに二人乘て往けよ」と強力がいへば「駄目だ〳〵」とうけつけぬ。「ほれ其馬に二人のせられねへで、乘られるかあるかよのせてゆきなよ」とこゝにもゐた若女房が同じ樣に言をそへる自分はつかれては居るけれど二人のつて行ふとは思はなかつた夫で柳樣に兎に角その馬にのつて



太郎坊まで行つた上幸に其處に居たならば早速二頭よこして貰へば歩いて行く途中で逢ふ、もし不幸にして殘りなく御殿場へ下つたなら、歩けるかぎり歩くまでといつたのに輝樣も同意して柳樣は直にその馬にのり太郎坊まで一散に走つた、迎ひの馬に途で逢ふかとはかない事を心にたのんだ此處をも又後にした、道は殆んど平である、いたどりの葉の黄に色づいたのが處々丸い大きな株の樣になつて、廣い砂原一面に美くしく彩つてゐる、二合目の茶屋の邊りから遠く彼方を見れば、ポッチリと白い一つの物が此方に向つて走つて來る。「白馬が、迎ひに來た」と思はずもさけんだが夫は黒い上着をぬいだ柳樣が太郎坊に馬のないのを自分らに

しらせる爲に此方に近くのだとわかつたので無くてもよい目を持つてゐると輝さんに笑はる、しかし自分は全く失望した、今は馬も思ひ絕りて太郎坊さしてあゆみを運んだ、道すがら薊に似たおもしろい草の處々生へてゐるのを見る、葉は鬼あざみのそれよりも廣く、且つ恐ろしく、尖つて紫の勝つた紅色の花の思ひ切つて大きいのが、細く短い莖の先に重げに支へられてゐる、強力にとへば富士薊と答ふ、ふさはしい名は、よそに負はして、聞くもやさしい富士の名を得た此草のこころ賢さを思ふに自からほゝゑまる、名もしらぬ草の花のむら／＼咲く中の細道を過ぎて、太郎坊に着いたのは五時四十分。

今上つて來る馬がなければ三里にあまる裾野の原を夜に入つて御殿塲へつく事は出來ぬ、旅はたゞ山の姿水の色のおもしろいのみでなく、此樣なよろづのさわりに飾られてゐればこそ後にをかしい思ひ出にもなるのであると、常におもひもし、又いひもする自分も、足のつかれを忘れてまでその趣を味ふほど心ある人でない事を、今はじめて思ひしつた。

折もよし二頭の馬は客をのせて上つて來た、其人々は二合五勺までそのまゝで行くはづを自分らの話しを聞いて親切にも下りてくれた、あまり嬉さの度がつよいので今までの案じ過しはこの樣な結果を得させる爲の神の戯ではあるまいかとさへ思はれた。

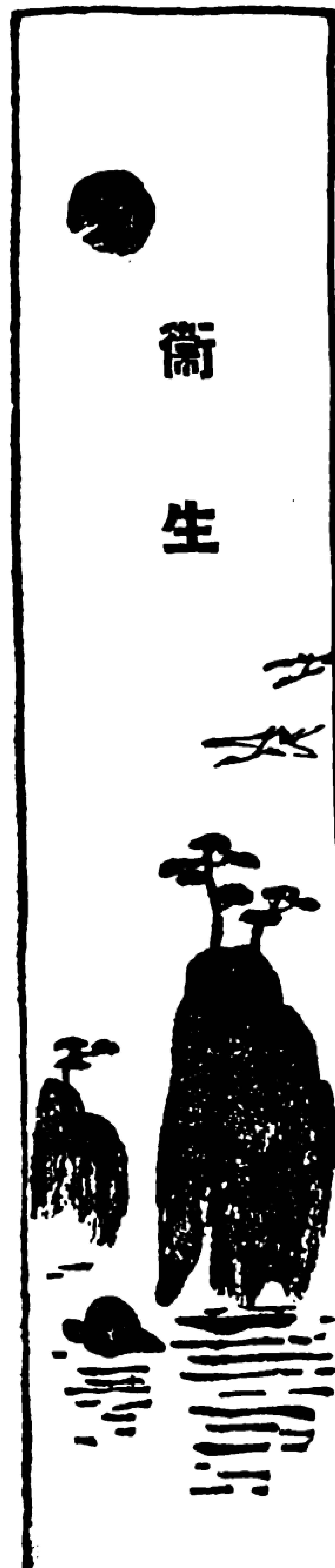
ゆふ餉を終へて後紀念の繪はがきなど求む、日も今は西に入つて草の花ほの白い黃昏時、三頭の駒ないていでたつ、かへり見る宿の軒端の墨繪の富士、わづかに殘る空の薄紅は、忘れた戀の名殘の樣、こゝをも後に細く暗い木下路に入る。輝樣を先に次で柳樣、後れて自分の白馬は石高の下り坂をさも注意する樣な足どり、松の勝つた雜木林は木かげまばらに、ヂーヂーといふあはれなしらべは松の枝に住む虫の聲、是が眞正の松むしと、馬子の說明さすがにめづらしい思ひがした、風の香かほる松の下みちを過るころ、あたりの少し明るくなつたに心付く、ふと見ればいつの間にか新らしい樣なよひ月が林の樹間に低く懸つて、露をやどした木

樹の葉に、その光をすべらしてゐた、夕べの靄はうす青い月影に浮んで行く先をうつくしい夢につゝむ、杣がともしの影もなく、篝火の光も見えぬこの道を、さしもさやかなよひ月の、馬上の人をなゝめに照して幻のかげを追はす。

此おもしろい景色をかりて、何處ともしらぬ國、名もしらぬあたりを、まだしらぬ父を尋ぬる旅と思へば、あはれは一しほふかいであらう、林を出れは名にしおふ大野原、梢はなれて月かげは、浮雲に晴れくもつてかすみこめた野の末の、遠い彼方にわすられた様な、松一本ほのかに立つたうす墨のかげは、こゝろに消えぬあとをとめ、のもせに滿ちた虫の音の中を過ぎて行くまゝに、里の賤やの火影ひとつ、またふたつ、彼方此方にちらめいて、水車の音高い小川の土ばし渡るほどなく畦道は、やがて御殿塲の町に續いて不老館、不二屋の門に着いたのは、夜の八時ころである後れて着いた强力のたづさへた草の花は色もあせ、葉もなえて、明日の家づとにはをもひもよらぬ、こよひは早くと閨に入れば、さてもこのまくらのかたさ、昨夜の宿も最早忘れて。（完）

流行の變遷

廂髮の束髮にレース編の髮掛といふ時代は氣候の變化と共に過去に屬してしまつた、今女學生間に流行する頭髮の結ひ樣を見れば何れも束髮に飽きが來たといふ鹽梅で廂髮形に前髮を取らずに梳われ又は銀杏姿に結ふものが多くなつた、而して其廂髮は成るべく押つぶした樣に前方へさし出してあるから少女には好く調和して愛くるしく見える、夫から衣服には一般に襟止を用ふる事流行で其襟止は普鉄用のを取外して用ふるものが多く從つて割合に瓦い品を用ふるといふ傾きがある、近頃多く襟止兼用の簪を製作し夫が爲には種々意匠を凝らしたものを賣出して居る、尤も男子の襟飾に用ふるピンを此襟止に用ふる婦人も多くピンは男女兩者の側に向つて盛んに供給されつゝある、又襟止に限らず指環に限らず又帶留に限らず虞美人草を模樣に取つたものは追々流行の兆を來し玉寶堂では指環の外に帶止を製し三越では浴衣の外に今度虞美人草の中襟をも製らへて賣出し何れも女學生其他の少女界に歡迎されつゝあるさうだ、又束髮用の櫛としては金子男爵夫人が考案したとかいふ金鍍金の根掛形三本足のものは上流一部の社會に歡迎されて居るとか。



醫學上より見たる 紫式部

糸左近

はしがき

我れ筆を執つて以來、此の一文程骨を折つた作は無い。然らば定めし得意の文ならんと言はるゝ方もあらうが、否々得意の文なるが故に骨折つたので無くて、或る二つの理由がさらでだに痩せこけた我骨を折らせたのだ。二つの理由とは如何曰く其一は紫式部は有名なる女の文豪なるにも似ず、其の傳記が少くて彼女の歴史を詳に知り難き事、其二は余は國文學に暗くて、爲に彼女の面影を見るに足るべき「紫式部日記」等を讀む際解せられぬ語句多く、巳むを得ず數多の註釋本を讀み、多くの日數を費したる事此の二つである。兎に角參考としたる本は左の通りだ。故に余の診斷を疑はるゝ方は、左の本を熟讀せられたら、成程さうかと思はるゝであらう。

紫女七論。大日本史。梨壺の五歌仙。紫式部。日本紀御局考、紫式部日記。理齋隨筆の第六卷北邊隨筆の第三卷。中古歌仙傳、清少納言と紫式部。日本烈女傳等。

是等の書を引證するに當り、原文通りに書かぬのは難解の語が多いからである、併し歌を今の言葉に譯

するど眞意を傷ふから、其儘にしておいたが、其代り知つたか風にも、解釋を加へてある、定めし謬解してる點も有らうけれど、其處は醫者だから無理も無いと、大目に見て頂きたい。

不學な身をも省みず、難關を排して此文を書いたのは、紫式部を學者として又淑女として余が理想通りの圓滿なる婦人なれば、其の衞生を如何に實行せしかを我妻に讀ませたい爲である、我が妻に讀ませたいと思ふて書いたのは、縱ひ文が拙くても、誠が籠つてるでは無からうか。

▲紫式部の遺傳

雄大にして婉曲自由なる源語五十四帖を物したる婦人の文豪紫式部は、抑々如何なる遺傳を受けたる人なるか、請ふ右十一部の書物を證據に取つて千歳の下聊か禿筆を揮つて見よう。

無風流な事申すやうなれど、醫學上より論ずれば、如何に善良な教育を受けても、遺傳が惡いと、思ふ通りな人物に成れぬものである。所が式部は幸なる哉遺傳も宜ければ教育も宜い、即ち父は閑院左大臣冬嗣公の末裔、越後守藤原爲時である。爲時は少い時に文章博士藤原文時の門に入り、門弟中嶄然頭角を顯し、文章生より式部丞藏人辨を歷て、正四位下越後守と爲り、有名なる儒者兼歌人なる事は、誰も善く知る所。

母は常陸介爲信の女、一條天皇の乳母、如何なる性行の夫人であつたかは、余の歷史に暗い爲と、及び由來我國は男統を重んずる所から、女統は母の名を記すのみで多く顧みぬ傾あるとで、詳しく知るに由なけれども、母の祖父文範は、之も名高き歌人式部の、曾祖父兼輔祖父雅正皆何れも勅撰集中に採錄せられたる歌人。爲時の兄即ち式部の伯父爲賴爲長、亦勅撰集中の人。式部の長兄惟規も其一に漏れず。次兄惟通は如何なる人であつたか了らねど、兎に角安藝守。三番目の兄は僧の定暹之も歌人を以て著はる、斯の如く一族悉く文才の優れたることなれば式部獨り何條其血を受けざらんや、迸つて源氏五十四帖となり、婉麗優雅

な思想を灑すも一は其の遺傳に依るのである。故に又其血を傳へたる長女賢子は後に大貳三位と稱へ、才學有つて和歌文章を善くし、狹衣物語を著はし、次女辨局は後冷泉天皇の乳母となつて才名高し。嗚呼瓜の蔓に茄子は生らず。鷹は鵈を產まぬものである。

▲紫式部の履歴

如何に善良なる遺傳を受けても、學ばずんば到底天才を發揮せられぬものである。然らば紫式部は如何なる敎育を受けたか、これ讀者の定めし聞かまほしく望まるゝ所であらう。式部は幼より學問を好み、父爲時に就て和漢學を受け、又傍ら獨學を以て群書を涉獵し、漢學では四書五經樂府史記左傳老莊は言ふも更なり、多くの詩文集までも研究し、國文では國史萬葉世々の撰集竹取伊勢等の物語其他貫之など名ある人の作物は大抵讀み悉し、佛敎までにも眼を注ぎ、天臺の妙理、八宗の大意にも通じ、兄の定暹も自然とそれに感化せられ、嗚呼佛道に入りたいなアと、遂に發心したといふことである。式部は其他香合、繪合、琴、裁縫等一として通せざるなく、後に才學ある藤原宣孝に嫁してからも、其夫の藏書に就て硏究し、夫と共に春の晨秋の夕、

不レ論二夫與一レ婦　恰似二妹與一レ兄　侍レ酒談二學理一
煎レ茶話二平生一　應レ喩二藤蔓絡一　紫色千歲淸

といふ有樣で其の綢繆纏綿の情外の見る目も實に羨しかつたとのことだ。斯樣に才學あつて、而も美想に富める夫婦の間に設けたる子は果して如何、即ち前に述べたる如く賢子、辨局といふいとも美しい姫百合である。けれど、天は無情にも百年の契りを全うせしめず、夫宣孝は長保三年四月北邙一片の烟となつた。されば式部の歎き一方ならず、月を見ても、花を眺めても、嗚呼あるが中にと思ふやうになり、或時も陸前なる鹽釜の繪を見て、

見し人の烟となりし夕より
名もむつまじき鹽釜の浦

評釋——鹽釜の浦は常に烟の立つ所と聞く故に、睦じくしたる夫

の遺骸を煙になしたる夕より、其名も親しく覺ゆるやうになつた云々の意で、あどけなき詞の中に、何となく其人を慕ふ有様の見えて、優しく哀れである。「名もむつまじ」の一句實に面白し。



乃で普通凡々の婦人ならば、善く行けば剃髪して尼になるとか、左なくば歇私的里的になり、惡く行くと次第に亂れて、德操を破るやうになるものだ。所が式部は髪をこぼちて佛門に入らうと思うたことも無いではないが、斯くては亡き人の遺子を敎育することが出來ぬのみならず、命の有らん限りは、世の中に活動したいものだと、是に於て彼の浩澣なる著書、即ち源氏物語に着手し、三四年の間に、粗脱稿したのである。併し此の著書は式部が石山寺に通夜して禱り、折しも、八月十五日の明月、湖水に映じて、心の澄みたるまゝ、物語の風情空に浮びければ、忘れぬ中にと御前にありし大般若の料紙を本尊に借りて、先づ須磨明石の兩巻を書き始めた云云との説も有れどこは年代の齟齬せるのみならず、石山寺からは湖水に映ずる月は見えぬされば佛家の迷信に基ける俗説で、石山寺の源氏の間が有つたり、式部の畫像などの有るは、後世の横着者が爲したる仕業である。されば式部は著書の粗脱稿した時、即ち寛弘二三年の頃に、左大臣藤原道長の女の宮中に入り、女御

となり給へるに仕へた。この女御は間も無く中宮に進み、後一條天皇及び後朱雀天皇を生み奉り、遂に皇后となり給へるが、後には祝髮して上東門院と號す。仁慈にして學問を好み給へる所から、父の道長公は、式部をして師傅たらしめたのである。式部は仕ふること多年、頗る寵愛を受け後一條天皇の萬壽二年頃まで奉仕し退いて風流三昧に此世を送つたといふことである。

▲紫式部の容貌

紫式部は藤原道長公を始とし、其他色々の人から戀慕せられたことのある所より、其容貌は如何にも端麗であつたかの如くに、諸書にも記してあるし、古來の想像畫にも畫いてあれど、余は思ふに、我が國人の所謂美人ではないと思ふ。我が國人の所謂美人は、色は白くて髮黑く、頰にホンノリと赤みを帶び、丈は細そりと高く、口締り齒白く何となくなよ〳〵とした結核的の風姿を指すのである。然るに式部は之と異り、色も淺黑く、筋肉も比較的太く、何と無う雄々しい姿で、芝居に出る千代萩の政岡的であつたに違ひない、道長などの戀慕するのは、容貌の美麗なるが爲ではなくて、其の才學と、優美な心と、及び品格の氣高い所とを慕うたのであらう。何を以て之を證する、曰く式部の日記に依ると、「自分は實に醜い女だ」と所々に記してあるし、且つ歌にも

をみなへし盛りの色を見るからに
露のわきける身こそ知らるれ

意解――女郎花の色の盛りに美しきは、露の置き添へたる爲であらう、其色を見るにつけても、自分は女郎花といふ名の如く女の身なれば、此花の如く美しければ宜いけれど、此の通り醜きは、露が依怙贔屓して、自分の身には露おかぬ爲である。「わきける」は分けへだてするの意である。

と詠んであるからである。斯う申すと、それは謙遜であると駁せらるゝ方も有らうが、成程自ら美人なりと口に出す者も無けれど人は誰でも多少の自惚あるものなれば、衆人から美人なりと賞めらるゝを聞けば、如

何なる謙遜家も心の中には美人なりと、自ら許すに相違ない、心の中に自ら美人なりと信ずれば、豈夫正反對に醜い女だと、文章にまで書くべき道理は無い、若し眞に美人であつて、自らも美人なりと信じながら、醜い女で御座いますと書いたとすれば、式部も餘り感心の出來ぬ女だ、所が式部は斯樣な心と口と違ふやうな白々しいことは書く人では斷然ないのみならず、後に述ぶる通り、身體も强健であつたことなど、照し合せて考ふれば、前記の如く、色の淺黑い、筋肉の比較的太く、雄々しい姿であつたと、斷言するを余は憚らぬのである。嗚呼讀者諸姉よ、心が氣高く、且つ優美で、而も身體强健ならば、容貌從て醜からぬものである。二十世紀の美人は之を標本にしたいものだ。

▲式部の性行

紫式部は宏壯優美な文章を綴る腕前のあつたばかりが豪いのでなくて、其れよりも尙ほ貴い德操の有つたのが豪いのである。抑々當時は藤原氏全盛の時代で、政治の事は一切地方の豪族に委ねて顧みず、廟堂は大いに文弱に流れ、淫猥の醜聲聞くに堪へず月卿雲客は詩歌管絃の歡樂に非ずんば、酒色の爲に浮身を窶してゐる秋である。故に女も亦德操の如何は念頭にも置かず、有夫の身でありながら、猥行を敢てしたる者さへ珍らしとせず。朝に衣裳を着飾り、夕にコテ〳〵白粉を塗り、間がな隙がな戀歌を稽古してゐる。式部は此間に成長して、其の汚濁に染まらず、良人の有る間は婉柔以て仕へ、文筆以て友となり、良人此世を去つても、浮きたる心は更に起さず、意志强く、情美しく、其の朝廷に出でゝ仕ふるや、人は服裝などに氣を揉んで居れど、式部は『服裝に兎や角言ふは心得違である、それよりも禮義作法に就て彼是言はねばならぬ』と、述べてゐる、尊い心と謂はねばならぬ。又權勢竝びなき時の總理大臣藤原道長が

　すきものと名にし立てれば見る人の
　　折らで過ぐるはあらじとぞ思ふ

意解――「すきもの」は好色者と、梅の實の酸きにかけて言つたの

で、「折らで」は枝を手折ると、女を靡かすとは通じ、梅は式部に喩るのだ。一首の大意は賤き物なりと評判高き樹なれば、見る人が折り取らないで、行き過ぐるは無からう云々。

と挑めば、式部は

人にまだ折られぬものを誰かこの
　すきものぞとはくちならしけん

意解——人に未だ折られたことのない、潔白な梅なるに誰の讒言で賤しなど言ひふらしたのであらう、我身には決して汚はしき行は斷然ありませぬ云々。

と立派に斷つて居る。それでも道長は性懲もなく、又或時に

よもすがらくひなよりけになく〳〵ぞ
　まきのとぐちにたゝきわびつる

意解——終夜水鷄よりも勝れて泣き〳〵戸を叩きつゝ立つて居たのに、まきの戸（檜杉の類で作れる戸）を開けてもくれぬから、甚だ困難した、情てつれなき御身である云々。

と愚痴を溢して還したれば、式部は

たゞならじとばかりたゝくゝひなゆゑ
　あけてはいかにくやしからまし

意解——尋常な事で叩く水鷄ではあるまいと思うたから、開けずにおいたのです、若し開けたら如何程殘念に思はれたであらうに、開けざりしは實に幸であつた。

と、撥ねつけた、實に氣味の宜い話である。然らば此の筆法を以て誰に對してもピン〳〵主義であつたかと云ふに、却々さうではない、當時の官女は實に僻み根性の者多く、何うかして式部の名聲を落し、式部の寵愛を殺いで遣らうとする間に立つて、式部は婉曲に交はり、彼女の日記中に「他人が如何に我を憎むも、我は他人の幸を計るが君子の道なれど、其れは却々難き事なれば、せめて表面だけでも平和に交りたいものだ」と述べてゐる、なんと美しい氣象ではないか、若し之を「他人が如何に我を憎むも我は他人の幸を計らう」これ丈言つたとすれば、唯表面の君子を氣取ることになれど、聖人ならぬ身は、我を憎めば矢張腹は立つてもそれを荒立てずに、交らうといふは如何にも正直に飾らぬ心情を明してある、返す〴〵も圓滿な婦

人である。

▲紫式部の壽命

殆んど空前絶後の女文豪而も淑徳圓滿なる紫式部の壽命は果して如何に〳〵、是れ余の最も苦心して調べたる一事である當時は言ふまでもなく、市役所に戸籍帳が調つてる譯でもなく、又當時の習俗として、女は一般に若やかに身を飾り、可成年齢を隱したことなれば人も貴女は御幾つですかと尋ぬるを失敬としてゐたに相違ない、故に式部の日記にも、「年長けたり」といふ言葉は何箇所も書い



てあれど、幾つの年に夫に別れ、幾つの年に宮仕したかは、何れも記して無い國史略年契などには、正暦三年に卒すとあれど、正暦は長保寛弘よりも前の年號なれば、出鱈目の誤なることは確かだされば式部の壽命は雲を摑むやうで、如何にも漠然たるものなれど、夫に別れてから、三四年の後に宮仕し、宮仕中に數多の官女の中に在つて、前述の如く、常に自ら年長けたることを耻ぢてゐたる點より考ふれば、當時少くも三十歳を超えてゐたであらう、果して然らば、宮仕を止めたる時は、旣

に五十三四歳となる勘定だ、此の勘定は恐らく間違つてはゐまい。けれども、之より後退いて風流三昧に世を送つた年月は、余の歴史に暗い故かも知らねど、何等の書物にも見當らぬ、併し余の憶測では、必ず七八十歳までも壽命を長らへたらうと思はる、何となれば、彼女の日記中にも、病氣に罹つたことはつゆ記して無い處から考へても、健康であつたことは了るし、且つ精神は常に爽快で、僻根性も無く、而も樂天主義の所があるからである、此の理法から推せば宮仕を止めてから、傳染病に襲はれたらいざ知らず、十四五年は悠々自適風月を友とすることの出來るは生理の然らしむる所である。尙之に就いて滔々述べたいが、そは次の章に讓るとしよう。

▲紫式部の衛生

前章にも述べた通り、紫式部は身體健康で、女に有勝の欺私的里にも罹らず、又子宮病も無く、無病息災で七十歳以上の壽命を長らへたことは豈偶然ならんやである。余は諸書に就き、又實際の人に接し、健康長命の原因を聊か研究して見たが、皆何れも精神が爽快で、而も悠々迫らず、意志強くて情鋭からず、物事に規律があつて、懦弱ならず、善く運動し、善く食し、善く眠るの三原則を實行し、其上自然美を愛するの人である。之に反して、虛弱短命の人は精神は何時も悲觀的で、而も成功を急ぎ、意志弱くて情鋭く、忽ちに怒り忽ちに泣き。膽病で人に欺され易く、物事に規律が無くて、不性で、懦弱で、時偶に規律を立てゝ見ても、長くは續かぬ、働くことも厭がり、食することも少く、寢就が惡くて朝寢をする、而して自然美よりも人工美を愛するものである。所が式部の性行等から觀察して見ると、前者であつて後者でない、其夫に別れた時などは、人情の常として、悲しんだには悲しんだけれど、其處は又氣を取り直して、「此世に在る間は二人の女子を云々」と、敎育しながら著書に從事し、悲觀に傾かんとする精神を、美學に轉じ、而も一夜作りの一小册ではなくて、五十四帖の大部、これ悠々迫

らざるの強き意志が有つて、物事に規律あり、懦弱ならぬ性質でなくては、到底出來ぬことである。意志の強きは此の一事のみでなく、道長の權威に靡かず、時世の淫猥に染らず、飽くまでも德操を全うしてゐる。次に健康の三原則たる善く運動し、善く食し眠るを實行したかといふに、食事と睡眠とは唯想像に止つて、確たる事を記す譯には行かぬが、運動は當時の上流婦人としては、頗る實行してゐる、當時の上流婦人は、足家門を出でず、「垂れこめて春のゆくへも知らぬまに」的で、一生涯に十里の外へ出たことの無い者が多く、其故月雪花を詠んでも、甚だ狹い眼界に過ぎぬ、式部は之と異り、大に遊歴を好み、須磨、明石、住吉、難波、平安近傍の名勝は言ふに及ばず、遠く北越の地方までにも踏み入り、加賀の白山を望んで、

名に高き越の白山ゆきなれて
伊吹の嶽をなにとこそ見ね

と詠んでゐる、斯く自然の美に接して、崇高なる精神を養ひ、且つ旅行してゐる爲に、頗る平民的の事情にも通じ、彼女の著書に依ると、田家の樣など寫した所は、實に精細なものだ、されば千歳の下、彼女の平常を占つて見るに、朝も早く起きたであらう、三度の食事もむら無く食べたであらう、夜も程宜き時刻に眠つたであらう、入浴も怠らないで、何時も清潔であつたらう、召使の者ばかりに任せないで、自らも襷掛に働いたこともあらう、若し式部をして、今の世に生れしめば、體操や遠足などの運動は進んで爲す方で、冷水浴雨浴等も必ず實行し、歐米各國へも洋行して、立派な著書も成し、壽命も百歳以上に長らへんものを、嗚呼讀者諸姉よ否我妻をして式部の如くあらしめたいものだと、斯くなん綴りぬ。（完）

季節衞生

菊、紅葉、米、栗、蕈、月に虫
嬉しきことは秋にこそあれ

今月より來月にかけての氣候は所謂中秋で、萬頃の稻田は黄金の錦を敷き、天高く氣淸く、實に馬肥ゆるの時は、我等人間も亦肥ゆるのである、然らば、

△何ぜ身體は秋に肥ゆるか――夏は炎熱甚だしき爲に水分に富める植物性の食物を取り、身體の熱を發散することを旨とし其の蛋白脂肪に富める肉食は餘り取らぬ、又自然に取ることを欲せぬ、故に大抵の人は多少夏痩するもので、小兒の成長も、夏は最も少きものである、然るに金風一陣涼氣漸く來れば、今までの樣に身體の熱を發散することのみを計るべき必要は無い、乃で其の痩せたる肉を肥やして、大に挽回せねばならぬ、若し挽回せずして、其儘ならんか、嚴冬の折に至つて、其の影響を及ぼし、身體益々弱くなるものだ、重言すれば肥やすべき時に肥やさゝれば取返しの出來ぬ耻ありと知り給へ。然らば、

▲如何にして身體を肥すか――天の配劑は靈妙なもので、秋になると、雁鴨小鳥乃至は河海の魚類に至るまで、蛋白脂肪に富み、我等は之を利用し、香氣馥郁たる松蕈などゝ取り合せて食すれば、美味津々自ら舌鼓が鳴るのである。而して又一方には含水炭素に富める新米や豆などは熟して益々我等の滋養を助け、加之にヂアスターゼといふ消化藥を含んでる大根は、秋最も宜しく「おろし」として用ふれば、消化器を刺戟し、食慾を進め、澱粉質を消化し、又濃厚な肉食を取り人の爲めには體温を調節する助ともなる、返す返すも秋は身體を肥すべき時であるから、是等の物をドシ〳〵取つて、大に身體を肥さねばならぬ。然れど又、取ることのみを知つて、之を消化さすべき道を講ぜざれば、却つて禍の種となり、即ち、

△胃病は秋に最も多く萌す――やうになる、ゴーガーと吐き下しする急性胃膓加答兒は夏に多くて秋に少なけれど、慢性胃膓加答兒や消化不良は、此時に萌し易いのだ、其譯は前述の如く、蛋白脂肪に富める肉類や柿栗の如き果實を食し、而も食慾の進む時であるから、進むが儘に食れば爰に消化の不良を來し、酸い噫囈を出したり、粘滑なる物を下痢したりして、

遂に慢性となり肥ゆるべき秋に却つて痩せるものである。然らば、

△何うすれば胃病を防がるゝか——曰く食時と食時との間を少くも五時間隔て、每度言ふことながら冷水浴と運動とを、從來よりも一層に實行せられたいものである。夏は如何なる不養生家も外より歸れば、知らず識らず冷水摩擦をするけれど、冷氣の加はる秋になると、自然に冷水を遠ざけるやうになるが、其れでは衛生の主意に違ふから、每朝怠らず實行し、取分けて腹部には冷水を灌ぎ灌ぎては摩擦し、胃腸の筋肉を興奮せられたいものだ、此法は憖の消化藥よりも効能がある。運動は郊外の散策、室内の體操、拭掃除、水仕事などドン〳〵行はねばなりませぬ、病の神も働く人には取りつく島が無い



次に話は變れど此頃東京市は麴町區牛込區麻布區を中心とし、其他都下各所及び各縣にも流行しつゝある腦脊髓膜炎といふ恐るべき傳染病に就き一言申し上げておきませう、本病は目下流行しつゝあるのみならず秋の末から冬にかけて流行するものなれば、時節柄大いに講究すべきことであらう

△腦脊髓膜炎の原因——はミクロコッケンといふ病毒で、十四歳以上

の小兒を最も侵し易い、されど又壯年老人なども敢て罹らぬ譯では無い、兎に角秋の末より冬及び春の寒い時に最も流行する恐ろしい傳染病である。

△腦脊髓膜炎の病狀――最初は俄かにブル／＼惡寒を催ほして戰慄ひ、熱は四十度内外に上る。續いで劇しい頭痛を發し、患者は呻き唸つて泣く位である。それから即日又は翌日になると、精神が朦朧となつて、人事不省になることがある。項部や頸筋背筋が强直つて、時々痙攣を起し、譫語を言ひ遂に昏睡して、重きは三四日輕きは一二週間で、多くは冥土の客となるのである。然れど必ずしも不治の症では無くて、手當の時機を誤らず、適當な療治さへ行屆けば、全快せぬとも限らぬ。

△腦脊髓膜炎の手當――本病で あらうとあるまいと、俄然熱發して、劇しき頭痛を感じて來たら、先づ重き病で、若しや本病かも知れぬと心得、一方急使を醫家へ走らせ、頭部に氷囊を載せ耳後を水蛭に吸はしめ、項部に發胞膏を貼け、足を湯温に入れ上肢には芥子を塗つておく、斯る所へ轆々車を馳せて、醫師の來診、「却々御手當が行屆いてゐる、腦脊髓膜炎なれど、手後になつて居らぬから、一週間内に治ります」と醫師も骨折つて治療する、乃で人事不省にも至らず、追追快方に赴くものである。此の手當は若し本病で無かつたら、害になるかと云ふに決して、然うではない、如何なる熱性病にも應用して差支ない、殊に小兒には腦膜炎を豫防する大必要の手當法である。

△腦脊髓膜炎の全快後――全快後は全く健康に復する者も有れど、中には腦の障害を起し、頭痛眩暈或は耳が遠くなるなどの徵候を遺すものなれば全快後と雖も、攝生を嚴重に守らねばならぬ、「病は少しく癒ゆるに重る」とは此事だ。

△腦脊髓膜炎の消毒――本病は赤痢虎列剌等の如く、八種傳染病の中に加はつてゐるから、警察へ屆出るの必要は無いが、恐るべき傳染病であるから、病人の排泄物、及び衣服等に至るまで、濃厚なる石炭酸水等にて消毒し、醫師及び看護の任に當る人の外は、一切近づかぬやう、大に注意し、返す／＼も、之に罹れば、十中六七まで、死ぬものと恐れねばなりませぬ。

女子を教員としての長短

大日本教育團は去月二十一日夜神田一ツ橋外學士會に於て集會を催し女教員問題につき討議を爲したり。

▲女子教員としての長所短所

一、生理的短所　月經期と姙娠期の靜養▲體力纎弱

二、心理的長所　愛情に富み親切なり▲音樂に長ず▲年少兒童の取扱巧なり▲面倒を厭はず▲從順なり

短所　愛情の偏頗▲男兒をして女性的ならしむ▲注意力繼續せず▲見聞を輕んじ社會の事情を疎んずる風あり▲應用の才に乏し▲獨立心乏しく依賴心多し▲私事に拘り公務を等閑にする傾あり▲小事に拘泥して大事を逸するの風あり▲理解力に乏し▲進取の氣象に乏し▲嫉妬の情に制せられ易し

三、社會的長所　生活費少く低き俸給にて傭用することを得

短所　家事上の煩務多し▲終生從事し難き事情多し

▲短所の矯救策

一、生理的短所　姙娠者は分娩前後適當の期間缺勤せしめ其の間月給の幾割を減ずるも可なり但し其の間臨時補充教員を置くべきこと

二、心理的短所　出來得る限り女子教員養成の際に當事者が十分此等の缺點を了解して十分の注意を加へ方法を講ずること又婦人を中心としたる講習會研究會等を開くこと

三、社會的短所　制度又は統督上の注意を以て成る可く矯救すること

尙次回に於ては如何なる程度迄女子を小學校教員となすが適當なるかを研究する筈にて其調査委員を擧げたるが其の草案は左の如くなりと。

▲採用の程度

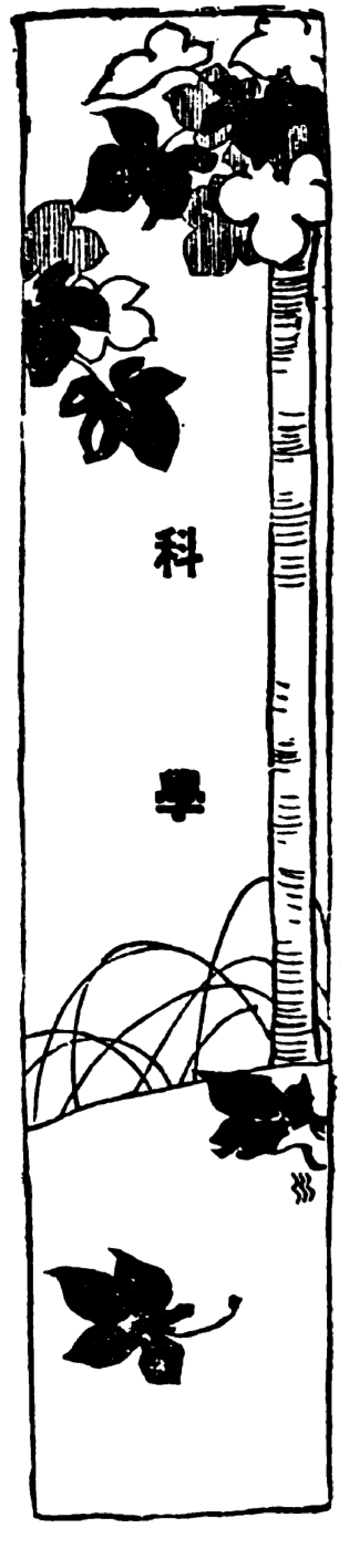
（イ）各學年二學級以上を有する學校に於ては一學年又は二學年每に一人宛の男教員を置き之が指揮監督の下に尋常科（六學年）を通じ兒童の男女を擇ばず凡て女子に擔任せしむること

（ロ）各學年一學級の學校に於ては過半を女子に擔任せしむること

（ハ）單級學校は必ず男教員を採用すること

貴族の女生徒衣服を質素にす

今回刷新せし學習院女學部の服裝は專ら質素を旨とし之れに多少の品格を添へたるもの丶由なるが衣服の地質は（和洋服共）綿布、麻布、毛布、紬、銘仙、及び總て廉價なる交織の類を最高とすべく、袴地は綿布、カシミヤ、メリンス、紬及び交織の類に止め、衣服の模樣、形、縞等は華美又は野卑なるものを用ひしめず、幼稚園の幼兒及び小學々生の衣類は筒袖の仕立を用ひ、中等科の學生も成る可く袖の短きを用ひしめ、紀元節、天長節、地久節、開校紀念式、卒業式、及び御苑拜觀等の場合と雖も右に定めたる地質により成るべく紋付を用ふる事にし、筒袖は紋付に及ばずと云ふ條々なるが、其理由は去十八年華族女學校開校式に　國母陛下行啓の時より御内旨を以て、深く學生衣服の華美に流れざらんを御注意あらせられ、爾來其趣旨にて校内及び家庭を誡め、學生に訓示し來りたれば、上流女子の服裝としては比較的質素の方なりき、然るに日露戰役大捷の結果世間動もすれば奢侈に傾かんとする風ありて、大に學生の身上に顧慮すべき處あり、之れを歐米諸國の學生に就て見るに學校に在る間は衣服の地質及び其色摸樣より裝飾等に至る迄極めて清楚なるを旨とするは婦人が未た社會の交際場裡に立たざる時期に於ては無用の費を投すべき必要なしとの旨意にて、全く我國往古の習慣に似通ひたり、されば今回の衣服品質を定めたる上、模樣形縞仕立等にまで多少の制限を加へたるも、此に外ならざる由縁に摸樣形等の新奇を競ふに至りては其價不廉なるのみならず、往々華美に過ぎ野卑にわたるものありて、風敎上面白からざるのみならず學生の資格を以て人の前に出る場合は學校にて規定したる衣服に依るを至當とすべきものなり世には學校へ出る時だけは學校の規定に從ひ家庭に在る時又は私用にて他出の場合などには頗る驕奢の風采を纏ふ者多けれど常住坐臥學校の規定を念頭に置かば自ら清楚の觀念修養ともなる可し。されば廿年一月　皇后陛下は華族一同の婦人に「凡そ物事を改め新に移るに無益の費を避けんとするは最も至難の業なりと雖も人々互に其分に應じ質素を守りて華美に流れざる樣能く注意すべし」との御令旨を體してこゝに學生服の刷新をなしたるなりと。



家屋に對する衛生智識

越　嶺

△健康に必要なる條件

凡そ健康に適する居宅として萬人に通用すべきは、左の四個の條件を備へなければならぬ。

(1)先づ第一日光を充分受け入るやうにしなければならぬ。

(2)次に健康なる空氣の場所に建てなければならぬ。

(3)濕氣の土地若くは沼澤多き所を避けなければならぬ。

(4)床板は成る可く地を拔く事高くなければならぬ。

△日當りの好き居宅

居宅を卜する時には、南向か東向を撰ばねばならぬ、少くとも東南に面する居宅を卜する筈である、此の方角に面する居宅には他にも種々の便利あるけれども、先づ第一夏は涼しく、冬は暖かと云ふ何よりの便利がある、日光は早朝より差入るが故に、早く窓戸を開けて掃除することも出來、夜間に腐敗した空氣を、朝の内に直ぐ更新することが出來る、夏ならば、朝一時間乃至二時間窓戸を開け置き、新鮮なる空氣を充分流通せたる後、窓戸を閉めて、多少日中の暑氣を防ぐことも出來る。

次に東向の家に就て特に其の利益を語れば、不健全なる發散物を帶び來る南風を防ぎ、又國によりては常

に西より降り來る雨を避けるに甚だ都合が好い、此はツマラヌやうであるが、土地の狀況によりて餘程考へなければならぬ物である、居宅を東向にしなければ毒風や暴雨の來襲を避けることの出來ない土地がある。

加之ならず、東向の家は一番愉快である、日光が早朝より訪問し來りて吾人の早起を促し、長く床上に惰眠を貪ることを許さない、愉快に起きて愉快に働かしむるものは、實に東向の家である。

△風向きの好き居宅

若今こゝに衞生上理想的の家を建てんとすれば空氣新鮮にして充分更新の出來る土地を撰ばなければならぬ、其の爲には家を丘上若くは小高き處に建る方が好い、どうしても高い處は空氣の流通が宜しい、家の周邊に樹木を植ゑるのは、空氣を健全にする一法で甚だ結構であるが、然し其の流通の妨にならぬやう注意しなければならぬ、尚又成る可く近傍は不健全なる建物のない所を撰ぶやうにしなければならぬ、例へば有害なる製造場とか不健康なる工場などを云ふのである。

都會などで庭と庭との間に家を建るのは、健康上甚だよろしい、少くとも內庭を設けて樹木を植ゑるやうにするが可い、さうすれば啻に花木の樂み、園藝的の慰みある而已ならず、新空氣と良健康とを其間に求むることが出來るから、趣味と實益とを兼有する譯である。

尚窓を開て遠近を眺め得るやうな家ならば、更に愉快と健康とを併せ得ることが出來て、心身の爲に尠なからぬ利益であらう。

△居宅に避く可き土地

小石砂利などの地は、粘土と異なりて始終乾て居るから、居宅の地としては好適であるが、池水、沼澤、水溜などのある所は健康上甚だ宜しくない、然し河川溪流の涯等凡て水流の急湍明麗なる處は差支ない。

△建築の際に注意すべき件々

居宅を建るに注意すべき事は一にして足らぬが、其の中最も大切なことは左の件々である。

(1)床下を出來る丈け高くし下に優に穴倉を設け得る

位にして置かば、尚一層便利なるべし。
樋は必ず架設して、雨水が屋上より壁を傳ふて下り若くは簷溜が家の入口に落ち來るを豫防し置く事。
(3)下水の水排きを始終流通せしむる事。
(4)壁を厚くし、壁土をも堅固にせん爲、粘着質の多き土を撰ぶべき事。
(5)出入口を出來る丈け廣くし、天井を成る可く高くする事。
(6)西洋造りの家ならば、成る可く多く煙筒を設置する事。

△平屋と二階の利害



之を要するに居宅上一般の健康法は、日當りの好く、空氣の新しく、濕氣の少なく、床下などの高き居宅を以て、健康上好適のものとす。此の如き條件は之を平屋に求むること甚だ困難である、平屋には濕氣を一番注意しなければならぬ職業と家計の許す限り、二階住を善しとする、冬期には平屋よりも寒く且梯子を昇降するなどの不便はあるけれども、其の代り空氣は始終乾燥にして、特に日當りが好く眺望がよい。
薄暗い崖の下などに居宅をトするは宜し

くない、人間が永く暗い處に居りては、顏色が段々と蒼白になつて健康は次第に衰へるのである。

△居宅の周邊に對する注意

居宅の周邊に注意すべき事は先づ第一タヽキ又は敷石などを敷つめて地盤を鞏固にする事、是れは雨水などの流通を易からしむる便がある、又公共の下水溝がなければ、自ら地下に下水の管を設置する事庖厨より流れ出る汚水は始終流通のよき樣にして、中途に遮斷物があらば、直ぐに之を排除しなければならぬ。

都會には各家芥棄箱なるものがある、此は傳染病などの導火線となるものだから、出來る丈け居宅より遠く離して置き、且常に蓋を覆ふことを忘れてはならぬ。

居宅の入口に便所を設くるも宜しくないが、井戸の側に直ぐ便所を設置するのは、尙更惡い、前者の場合は臭氣發散して不體裁であり、後者の場合は不潔物が土中より井戸に浸入して水質を變する恐れがある。

田家には厩、豕小屋、糞尿桶など種々不健康なものがある、此等は餘程注意しなければならぬ、就中土地が低く、沼澤多く、又は樹木繁茂して日光と空氣の流通の惡い所には尙更に注意をしなければならぬ。

室內衞生法

室內に於て最も必要なものは日光と空氣である、故に、氣候溫和にして夏は涼しく冬は暖かなるを善しとし、空氣乾燥にして濕氣を帶ばぬ所の室を善しとする、室內の衞生法は、主として此の兩方面に注意するに在る。

△室內に光明を取る法

天氣と季節の許す限り、門戶を開放して日光を歡迎しなければならぬ、卽ち日本流の家屋ならば障子窓なども悉く開放つが善い、日光は微細なる戶隙からでも入るものである、ガラス戶、ガラス窓などは塵埃の爲に汚れ易いものであるから、度々石油でふき、日光を其儘見るが如く透明ならしめねばならぬ、其外凡て日光を遮り又は之を覆ふ性質のものを殘らず撤去しなけ

ればならぬ。

△室内の濕氣を防ぐ法

室内に濕氣の有る無しは左の徴によりて知れる、壁面の濕る事、時に壁土の剝落する事、障子の紙の剝がれる事、庖厨の鐵器に錆を生ずる事等即ち是である。且此の如き濕氣のある室に入るときは、何となく一種異樣の冷氣に襲はれ、時として呼吸の自由ならざるが如きも亦之が徴である。

此の濕氣を豫防し若くは輕減する方法としては、左の數件に注意せねばならぬ。

(1)必要缺く可からざる掃除の外、床板などに、就中板の間などに水を撒て洗ふことを避けねばならぬ。



(2)室の內の臺とか棚などに濕れた雜巾を決して置いてはならぬ、雨天などの時に洗濯物を室內まで擔ぎ込んで竿の儘架けて置くなどは、不心得の事である。

(3)暖爐又は火鉢など度々室內をあたゝめることが必要。

(4)好天氣、好季節の時には日中戶障子をあけ放ち置かねばならぬ。

平屋などで室內の濕氣を防がんとするには、消極的の方法ばかりでは足りぬ、尙一步進んで積極的の方法を取らねばならぬ、其の一番簡便にして効驗の著しい方法は床下に炭、鉋屑、若くは砂利などを入れて置く事である。

右數件は新宅に住み込む場合に特更堅く相守る可き事と承知して置かねばならぬ。

△室內の溫度を保つ法

冬氣又は寒い時節に、晝も夜も室內に火を置くとが必要である、是れは室內の空氣をあたゝめて、外界の冷氣に打勝たしむる爲である。

田家などに爐中直に薪をくべて煖を取り又は炊事したりするは、外見上體裁惡けれども、平屋などの濕氣多き家には至極結構な事である。

室內に火鉢を置くときは、成る可く鐵瓶に水を入れて懸け置く事是れは誰も知つて居る所であるが、湯氣は空氣の乾燥するのを徐々と和ぐるものであるから、斯くすることは健康の爲に缺くべからざる事である、さもなければ頭痛眩暈を起すことがある。

家居の婦人や座職の人などは炬燵、アンカ、懷爐、或は大なる火鉢などを用ゐ、炭、タドンなどを使用するを常とするけれども、炭やタドンは炭酸瓦斯で空氣を變性せしむるから、餘り宜しくない、特に多感質の婦人及び未だ發育の充分でない小兒などには最も有害である、加之ならず寒氣に感じ易き習慣を來たして脚部に寒冷を覺えしむる不都合などもある、又老人などが、炬燵を蒲團の中に入れて眠り、又小兒の襁褓を炬燵に干すなどは餘り宜しくない、炬燵を使用するときには、成る可く炭の充分赤くなつたのを入れるやうに

しなければならぬ。

何れかと云へば、湯たんぽを用ゆる方が健康の爲に宜しい、然し湯たんぽも湯加減を見て入れ、且湯の暖氣を傳ふる性質のもので覆ひ之を使用せねばならぬ。

冬期中室内の暖氣を保たんには天氣の好い時日中にのみ空氣を更新へ、朝夕は掃除の時でなければ窓だの障子などを堅く閉めて置かねばならぬ、然し冬でも時時好天氣の日があるから、其時室内の空氣を更新へることは差支ない。

暑氣の烈しいときには、度々家の内外に水を撒て涼を納れねばならぬ。

夏でも窓を開けた儘眠るのは不用心の事である、睡



眠中は夜間の冷たい空氣に一層感觸し易いから、之が爲に咽喉病、風邪、僂麻質斯などに罹り易いものである。

△室内に空氣を入るゝ法

室内の空氣の腐敗するには種々の原因がある、其中の二三を記せば、

(1)一室に大勢寄集まる時、室が狹くして、家族の大勢な時、或は家具などを多く積み累ねて置く時。

(2)爐又は竈の烟、火鉢の炭、庖厨の各種の發散物などより空氣が腐敗する事もある。

(3)不精且つ不注意にして、生兒の襁褓などを洗はざる時、就中之を火に乾かす時。

今此等の發性空氣を健全にして、新鮮なる空氣を入るゝ法を記せば、左の通り、

第一の場合には障子や窓を開け放ちて新空氣を入るる事。

第二第三の場合にも同じ方法を取るか、又は煖爐を設け置く事。

世には不精者もあり清潔の人もある、不精者の室内は不健康と貧乏と同居して居る清潔の人の室内には健康と秩序が姉妹の如く仲善く暮して居る。

因に庖厨は食器食物の堆積して居る所なれば、空氣はイツモ多少腐敗して居るから、之を防ぐには天井の烟出を始終開けて置く筈である。烟出は食器食物の發散をも吐出して、内部の沈滯せる空氣を更新するの用にも供しなければならぬ、庖厨に窓戸の設け尠なくして、常に薄暗いのは、健康上尤も宜しくない。

室内衞生法として平生是れだけの事を心得て居れば澤山である、心得て居る方は澤山あつても、實行する方は尠ないでせう。

一日の苦樂

みゆき

心持のよいのは朝起きて庭へ出た時、いやなのはお掃除とお化粧、つらいのはおさんどんのお手傳、嬉しいのは机に向つて女學世界を開いた時樂しいのは家族打揃ふて夕食をなす時、そしてねむいのは琴のお稽古。



秋の風物

玲瓏子

一葉の風に秋たちて、日は漸く南に遠く、我が世を照らすに斜なれば、温熱を受くること之れよりぞ少なし、されば春より夏にかけて、茂りに茂り、榮えに榮えし草木も今は全く其生長を休止して木葉黄落し、種實熟し、地下の根部は著しく肥大して、又來ん年に榮えんがため、夥しき養料を貯ふるなり。

かくの如く、花なく葉も又落つれば、蟲は蟄して蛹となり、或は卵を殘して空しく斃る、さればこそ燕は食を求めんがために、遠く海を航して南洋に去り、水底の藻枯れて、魚蝦亦泥中に潜み、我が世の秋はこゝに漸く荒涼の天地となれるなり。

◎東籬の菊花

晩秋の天、百花悉く凋落して、東庭獨り霜に威あるの時、菊は猶その霜に驕りて、色香一入美しければ和漢共に之れを愛し、殊に支那の陶淵明は、蘭竹梅と併せ稱して四君子と激賞せり、いでや東籬の下に、此の花の清香を尋ねん。

たぐひなき、色にもあるか菊の花、いかなる露の置きてなるらん、とは人も知る彼の謙德公の詠なり、又芭蕉翁は、白菊の目にたちて見る塵もなしと吟じて、共に菊の清節を愛す。

記すもかしこけれど、我が皇室の御紋章に菊花を用ゐさせ給ふは、古へより目出度き花なるのみか、其異名を括り花と呼びて、數多の花を括りたらん如き形なるは、天皇が天が下を總括し給ふに似通ひたれば、さては御紋章とし定められしとかや。

抑も菊は多年生の草本にして、蒲公英、薊の類と共に、所謂菊科に屬し、莖は灌木の如く、葉は單葉に羽狀缺刻あるを見る、また花は多く相聚りて、頭狀をなせる花軸に着生せり。

菊は古來、人の愛育せし故にや、今にては本邦に產するもの〻みにても、優に千種を數ふるに至り、其色

彩花形、共に多種多樣にして年々歐米諸國に輸出する額も少なからず、即ち白色には、雲井、共白髮、後の月、春の霜の如き、紅色には武藏野、六歌仙、千代の光、黃色にては雷電富士の雪などは、何れも外人の賞賛するものなりと聞く。

◎西郊の吟

蟲

夏すぎて、秋風の袂に涼しき西郊の夜は、全く鳴蟲の世界なり、月は高く中天に澄みて、空に雲もなく、草葉の末には露の白玉數さへ知れず、月の光に照りそひて、宛然夜光の玉を見るに等し、蟲は此の露の草蔭を宿として、翅の疲れも知らず、今宵ばかりは我が世界ぞと、聲も



惜まで鳴けるなり。

秋の夜を、ひとりや泣きてあかすらん、ともなふ蟲の聲なかりせば、とは詩人西行の詠なるが、誰しも同じ秋の夜の、哀しさまさる時、蟲の聲々を聞かば、秋思の情の一入なるを知るべし。

抑も蟲は、何のために、かくも音たてて鳴けるや、秋の哀れさを覺えてや、其哀れさを人にも告げんとてにや、否々彼の雄は、あらん限りの美音をあげて、之れをしも彼が最愛の妻に聞かしめ、その歡心を求めて、わが傍に引き

寄せんとはするなり。

殊に彼等の雌は、其雄に比して、少數なるが故に、雄は非常なる手段を用ゆるにあらざれば、雌を得る能はず、故に各々美音を放ちて、吾こそは戀しき妻に慕はれむとて、身を焦しつゝ鳴き續くるなり。

されば鳴けるものは、必ず雄にして、默して之れを聽くは其雌なり、雌雄相會すれば、秋もやゝ冷たき十月の半、雄先づ斃れ、雌は土中に産卵して後、雄の後を逐ふて死すべく、かくて卵は無事土中に越冬して、翌年の六月、既に妻戀ふてや、その子の低聲に鳴き初むるを聽く。

◎女郎花



秋の七草として、古人の撰びしものには、何れ劣り優りなけれど、殊に其名の示す如く、女郎花こそ、一入捨て難き風情ある花なり、名にめでゝ、折れるばかりぞ女郎花、吾おちにきと人にかたるな、こは遍照の詠なり、秋の野に出でゝ、なまめかしき一本の女郎花を見れば、女人禁制の聖人と雖、その名に愛でゝ手折りもせむ。

女郎花は漢名を敗醬と呼ぶ、その莖の敗れたる醬油に似たる臭氣を發するが故なりとか、さりとては亦、あまりに無風流なる名を付けたるものかな、漢土の人、未だ此の花の詩趣あるを知らず、日を同じうして語るに足らざるなり。

由來宿根草にして、春月愛らしき新芽を生じ、初秋の天、莖の頂端に小さき粟粒の如き多數の黄花を點ずされば別名を粟花とも呼べり、莖の高さ、普通三四尺なるを常とすれども、薄と共に交生する時は、優に五六尺に迄至る。

葉は菊に似て稍細長く、葉柄なくして對生し、春の若芽もまた一入の風情あるを見る、秋の草には女性的のもの多く、殊に女郎花に於ては、其草立のやさしさ、其花の趣ある所、最もよく女性の美を現はせるを見る。

◎垣根の秋

露の干ぬ間に咲き誇りて、露の干ぬ間に萎るれば、名付けて之れを朝顔と云ふ、されば亦異名東雲草とも呼びて、古くより貴賤共に之れを愛養せり、平安朝のはじめ、支那より傳はり、德川幕府の頃、殊に珍種を出すに至れりと云ふ。

短かき夏の宵、寢心地よければ、朝は兎角寢過すを常なるに、此の花咲けるを見ては、眠さを忘れて早起しつるが、今秋風の吹きしきて、垣根の蔓は、色さへ黄ばみ、片足失ひたる蟋蟀の、しかと其蔓にすがり付きて、哀れなる骸を横たふるも、一入秋の淋しみを覺えつ。

抑も朝顔の花は、漏斗狀の合瓣花にして、下部は甚だ細く、上部は著しく展がれり、花瓣は、かく合着

すれども、其接目さへ見なば、誰の目にも、明かに其五瓣より成れることを知らるゝなり。

夜全く明けず、太陽は未だ地平線下にあり、花は猶開かず、太き筆の狀をなして、露深き所、徐ろに時の至るを待つ、此の時いづこより來りけん、二頭の大なる蟲は、頻りに花の四邊に飛び廻りぬ、一は花蜂にして、他は天蛾と云ふ。

花蜂は朝顏に開花を迫りて、花底の蜜を求め、其報酬として、花粉の輸送を司れども、天蛾は風流を解せず、却つて朝顏の葉を蠶食すべき、恐ろしき螟蛉の卵を殘して遁る、あゝ時は秋、今ぞ花は素枯れて、只枯れたる種子と黃ばめる蔓のみ、花蜂や天蛾や、いづこに昔しの樂しみを夢むらん、我庭の秋は、かくも淋しかりき。

富豪と華族の婚儀

當代の富豪大倉喜八郎氏令息喜七郎氏は有栖川宮大妃殿下の御思召に依り舊新發田藩主溝口伯爵令孃久美子と結婚する事となり婚儀は伊藤統監夫妻の媒妁と小林眞子女史の司式に依り去月十九日午後三時を以て大倉邸内の西洋廣間にて擧行せられたり當日同家にては日本大廣間に諸方よりの祝品を積み飾れるが先づ床には光琳の中軸福 祿 壽 左右松竹梅の三幅對を懸け床の間正面には伊藤統監 夫妻よりの祝品高砂島臺 並に和洋食器を飾り右に大山侯よりの高砂島臺 左に井上伯よりの鶴龜松竹梅の島臺を飾り山縣元帥、黑田侯、桂伯よりの祝品を前にし尙奧侯よりの勝魚節大倉組よりの銀花瓶一對高島氏よりの銀製菓子器大倉氏よりの銀製珈琲器安田善次郞氏よりの紅白縮緬大岡育造氏よりの小田𤭖高砂 松 竹 梅の島臺馬越恭平氏よりの紅白縮緬等を飾り廣間の左右一面に數百の祝品を飾れるが中に就て最も美事なる二三を擧ぐれば雨宮敬次郞氏よりの鹿の子中形松 竹 梅模樣の目の下五尺以上の大鯛一對手島秀一氏よりの一間中に餘る紅白縮緬細工の末廣一對高島鑛槁氏よりの靑龍大鯛是れ亦目の下五尺に餘るもの村井吉兵衞氏よりの縮緬細工寶盡し小樽木 材 會 社重役よりの一間に餘る寶船に悉皆縮緬細工の萬寶を滿載せるもの川 端 玉 章氏のふくさ竹内久一氏の圖額其他澁澤、森岡、高田、大橋、淺野玉置、今村、野田男等よりの祝品數百點を殆んど日本廣間に滿飾して五彩燦爛たり猶當日の式は伊藤侯統監服にて式に列せらるゝを以て和洋折衷に改め花聟 花嫁 媒 妁 人 等 總て椅子を用ゐられたるも花聟の服裝は烏帽子直垂花嫁の服裝も亦是れに對せしものなりし由。

修養錄

經驗の反響

大我

▲天地は一大比喩なり、之を善解すれば極樂となり、惡解すれば地獄となる。唯だ善惡の岐れ路は心眼の明かなると否とに在り。

▲人生は歡樂に始つて悲哀に終り、悲哀に始まつて歡樂に了る、即ち大晦日の翌日に元旦あるが如し。

▲地球が太陽の周圍を廻轉するそれの如く、人の一生は『今日』を以てはじまり、又『今日』を以て終る、太だ簡單也。

▲惡夢より覺めたる時はマア可かつたと思ひ、善き夢のさめたる時は惜しかりしと想ふは普通の人情なれど醒めての後は、損もなければ得もなし。快樂も苦痛も畢竟は一時の現象に外ならず。

▲遠方を眺望せんと欲すれば、勢ひ高きに上らざる可からず、遠き慮ある人は、常に心を一段の高きにおく。

▲感情は理性によつて支配さるべきものにて、即ち主從の關係あるに齊し、さるを世間には往々これを顚倒して、感情の奴僕に理性の主人が使役さるゝ者少なからざるが如し。

▲自己の感情に服從する人は、遂に感情の犧牲たらずんば已まず。

▲西哲曰く『余は余が心中の帝王なり、故に能く凡ての慾望を統御し、余をして之が奴隷たるを免れしむ』と旨い哉言。

▲人の惱みは私慾のなやみ也、これに打勝ちたる時に於て、はじめて眞正の幸福を感得するならん。

▲世路の浪荒きに、漕ぎ行くは我身てふ船なり、理性の羅針盤あり、忍耐の錨あつて而して航路の安全なるを得べし。

▲薪炭は火の材料なり、暴飮荒食は情火の材料也、霧は濛々として天日を蔽遮し、酒氣は紛々として精神

の光明を奪ふ。
▲身體を餘りに肥し過ぎるは、自ら情慾の敵を作つて、健康の城を陥れらるゝに同じ。
▲空腹によつて死する人よりも、貪食の結果腸胃の病に斃るゝ人の多きは、醫家の證明するところ也。
▲勝者が玄關より這入る時は、幸福は裏門より逃出すものぞかし。
▲批評家の位置に立つて世に處すれば、決して多大の失敗ある事なし。
▲胸に疚しき秘密を抱く人は、尚ほ惡疾を隱蔽するに等しく、隱せばかくす程、永びけば永引くほど身心を傷ふばかり也、之が治療法は唯だ懺悔の二字にあり。
▲質屋の藏に預けたる品物は、自己の物にして而も己が自由にならざるが如く、金錢勢利の擒となりたる我等が良心も亦然り。
▲自己の知りたる凡ての事を話す人は、土藏に納めし凡ての物を抛り出すに同じ。
▲借りる時の地藏顔、返す時の閻魔顔、人に金品を貸さんとする塲合には、まづ豫め他日の不和を想像すべし尤も賢き用意なり。
▲對者を蹴らんとして立止まる馬は、競走上到底最後の勝利を得る能はざるが如く、他を排して進まんとする人も、畢竟這の理に洩れざるべし。
▲馬術を稽古する人は、最初先づ馬に御されて、後これを制御するにあり、主婦が雇人に對するも亦た此筆法を以て、服從せしむるこそ宜けれ。
▲財産餘りありて心貧しきがあり、心豐かなれど衣食に窮するがあり、前者は後者を羨み、後者は前者を羨む、さま〴〵の世なる哉。
▲科學者は萬物を氣體と液體と固形體とに區別せり、其中最も要領を得ざるは氣體にて、最も要領を得たるは固形體なり、されど固形體は往々物に衝突して破壞するの虞あり、人の處世上或程度まで、氣體の如く不得要領なるも亦一法なり。
▲世に明暗の二面あるは倘ほ人の境遇に順逆あるが如く、暗きより明所を見るは易く、明に處して暗を見

るは難し。

▲人の耳に最も快くして、且つ最も危險なる音樂は、實の伴はざる「喝采」なり。

▲一たび喝采の快味を領したる人は、毒酒に泥醉せし者の如く、其喝采の何處より來つて又幾干の價値あるかを識別するの明を失ふ、所謂御機嫌買と稱する婦人に於て殊に爾り。

▲達人は喝采を制止せんと欲し、小人は金を投じても之を購はんと力む。

▲眞正なる喝采は我良心なり、良心以外の喝采は悉く空虚に屬す、名聲、榮譽、尊敬、崇拜等、皆な虚僞也。

▲婦人の交際はお世辭の交換なり、横を向いて舌を吐くお稽古也。此術に長けたる人を以て交換上手と稱す。

▲交際術は人の心を讀みつ讀まれつする、謂はゞ讀書の如きもの也、されど悉く書を信ずるは書なきに如かずとか、人と交るには須く精透なる批判的眼識なかるべからず。

▲友の不幸ほど、快感を催さしむるものはなし、然れど人を呪はゞ、穴二つの諺あるを忘るゝ勿れ。

▲古聖の所謂『互に相信ぜよ、否らざれば呪はれん。』とは婦人の猜疑心に對する間接的の訓戒にて實にや人を憎むは己が心に針を植ふるよりも不安なりけらし。

▲孤立は一種の牢獄なり、さるを猜疑深き人は自ら其心に墻壁を築きて、我から此世を狹めんとする、寧ろ憫む可きにあらずや。

▲快感は晴天の如く、苦痛は曇天のそれにも似たり、されど何れも永續すべきに非ず。

▲晴天には群集し、曇天には飛散し、幸運には阿諛し、非運には侮蔑す、人情の輕薄なる、之を稱して春來秋去の燕とは謂ふ。

▲美しき薔薇には刺あり、甘き栗には針毬あり、寧ろ天意の配劑と知るべし。

▲毒を救ふものは毒藥なり、苦痛を救ふものは苦行に如くなし。

▲十里の道程を行かんとして八里に留まる者は疲勞せず、最も安全なる處世法は身分以下の生活を爲すにあ

り。

▲正午の赫々たる光輝よりも、東天の漸く白む頃、若くは夕陽の淡紅を殘す頃の光景が遙に美觀なり、婦人の餘りに華美やかなるは寧ろ多くの美感を殺ぐものなりと知るべし。

▲惟に繪畫彫刻の類に限らず、人の世に處して節制てふ事も一大美術也、何事にも適度を守り、言ふべきは云ひ、行ふべきは行ひ、敢て沈默するにあらず、又饒舌を弄するにも非ず、凡て言語擧動を規矩準繩に合して表示する處は、正しく美術以上の美術ならずや。

▲節儉も實用も或程度までは結構なり、されど庭園の櫻樹を伐つて薪木と爲すが如き沒趣味に失する勿れ。

▲富士山を崩して琵琶湖を埋めて町を作らば、或は幾萬の人を住せしむるに足るべし、されど是は褞袍を典じて鷄肉に代ふるの愚なるよりも更に一層の愚なり、實用一方に偏する人は偶々如上の觀を免れず。

▲『憤怒は短時間の發狂なり。』とは古人の既に道破せる所なるが、如何にも簡潔にして巧妙なる言といふ可し。

▲世には心のお留守なる慈善あり、名聞の爲、利用の爲に、蒔散らさるゝ慈善は悉く然り。

▲盆栽を培養すると等しく、家庭に趣味あらしむると否とは、之を經營する主婦の技倆如何に在り。

勞働と不消化物

従來不消化物は衛生上絕對に惡いと云はれて居たが、米國に於ける最近の調査に依れば、不消化物も時に非常に効能があるさうだ。それは何う云ふ譯かと云ふに、勞働したり旅行などする際、消化し易い食物許り喰つて居ると、其食物は直に消化して胃腑を支持する力がなくなるから、従つて飢餓の苦痛を覺える、斯う云ふ時に不消化物を喰へば、久しい間胃が空虛にならないから、飢餓の苦患がなく、自ら疲勞も覺えないと云ふのである。然し不消化物と云つても其爲めに胃を害す様なもの或は無益に消化機を勞するのみで滋養分の少しもない物は不可ない、米國の當年六十四歳の一老翁は堅い黑パンの外何物も喰はずして一日に四十哩を歩き、更に疲勞を覺えなかつたと云ふことで却つて正式の料理を喰つて歩いた時の方が餘計疲れたと云ふ。此の例を見ても黑パンの如き比較的消化の惡いものが旅行などする際に有力なことが分るので、學者に聞いても黑パンは消化には困難だが一旦消化すれば澤山の滋養分を得ることが出來ると云つて居る。



新婦日記

下

小波

同　十六日　曇

朝の御飯の時にも、亦兄さんの噂が出た。良人と兄さんとは、中學時代に同窓であつた以來、六七年は疎遠に成つて居て、今度の緣で又親しくなつたのだが、よく性質は知つて居るから、其批評も萬更當らなくもない。

『兄さんは私と違つて、昔から大きにさばけて居る方だつたが、それで居て、よくいろんな事に氣の附く人だから、實は存外氣むづかしいかも知れん。』

『全く然うなんです。あんな、他所の人に好い人は、却つて自家の者にやアむづかしいもんですよ。ですから、奥さんになる方も、初めの中は可愛がつてくれましやうが、段々馴れて來ると、屹度仕にくいだらうと思ひます、けれどもあの義子さんなら、私なんぞと違つて、なか〳〵世馴れてる方だから、屹度巧くやるだらうと思ひますワ。』

と、自分も一寸人物評を試みて、

『ですから郎君！　此頃に兄さんが來ましたら、何卒勸めてやつて下ださい！』

『それは私も贊成だから、出來る丈勸誘してやる。』

『ほんとに、さうしてこの話が纏まりやア、私もこんな嬉しい事アありません。それに第一、母が安心しますし、兄さんだつて幸福ですし、……ねエ、郎君だつて、喜んで下ださるでしやう？』

『無論喜ぶサ。ぢやア二人で同盟して、是非この話は纏めやうぢやないか。』

『ハア、何卒！』

と、私は我知らず膝を進ませると、良人は妙に笑を浮べて、

「然し、私達二人は、結婚してから幾月になるなア？」

「まだ二タ月に成つた斗りでせう。」

「それにもう他所の結婚の斡旋か？」

「他所ぢやアありません、兄さんのぢやありませんか。」

「それは内輪には相違無いが、矢張り他人と云へば他人だ。此間まで他人の厄介に成つてながら、今度は他人の爲めに氣を採む樣になつたんだから、考へて見ると可笑しいなア。」

「何が可笑しいんです？」

「だつて……一廉先輩がつて、媒灼氣を出す所がサ。」

「媒灼人をするんぢやありませんよ。」

「イヤ、そりやア解つてるが、兎に角話を纒めやうと云ふんだらう。して見りやア、所謂月下氷人に成るんだ。お互ひに出世したもんだなア。」

「だつてそりやア仕方がありませんワ。」

「然しまだこれが、自分達の倅や娘で、氣を採むんで無い中が花さ。」

「アラ今からそんな事……」

良人は支度をする間も冗談を云ひ〳〵、機嫌よく勤務に出て行つた。

午後に來た郵便を見ると、其中に義子さんからのがある。此間の返事だから、乾度又面白い事があるだらうと思ふと、今度は思ひの外眞面目な文言で、而も「一兩日中には歸京可致候」とある。

まだ殘暑が厳しいのに、何で急に歸へるのか知らん？と、思ふ間も無く直ぐ點頭かれた。――さては先方でも、巳に話があるのに相違無い。

同　十七日　晴

夕方良人は歸つて來ると、まだ衣服を着更へて居る中から、

「オイ、今日社で面白い事があつたぜ。」

「何樣な事ですの？」

「記錄に居る松倉つて奴が――ソレ、此間資生堂で會つた――彼奴が私を陰へ呼んで、妙な事を聞くぢやな

いか。――奥さんのお兄さんは、たしかまだ獨身で居らしつたねエつて……。さうです、まだ妻はありませんて答へると、何方か極まつてるんですかと來た。――彼奴評判のお世話燒だから、また初めたなと思つたが、わざと眞面目に、イヤ、誰も極まつとりませんが、何所かに好いのがありませんかなアつて云つてやつた。」

「アラ、余計な事仰有らなけりやいゝのに！」

「なアに、關はん、面白いから揶揄半分、わざと然う云つてやると、松倉奴眞氣に成つて、それぢやア何うです。一人非常に好いのがあるんですがッて、それから話すのを聞いて見ると、何ぞ圖らん、その候補者と云ふのは、重役の淸田さんのお孃さんさ。」

「淸田さんて……あの、日外御披露會の時、一番後までお酒を飲つてらしつた方ですか。あの大きな、赤柄顏の……」

「さうだ、あの人アあんな顏してるが、お孃さんは一寸美人だよ。ソラ、此間の萬朝報の、一技一藝に出て居たぢやないか。何でもお茶が大の自慢で、その上ピアノも彈けると云ふ、高弊とハイカラと兼備した、所謂る當世の才媛なのさ。それで松倉の云ふには、御兄さんの事は、薄々淸田さんも御承知で、あの方ならばと、內々大いに氣がある所だから、此所は是非君も一肌脫いで、御兄さんの爲め、淸田さんの爲め、又一つには自身の爲めにも、大いに斡旋して下ださらんかと云ふんだ。

「まア……それで郎君！　何と仰有いまして？」

「仕方が無いから、好い加減に返事をして置いたサ。」

「好い加減につて、何う云ふ風に？」

「まア先方へ申しては見ましやう、然し斯う云ふ事と云ふものは、何分緣の事ですからつて……頗る曖昧に外交的にやつといたよ。」

と、何だか得意に成つて居る樣だ。

私は呆れて挨拶も出來ない。實に私には、此時の良人の氣が知れないのだ。――現に昨日も、私の說に贊成して、兄さんには義子さんと云ふ人を、是非嫁に持

たせやうと、あれほど同盟が出來て居るのに、今日の松倉さんの話を、何故良人が斷らなかつたのだらう？——成る程先方は淸田さん、同じ會社の上役のお孃さん！　お茶が名人で、ピアノが御上手、容貌が好くて、敎育があつて、當世の才媛とやらには相違あるまい、けれども此方の義子さんだつて、お茶は習つたし、ピヤノも彈ける。それに新聞の肖像で見た所ぢやアなアに、義子さんの方が余程好い。——それを又私の良人は、何だつて斷つてしまはないのだらうと、よしんば曖昧にもせよ、

懸賞繪さがし（9）



外交的にもせよ、話の後へ殘る樣にしたのは、何云ふ心算なのだらう？　私ならその時に、ハイ、折角の御話ですが、實はもう極まつとりますからと、奇麗さつぱり斷つてやるのに、……矢張り良人がらは他人だから、兄さんの事も義子さんの事も、それ程には思つてくれないのか知らん？

それとも……それともそれとも……話した人が同僚の人で、先方が上役のお孃さんなので、ちつと所存でも變つたのか？——イヤ〳〵、良人に限つてそんな卑劣な事は決してあらう筈は無い。また、あつて

貰つては情無い。——そんなら又何の爲めに、あんな返事をしたのか知らん？　あゝ私には、どうも良人の氣が知れなく成つて來た。

　そんな事を考へて、私はぼんやりして居る中に、良人は行水を濟まして上つて來て、

「あゝ好い心地だ。早くビールを拔いて來てくれ！」

と御催促だ。

　私は急いで支度をして、良人に御飯をすゝめて居る中も、何となく氣掛りで、例の樣に元氣も無かつたが、それをはやくも見咎められて、

「何うした？　何を考へてる？」

と、云はれたのを機會に、私は思ひ切つて云ひ出した。

「……郎君は、あの兄のお嫁さんを、義子さんでは御不承なんですか？」

「何故だイ？　妙な事を聞くぢやないか？　昨日もあれほど贊成して、二人で期成同盟まで結んだんぢやないか。」

「でも……今日の松倉さんのお話で、又お考が變つた樣ですもの。」

「馬鹿な！　誰があんな胡麻摺野郎の、口車に乘せられるもんか！」

「ホヽヽ……そんなら何故その時に、立派に斷つて下さいませんの？」

「そこが所謂る外交的の所ぢやないか。管無く斷つてしまつちやア、曲も何も無くなるから、わざと揄揶つて、釣つてやつたのさ。」

「そんなら可う御座んすけども、私はまた……郎君が同盟をお破んなすつたかと思つて。」

「それは餘計な心配だ。よしんば義子さんの話が無いにしても、誰が清田の娘なんぞ、兄さんに推薦するもんか！　そりやア安心してるが可い。」

「ぢやアもう兄にやア仰有らないんですネ？」

「ウン、……話はしない事も無いが、只勸めない斗りさ。」

「そんなら初めから云はない方がよう御座いましやう。」

「なアに云ふのは關はんす。淸田の娘が賣物に出てるつて事だけは、むしろ廣告してやる方が可い。」

「まア、酷い事……」

と、私はこれで良人の氣が知れて、大きに安心はしたものゝ、またこの言葉を聞くと、一時は面白く思はなかつた、その淸田さんのお孃さんが、急にお氣の毒に成つて來た。

御飯後はまた散歩に出たが、途中で急に思ひついて良人は寄席へ入らうと云ふ。私は何だか氣が濟まなかつたら、その中にもう木戸で「入らつしやアい」と云はれてしまつたんで、とう〳〵入る事に成つた。

土曜日なのと、新看板なのとで、客も一杯なら、藝も面白かつたが、その中で一番感じたのは、あの圓喬の「强情」と云ふ話。何でも飜案物だと云ふ事だが、奉公人の夫婦喧嘩が、段々主人夫婦に移り、それが又隱居夫婦に傳染すると云ふ、女の强情を戒めた筋で、よくも人情を穿つたものだと、私は感心して聞いて居るのに、良人は時々私の顏を見ては、ニヤリ〳〵と內證で笑ふ。

十時半頃にはねたから、直ぐに歸らうとすると、良人は氷でも飮んで行かうと云ふ。私も其氣で、ある氷屋の前まで行つたが、何だか人の惡さうな、新聞に出る墮落書生とでも云つた樣なのが、五六人端の床几に掛けて、匙でコップをかきまはしながら、往來の人を品評して居る所だから、私は急にいやに成つて、良人の袖を引いて行き過ぎてしまつたら、後で「チエストー」と云ふ聲がした。

同　十八日　曇

今日は日曜なので、良人は朝もゆつくり起きて、二階の緣の籐椅子に凭れて、牛乳を飮みながら新聞を讀んで居ると、もう其所へお客が來た。而もそれは社の松倉さん。

例の話だと思ふから、私は面白からず思ひながら、好い加減に挨拶して、下へ來てしまはうとすると、松倉さんは呼び止めて、

「奧さん！　實はあの……もう御聞及びで御座いまし

たらうが、今朝は其事で參りましたので、昔は急げとか申しますから、早朝から御邪魔致しました樣な譯で……へ、へ、……今日は寫眞を持つて參りました。」

と、もう一應媒灼顔で、勿體らしく服紗包を解いたと思ふと、その中から出したのは、奉書に包んだ清田のお孃さんの寫眞だ。

三越の寫眞部で、つい此頃撮つたのだとか云ふので、ハイカラな臺紙に貼つた、白金のカビチ版の、——裾模樣が見せ度いのだらう、椅子にもかけず立つたまゝの全身。成る程姿も惡くは無く、高髷の格好も好く、それに容貌だつて、此間の新聞で見たのとは、メレンスと友禪ほどの差はあるが、但し彼所は修正が上手で、而も見合向きの寫眞と思へば、少しは眉に唾も要らう。

然し私は何とも云はず、只、

「お美しう御座いますこと！」

と、云つた斗りで下に置かうとすると、置かしもあへず今度は良人の方へまはして、

「何うです。貴君は實物を御存じですか、看板に僞のある方ぢやアありますまい。」

と云ふので、良人は何う云ふかと思ふと、

「成る程……こりやア見事な者です。御當人そつくりですなア。」

などゝまだ眺めて居る、それも外交的なのか知らんと、

松倉さんはいよ／＼呑込顔に、

「何しろそれはお預け申しますから、何卒先方樣へお見せ下さいまして！……付いては御兄さんのお寫眞も此方には御座いましやうなア。」

と、今度は私の方を向く。

何と云ふ壓の強い人だらうと、私は少し癪にも障つたが、良人の手前色にも見せられず、「へイ……」と生返事をして居ると、

「清田さんは何所かで御存じですが、兎に角御本人にもお見せ申度いのですから、暫時拜借致して參りましやう。」

と、云はせて置けば段々乘地になる。

私は良人に目配するのに、良人は氣の付かない風をする。松倉さんは元よりそれとは心付かず、

「なアに、お古いのでも宜しう御座います。なんなら皆さんと御一所のでも……」

と促がす。

私はもう耐らなくなつて、

「あの……いろいろ御心配下さいまして、まことに難有う存じますが實はあの兄には……もう定まつて居りますので……」

と、我乍ら思ひ切つて云つてしまつた。

松倉さんは目を圓くして、

懸賞繪さがし (10)



「エッ、もうお定まりに……ア、、左樣で御座いますか……」

と、少し氣の拔けた樣に、又小言を云ひ度さうに、良人の方を見かへると良人は一寸頭を搔きながら、

「實は私も子、一向知らなかつたものですから、昨日あんな御返事をしましたが、あれから歸つて妻に聞きましたら、もう内々定まつとるんださうです。折角の御心配を無にして、甚だ相濟まん事でした。」

「ア、、左樣でしたか。イヤ、それでは致方が御座いません。」

と、暫時は無言。

私も少しは氣の毒に思つたから、先刻の寫眞を元の通り包んで、丁寧に松倉さんの前へ返へすと、松倉さんは極まり惡さうに、それを又服紗に包みながら、

「それは惜しい事致しましたなア、實は濟田さんでもあの方ならばと云ふので、非常に進んで居られましたのに……それも御緣で致方が御座いません。然し奥さん、失禮ですがお兄さんのは、何方から入らつしやいます？」

と、切り込んだ。

私もこれにはハッと思つて、何だか頰が熱くなつたが、

「私共の事で御座いますから、とてもさう云ふ立派な方からは戴けませんので、……實は私の友達で御座います。」

「お友達？　成る程、それはお宜う御座いますなア。」

と、後は煙草に成つたから、此上深入されない中にと、私は御免蒙つて、下座敷へおりてしまふと、松倉さんも別に用は無かつたと見えて、十分ほどするともう歸つてしまつた。

氣に成るから後で良人に聞くと、果して松倉さんは兄さんの緣談の事を、根掘り葉掘り聞いたさうで、良人はそれを立て切るのに、大層骨が折れたさうで、終には仕方が無しに、義子さんの名を出してしまつたらしい。

さう成ると私達の責任は、いよ／＼重く成るばかりだ。

「ですから郞君！　何うしてもこの話は纏めなけりや成りませんねエ。」

「さうとも。だがこりやア乾度纏まるよ。」

と、良人は何所までも樂天主義だ。

けれども私の身に成つて見ると、今日の松倉さんの談判を、自分の口から奇麗に斷つた丈、いよ／＼重荷を負つた樣に感じて、事が運んでしまふまでは、氣に成つて／＼成らない。

すると午後に、好い鹽梅に兄が來てくれた。そこで良人からも私からも、まづ義子さんの事を說いて、い

よ〱決心をさせてしまつた所で、又昨日からの話を初めると、兄は兄でまた氣樂な事を、

「そんなら何故その寫眞を、僕の來るまで預かつといてくれんのだ？」

と云ふ、

「それぢやア兄さん！　見て何うするの？」

と、眞顔で聞くと笑つてしまつて、

「ハヽヽ、然う云ふ耳寄な寶物があるなら、又何所かへ周旋してやるのに……」

と、ほんとに男と云ふものは、何故斯う女を馬鹿にするのだらう？

あゝ清田のお孃さんが、一層お氣の毒で成らなくなつた。それに付けても私が、こんなに寫眞を玩具にされないで、よくこの縁の結ばれた事を、今更ながら感謝に堪えない。

（完）

ミシン裁縫女學院落成式

麴町區有樂町なる同院は昨年九月の設立にかゝり日尚淺きに拘らず入學者意外に多く爲に忽ち校舍の狹隘を告げたれば先般來隣地に更に校舍寄宿舍を建築中なりしがいよ〱落成し去月廿一日同院設立の紀念日をトして其の移轉式を擧行したり、先づ設立者秦文學士の挨拶あり、次に大隈伯は國運發展の方面よりミシン裁縫の將來最も有望なる事を演説せられ、後ち手島精一氏は、手縫とミシン縫とは其の裁縫の速度に於て人力車と汽車との相違あり、のみならずミシン裁縫は練習に長時間を要せず、且つ其の出來上りたるものは却て手縫よりも立派なりとてミシン裁縫の効能を擧ると共に之を和服に應用するに就ての希望を述べられ、それより院長の案内にて生徒の作品及び實地演習を來賓一同に觀覽せしめて式を終りたるが、當日は雨天なりしにも拘らず男女の來賓廣堂に滿ちて頗る盛會なりき猶ミシン裁縫に就ての詳細は次號に述ぶべし

衛生顧問

内科の部

（精神鬱閉に就いて）問　私事本年三月頃より精神鬱々として面白からず、此頃に至り乳房より上の所時時痛み、左程苦しくは感せねど、何となく心配になり候、如何致して宜しきか、御教へ下され度。（櫟木の心配女）

答　察するに歇私的里症ならん、果して然らば冷浴温浴を毎日實行し、大氣日光に觸れて運動を怠らざれば、日ならずして治ること妙なり。嗚呼運動なる哉運動。

▲（福岡の京都女）（香川縣中央女）に答ふ——前者の答に同じ。

（消化不良の療法）問　三四年前より赤飯豆類芋類などは言ふに及ばす、ふかしパン粥すらも食すると同時に胸やけ、困り居り候。而し運動は十分致し、食慾も進む方に候。賣薬醫薬も色々用ひ候へども効なし、何とぞ根本的治療法を御教へ下され度。（因幡若櫻二十歳女）

答　診察せねば勿論分らぬけれど、大方酸性の消化不良症ならん。兎に角流動性の滋養食物淡泊なる魚の刺身、生卵、粥豆腐の如きを取り、御地の醫士と御相談の上左の處方を試みられよ。

重炭酸那篤僧謨三、〇　ホミカ丁幾一、〇
單舎八、〇　水一〇〇、〇
右一日三回分服
含糖百布聖三、〇　マルチン〇、三　撒里矢爾酸〇、一
右分ニ三包ニ一日三回一包宛

（肋膜炎に就て）問　私事嘗て肋膜炎に罹り、一度全快致し候が運動又は風邪に犯さるゝ時は必ず痛み出で困り入り候、之が根治療法等御教へ下され度　願上候。（東京下谷WT女）

答　當分の中は牛乳三合鷄卵五六個も食し、其他淡泊なる滋養品をも用ひ、身體は可成安靜にして感冒を引かぬやう溫包し、内服薬としては

沃度鐵舎利別六、〇　苦丁二、〇　水一〇〇、〇
右一日三回食後分服

▲(岡山縣の戸部女)に答ふ═前答を應用せられたし。

〔脚氣の療法〕問　一昨年の夏より脚氣に罹り、初期は膝以下に水腫を來し、其の歩行に困難なることは譬ふるにもの無く、續いて麻痺を來し、後には指尖唇までにも及び、非常なる困苦といふ程にもむらねど、業務を採る事も出來ず、秋冷を催す頃までは、臥たり起きたりして日を送り居り候、何卒轉地せずして治る方法有之候はゞ敎へ賜はりたし。(東京の活計女)

答　淡泊なる滋養食品を取り、刺戟性の食物を嚴禁し、心身を安靜にし、初期には



硫酸苦土一五、〇　稀鹽酸一、〇　單舎一〇、〇
水一〇〇、〇
右一日三回食前分服

の處方を以て便通を利し尚麻痺を治す目的として
蕃木鼈越幾斯〇、〇六　鹽酸規尼涅〇、一　甘草末適宜
右九丸と爲し食後三丸宛
右の如く書いたれど此は唯御參考までのことで之を飲めば必ず治するといふ保證藥ではない、現今では恐らく全治藥とては有るまいと信ず。▲(廣島の廿二歳女)に答ふ═前答を應用せられよ。(下總國の脚氣女)に答ふ═足袋を穿きて草履を用ひられよ。

〔僂麻質斯の療法〕問　本年三十四歳に候、二十二三歳より夏冬に輕き僂麻質斯を發し、二三年前より段段重く相成り（中略）溫泉は効能あるものに候や（中略）療法詳細に御敎示下され度。（麻布の御返事待婦女）

答　乾燥溫暖の住居に移り、身體を溫かに包み滋養に富んだ食物を取り、痛い個所を按摩し、酒精を塗り、又沃度丁幾を塗るも可い、最も愼むべきは隙風と濕冷とである。滋養品としては牛乳ソップ鷄卵魚肉豆腐の類が宜い。又溫浴も効がある。藥品としては、

撒里矢爾酸〇、五（一包の量）白糖適宜

右一日三回に三包服むべし。

或は又左の藥も甚だ宜しい、

撒曹四、〇　薄荷油一滴　白糖適宜　水一〇〇、〇

右一日三回に分けて服むべし。

すべて慢性の者には右の藥は効が無いといふわけでもないけれども、根治藥法ではない、根治藥は皆劇藥であるからこゝには書かぬが、併し溫泉療法は頗る効のあるものである。殊に相模の湯本、堂が島、伊豫の道後、下野の日光などは大いに宜い。▲（北國の心配女）に答ふ──僂麻質斯には冷水摩擦甚だ惡し、前答を參考せられよ。

〔十二指腸虫の療法〕問　十二指腸蟲の素人療法無之ものに候や伺ひ度候。（加賀の青蘭女）

答　綿馬エキスを服むのである、併し一度や二度では擊退すること叶はぬ、さりとて屢 之を用ふれば恐ろしき綿馬の中毒がある、所謂前門の虎を逃れて後門の狼、さうかうしてゐる中に敵は益々暴威を逞しうし、遂に流石の大國も衰滅するのである、されば到底素人療法の出來る筈は勿論無いから、大醫の作戰計畫を待たねばならぬ。▲（靜岡縣の馬船住人女）（豐後の青□草女）に答ふ──前答の如し。

婦人科の部

〔白血長血に就いて〕問　私は久しき以前より白血長血で月經も不順勝に候（中略）是非其の療法を御敎へ下され度。（谷間の百合子女）

答 白血長血といふ中には子宮癌、卵巢囊腫などの重病があつて、手後になれば一命にも關はることがある一刻も早く專門醫の治療を受くることが大必要である。

（白帶下の療法）問 本年十九歲身體至つて壯健なれども、本年の一月頃より子宮より白色の液出で困り居候、何卒其の療法等委しく御教授下され（中略）隨分腦と眼とを使ふ職業に候。（岡山 [illegible]）

答 子宮內膜炎、子宮外膜炎、子宮實質炎、淋毒、月經時の不攝生體質不良（これ多く少女に在り）腺病性膣加太兒などの原因より來るものなれば婦人科專門の醫士に就き原因療法を請はれたし、さりながら一般に身體殊に局部を清潔にし適度の運動滋養物以て全身の營養を良くし月經時の攝生等に注意し常に左の方法に依り膣內を單寧酸四、〇を三百倍の石炭酸水四〇〇、〇に溶かした る液を少し溫めて洗ふべし。子宮病洗滌法を行ふには「イルリガートル」と云ふ器械を醫療器械店又は藥店（地方の藥店に無くば取寄せて貰ふべし）より買求め熱湯にて器械の內外及びゴム管內も善く洗ひ清め、然る後右の藥液を入れ、少し高き處の釘にかけ、己は仰向になり、腰には油紙を敷き金盥を當てゴム管の尖を膣內に入るれば、藥液はドン〳〵流れ下りて膣



内を洗ふのである、之に就ての大注意は、ゴム管の尖が不潔であると、有害であるから善く／＼洗ひ清めねばならぬ、又藥液が冷たいと寒冒に罹るし、去りとて熱ければ火傷をするから其の温度が肝要である。子宮病の内服藥は前述の如く原因にも依るし、且つ醫師に就くの安全なるに如かず、併し御參考までに言へば強壯劑として、

還元鐵　鹽規　各〇、一　甘草末適宜

右六丸と爲し食後二丸づゝ

などを用ひます▲（上浦の不幸女）（若松市の十九歳女）（出雲松江の朝顔女）等に答ふ――前答を參考にせられよ。

（月經不順の原因）問　私は別に之と云ふ病もありませんけれど月經は毎月有つたり無かつたり、多かつたり少なかつたり、實に不規則に候が此は如何なる原因より來るものに候や。（ふりみふらずみ女）

答　（一）精神の安靜ならざる事例へば小說芝居など見て悲哀したり、或は何か心配事に遭遇するが如し（二）消化不良を誘ふべき飲食物を取りたる時。（三）平生の生活法を換へる事、例へば汽車汽船の旅行を續け或は過勞を爲しゝ場合の如し。（四）寒暑の劇變。（五）過房（六）寒冒其他疾病の有る場合等には或は早まり或は遲くなり、或は全く無きなどの不順を來すのである。

（月經不順の豫防及療法）問　（上略）月經不順の豫防及び療法を詳しく御敎へ下され度。（下略）（神田の月因女）

答　精神を何時も春の如くに穩かなるやうに注意し、感情を害すべき悲哀の小說芝居を見ぬやうに心がけ、月經前は殊に過飲過食せず、又辛き物を避け、過勞せぬやうにし、而して適度の運動を怠らず、午前午後に各一度宛庭園若くは原野に出でゝ大空日光に觸れ、夜は腰湯をなし、今日も明日も規則的の習慣を付けられよ、又少しにても病氣殊に子宮病は無理をせずに、醫士の治療を受けらるゝこと肝要なり。斯の如くにして尚不順なる時は、左の藥品を醫士と相談の上内服せらるゝことも必要である。

蘆薈末　葯刺巴石鹼　各〇、一五　甘草末適宜

右六丸に作り朝夕三丸宛（月經一週間前より五六日

間連服）（岡山の顏青き女子）（東京の君代）（上州妙義山の村雄）（山口縣の秀竹女）（駿河の困難女）等に答ふ
――前々答及び前答を參考せられよ。

豫告　十一月は皮膚科及び雜部十二月は小兒科眼科を答へますから其の御積りにて質問を發せられよ。

質問心得

一、葉書は一人一問たるべき事。
一、封書及び往復葉書は規則違反として必ず沒書にする事。
一、豫告の範圍に於て質問せられたき事。
一、縣名又は國名及び年齡は必ず記入せられたき事。
一、異樣なる即ち人の言はぬやうな匿名を用ひられたし。困難女、愛讀女、伺度女、心配女、等の如きは餘り多て紛らはしき事。
一、質問書は左記の個所へ當てられたし。

東京市本鄕區森川町一番地
淡北寮七十八號桑左近へ

流行の半襟

貴婦人女學生の間に當時流行せる半襟なりとて聞く處によれば近來は襟先が拔き模樣となり、前にて合すれば一ッの形を現はす樣にするが流行し來れり、是等は大抵色を鶸色にし地は縮緬又は鶸等にて一筋二圓以上四圓位迄又納戸色は大凡二圓内外の物賣行きよく模樣は時候物の草花など多く特に貴婦人向には地は矢張り縮緬、鶸にて、模樣にはケシ縫と稱する縫取りが流行し蜘蛛の巣に楓或は公孫樹の葉の散りかゝりたるが如き清洒の趣あるが流行し色合は鼠、褐色、栗梅色などにて、三筋三圓内外、是等は廿五歳前後の婦人に似合ふ、又模樣の莖をスガ縫にし花などの副をヒラ縫にしたるが二圓五十錢内外にて卅歳前後の人に適し、粋な婦人は二十五歳前の婦人も用ふるが如く色は概して前者と同じ、又卅五歳以上の人に適する者は、色は鼠などにて極めて淡く、模樣は縫取りにてスガ縫にて、花又は葉等を濃くぼかしたるがあり、是は一筋一圓六十錢位なり又近來は綟り織と云ふもの二種程大分流行の風あり、一は鶸と絹縮とを入分位に段織にしたる者一は、木賊織と稱し無地にて實用的何れも模樣を縫取りにて入れたるもあり入れざるもあり、色は前者と同樣にて、是等は新奇を好む婦人には階級に拘はらず流行す、女學生には今夏以來平生用の半襟として盛んに流行せるはリボン襟と稱して白リボン巾廣の物にて、模樣は桔梗、撫子、水仙、朝顏など時節物を染め拔きたり代價は一筋四十錢小物は廿錢なれば山の手女學生は殆ど此を用ひ、稍上流家庭の女學生が縮緬栗梅色の模樣物を用ふる位なりといふ。

詞藻

和歌

塚越停春選

（天）題知らず　牛込　平塚白百合

虫の音のはてもなきかなうき秋は
さが野ばかりにおとづれずして

評。想美詞美を兼ぬ。

（地）逸題　牛込　渡邊愛子

音もあらく降りしきる雨のかゝる時
我が世の秋は立ち初むるらむ

評。用詞最も妙。
又。我が世の秋の語殊に面白し。

（地）田家月　本郷　河合清子

かけ稲も殘るくまなくとりいれて
月計りなるをやまたのさと

評。實況見るが如し。

（人）暮秋　紀伊　佐田柳子

物思ふ身にしあらねど何となく
哀れ身にしむ秋の夕ぐれ

評。眞に悲秋の情なり。

（人）虫　陸前　大和田はな子

露に生れ霜に消え逝く秋のむしの
小草をやどに夜もすがらなく

評。はかなきはひとり蟲のみかは。

（人）砧　神戸　足立あさ子

みどり子に乳ぶさふくませすかしつゝ
打かきぬたのたゆみがちなる

評。乳房ふくませすかすとは、他人未た想到せざる所。

（人）無常　岐阜　度會よし子

今日ありて明日とたのめぬ水の泡の
消えぬや人の命なるらむ

評。用語の巧を見る。

（人）逸題　福島　橋本美恵子

萩の戸の虫の音やみぬほのかなる
月の光に友や来ましゝ

評。着想面白し。

秀逸

〇〇〇　詠史　越後　坪井和歌子

望月のかくることなき我世ぞとよみしやかくるはじめなりけむ

好史論。

〇〇逸題　福井　島眞壽子

家たちこち木立まばらの龍野は夜明けかゝれり狭霧ながらに

宛として水彩畫の景。

〇〇萩　奈良　馬場昌

月の夜は如何なる蟲やゝとすらん色うつくしき萩の花妻

上句殊に妙。

〇〇秋興　三重　水谷靜子

ちくさの秋にしなれは野に山にこゝろのゆかぬ日はなかりけり

無礙なる歌なり。

〇〇折にふれて　新居濱　山崎くま子

呉竹のすくなる道をたとる身もなをうきふしわのがれさりけり

人生貫に愼みなきこと能はざるか。

〇〇題知らず　美濃　山田愛子

数さへもたらで雪岡につみし野も秋はちくさの花野なりけり

〇〇萩　築地　堤いく子

ひめはぎはかきほのまそでしめくと時雨にそぼち夫まつらしも

〇〇秋思　筑後　後藤藤枝

運ひやる思はよそに針の目も亂れがちなる秋の夜半かな

〇〇失題　姫路　柳田白百合

うたひ女のわび居すと聞く白萩のいほりをたゝく秋雨の夜

〇〇秋夜　岡山　田上濱子

秋の夜の空に心のひまぞなき月こそ澄めれ雁こそわたれ

面白し。

〇〇松秋風　京都　石谷まき

吹おろす音羽の山の松風もあきのとらへと成にけるかな

〇〇月　本郷　歌子

秋風にこぼるゝ露も見ゆるまでこはぎが原にすめる月影

〇〇海上月　大分　加納豐子

久方の空のものとは見えぬかな波間にすめる秋の夜の月

〇〇失題　備後　立神峯子

月夜よし夜よし友よしいざさらばおもふがまゝにあくがれなまし

〇〇失題　滋賀　久子

吹く風も身にしみ初めてしの海秋のあわれを招きよせけん

篠海秋の哀を招くの語面白し。

〇〇逸題　美作　松尾まき

庵守の昔語りに泣かされぬ旅の一夜を雨宿りして

〇〇鹿　山口　吉村眞砂

小牡鹿のつれにかく鳴ものならはあはれは秋に限らさらまし

▷〇〇月前萩　大阪　武内信子
露に挽む萩は傷はしさりなから拂ひもならす月の宿のは
着想見るべし。

▷〇〇夜學　岩代　岸野常子
おこたらぬまなびの窓のともし火はひとに光をそふるなりけり

、〇〇秋のうたとてよめる　本郷　中島茂子
松の枝をもりくる月のかけあはくま萩こほれて蟲なきしきる。

、〇〇旅行　河内　竹内敬子
去年の冬いまはと見えし母君と海路はるかに神詣する
其事知るべし。

、〇〇月夜逍遥　尾張　氷室けい子
うきことをわすれんとすれとなかなかにおもひそまさる秋の夜の月

、〇〇折にふれて　肥前　嬉野益子
ならばわれ雁ともなりてゆかまほし君住む里の空をかけりて

、〇〇露　四坂島　渡邊椿子
名も知らぬ垣根の草の花の上も思ひ殘さぬ秋の夕露

、〇〇秋思　姫路　松下なでし子
二十年に三とせの秋もゆめなれや桐の落葉に窓の灯消へて

、〇〇夢露　伊勢　佐々木らく子
風吹かは亂れやすらむ白露をつらぬきとめよ玉の緒の糸

、〇〇馬關眺望　山口　吉村眞砂子
關門に戰鬪艦の影浮きて六連の島に烟横たふ
壯景。

、〇〇折にふれて　本郷　榎本鈴子
取りすかる可愛き稚子にわれもまたはゝの乳房のむかしこひしき

、〇〇秋の夜　八王子　金山秀子
風ふけば岸邊のあしの花ちりてかりなきわたる馬關の湖

、〇〇失題　神戸　船戸ゆき子
鳴く蟲のなくに任せてあるじ無き萩のみ寺は秋ふけにけり

懸賞和歌

〆切	十八日
一人一首	葉書の事
題	随意

賞品		
天	一人	壹圓
地	二人	七十錢
人	五人	五十錢

佳調

秋の夜　大阪　沖ふく子
蟲の聲かれの音さへみにしみて枕をぬらす秋の夜半かな

失題　横濱　吉川紫香
病葉の一つ浮びてながれゆく野の水白う秋の日くれぬ

寄書説　埼玉　宮倉とく子
書見れは樂しかりけりまのあたりむかしの人に逢ふ心地して

時雨　神田　西村直子
雲をおこしはしる龍かと見る汽車を風に追ゆくむらしくれかな

夏草　青山　かほる

夏草は茂りにけりな我かどのいさゝ小川は見えわかぬまで

深草　下野　渡邉とく

うらがれた袖に包みて二十五の秋に泣く身をあはれとおぼせ

菊　名古屋　木村なら枝

つくろはぬまがきに咲ける白菊のきよきすかたをなにゝたとへん

秋のうたの中に　山梨　さゝ舟

遠砧のかれの音遠くきこゑきて大路さびしく秋の風吹く

あすかへらんとする夜ふるさとにて　播磨　すみ子

ふるさとにこよひ一夜とまちいでし月かけみえす雲かくれして

折にふれて　桑名　しげ子

病にやむ身の淋しきは朝夕を吹く浦風に秋もしられて

逸題　相模　文子

兄君と砂盛りたてゝ水ぎはに遊びしこともありしと思へば

失題　神奈川　秋子

ともかきをおとづれ見んとたちよれは袖にこほるゝしら萩のはな

あさかほ　三河　石川歌子

あさかほのはちを蚊帳のそとにすへてせこかれさめを待ちわふるかな

失題　京都　下村はぎ

あき風に秋海棠の花しほれ泣く人のあり淋しき今宵

失題　大阪　三宅菊子

そよ風や白馬の君が笛の音に露の玉ちる小野の夕月

失題　東京　土田ひさ子

龍の馬に黄金作りのくらおきて秋の花野を行くよ公達

墓亡児　栃木　田川ヨシ

いとし子の魂かむらぬか宵闇にほのかに匂ふ月見草はも

失題　岩代　菅野和子

うき雲の所さためすゆく身にも心ひかるゝ古里の山

紅葉　前橋　宮内りき子

言さしてうつむく人の白き頬にもみち散るなり秋の夕くれ

月前露　弘前　佐伯廣子

さえわたる月の雫かくさむらにこがれかゞやく露の眞玉は

女郎花　牛込　宇野淑子

しらつゆはむすびをけどもをみなへしはなのたもとはほころびにけり

病床にて　信濃　松尾節子

しわふきになやむ夕はすゝ蟲のなく音をさへもくるしときゝぬ

月下宴　麹町　羽田豊子

望月のかくるよしらて酒やくむ笑ひさゝめく高殿の上

題知らず　東京　沼野喜美子

なつかしき君がかへりをまつ夕べ吹く風寒く小窓を打つなり

逸題　上總　高橋花影

暮れて行く淋しき秋や江のほとり蘆の葉枯れて雨細うなる

題しらず　岩代　菅野梅子

月おきてひとりねなむのたゆたひに蟲鳴き出でぬ白萩の宿

初秋風　牛込　和田緑子

はつ秋のしるしの風はわが庭の萩の上葉にまづたちにけり

題しらず　姫路　矢田れつ子

萩尾花よへの嵐にうなだれて松の根もとに鈴蟲のなく

若竹　攝津　平林ふさ子

雨はれし庭の若竹露ちりて葉末の月の影ぞこぼるゝ

失題　相模　宮澤しげ子
ほゝえみつしたるゝ垣に月さえて風なきに散る夏ゆきの花

秋夜月　東京　池上貞子
久かたに照る月かげをながむればそゞろに君のなつかしきかな

砧　下野　野尻よし子
乳母病むと知らせ得て行く夜の路にそぞろさびしき遠砧かな

海　豊後　加納とよ子
夕潮は影もとゞめず大御代の静けさ見ゆる玄海のなだ

失題　韓國　原野幹枝
別れ行く君を見送る野の夕べそゞろ冷たき秋の風吹く

秋の夕暮　長崎　鹽見ちづき
露しげき伏屋に月の影おちて蟲の聲高き秋の夕暮

失題　陸前　山形ふみ子
追分の一節遠くもやに消えて村はしづかに暮れて行くかな

對月待人　長崎　南　品子
獨りして見るにはおしと來ぬ人をまつに更行月のかけかな

蟲　芝　高木きん子
夕まぐれ露ふみわけて野路ゆけばぶりすてがたき鈴蟲の聲

失題　芝　鈴木とみ枝
おばしまに姫宮秋を泣れけり里居わびしき白萩の雨

失題　牛込　遠藤義子
加茂祭り千人にあまる若者の花笠つゞく花衢のまひるま

失題　深川　辻　節子
萱のまのあつさわすれて見る月にれるまもなしき夏の夜中哉

美濃國苗木の城趾にて　名古屋　山村　榮
ゆめのあと残してこゝに城山や松の老木に蝉なきしきる

失題　越後　松永しげ子
母人に泣かれて出でし旅姿なさけの雨のうらなつかしき

友の身をおもひて　長門　三宅千代子
風寒み利根の畔にうらぶれて散るもはかなき糸萩の花

失題　品川　鈴木うた
ふくよかに白重ねせし舞女のたづれも來ずや花野見る宿

失題　巣鴨　大塚藤子
こし方はかへり見まじといひし君の御姿さびし秋の夕くれ

逸題　本所　秋もと
朝毎に落葉散そふあれにはにはかなく匂ふ露の朝かほ

逸題　澁谷　原田千代
をやみなく降る五月雨のさびしさに故里しのぶ夕ぐれの空

秋　岡山　梅窓
白萩のみたれみたれし野分路をもの思ふ少女ひとりたゝつむ

獸惑　岡山　小野ろい子
稲の穂の豊かに垂るゝ畔道を少女子二人歌うたひ行く

夏の月　久美子
風よりもはた水よりも一しほに涼しささそふ夏の夜の月

朝顔畫賛　青森　佐々木愛子
露姫のなさけの乳を分けられて咲くか朝顔ひるがほの花

失題　濱花　花枝みつ
そゝり立つ尾花か末に月落ちて蟲のひろ野となれる夜中哉

渡場　横濱　吉川菁郷子
小春日や渡船まつ間のつれ〳〵に予遊廬の身の上きゝぬ

晩秋　茨城　稲葉よし子
うつせみの夕日にむせふ聲ふせて葉柳ちりぬはらく〳〵とまた

白はぎ　伊勢　[illegible]子
朝まだきそゞろありきに乙女子がそでにこぼるゝ白萩の露

逸題　羽後　柴田春子
鐘の音残る一つに雁来紅の夕影赤き寺の庭かな

逸題　高崎　小澤たき子
花すゝきせめき合ふ野の葉かげにも音なくてちる露はありけり

逸題　長野　橋本今江
白萩の雫を小さき手に受けてけわいする子の愛らしき哉

月前雁　甲斐　岸田かほる子
誰かための玉章ならん月影に行先いそく雁の一つら

折にふれて　埼玉　堀越花子
夕闇のそゞろにせまる五歩の庭萩ほの白う風にうなづく

萩の露　桐生　椿きよみ子
鳴き渡る雁の涙か萩の葉に玉と置きそう白露の散る

蟲　千葉　高橋[illegible]枝子
文月な松の葉ごしに眺めつゝ小萩がもとの蟲の音をきく

菊　河内　陸山[illegible]子
朝風にゆれておちたる白たまのつゆさへ匂ふ菊の花哉

はまでら　大阪　はま子
波の音磯の松風しづかにて月すみわたる濱寺の里

雨中萩　大阪　磯まさ
なりたちて傘さしかけん由もかなあめになやめる庭の白萩

失題　牛込　ひで子
尾花野や朝霧はれてほのかにも鐘の音すなり秋風の寮

秋夜　京都　砂川澄子
澄む月に手馴の小琴かなづれば窓の外ちかくこほろぎの鳴く

朝顔を見て　越後　靜子
なき妹のかたみとなりし朝顔の露もおもけに咲き出でにけり

擣衣　大和　英子女史
山松のあらしの末に聞ゆなり里も夜寒の衣うつなり

滿洲の秋　足尾　小田けい子
見渡せは千里の荒野鷲ぞ舞ふ北滿洲の秋の夕暮

涙　大阪　正岡ふで子
あゝと云ふ言葉の末に時雨してくもらぬさきにぬるゝ袖かな

失題　越後　紅露
さとの子らにふみにしられしはきの花たをれながらもはなさきにけり

古塚　大阪　二葉子
糸すゝき招けどたゑて人とはぬ野邊の古塚月ひとりすむ

秋月　大阪　澁谷ちかえ
見る人の心々にたのしともうしとも思ふ秋の夜の月

秋興　大阪　山崎玉子
思ふどち紅葉狩りして更に又暮れなば蟲のやどやとはまし

折にふれて　福井　鶴子
ふるさとに親のある鳥は夕からすなく音にさへもこゝろおかれて

同　麹町　羽田豊子
聞えある都の人にみせはやな姨捨山の秋の夜の月

失題　芝　二木こま子
牡蠣船に灯火ほそき雨の宵や水の難波の秋は更けたり

逃題　竹原　堂面幸子

我ゆけば蟲の音絶えんいざゝらはゆきつもどりつこゝにあかさん

團扇　京都　深谷銀子

耐え難き暑さも風に忘るゝはこれも恩みの團扇なりけり

山家紅葉　京都　小西辰子

山かけの賤が櫟屋の軒ちかくさらす錦は紅葉なりけり

松蟲と鈴蟲といづれがよき哉　木更津　菊野

まつ蟲はつらしと思ふをりしもぞうれしくもきくすゞむしの聲

初秋露　紀伊　須賀原登起

花はまた咲かむともせむ月草にほの見えそむる秋の夕露

初産の前に　美濃　餘島敏子

男の子なら太郎とやせむ女子なら小枝と呼ばむと祖母のほゝえむ

日　臺灣　大橋翠雪

久方の空ものどかに出る日は曇らぬ御代のしるしなりけり

蟲　京都　松井ひで子

いそぎ行くみちのゆくてに鈴むしのふりすてがたき聲を聞くかな

秋草　神田　鶴岡とく子

世の人の心に似たり秋草の色さまざまと咲き競ひけり

秋祝　本郷　高野元子

豐としのわさ田おくて田ゆたかにて神まつりするうふすなの杜

月前菊　埼玉　宮倉いれ子

おのつから月の光もさしそひて影さへ匂ふ白きくの花

失題　栃木　藤澤きみ子

咲亂る菊の園生に只だ二人秋の一日は興多かりき

秋海棠　美濃　八重子

一

やさしき君が　もの學ぶ　書齋の障子　引きあけて
鏡とうつる　まはり縁　いまは庭のみ　うづもれて
みやびに結ひし　ましば垣　牛はやれて　蔦葛
我物がほに　はひのぼる　石の手洗　苔むせる
庭のうへに　ゐすはれど　水さへかれて　あはれさを
汲む人もなき　夕暮に　鉢まひ石の　そが許に
紅にほふ　秋海棠　ゆかしく立てる　秋海棠

二

堅くとざせし　中垣の　扉もあるを　いつしかに
心づくしの　秋の風　音づれそめて　軒の松
古葉を散らし　一むらの　尾花が袖を　なびかせて
主なき宿の　月をたゝく
拂はぬ庭は　秋の野ら　なく蟲の音を　やどしつゝ
小雨そぼふる　そが中に　一人笑ふは　秋海棠
むかし語るは　秋海棠

三

やさしき君に　愛されし　花は我なり　美しき
君をしたひし　花は我　露にも誇る　君が手を
そゝぎし水を　打ちあびて　花咲きにけり　秋どこに
美しき君が　嫁ぎてし　目出度き日こそ　我がわかれ
日數をふりて　はや六とせ

短文

秋夜の感（乙）

鎗枝　石山とら子

をちの里々にひゞく小夜砧、まどほになりゆきて、蟲の聲々やう〳〵すみまさる程に、いとねられねば、ふすまふみやり起き出でゝ園の小窓をおしやれば、千里の外までもくまなく晴れ渡り、鏡の面拭ひたらんやうなる月の光は、四邊さやかに前栽を照らし、千草の葉末に宿れる白露のいとも美事にきらめきて、さながら玉の如く、荒れはてゝたふれかゝれるまがきには、風なきにたをやぐ尾花の影やせたるなど見えて、其景色の面白さ實にいはん方なし。又池の邊に生ひ繁れる茅萱の下に鳴く蟲の音は、いよゝ喧ましく、常にきゝなれし筧の水の音までも昨日にかはりて哀を添へたる心地するに、笛竹の音さへ月の桂の散りかゝるかと覺えてはら〳〵と木槍にひゞきて殊にわびしきにつれ、そゞろ家郷の偲ばれて來し方行末の事など限りなく思ひ出でゝ恍惚たる折しも雁か音遠くなき渡り身にしむ風のさむけきに、思はず頓せば、桐の一葉は心ありげに窓打ちて散りぬ。

花舟（丙）

宇都宮　君島喜美子

爽涼しい朝でした妾庭の栞戸から瀬戸の小川へ出てふと 流れに目を向けましたらまあ何んて可愛らしいでせう 岸邊の小草の間をさや〳〵とさゝやく様に流れる奇麗な清水にゆられ〳〵て 露葉の美しい野菊の花に小さな愛しい黄蝶が一ッ泛してのつて 流れて來るのですもの姿あんまり可愛らしいのでそつと手をのべて救ひ上げ様としたら 胡蝶ひとつ舞ひ上つてひら〳〵と行つてしまひました 川上を見ると美ちやんと豫ちやんが綺の袂で摘んで 土橋の上から流して居るのでした妾は胡蝶のかたみの此の美しい花を押花にしようと思つてそつと取り上げて書のまゝ本の間へ栞に挟んで置きました。

秋は來た（丙）

前橋　野口やす子

秋はきた、天上の星にも秋は來た、地上の草木にも秋は來た、蜜よ乳よ小川の水にも秋は來た、天の空蒼に翔ける鳥にも又地にありて匍匐ふ昆蟲にも秋は來た、然して余の特愛の秋海棠にもたつぷり、秋は宿りて何時も私を慰めて呉れる、余が心正に秋を讃んでそゞろ詩人の思を偲ぶ、空靜に月清し、秋の女神は地上萬物の口に生命と希望とを與へける哉。

朝

横濱　坂本幸枝

私は毎日曜日の朝、海より二十浬隔たりた小高い公園地に、草葉に宿せる白露を踏みつゝ散歩するが常です、まだ霞に包まれつゝある海原よりお日様のお昇りになる時、青い光をあびながら大船の霞の中より現はる様、白帆の數多沖を離れて三々五々走り行く様など恰も白羽の胡蝶群れ遊ぶかと思はる此方の木の葉かくれには 朝日を祝ふ蟬の聲も聞えて心地よし、あゝ朝の散歩の愉快さよ。

撫花

岩代　菅野ひろ子

妹は昨夕死ました。今朝は猿の出入も少く、部屋も片付いて、寂しさは一入であります、それでも、病間三十日、枕元で永い馴染であつた赤や紫や、白や黄の、雜多の萎れた花は、其儘に殘しました。香もない、色あせた花ではあるけれど、これあれば幾らか心遣りにもなります。妹の亡骸も、此花のやうに、野邊へは遣らず、何日までも、其まゝ臥せさせて、花は妾が添寢もして上たいけれど、あゝ此夕からは、花ばかりが、妾の友達であります。

戀

岐阜 西村比智子

谷川の清き流れに紅葉一つ浮きつ沈みつ流れ行く、ながれ〳〵て渦まく中に沈みぬ、紅葉や心亂れしならん、時過ぎ渦滑へ又も添ふて流れ行く浮きつ沈みつ、君あり二筋の川嘆……。

新妻の留守居(甲)

弘前 野の花

今時計は五時を打つた許り、「ボンナリ」と椽の柱にもたれ、九月の始とは云へ北國の常で夕方渡る風はくびを 稍糸できりつと占めて行かれるやうな心地がする、と、良人の顏が判然と現はれる、おー君には新婚の夢未だ醒めぬのに職務の爲とは云へ振りすてゝ 演習場に行かれたまだ二十日も留守をせねばならぬ、立派に留守をするのは妻の務、だけれど私は辛い、戀しい、あゝ、此寂しさを何んとしやう、知人一人居るでなし言葉はちつとも分らず、下女だつて昨日來た許り、だつて無理はないでせう夫婦と云ふ名を附せられてから一週間經たぬ仲ですもの、そーそー御出立の時腹痛むと仰せられたがどうなすつたらう、從卒がついて居るから心配はない樣なものゝ、乘馬で行かれたから若しや途中で烈しくなりや仕まいか、右の「ポツケツト」にそつと「セム」を入れて置いたが御氣が付きなすつたらうか、と思へば無暗に戀しくなつてあゝ貴郎と咽喉に出るのを耐へる辛さ、おゝ亦今夜も夢を見ませうよ。

嵯峨の秋

佐原里 小澤蝶子女史

露霜のまゆずみ、さよ嵐に消ぅ冴へ渡りて、千里一碧銀河星華を綴りて蒼茫の裡を流るゝ處、折々出づるしら雲は、月姫君が飜へす白綾の裳裾とぞ見ゆ、蟲聞きの男連れ、女連れ、あえかに若き友禪の、袂の亂出しのちらほらと、何に笑むや二八の少女、さゝやき合ひて、萩の花妻亂舞せるはおぼろ路を辿りゆく。嵯峨には優しき戀ありけり。

夕の港

神戸 安藤たか

淡路島に日が落ちて月の光がさして來た、二階のてすりによれば青々とした海にはもう白帆の影はないが大きい、汽船や灰色の外國軍艦らしいのが澤山見えけ、今黑い煙を吐いて居た汽船は急にむら〳〵と白い煙を吐いたかと見えてるまに牛のなく樣な汽笛と共に動き出した、今まで美しくうつゝて居た燈臺も月も波と共に長く短くゆらぐ。

水まき

下谷 久子

夏の夕ぐれ、湯上りの心地よさに、二階の机によつて何か書こうと筆を

とづたが不意に庭の方で愛らしい笑ひさゞめきが聞えたのでてすりによつて下を眺めるとまた、芳ちやんと猛ちやんとがはだしで水まきをして居るので二人とも後で袂をしぼり裾を高くはしよつて、ふつくりした人形のやうな手足をスツと出している私が顔を出すと、芳子がすぐと見つけて「お姉ちやん、猛ちやんがいますべつておひざついたの」。成程猛ちやんのちツちやい小僧さんは両方ともぼツちやり丸く黒くなつている。けれど御當人は一向平氣で姉さんの云ふ事が何かおかしい事でゝもあるやうにニロ〱しながら鈴のやうな目で私を見上げる見る〱夜の色がせまツて庭中ほのぐらく「芳ちやんのとき色のへこ帯がうツすりとすけて見へるばかり。「さあお家へおはいり」と母に幾度いはれてもキャツ〱とあちこち飛け廻はつて遊んで居るのでとう〱二人とも母につかまへられて、あんよを洗つてやりました。

九時半

姫路　鈴木しげ

妾と母様とが釣ランプを中に、向ひ合でお仕事をしてゐると美いちやんはふらばいになつて御本のお復習をしてゐます。

「……お様が……申しました……」美いちやんは讀みさしにしては、上を向いて頻りに時計を眺める、私の家では、九時半になると、お湯に行く事になつてゐるのです。

「お母さん」。もう半ですよ。ねーお母さんつてば」

「へい〱」とお母さんは繕ふ手を、おいて、柱時計を見かへして、

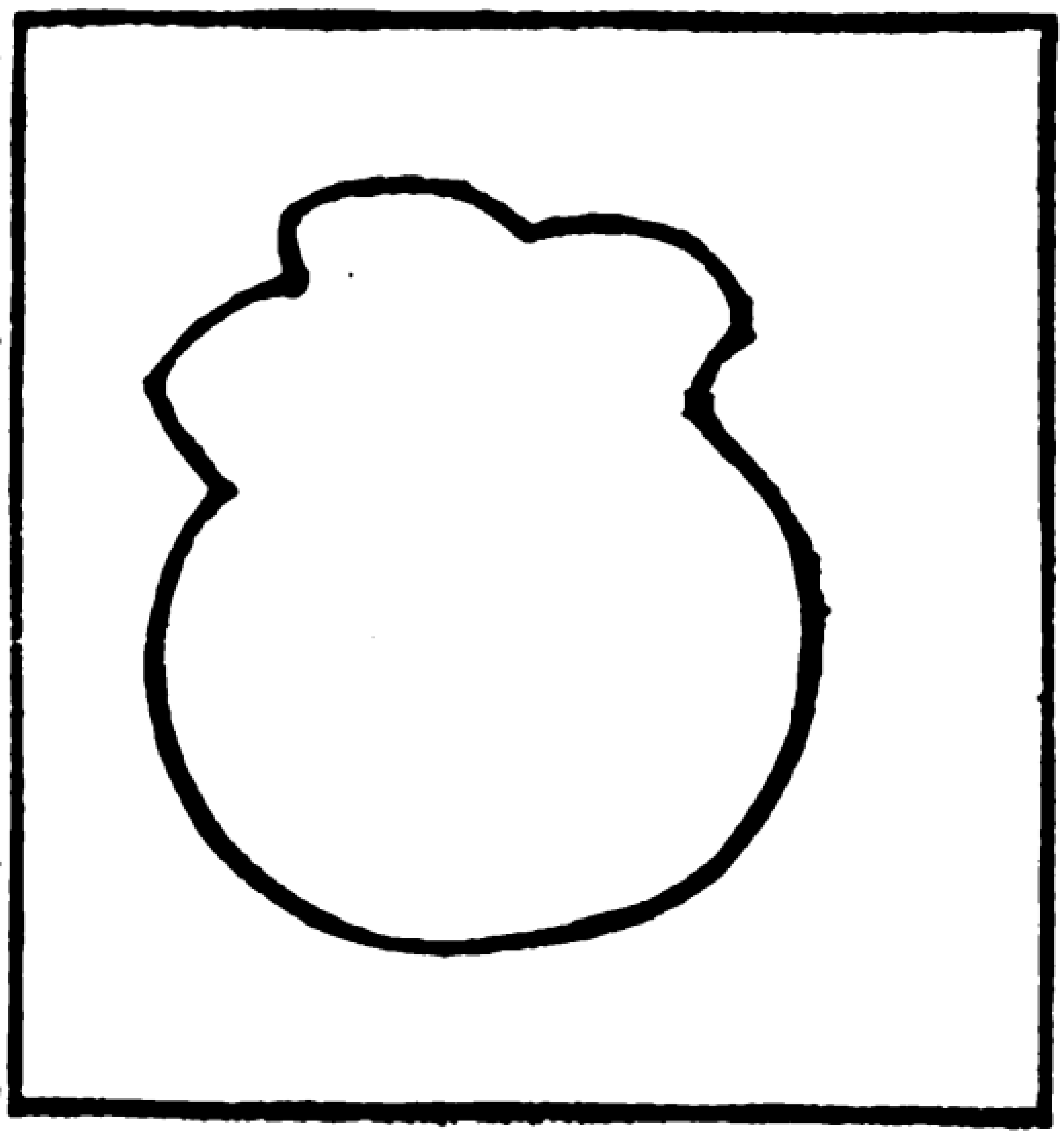
「お丶ほんとだ」と今度は、仕事をおしよせて、針箱から風呂札を、お出しになる。

美いちやんは、早臺所から手拭と石鹸をもつてきて立つて唱歌を歌つてゐる、お母さんが、お立ちになる、美いちやんが「行つて參ります」と例の如く言ふから「お早くお歸り」と應へた。障子をあける音、下駄を出す音、履く音、ガラガラツと戸をあける音、

「お丶い丶お月様だこと」!!!。

新案鳥の子書

〆切十一月廿日



畫して鳥の子紙といふ皆さんの意匠でこれが鶏になるか鷲になるか、それとも又猫になるか、土瓶になるか御工風一番案じでごらんなさい一等より五等まで賞品をさし上ます。

海の暮景

上總　高橋花影

際限もなき沖を眺めつゝ吾れはたゞ一人汀に立てり。鏡の如き水面は彼方此方に漣猗を立てつ吹く風を孕んで走る眞帆片帆。夕陽は既に西海に沒して、藍碧の空はオレンヂ色に彩色られつ……波打つ渚には破れたる捨小舟。葦の葉は枯れて秋風はそよぐ。あゝ淋しき秋の暮なる哉。

蟲の宿 (丙)

大分　加納豊子

うき秋を青に立てゝなく蟲の露の宿りともせばやと刈り殘せし籬の糸

萩一本、夜な〳〵鳴る蟲の音を露に移ろふ月影と共に宿して秋の憐を添へしも幾夜、あはれ其の蟲の音も夜毎に細りゆく昨日今日、かりそめの露にだにえたへぬ小萩の花の上に心なき秋雨は降りそゝぎぬ。

聾と聾

上野光枝

妾の隣家に一人の聾の老婆が茶店を出して　生活して居るスルト或る日同じ年頃の十八り聾の老婆が店先へ來て　兩人で大きな聲で何か話をして居たが妾が其前を通るのを見て隣の老婆が「今通つたのは紙家の光ちやん　だらーと云へは、一人の老婆は「何あれは紙やの光ちやんだよ、隣の老婆は「左樣かへ又アシは紙屋の光ちやんだと思つた」……

虫

能登貞子

夏の末より鳴きつゞけて秋になり　極めて寂き蟲の聲あはれに面白し中にもすぐれたるは鈴蟲、松虫なり轡蟲はあまりに喧噪しく疎まし促織はさせる風情も無くや草雲雀とて細やかになつかしき　聲するか有り歟によまゝほしくこそ、この外よき音なるも多しゝところもに亂れ合ひたる秋草の中を押分け蟲狩るすさびも優になつかしくよし有る　家の物閑かなる庭にさま〲のなく音を聞き集めむも亦たのしきわざならん。

月と日

豐後、大橋眞雪

圓々として松の枝を上る月は如何に靜かならずや、赫々として山の端出る日は如何に眩しからずや、月は沈思憂愁の厭世家の如く、日は快楮喜絕の樂天家の如し、皎々として宇宙を照す月は如何に明かならずや、赫々として、四海に輝く日は如何に盛んならずや、月は堅忍なる深慮ある男子の如く、日は輕薄喧噪なる女子の如し、漠々として曉天に消へ入る月は如何に哀れならずや、紅々として西海に沈み行く日は如何に美しからずや、月は斷頭臺上に消えんとする義士の如く、日は若殿の寵に入りし美人の如し。

うつしゑ

本郷勝花

懐しき亡き友がうつし繪。豐面のふくよかに皙の品高く花も恥らふ御かむばせ一きは美しく見えさせ給ふ。何時うつさせ給ひしか、君よ、なぜに贈らせ給はぬ。あゝ思へば五年の昔、共に母校をはなるゝ時かたく契りしあの事、よもや忘れ給はじものを。おゝ何をか笑ませ給ふぞ、わが愁をよそに見給ふや。優しく嬉しかりし其御笑みも今はたゞ涙の種なるを。

燒松茸

攝津里しくれ

去年茸狩の折なりき、籠にみちし獲物嬉しくて其日のむしろに引上げしに、一時にせめくるひもじさやるせなくて茸飯炊く間もゝどかしく。落葉かきよせ茸埋めてマッチすりつくればサット吹立つる山風に見る〳〵出來し燒松茸。其味其香今も殘ると思はるゝ。……よし茸狩の興は忘るとも、いかで此事忘れ果つべき。

嬉しい夜

越前片山千里

明日から暑中休暇だと云ふ夜は、久し振りで父上や母上や姉上に逢へるのだと思つて、嬉れしくつて嬉れしくつて眠られなんだが、明日から學校が始まると云ふ夜も、なつかしい師の君や親しい友達といつしよに居られるのだと思ふて又嬉れしくつて眠られませんでした。

蟲の音

本郷 西岡古代子

風邪の心地とのみ侍りて、醫師が與へし藥も學の業も怠りがちにありしが、病氣のみは些少も怠らで、日每に數まさる咳嗽につれ、肉殺げ、血瘦せゆくにあわてふためきて、醫師よ、藥よ、と徒に騷ぎても甲斐こそあらね、醫師が敎ふるまゝに、我は今、秋の哀れを我身一つに集めて、霧深き故鄕の道を歸り行くなり、月なく、星稀に、微けき燈火一つ、我家を漏れ來るにやあらん、車は懷かしき門の前に停りぬ。父、母、妹もかけ出でぬ。あはれ懷かしき父母妹、されど互にものもえいはず點頭きしのみ。やがて、四人は團居に就きぬ。されど、あゝされど、倶互に、念がしく聽きてたゞうなだるゝのみ。秋の夜寂として更け、庭もせにすだく蟲の音ばかり細うも細し。

停車中にて

栃木 玉野とし子

汽車は停まりぬ、ドーアは開きぬ、降りる人乘る人の、何となくそはそはして落ち付かれねば、場所柄とて詮なし、されど異國人の、僅かなる停車時間を利用して、下車し、緩歩プラツトホームを、行きつ戻りつするを見ては、邦人の心を見らるゝ思ひして快からず。青森までは前途程あり、妾は斯かる光景を、まだ幾度か見ればならぬなり。



はめ繪の例

玉章

岩代 木下壽子

垣根の朝がほ明日はいくつぞ咲くなるなどかぞへつゝえんにこしをおろせば白萩の葉末を渡る風のいとつめたくまがきこしにかゞやける青き星、いと美し、身も世も忘れはつる折、「姉さん御手紙」とうしろより妹のこゑいそぎうけとりてうすぐらき庭の燈に照らせば例のなつかしの君より……

開かんもおし……開かぬもおし……あゝ……

秘密

河内 田中八須子

竹子さんほんとうに是れは秘密ですよ、あなたより外には決して語りませんと、松子さんの物語り、聞た竹子さんはまた、梅子さん是れは極々内證ですがあなた許りに御話します、梅子さんはまた菊子さんに、菊子さんからは萩子さんと、それからそれへ順々に遂に松子さんの秘密は知らぬ人は無い樣になりました。

ゆめ

芝　高木きん子

いよ〳〵あすが演奏會の日となつたので、今日は其練習や打ち合せをなすべく皆學校にあつまり一日熱心に練習をなして家に歸へりぬ、教師より何かと注意されし事などむれの中にくりかへして　肝心にかゝれば又ヴアイオリンとり出で糸や弓などしらべ　今一度練習をなしあすは無事に奏し終るよう心に念じつゝふしどに入りぬ。身は早や演奏臺にのぼりピヤノの前にて合奏するべく。風琴科の生徒姿をたゞして椅子によりぬ妾と今一人二人にて奏する筈なるにいかゞなしけん　待てど〳〵出でこず、多くの來賓は水をうちし如くしづまりて皆うなだれ見まもるに、妾はいかにしてよきかたゞ〳〵心まどふうち、教師出で來りて、今一人は急に差支へ出來たれば獨奏なすよしといはれ、今更いなむ事も出來ず心を決してやがて譜に向ひ弓とりなほし　教師の指揮のもとにいく度かとどろく胸をしづめつゝ漸く奏し終りぬ、來聽者皆手をうちくれるにいよいよ面はゆく臺に歸へりホツト胸をなで下すと思へば全身汗にしみてありあたりを見まはせば今のは全く夢なりき。

時計は早や四時、あくればいよ〳〵其日ゆめのやうにならぬようと日影さしそふまで心落つかざりき。

橋上の眺

和歌山　植木操子

日も、はや、山のかたに落ち、夕映の光は、うすれ行きつ。ゆめみるが知き、星くづは、次第に、奇しき光を放ち、夕の露は、青葉の上にみちたり。何心なく。切戸おしあけしに、氣もそゞろになりて、そこはかとなく、歩をうつし、とある、橋の上にいたりぬ。

すゞしき風に、袂をひるがへし、欄干に、打ちよりてながむるに、雲なく、月は、華やかにさしのぼり、水面は、一時に金色をあらはしたり。折りしも、川上より、話の聲を乘せ來る舟あり、とりなほす竿のしづくは、黄金の色に見え、艪を弄する、さゞなみは、月を碎いて金波となり銀波となる。

月

大阪　磯うす紅

思ひ出せば涙の種ながら、今年もまた月に泣くべき夜は近づきぬ。わが母ば一年有餘の大病にて醫藥の効も無く最早死を待つのみなりしが、儀偶人の勸めらるゝ儘呪を教はりしに、それより病日に〳〵輕く、此調子にて進まば月見には歩行も自由なるべしと人も妾も思ひしは、忘れもせず廿四年七月妾が九歳の時なりけり、されど天は無情なり待ちし其夜に母はあらず空しく野邊一片の茶毘の煙となられぬ。それより月に對し嘆かぬ年は無しと、此話聞いて妾も胸せまりぬ。

夏の朝

大阪　大谷きく枝

とりとめも無い夢の中中に眠が覺めて、終夜蚊と蚤に食はれたかひなを掻いて居ると、内のも、隣りのも、向ひのも、鷄がしきりにコカコーとうたひ出した。ヘテ夜が明けたのかしらんと、雨戸を明けて見ると、そうでもないほんのりと明けかけて居る。庭の立木の線深う繁り合つた梢にぼうとした光の月がおぼろげに掛かつて、而かも其が六日だから若葉に鐵といふ光景。内のおさんどんはゐらい勢で水を汲んで居る。向ひの

作兵衛はんはいつもの様に牛を引いて草刈に出掛ける。また誰も居ない學校の庭の若葉の蔭には虫のしきりに鳴くのが聞える。我魂は此の面白い景色にさまよひ、我今吾にあらざる折しも、思ひ掛無き杜鵑の一聲—ソツトして振り返へると遙か向ふに男と女と二人の幻影が現れた。

秋の夜

備中　小野るい子

風鞠の如くまどかに鮮かに尾の上の一本松に懸れる月の光にあこがれていづこともなく徜徉ひ出でぬ、夜は恰も白晝の如くつらぬきとめぬ白玉は、草葉の上に月の光を宿し、白妙の秋うち連れて、舞亂ぐ尾花の下に、虫のむせかへる忍び音もいと悲しく、冴へに冴へたる大空を、雁の誰か玉章をや運ぶらん、聲たえ〴〵に鳴きつられたる様げに趣深き秋の夜の野邊。

初秋の朝

紫花子

手水を用つて戸外へ出ると朝の涼風が臉から入つて誠に心地が宜い近所の家はまだ皆戸がしまつてる只堀尾さんの南向の窓の戸が一枚だけ開て居る。

向ふの方を大きなこゑで喚作らガラ〳〵と八百屋が荷車をひゐて行くまだ早いので人通りが少れなのに、朝の風がさつと吹く牛乳配達が八百屋の行た方へ威勢よく驅けて行く。其後暫し人通がない、突然に後の方で、とうふいと云ふ聲がしたので驚いて其顔を見たら、まだねたりない様なかほで俯下いて歩いて行く、其姿が見へなくなると、今度はいせいのよい鈴の音がして新聞屋が横町から出て來て、私に萬朝と國民を、堀尾さんの處から時事を入れて又驅けてゆく。

昨夜の友に

神奈川　恒子

明日は、この淋しき宿に、老ひたる母と、幼なき弟とを殘して、旅路の空にさすらはん身とし思へば、流石に悲しさのまさりぬるを、今宵はせめての名殘りに小琴かなでゝ暫時母人の心慰めばやと存じ、心のたけにかきならし候をば去なくも亂れし音の御庭に通ひて、みやびなる御心に御越し遊ばしあまりの嬉しさに、別れゆくべき明日の身さへうち忘れて月の夜をいと興深くあかし候へぬ。

今日は旅窓の下に深く昨夜の失禮を謝すとゝもに、折柄もおほめにあづかりし今はなき嚴父が手入の四季の庭去年の形見の　秋菊もやがて咲き出で候はんに。其なりこそ君が御歌草に色香をこめて賜はりし賞哉のあともえならずまたかつて數ある花の品定めせし時、菊こそと二人一所に云つゝ出でたるがおかしと笑ひ給ひし君もありしよ。

今また其花は開くとすれど、雲のへだてを如何かせん、それにつけても母の思ひのふかゝらましを、せめては君暫時がほどだに妾にかはりてあはれ御情をたれさせ給はゞ母も　幸多きことゝ旅にある身に心ひとりいと切に候へ。

道すがらおもひは深し酒句の
水にうかぶる古郷の色

秋草

静岡　鶴岡とく子

紫陽花は七色變ると云ふ噺しを聞いて　世の中の事もかくもあらんと

揮つて見たことがあつたが、今又秋の野邊を見渡すと萩、尾花、女郞花、桔梗、撫子、葛、藤袴と色さまざまに美を競ふて居る、然しこれも又菊花の類で眞底からの美でなく、上べばかりの色香ではないかと考へたら、人の心も矢張り此秋草の樣かしらんと思ふにつれ、自分の美ならざるも遺憾する事はない、上べの美よりは結句ましだ、と、心强い思ひがした。……

懸賞

短文

題 隨意

〆切 本月二十日

一人一題 葉書に限る

賞品は 圖書切符

甲 一人 金壹圓
乙 二人 五十錢
丙 三人 三十錢

雨の渡場

牛込 平塚いと

雨はシツシツと降つて向岸はおぼろに 柳の葉からは絶えず露の玉がポツリポツリと落ちて汀にしげつてゐる蘆の一葉一葉にやどる。サラサラと風にそよげば露は生きて走りころころと 銀の玉をころばすやう水にきゆる、

あゝ此蘆にできた魚はさぞ美しかろう、

船はあし間をわけて位置をむけかへた、老船頭はその日にやけた手に棹をとつた、

岸を一つき船はすらすらと川中に浮び出たと 右手の蘆みから行くふたこゑ三こゑなきたつた。

秋曉

山梨 小々舟

瑠璃色のみ空に曉星のかげ白う、まだ人顏の定かならぬ頃を稻刈るべく田の面に出づれば、隣田にはゝや、女が打振る利鎌の音霜に冴えて姉樣かむりを吹く風寒げなり、落葉かき集めて焚火點ずればポスポスと音してやがて立のぼる一條の白煙流れ流れて消え行く 森の端より飛び立つ鳥二ツ三ツ四ツ。

空には星かげいつしか消えて東の山端恰も火の如し。

秋の野

京都 松井ひで子

詩集片手に野べに來て見ればさながら錦を織り出だしたらんやうに、桔梗、かるかや、女郞花、などとりどりに咲きそろひ中にも名のみはおそろしき、虎の尾、鬼のしこ草、など愛らしき花も見ゆ、たがぬぎ捨てしやらん藤袴のかほりゆかしきに、

きて見ればかほりもゆかし藤袴たがぬぎ捨てし主は知られど

など口ずさむ打ち招ぐ尾花が袖にさそはれて いさゝ川に來て見れば愛らしき糸萩に結びそめけん露のこぼるゝばかりなるもおかし 折柄かげろうの二ツ三ツいづこよりともなく 飛び來たりて此の萩の葉にとまりぬ露をもとめんとてや。

やがて我身も消えゆく露の命を知らぬ顏に!!!

妾の姉さん

栃木 齋藤そめ子

妾の姉さんは去年の春〇〇女學校を卒業して 間もなく近所の呉家にお

嫁に行きました、其の時は姉さんのお友達は申すまでもなく妾のお友達まで美知さんは理想が低いの意久地がないのと笑ひましたので妾まではづかしう御座いましたが、姉さんには先月玉の樣な男の子が出來て家内益々圓滿となりました、今では前に笑つた人達は皆うらやんで居るのです、ほんに人の心程おかしいものはありません。

初秋の朝

下總　藤崎美奈子

祖母さんは眠られないと見えて起きて戸を開けられる。まだ外面は薄闇い。庭の小池へ落つる水が琴の音の樣である。一陣の風が築山の小笹を鳴らしたと思ふと、軒端の破れ風鈴がカチと音して、初秋の朝の冷たい空氣が、青蚊帳を縫ふて入つて來た。スツと蚊帳が直ると共に妹の白色のリボンが枕の先へポタリと落ちた。妹の松子は無邪氣な顔ほの白う、スヤ〳〵と眠つて居る。嗚呼たつた一人の妾の妹！、妾はリボンを拾つてキツスした。

小庭のばら

相模　田中五十子

今朝もとく起き出でゝ大好な紅のばらをながめた。あなあはれ一夜の雨につやこそ美しいが皆首うなだれてしまつて居る。昨日の樣を思出てあまりのあはれな風情に何となくむかなしく葉かげ枝かげさしのぞいて見たら、あゝ嬉しい青々とした大きな葉かげに只一ツ美しく氣高くゆふべの雨にめげし樣もなく咲いて居た。しかも其風情がいと清き乙女の世の誘惑世の荒き波風にもまれつゝも或一個の光明を見とめて聊も操を汚さぬそれの如くに思はれて實に尊くゆかしく、一度はつとかけ寄つて枝まで手をそへて見たがあゝ如何しても無情にその花を折取る事は出來なかつた。

糸瓜の水

磐城　小林槇枝子

「今年こそはキツト糸瓜の水取つてよ」と自分は七つの桂チヤンと、ささやき合つてひそかに、まちに待つた、十五夜の宵は來た。今西の空の色麗はしい夢が消えてしまうと、セウ輝く月姫の御顔が見えて來る、と玉の樣な露で化粧した小萩がうれしそうにツク〳〵ふるい出す、庭の中は芒が笑つて桔梗が咲いて月姫樣の御使でも、くる樣なと母上が笑ひながら御供物を上げて居る傍を二人はスルリぬけて裏に出た。糸瓜棚は葉がよく茂り交してゐる、眞白な月光をおびた、其青白の長い顔が、おかしいとて桂チヤンはふき出してしまふ。自分は、いちやく蔓を切りはなし、元蔓の切口を二ツこしらへて、二ツの壜へさしこんで其まゝ歸つた翌朝桂チヤンを起して、露の玉を散らしながら、糸瓜棚へいつて見るとうれしや自分のには一ぱい……桂チヤンのには少しも水がない、桂チヤンの泣き出しそうな顔を見て、自分はよんどころなく云つた。「いゝわれ姉チヤンのでお人形サンの紅といてお上げなさいれ」

月出

岩代　菅野廣子

夕燒の空、やう〳〵紫にかぎろひて、暮六つの鐘は、やがて古りし銀杏樹に數まりて、稍に美しき星を生みつ。遠方の里に灯影ちらほら見え初めし頃は、山は淡く森は濃く、墨繪の如くなりゐると見しも暫し、東山の端に凝りし薄雲の、灰色にぼかされ、白色に變りて碎くるよと見れば

十丈の松の上に、はや白銀の玉、嚴そかにかゝりて、賤の女が芋洗ふ小川の水にも影を映しつ、露滋き野路は、一面、銀砂を布きたらむやう、蟲は一齊に鳴き出でぬ。

落雷

青森　大野信

父は旅行中なので母と私と妹と三人 今し夕飯に取りかゝらうとした時でした。前からばら〳〵と降て居た雨が俄に劇しくなつて電光閃めき雷鳴り響いて天地も今や覆さるゝかと思はるゝ計り。すると隣の暗い室が急に青白い光りに 明るくなつたのではつと思ふ途端、パリ〳〵ガラ〳〵ッと耳を聾するやうな音がした。近所に雷が落ちたのでせう。三人顔見合せて暫しはぼんやりして居ました。間もなくヂャン〳〵と半鐘の音覚えすぞつと身がすくんだのでした、妹を背負ひ母と共に門口に出たが電光は絶え間なくぴか〳〵つと光り雷は今にも頭の上に落ちそう、其物凄さはとても云ひやうがありません、外に出て見たら停車場の彼方が火事で焔が炎々と燒え上りかなたの空が眞赤になつて居た。

來客

本郷　紅梅

暑き日の午後二時威勢よき靴の音 わがやをおとなふわれもいそ〳〵立ち出で見れば、思ひもよらぬ故郷よりの人、しかも師の君なり、まづ御なつかしく直に奥に請じ折柄あるじも 在宅なればビールをすゝめ参らせつ種々ふるさとの消息きく、殊にも喜はしき父上母上の御ことづて親しく承りては又更になつかしき。よく母様に「御前のは皮ではなくてみを削るのかと」笑はれし菓子をむく此手元今見まさばそれでも少しは上手になりしとほめ給ふらんなど思ひ出し語りて笑ふ。げにかやうの御客様にはあつさも忘るゝ心地す。

火事

神田　元子

ヂャアン〳〵と遠く幽かに警鐘の響、さすが寢坊の妾もはつと目が覚めた、四邊りはまつくら、而もしんとして唯人のいびきとチクタクと刻む時計の音より外耳をさへぎるものは無い。だん〳〵あちこちの鐘がふえて次第々々に騒がしくなり、氣の弱い妾の胸は早鐘を打つ様である、つと手を延べて燐寸を探し出し、ふるへる手先で火を燈した時、階下で叔父様が火事の様だねと仰言ると 叔母様のさうですねえとお答へなさるのが聞えたが、然しお二人共別段騒ぎもなさらない、其内表でこれは遠方の様ですねこれぢや大丈夫ですと話し合ふのが 手に取る様に聞えたので妾はやつと胸撫で下て燈を消し再び枕に就きました、折柄三時を報ずる時計の音、チン〳〵、

おちつき

濱　花澤子

七月の末ころでしたが暑中休暇でかへつて來た 俊子さんとある晩一しよに御涼みにまゐりました、松の葉ごしの月影を身に受けながら行く〳〵とそのすゞしさはそしてところ〳〵何ともかともいはれません、露草の上に螢が美しい光を放つて居ります。俊子さんがとりたいといふのをあぶないと制しながら づん〳〵行くと小橋の上に出ました、下はすき透つた様な水がさら〳〵と流れて居た、足元から螢がふわつと光を放つ、俊子さんは「アラッ」と大聲をあげてッ

ナツで引きよせようとするとたん、ウナブンと水に落つた。私はアツト呼んだが御本人は落ついたもの、「淺いことよ、貴女もなりていらつしやい、好い氣持よ」

淋しき思ひ（乙）

東京 清水玉露孃

讀書につかれし腦の痛みを不忍池畔の夕風に冷さんと、一人歩きの四五間さき、ふと目に入りし其人…………

詩壇の寵兒よ天才よと羨ましがられつゝ女學校を卒業せし其夏の事、舞扱の海水浴にて知り合ひ、是非嫁ては吳れぬかと親御様ともぐ懇望せられしを、單に文學士と云ふだけでは……と一笑に附して終りしが、五年目の今、其人美しき新妻君とそゞろ歩きのあたゝかう微笑みかはして……。

已が實力やうやく覺りて巧名の夢空しく消ゆれば、今更に我身の春は既に老いたり……。

池の面凝と見つめてたゝづむ眼より、れたみならぬ涙ばらぐとこぼれぬ。

稲刈

下野 桒谷德子

朝六時起床、例に依つて冷飯の茶漬二三杯餘なく平げて早速一挺の鎌を提げ稲を刈るべく家を出た、程なく田へ着くや一生懸命とうぐ正午頃までちつとも休まず刈續けた爲め 大分空腹を感じて居る所へ弟が辨當を持つて來た、母上が心 蓋じの握飯を流るゝ汗と共に喰ひ盡して弟をかへした、暫くにして自分は亦再び田の中の人となつた。

秋風

栃木 柴山たけ子

此の夏休みにこそ、大に勉强しようと思ふて、敎科書を詰め込み置きし行李は、遂に開かれずして往復し、今宵下宿の窓に開くべく餘儀なくせられて、先づ明日の代數の下見にと机の塵を拂ふたが、殘りの暑は夜まで倦める身を襲ふて、いつか樂しき故鄕の夢に入りぬ、折りしも風一陣孤燈を吹き消したので、驚き火ともし見れば、梧桐一葉栞の如く、頁の上に遺されてあつた、嗚呼既に秋！、

葡萄棚

下谷 赤堀久子

去年の秋よそからもらつて植ゑておいた 甲州葡萄の木のとてもなるまいと思つていたがそれでもやつと十房ばかりなつた。日ごとぐに色づいて來る。

四疊の障子をあけるとすぐ葡萄棚で、したゝるやうな紫玉の、白い粉をふいたのがさもおいしさう。

そうぐあの葉がくれの一房あれが一番はやく 熟していたのだつけとのぞきこんで見る。と、どうしたのかあほい實が只二つぶのこされているばかし。大方風にふきおとされたのであらうと思つて、下を見ると、やはらかい芝生の中にころぐころがつていた。

女學世界
定期增刊

處世百話

十月十五日
發行

處世は一人を以て萬人に交捗するの意にして人間終生の目的たり、よく養ひ、よく修め、よく研き、よく成す、煎じつむれば人生は一個處世の本分を完ふするものに外ならず、これを先進に聞き、これを時代に鑑み、これを經驗に徴し、これを現時に適應せしめ、資て以ておのれの進路を拓き、資て以て萬全の境に達せんことを求む、時に玉となりて碎くるあり、時に瓦となりて全きあり、皆おの〳〵個人天性の發揮にして其本分を盡すに於て更に遺憾あることなし、近時社會組織の複雜に入り、婦人として世に處するの方法を求むるや急なり、本誌は聊かこの讀書子の希望に應じ、力めて這般の捷徑を窺はんと期するものなり。

目次概要

▲女性に對する注文（新渡戸博士）
▲老婦人の處世覺悟
▲社交上の秘訣（須田文學士）
▲注意深き良人のいましめ
▲境遇の順逆と女子
▲日常訓（佐治實然氏）
▲婦人の雅量（村上文學士）
▲行路難と運命の順逆（寺田勇吉氏）
▲婦人の惡癖矯正法（元良博士）
▲我が意志と我が感情との衝突
▲婦人の深酷性と寛大性
▲女性の心理解剖
▲美人玉碎奇事
▲家政の苦心と良人待遇法
▲幸福を求むる法
▲暗黑裏と光明界
▲道德外の道德
▲處世上の比喩談
▲結婚玉手箱

謎々　◎印は入賞

△呉服店の賣出とかけて、

◎墓穴と解く、心は時候の變り目に多くある、　靜岡　秋野　紅葉

軍人の汽車旅行と解く、心は必ず割引がある　仙臺　佐藤かつ子

水害地の用水と解く、心は水濾(三越)が流行る　東京　幸田　慶子

◎ルーズベルトのトラスト政策と解く、心は富人(婦人)が大騒ぎ　千葉　沼上ふく子

東京横濱通ひの汽車と解く、心は京濱(景品)で客をとる、　神奈川　旅坂　梅香

人身御供と解く、心は白き矢(白木屋)が當たる　仙臺　佐生　晃子

嘘と解く、心は粋から(珍柄)も出る　下野　栗原くに子

伏見鳥羽の戰爭と解く、心は慶喜(景氣)先立つ　長野　井上　龍子

△海牙の密使とかけて

北野の社と解く、心は韓皇(菅公)が本尊、　下總　藤崎美那子

◎毒殺嫌疑の證據調と解く、心は韓帝讓位始末(鑑定上醫師待つ)　東京　野田鈴江女

四人の逃亡と解く、心は韓國(監獄)から飛出る

◎堀出物の賣物と解く、心はかんていのあやまり、　越後　品川　錦子
　下野　岡部ゆう子

△秋風とかけて

雄辯家の演説と解く、心ははた(肌)がヒヤヒヤ(冷々)　京都　手島ふさ榮

◎尺八と解く、心は吹けば身にしむ、　仙臺　佐藤かつ子

繼母と解く、心は何んとなく冷かなり、　信濃　足立　照子

古刀と解く、心は峯に錆(寂)を見せる、　京都　小西　辰子

昔の婦人と解く、心は齒(葉)を染める、　上毛　栗原くら子

獵人の妻と解く、心は雁(狩り)來るを待つ、　東京　廣田なみ子

惡い小供と解く、心はおとなしうない、　大阪　磯　政

貸方へ爲替と解く、心は借金(雁が音)おくる、　大阪　のり川ふじ子

懸賞
謎々　〆切 二十日　解答は葉書に限る
次號の新題
△新華族とかけて　△紅葉とかけて　△消費組合とかけて

ものはづくし

こまつたもの

夕ヶ米の離れ　麻布　靜江

離れ小島で急病

探鉱の女

勉學中の雜談　群馬　摩子

ダラク書生の面會

大晦日の留守居

外出際の客來　神田　鶴岡とく子

御菓子をほゝばつて居てよばれた時　東京　池田百合子

蠶兒の上簇間際に桑葉の欠乏　山口　尾谷　駒蔵

食事中すき間なく話しかけられる　千葉　石川　光

行商中の車のこわれ　赤坂　近藤喜久子

學業はしめに際しての汽車不通　横濱　佐藤若葉子

栗ひろいに行つた途中山の水が出て家に歸られぬ時　下野　殘菊子

愛兒の急病に醫師の留守　薩摩　日高　妙子

卒業前の國元の母の重病　熊本　福崎　梅子

芝居に子供をつれて、いつてだいじな幕から泣出したとき

三度も四度もよめいりがよひ　備後　重政千賀子

暑中の斷水、野原で夕立日本橋　ゆき子

燒出されのどしやぶり

御父さんの酒　越後　秋子

旅行中の月蝕　信濃　松尾節子

懸賞

〆切は本月二十日

ものはづくし

投稿は端書に限る

題

うれしいもの

くへないもの

たかいもの

一口噺　◎印入賞

◎　神田　冊子なみ子

母「おつかー／＼てつて人聞きが惡いからおつかさんとお云ひなさい。」
子供「おつかさん此字なんと讀むの」
母「おつかーがそんな字なんそ知るものかれ」

◎　神奈川　柳川千枝子

子供を寢かしつけてゐる間に母親が眠つてしまひ子の起たのを知らずにゐる、隣の人「母アちやんは」子「坊を寢かしてゐるの」

◎　埼玉　濱野作子

母「媒の中に、夜獨り歩きなんぞ、しては、いけませんよ」
媒「あらお母さん、いつでも私はお隣りの清さんと、二人なのよ」。

△　高知　澤田登子

乞食の子「父さん内には家がないから此間の樣な洪水の時などにも心配がないねー」
乞食の親「それも、皆、親のおかげだ、ありがたいと思ひねえ」

△　東京　瑛子

甲「一寸向ふを見な橫町の若後家が來たい、好い女ぢやないか。
乙「むゝ美人だおれの女房も早く後家にしてみてえものだ。

△　本郷　稻山かつよ

子供「お爺さんは、何時お亡くなりでせうね。」
母「何ですね此の兒は緣起でもない」
子供「お婆さんがお亡くなりになつた時には大きなお饅頭を頂いたつけ」

△　麻布　池田ゆり子

奥樣「ねー竹や、此の寫眞は家の坊やにそつくりだよほんとうに好く撮れてる事、
竹「ふゝ……ですけれど坊ちやんはこんなにおとなしくは有りませんよ。

△　大阪　田中雪江

弟「兄さん鹿島だの香取だのといふ軍艦は女だらふか」
兄「なぜ……」
弟「だつて姉妹艦だといふもの」

△　同　同

「今日は日曜で大變汽車がこみましたから一等へ乘りました」と話して居ると側に居つた幼き弟は、
「兄さん三等でもあんなに早いのに一等だつたらどんなに早いだらふ」

△　近江　ロシ子

甲「旅順は九百九十九圓九十九錢で在る」
乙「馬鹿な事を言へ」
甲「其れでも壹錢（一戰）で千兩（占領）だ

△　本郷　菊地竹子

或る人外國產猫の啼くのを聞いて。おや此の猫はもう日本語を使つてゐるぜ。

懸賞

〆切本月二十日

一口噺

投書葉書に限る

題は隨意、おかしみ味ありて頤を解くに足るべきもの

懸賞 繪探し答案募集

本號飛駒の中に繪探しが十個所（一個所に一つとは限らぬ）仕組でありますから皆さん當てごらんなさい殘らず當つた方には例によつて籤引の上六十名を限り左の賞品を呈上致します。

（〆切は十月二十日まで）

一賞品は博文館發行圖書切符金一圓
一答案は葉書に限る
一一人にて二様の答案を作りて送るものは二本共採用せず

第二回繪探し當選披露

（應募總數三千二百六十三名）
（内正解者七百四十五名）

當籤受賞人名

東京京橋區中橋和泉町一	小宮里惠子
同日本橋區本銀町三ノ二福岡方	中村きよ子
同同濱町三ノ一	田畑藤子
同麴町區五番町一八	野田久子
同麻布區新堀町四	倉茂鴨脚
同同東町四七	林常子
同赤坂區檜坂町五	内木しほ子
同淺草區淺草町二五	伊藤正子
同本所區元町七岩崎方	岩崎かね子
同下谷區入谷町二四三枝方	岩間とめ子
同同上根岸町六九	渡邊つる子
同芝區二本榎西町二	今井花子
同同本芝二ノ三四	三宮輝子
同本鄕區弓町一ノ二四佐原方	海保りき子
同小石川區大塚町七〇	平井ゆき子
同同下宮坂町一七海老原方	海老原春枝
同牛込區市ヶ谷富久町一〇四江副方	田中いぬ
同同若松町一〇二戸山腦病院内	中瀬古さいの
府下淀橋町角筈新町一八五福羽方	紺纈光子
府下北豐多摩郡石神井村字上石神井一九二五	朝賀若子
横濱花咲町三ノ四四河田方	中山みつ子
同芳町天沼五九二	岡村きよ子
同初音町二ノ二三	飯田ゆう子
在横須賀軍艦韓崎信號兵	加藤まさ子
甲斐中巨摩郡飯野村二ノ四八六	岸田はる子
甲府市郵便局内	瀬田えい子
山梨縣北都留郡初狩村	井上ます子
茨木縣結城郡菅原村大生鄕	坂野きみ子
上總市原郡東海村海保區上鄕	征矢光子
埼玉縣川越大工町九三三	岡本秀子
群馬縣館林町外伴木佐々木方	根本けん子
宇都宮市扇町仁科方	鈴木たけ子
駿河藤枝町	梅島くに子
靜岡縣志太郡藤枝町千歳	石田よし子
愛知縣北設樂郡武節村川手	山田なみ子
岐阜縣可兒郡御嵩町	山田しげ子
大阪北區下福島三ノ八二	佐藤かず子
同同若松町二一竹内俊雄方	竹内よし子
京都下京區本町廿二丁目	齋藤鈴子
香川縣綾歌郡松山村	松浦かずゑ
備後神石郡油木村	徳田勝子
周防德山西の丁	杉山松子
越前丹生郡立待村字亂	師岡つるゑ
長野市櫻枝町荒町	内田榮子
信州諏訪郡宮川小學校内	武藤梅子
新潟縣南蒲原郡栗林村字石上	外山いち子
同沼垂町一九七田澤孝方	田澤やへ子
越後柏崎	三宮とき子
長岡市柳原町	酒井貞子
福島縣安達郡塩澤村字浮内	齋藤きち子
岩代福島市柳町	佐藤しの子
山形市七日町五七九佐藤方	小笠原ふき子
山形縣東田川郡東榮村大字添川	澁谷はる子
仙臺元荒町一八後藤方	横山しづ子
同國分町一五五	三谷よし子
青森市榮町	三上秀子
青森縣弘前市土手町	杉見秀子
秋田市手形堀反町	小野崎つう子
紀伊有田郡糸我村	生馬鶴代
山口縣原狹野高千帆村	中村まつ子

賞外當選人名

◎東京府

△伊藤ふじ△朝比奈よし△林ひろし△齋藤あい△中島その△伊藤りん△佐々木よしこ△光永やす△大力よし△水谷うめす△小川えい△加藤たづ△岡本もん△中島さと△塚田ごえう△平林すゑ△平澤まつ△小谷ふみ△關すみ△阪本すみ△日野あき△西谷すゑ△野崎こてふ△水野とめ△小山はな△阪川むら△園田きよ△大川こう△新堀じゆん△笠井某△高野しげ△田中つれ△清水

みつ△目白齋よし△兒玉つれ△和仁しづ△眞貝くを△野口ちよ△加藤くま△桑たい△齋藤きよ△世子なみ△松本きよ△江川こう△多丸よし△三浦のぼる△長谷川やゑ△西川みつ△伊藤よし△大矢某△箱野まつ△恒野しま△村井まさ△平井しづ△池谷つま△廣田こうき△長島いと△高田ふみ△市村たか△杉山すゑ△小林ゆき△落合かい△楢原けい△相澤きせ△中村やす△西本まつ△木梨てい△中田はる△井上さだえ△住谷くら△久野えつ△矢澤つる△町田かつ△大井はな△秋元りよじ△岡部てつ△木村てい△堀いつ△村山みさを△加島まさ△佐藤忠治△佐藤まさ△北野てふ△隅田きみえ△酒井みや△原ふさ△島田てい△一島ひさ△吉田もり△甲斐しま△井上てい△中山ゑい△津久井某△菊澤とき△大谷まき△佐原うめ△野口みさ△藤田清△岡崎ちよ△鈴木りん△小掠治吉△青鹿さく△中村りさ△菊野桔梗△市田しげ△栗山ゆう△田中うた△前田まい△長山しが△市木かれ△池田とめ△田中のぶ△枚野とめ△大島よし△大塚やす△橋本某△島田やえ△加藤たけ△鈴木いくよ△鈴木ちよ△岸田きよう△澤田りよう△下田との△小情たけ△神保よし△平林民穗△野秋まつえ△川名わか△清水けんじ△土屋ゆき△蘇沼節一△竹内とし△外池りき△波々伯部きよ△黒川ふみゑ△海老野せき△柳田はつ△栗山ゆき△田久とし△黒岩とく△眞島とよ△鶴見こう△山中はつ△井上みつゑ△堀内あい△高瀬ふく△岩村まつ△秋田とし△原木しげえ△齋藤よし△鈴木きよ△小田切らく△林とめ△神田たけ△尾佐竹まさ△尾澤とよ△隅田たか△水野あきら△井崎のゐ△河村ひろ△桑よし△行方より△安藤きぬ△櫻井某△谷木きよ△佐保田はま△加藤じゆん△岡田かづ△牧野もと△飯山みゑ△石井ふじ△宮原さく△樽谷ひさ△加藤やゑ△安田しま△山内よし△日向だい△廣田隆司△小山りん△吉竹やゑ△鮫島こと△柳堀かげ△宮川みなみ△川島ますゑ△宮澤ばん△富澤かれ△鈴木まつ△千羽きた△木村かり△西尾ふさ△堀江きち△渡邊もよ△安東こと△地島あい△金子こう△伊東えん△井落つた△大庭しづ△鈴木ちよ△伊藤ふみ△橋永こう△田川なか△黒沼ひさ△藤田しづ△永井けい△菊池まり△十川しの△津田けい△萩所さへ△山村よき△增田つれ△上田とく△津村きち△石川あき△青山ちよ△佐々木べん△山中さよ△赤堀ひさ△鶴村しづ△鈴木鎌三△伊藤つる△田阪ちあき△伊地知某△多丸よし△永島はな△鈴木喜太郎△住谷ふみ△金澤あい△宮永よし△米野なを△近藤なでしこ△小林つる△竹内きよ△長谷川たきか△森江きくゑ△式場その△金子ゆき△古木よし△市村はる△倉本じゆん△與久ふか△佐野みつ△川保しげかつ△稲島すてまる△田子すま△上田とく△藤井かれ△長島いと△小平いちゑ△小平ひさ江△宮澤くに△川村きえ△菊池あい△飯岡澤はる

◎神奈川縣

△矢野芳太郎△森ふみ△伊澤輝義△青木ます△志村うめ△小林りゑ△高橋英勝△今井てい△鈴木いれ△松岡鐵五郎△石黒みさを△梅澤みよ△石黒まき△長島みき△渡邊よれ△井上ろい△佐藤しん△水江きし△市川しづ△岩崎まつゑ△柏木てふ△鈴木たまゑ△高野ゑい△大森ようゑ△新堀ふさ△涌田おりえ△高橋よう△小林きん△近藤とん△西野あい△橋本ちか△遠藤かつ△田澤まさ△村田すゑ△齋藤しよう△齋藤れい△岡田なか△稲葉こめ△内田きく△水江とく△宮脇かれ△安西みや△熊坂金作△大村くら△谷澤さだ△渡邊たま△玉置さち△三浦きん△得田かつき△岡野しつ△山崎ふゆ△山崎みよ△小泉より△萩野りん△松島され△藤本はつ△佐藤わかば

◎大阪府

△石原ひさ△佐伯みや△田中ふで△大久保ちゑ△景山みつ△奥田あきの△河合はるの△吉村久次郎△入江つた△出雲かよ△藤井みき△黒田てる△今井いつ△黒松ゑい△中村なかえ△安藤興一△安藤はる△岸本みのる△中村あき△中西たつ△安井こう△内海つれ△山本まさ△上田とみ△齋藤たき△松田しげえ△長岡某△松本つる△林こう△武田えい△長みちよ△佐伯利さわ△河中いと△磯野まさ△宮島かづえ△玉川のし△大崎つる△津川たつえ△若林ふじ△藤田とく

◎京都府

△岩本まつ△波多野ひろ△山崎まつ△笠間もと△横山とも△田村きよう△遠山きぬ△鷲尾ちよ△松風すて△藤田しづえ△西たき△加藤きよを△伊藤かづほ△松風たれ△吉川なつ△高田あき△前田政太郎△遠山あい△山本きぬ△山田えん

◎長野縣

△島田よし△島田ちさと△渡邊まさ△神田みつ△下條よし△縮貝寬一△中深さう△小平はなえ△小平よし△小平ちつる△小平ますゑ△小林某△田澤金左衛門△齋藤くめじ△山下某△降旗きゆ△駒井義朝△田えつ△荻原まこと△飯島うた△豐入ゆり△岩岡いし△小島ちゑ△中島しよう

△島田ふき△古淺さう△仙石やす△更級きやう△岩岡ひろ△岩岡きよ△小西とみ△伊藤こう△赤沼みのろ△中島らくに△戸田しげる△田中かつゑ

◎新潟縣

△傳田新吉△大里みや△佐藤しん△山本つぎ△佐藤てる△山崎たつ△秋子△八幡いれ△加藤かう△關しの△山本はな△井上誠治△今成きみ△那須さい△横田きん△吉田あや△小林初太郎△佐藤きみ△佐藤しづえ△田中秋藏△佐藤秋平△小出とみ△田澤ちよ△五十嵐さう△木野瀨もと△品田忠相△今井長藏

◎福島縣

△横山せん△栗村ふゆ△根本てい△黑須こう△八田部さと△船越なほ△木村たま△大島きく△杉原たい△堀部某△鈴木きよ△石崎よし△小林よし△坂上はな△安中つれ△菅野うめ△宍戸まさ△高橋せい△齋藤きみ△若林いせ△岡本なかよ△谷崎ふじ△佐原きよ△佐藤きゑ△足立きくの△杉原たい△渡邊つな△三澤ちか△松本はる△戸田くに△佐藤よし△須藤いの△安部井えい

◎茨城縣

△川又わか△宇佐美ふで△宮本かな△飯田まさ△三重よし△成島きよ△安藤みよ△荒木つれ△三枝とめ△大瀧はろ△川崎きよ△成島せつ△野口みさほ△横田しま△野口とし△加藤てい

◎群馬縣

△萩野そで△反町てい△星野しろ△宮入よし△神きん△中村みな△窪田すわ△田中とし△佐藤ふみ△峰岸まき△稲葉つるゑ△飯田ひで△小田じゆん△秋谷おと△神澤つる△小山すみ

◎栃木縣

△吉村よしえ△大橋せん△木村はろ△五月女きぬ△小西ふく△五月女ちよ△武田たか△湯澤かれ△中村ふじ△塚田はな△齋藤そめ△福田うめ△田川よし△中島あい△黑川ためや△須永くに△細つま△藤田やす△稲葉よし△正野てう△正野はな△川島むめ△大島たま△淸水ひで△飯島はるえ△石井てふ△日向野よれ

◎埼玉縣

△岡村こう△二上しづ△二上ふじよ△齋藤あい△小林みよ△松岡うめ△足立はま△濵野さく△齋藤ます△栗原とよ△山本きよ△法野きよ△飯田かく△大島かつ△諏訪よれ△安野さよ△堀野しげ△小林その

◎千葉縣

△小川ゆき△八角よし△武井いそよ△藤崎みな△倉貫みち△希木正一郞△石川みつ△佐藤いそ△海松ふさ△荒木田とよ△谷口こま△田邊いせ△安西てい△土屋まさし△鯨井ちよ

◎静岡縣

△古川たまえ△高橋あさえ△高木あさくら△畑ゆき△内田よし△竹内ふさ△石田あい△南須原その△杉山うめ

◎山梨縣

△大島れい△桑原えう△北山みれ△岸田かほろ△岩重克己△山田はつ△中込智

◎宮城縣

△大木ふさ△笹生いと△岡崎えい△佐藤よれ△阿部はつよ△石井とじ△井上しせ△笹生いと△笠松えん△加藤まさよ

◎青森縣

△山田たか△西村きよ△山口この△大和田さだ△中田安七△山口きん△伊東岩太郎△西澤やし△逢坂ひさ△小田ふく△佐久山みれ△千田和七△新谷えん△高橋きよ

◎愛知縣

△石川しよう△松岡とし△和田ふき△岡田いち△鈴木たま△鈴木信三△神戸紫雲

◎三重縣

△田中勇太郎△小林ふく△稲垣しげ△中島つた△西尾えい△太田まさゑ

◎北海道

△中濱愁外△伊藤もゝ△高橋やそみ△靜子△本田とく△井口ゑい△渡邊とし

◎和歌山縣

△山口としゑ△西田いと△澳しう

◎岡山縣

△岡崎なか△高橋かめ△仲よし△西岡りう△角田あや△岡崎とも△板野よし△野上こゑ△青木かほろ△大倉まつゑ

◎山口縣

△森篤人△森次ゆう△杉山まつ△山本しづ△村尾よし

◎島根縣

△玉村たけ△奥野たの△古瀬あやこ

◎鳥取縣

△坂本きく△青木はろ△倉橋しげ△宇佐美誠△三浦よし△上村きよ

◎石川縣

△橋はろ△寺尾ふみ△志筑いく△中宮ゆき

◎富山縣

△藤井きみ△本田きよ

◎福井縣

△的矢たつな

◎岐阜縣

△山口みつ△山口とし△山口ちよ△能勢みほ

◎四國

△近藤りん△楠ちゑ△山田青野あい△高橋かめよ

◎九州

△堀のぶ△山田かず△草野小次△松崎あき△千頭やす△佐藤貞雄△政元はつ△福崎おうめ

◎山形縣

△飯森あい△三井さだ△須岳きち△高橋淸松

◎秋田縣

△加賀谷きた

▲人事活斷▼

石龍子

▲秋野菊子へ‖更に疑ふことなく軍人の方と結婚せらるべし、琴瑟和合するの卦あり、されど結婚後も悠悠敎職を離れ給はざれば尚一層幸運ありと知り給へ。

▲岐阜縣可兒郡さゆり子へ‖夫婦となるの道は財產の如何に非ず、學力の如何に非ず容貌の如何に非ず、唯相和合して子孫を設け家運を榮えしむるに在り、然るに前者即ち早稻田大學卒業生の人と結婚せんか、始めは和合すれども後には不和合の種となり雙方の爲に甚だ凶なり、後者即ち師範卒業生と結婚せんか、始め和合せざる如くなれども次第に水魚の交りをなし家運長久なるの象あり、後に高等師範へ入學するとせざるとは問ふ所に非ず。

▲肥前高成郡白菊女へ‖蛟龍時を得ずして上らざるの卦あり、されば今二年の間身體の强健を計り後に軍人若くは外交官の如く勇壯なる職務の人と結婚せらるべし、良人は豪邁、御身は內氣、以て相和合し福運藹々たるべきなり。

▲熊本苦心中の鐵子へ‖妖は德に勝つを得ず、邪は正を傷ふ能はず、而して良人及び仇し女は邪なり妖なり、故に御身は德を備へ正義を守らるべし。然るに御身の言行は良人に對して不平を抱くかの如く、其德に於て人を感服する能はず、これ妖邪の未だ退かざるの原因なり、返すがへも御身は此理を悟り婉柔以て良人等に對せらるれば良人必ず前非を悔い妖女と離るべし故に此際御身は飽くまでも其家を去らざるを以て最上の策となす。

▲臥牛のみどり子へ‖自ら求むるは凶にして他に依賴する方吉なり、故に貴女は何事も父上に依賴し、貴女自身にては結婚の事念頭にも浮べざるを最上の策とす、さすれば同鄉なる實業家の人と結婚し末甚だ目出度かるべし。

▲信濃松本心配女へ‖貴女若し法律を夫としたくば法律書を求めらるべし、醫を夫としたくは醫書を求め

らるべし、貴女若し人間を夫としたくば職業何ぞ問ふの必要あらん、田夫であらうと、宰相であらうと、之に關係なく、唯貴女を愛し貴女を友とし、職務を働き家の爲め、國の爲に盡す人を求められよ、此心になるれば一二年の中に立派な實業家と琴瑟和合するの兆あり。

▲北海道なでしこ女へ‖御身の家は三十萬圓の富ありと言はるれど、其富は御身の作れるに非ず、御身の力に依りて生じたる富に非ず、然るに御身の書狀に依て判斷するに、文句と云ひ書樣と言ひ不平滿々德更に備はらざるの兆あり、されば兒童を敎育する尊き小學敎員を以て御身の夫と仰がるゝに至るは天恩實に莫大なりと感謝せざるべからず、此の感謝の心起らざる以上は到底幸福來らずと知り給へ。父上は攝生を嚴守せられなば今四五年丈夫なり。

▲兵庫不幸女へ‖大風吹き止んで激浪將に靜かならんとするの卦なれば、今一年の中に良媒有りて幸運來るなり、何をか慨かん、何をか憂へん。

▲大磯願女へ‖法科大學生との結婚も面白からず、一生の獨身生活も甚だ凶なり、故に今三年の間獨身生活をなし、母上の家政を助け、宗敎を信じ、自然の美を愛し、精神をして優美にならしむるやう修養せられ、然る後良媒を求めて緣附かれよ、萬全の策此上を越す事なし。

▲滋賀縣松本ゆり子へ‖貴女は婦德圓滿に備はれる象あり、されば如何なる家に嫁せられても夫には愛せられ舅姑には憐まれ、下男下女には敬せられ、幸運靄々として堂に滿つべければ何事も躊躇せずして早く緣附かるべし。

▲伊豫松山苦泣女へ‖天は自ら助くるの人を助くるものなるに御身の如く自暴自棄にも自殺を企てんなどは天何ぞ罰せずして止まんや、然れども御身にして人を怨まず天を怨まず悠々德を守り社會の爲に盡さるゝ心にならるれば三十歲を超えずして幸運續々たり。

▲横濱なでし子女へ‖「好こそ物の上手なれ」と古諺にある通りなれば學問に從事せらるゝこと上々吉なり

學問をなさんとする者が何ぞ一二度の落第を耻となさんや、人笑はゞ笑へ「將來にそれ見よ咲く花を」の心掛無かるべからず。

▲東京雪の下小間使女へ＝御身の仕ふる令孃と某華族の工學士とは剛と柔陽と陰實に調和せるの夫婦なり、早々正式の良媒を得結婚を申込まるべし、一刻後るれば一刻の悔あり。

▲八幡町白菊女へ＝貴女は進んで取る所の勇氣もあり、退いて守る所の德も備へたり、故に父上の勸めに從ひ緣附かれなば福運次第に來り日を經るに從ひ、目出度かるべし。

▲越中つぼみ女へ＝我れ貴女の身上を占ふに、貴女と許嫁の良人と正式の結婚を擧ぐるまでに三度故障起り其度毎に破約せんと思はるゝに相違なし、此時御身は許嫁の良人を縱ひ盜賊なりと罵る人ありとも放蕩家なりと認めらるゝやうに仕向くるとも、斷々乎として貞操を守られよ、貞操を守られて愈々正式の結婚を擧ぐるも當分の中は面白からず、然れども日を經月を累ぬるに從ひ家運益々長久なり。

▲不幸女へ＝明らさまに姉婿殿の不埒を姉婿殿母上及び姉君三人御揃の席に暴白し姉婿殿をして慚愧汗を流さしめ、再び御身に厭らしき素振なからしむべしこれ母に對して孝、姉に對して友、姉婿殿をして謹愼の人となさしむるの良策なり、然るに御身は人知らず苦悶せんか必ず濡衣を着て、姉上には怨まれ、姉婿殿には妨げられ母上をして心配せしめ其耻を雪ぐの時期は甚だ遠きなり、斷行すべき時に斷行せられよ。

▲品川廿一歲伺度女へ＝然り良緣あり。

▲南海煩悶女史(霜月女)へ＝昔伊太利の火山破裂して土灰を噴出し數萬の人畜を傷ひし後荒涼たる樣を打見れば婦人は皆我が兒を身を以て掩ひながら燒死したりきと云ふ轟然たる火山の大破裂、一小婦人が身を以て掩ひたればとて何條我兒を助けらるべき、されば此行や甚だ愚なるが如しと雖も、其愚や實に貴むべし、婦人にして此愚なかりせば國家は成立するものに非ず。話變つて幼兒は皆母を慕ひ父を左程に思はぬも

のなり、否年長じても何れかと言へば父より母は戀しきものなり、然るに〳〵幼兒が母を慕はずして他を慕ふは何處かに愛情の足らざるなり、宜なり、御身は國家の爲に戰死せし人の片身即ち一男一女の幼兒あるにも拘らず、一人を夫の兄に託し一人を年老いたる母上に預けて異夫に事へんとす、是れ大和魂のある貞操婦人の爲すべき事なるか、占はざるも判斷せらるべきに非ずや、とは言ふものゝ貧苦洗ふが如き者は又特別の處置をせざるべからざる塲合あり、御身の如きは二幼兒を人に託して異夫に仕るの必要夢々あらざるなり。又御身の言葉に、戰死せし夫の在世の折も愛情濃かならざりしが故に今も尙左程に思はぬ云々、是れ何たる冷けき情ぞや、人在世の中は凡夫の常として喧嘩することも有れど、亡くなりし後は、善事ばかりを思出し惡事は遂に忘るゝが人情なり、嗚呼御身よ〳〵何處が何うあつても誰が何と言はうとも責めては二兒が十歳以上になるまでは手にかけて育て然る後御身の言はるる如く赤十字の看護婦ともならるべし。壯年の立派な醫師にして名も富も御身の爲に犧牲にするなどゝ言ひ越すやうな腐敗男兒に、決して惑はされてはなりませぬ、併し御身は情に乏しき所あれども意志の强き即ち女丈夫なるの趣あれば長々と愚見を述べしなり、怜悧なる御身よ考一考して飜然と悟らるべし。

▲駒込千駄木伺女へ――御身の心は婉にして義親に事へて孝、夫に事へて貞、實に古への貞婦に耻ぢざるなり、されば天何ぞ幸福を與へざらんや、今後の運勢は旭日の天に昇るが如く益々幸運に向ふの兆あり。良人は務先を變へざる方吉なり。返す〳〵も近き中に家庭團欒の樂を得て今を昔に語る時來るや必せり。

▲大阪秋野鈴芳女へ――結婚は夫婦の和合を以て第一の要義となす、夫は妻を愛し妻は夫を慕ふの心切ならば是が親たる者一家の秩序安寧を妨げざるものと認むる以上は其間柄を割くべき所以なし况んや嫁の親は其夫を惡まず、夫の親は嫁を惡まず唯雙方の親同志が確執して遂に破鏡の嘆を見さしむるに至るは實に慨かはしき至りなり。故に今後の處置は御身の父上が最愛な

る御身の爲に我を折りて事の善惡に拘らず、先方へ謝せらるゝを當然なりとす、御身は此の全文を父上に御目にかけて諫められよ、是れ天道に適へるものにして他に良緣容易に無しと知り給ふべし。

▲姬路の深雪女へ――良人は貴女を愛するの情更に衰へず、然るに貴女にして之を疑はんか、其疑や遂に眞實となるべきなり、ゆめ疑ふべからず。

▲伊勢の子煩惱女へ――更に七年を待たれよ、七年の中には一男兒を設けらるべき兆あり、蓄妾云々は沒人道の至極なり。

▲邊海の懊惱生へ――人世の最大事たる結婚の契約は愼重に愼重を加ふべき者、然るに御身は其の愼重を缺きて茲に契約し契約の後に至りて其の秘密を知れるは其過ち御身に在り、而して先方の心中は大に前非を悔い、唯一心に御身に節操を盡しつゝあることとなれば互に意中を打明けて良媒を求め、契約を實行せらるべし。これ却つて君子の道なり。

▲北海道ふみ子へ――鴻鵬の小林に潜むが如き卦なり。されば貴女大に活躍して望まるゝ通り、滿洲に行かるべし、聊か恐怖の心有るべからず。

今月は答甚だ少なしと雖も來月は必ず此の埋合をなし、諸姉の滿足を得べきなり。

質問心得

一、封書にして東京市日本橋區博文館女學世界人事活斷掛へ宛てらるべき事。

一、縣名年齡は必ず附記すべき事。

一、匿名は異樣なるを選ばれたし。すみれ女、深山女、伺女、煩悶女、白菊女、不幸女、哀願女、心配女、何歲女、等は何れも十數人以上あるが故に例へば、「伺女へ」として答ふるも問者恐らく不得要領に終るならん。

一、疾病に關することは衞生顧問へ尋ねらるべき事。



姿の影

いそふね

一

『……。この二三日は雨の爲に、工事も自ら休みの姿にて、所在なきまゝに、調物にても、書齋に籠り居り候へども、汲ては乾し、注ては乾かし。徒らに、硯の水を空うのみ致居候。たま〳〵筆もち候へば、衣。衣子と、何の事にか候はん。知らぬ間に、白紙の上に、衣と云ふ字計り行列致し候て。我淋しき起臥の目先にちら〳〵致し候ものは、古今の難工事なる蓮田隧道の彼の憎き大岩石にもあらず、又下毛馬の急流にも候はず、只何處かの、誰やらの面影計りにて候。』

＊　＊　＊　＊　＊

「アレ又飛で來ましたよ阿母樣。」

「眞實に大な螢だ事ねえ。」

葦屋川の堤を、團扇片手にぶら〳〵と來かゝつた、上品造りの二人連れの女がある。夫れとは一目で知れる母子で、母は未だ若い四十五六、一本も白髮の交らぬ濃い髮を、少い髷にして藍地の細かい隈笹の浴衣を着てゐる。娘の方は二十一二。前髮の華美な束髮に、紫色の生花を一輪はさんで、口紅無しの薄化粧、白い肌膚がいとゞ透き通る樣。どちらかと云へば、瘦形のそれでも丸顔の方で、生え放しの濃い眉が、尻で心程力

みを持てゐて、黑味がちの白球の澄むだ涼しい眼の奧には、大な瞳がともすれば、馴れ易い、愛に滿ちた顏に程よく威嚴を持たせてゐる。

お納戸地に白あげの秋草の浴衣に、萠黃繻子と、水草摸樣の絹友禪を合せた薄心の帶を輕くお太鼓に結でゐる。

露を含んだ涼しい風に、靑田がサラ〳〵と鳴て、小い靑蛙が足許をヒヨイと橫切て草の間へ隱れた。

「先刻の、あれでしよか?。阿母樣。」

「オホヽヽヽ。吳樣のお云ひだこと。此處は昔からの螢の名所ですものね、彼樣な螢の一ツや二ツ位お前

イエね、此處等はまだ少いのですよ。もつと上の方へ行たら、去年阿母樣が、勵樣を連れて來た處なぞは、夫れは、夫れは、かうして步いて居るとね、大な螢がスウ〳〵顏へ當る程だつたよ。」

「マア阿母樣は仰山な事を有仰るのね。眞實?。嘘でしよう。」

眞紅の團扇の房がゆらめいて娘は艶に首を傾けた。

母は又、笑顏になつて、「嘘とお思ひなら明日でも一度、連れて行て上げましようねえ。夫は好い景色だよ、そして高見だから其處からはね、ソラ新納樣が設計お爲だつた、仁那ケ岳の墜道がよく見えるよ。」

「さう――ですか。」と吳子は急に顏を曇らせて、さしうつむいたが、こちらは何の氣も付かず。

「吳樣。此邊では新納樣の名を知らない人は無い樣子だよ。」

「えゝ。さうですつてね。」

「夫も其筈さ。彼處の工事の間、丁度五月の餘も我旅館の隣りの、ソラ錦水館つて云ふ旅館ね、彼處へ宿つておいでなすつたんだからね。」此處まで云て、初て娘の樣子に氣が付き。「オヤ。お前どうおしなの。又氣分が惡くなつて來のかえ。」と氣遣はしさうに、娘の顏をのぞく。

「阿母樣。」と突然に吳子は母の袖を引いて。

「アノ新納樣は、どうしていらつしやるんでしようねえ。」と淚組む。

母はハッとした様子で。「あゝさうだつたねえ。」と困じ果てた様に眉をよせて。

「呉様。堪忍しておくれ、阿母様は悪い事を云ひ出したねえ。」と引かれた袂を凡まゝに、呉子の顔を見たがさてつく〴〵と。

「ホンに彼の人と云へば、一體どうしておいでなんだらうねえ。實地踏査とかを命せられたつて、島根縣へお立だつたのは、確か五月ーだつたねえ、呉様。」

「えゝ。五月の四日でしたの。」

「おやもう二月にもなるのに、一本の手紙もおよこし



でないのだもの。けれども彼人に限つて、可笑しな間違ひなんかの有らう筈はないけれど――。」

「阿母様は、新納様を、信じ切ていらつしやるから、夫な氣樂な事を有仰るけれど、何だか譯りはしませんね。」と投る様に云て、團扇を逆にとつて、片手を後へ帶の垂の邊へまわす。

「譯りは仕ないつて、では何か呉様。思ひ當る事でも有るのかい。」

「別に何も有は仕ませんけれど、でもね阿母様。お出發なさる少し前から、何だか様子が變でしたもの、だから妾。心配だわ。」母はちらりと娘の顔

に目を走らせて。

「變だつて、どう變なの。」

「どうつて、何ですわ。イヤにそは〳〵して、家へいらしつたつて、お父樣に用事計り有仰つて、直、歸てお仕舞ひなさる事なんぞ、幾度も有りました。夫に何時頃だつたかしら、一寸した話の端から、ピヤノなんて、彼んな野暮臭い音色はきらひだの、お琴はイヤに陰氣で僕の理想に合はないのつて。」

「オヤ〳〵。」

「夫してマアいやな。あの長唄と云ふ物は大層華美で好いものだが、吳樣は三味線はやらないのですかつて、人を馬鹿になさるのよ。」

「オホヽヽ大さう趣味が變つてお出でだね。でも夫とこれと、何も關係は有りは爲ないでしよう。」

「だつて阿母樣。」と吳子は不服さうに、云ひ淀で、ホツと小い溜息。母が、も一ツ思ふ樣に同情をよせて吳れぬ樣子に無言でぢれて、足許の芝草に宿る可愛らしい銀玉を、惜氣もなく、白い鼻緒の重草履でハラリハラリと踏み飛ばせて歩いて居ると、いつか爪先がしとゞにぬれた。

「吳樣。」

と暫くして母は慰め顔に。

「夫に、人を疑ぐるものでは有りませんよ。夫はね。阿母樣も少し素氣なさ過ぎるとは思ふけれど――。然し彼の人だつて、遊んでる身體ではなしね。思ふ樣に仕事が運ばないので、焦燥して心に隙が無いのやら。若かすると病氣でもしておいでかも知れない。」

「病氣?。」と吳子は吃驚した樣に顏を上げて。

「夫なだつたら、大變ぢや有りませんか、阿母樣。」と早や色をかへてゐる。

「斯樣な事を云ふのではないけれど、いろ〳〵考へるとね、若しや夫な事にでも成てお出ではないかしらとつい思つたりするのさ。何が彼處の假住居を知らせておよこしでないのだもの、どうして暮してお出でなんだか、さつぱり當りがつかない。眞實に困つた人だねえ。」

とこれも終ひは又、呉子に隱してホッと溜息をついた、
呉子はハタと足を止めて。
「病氣になつても、お知らせなさらない樣ならね阿母樣、新納樣はもう。」と切つて。
「家へは、いらして下さらないお積りでしやうねえ。ぢや阿母樣、妾は捨られたのですわ。」
と永い袂を顔に當てゝやる瀨なきしのび音に、もう泣くのである。
母は驚いて。
「マア お前は何をお云ひなんだね。病氣と云つたのは、ホンの妾の想像なのさ。さうお前の樣に一途に物を思ひ詰めちや仕方がない。何も泣く程の事では無いぢや有りませんかね。」
「阿母樣は、直さう云てお仕舞ひなさるけれど。」
と涙を拭いて。
「だつて氣にかゝるんですもの。」
と訴る樣に、あどけない目で母を見上げた。
「ぢやアね。お前が夫に心配おしなら、こうしましよう、明日。お父樣へ手紙を出して、誰か一人、どうとか都合して新納樣の處へ遣て貰うよ。」
「阿母樣。夫れは眞實ですか。」
呉子の眼は、急によみがへつた樣に美しう輝き初めた
母は笑て。
「嘘を云ふものですか。」
「ぢや乾度よ。よう御座んすか。」
と頻に念を押すので有たが、又しほ〳〵として。
「でもね阿母樣。さうしたら新納樣が、お怒りなさる樣な事は有は仕ないでしようか。」
「何故怒るんです。どうして。」「マア好いよ。お前は心配しないで、阿母樣に任せておをき。」
呉子は素直に頷づくのであつた。
螢が二ツ三ツ、スウと肩を過ぎて、くるりと廻て、低く川邊の葦の茂みに隱れて仕舞ふ。

二

「呉樣。この橋を渡つて、もつと彼方を散步したらど

うなの。」

「イエ、今日はもう止しましよう。大分疲れましたから。」

「さうかい。では又明日にしましよねえ。と云て母は眼を上げたが、「オヽ好いお月樣だ事。與樣一寸見て御覽な、胸が清々する樣だよ。」

仰げば淡水色の空に、水銀の樣な新月が一痕、鎌のない姿で、うつとりとかゝつてゐる。

與子は顏を背けて、ハラ／＼と涙を落した。

橋の袂から町の方に歩を曲げて二人の後影は、次第に遠くなるのである。

青田にひそむ蛙の聲の、一節毎に、ほの暗んでゆく野面には、行く人も漸くと絶えて、濕氣を含んだ大氣が青臭い草の香を交せて、サヤ／＼と麥の葉を打いてゐる。

永い袂と短い袖が並んで、一筋道を、森の根まで行き盡した其時。サラ／＼と小川の岸に群あつて、脊丈程な葦の左右に靡くと見れば、水晶を碎く樣な葉末の露を頰に浴びて、月の真下にスックと半身を現はした女が有る。

はんのり赤味を持つた、艶々しい中高の細面を、惜げもなく素顏で見せて、この衣摺橋を朝霧の奥で見る樣なボウと永い眉を敷いて、切れ長の美しい眼が、さえざえと輝いてゐる。鼻はゆつたりと隆起して、形に申分はないが、頰から腮へ掛けての肉が稍薄く、口元が此爲に、餘りしまり過ぎて、一寸男の樣にも見えるけれども、白玉の齒を包むだ牡丹の花の樣な唇で、パツと顏中を明るく見せて、何も彼も取りかへして仕舞ふ、半面に月を浴びて、濃い睫毛の奥から、明星の樣な眸の瞳をこらして、森の小道に隱れてゆく、母子の後姿を、心ありげに、沈と見送つた。

風は一しきり。月の光をのせて、遥かの天方からそよそよと吹いてくる。

女はのび上つたが、もう見えなかつたので、雪駄の赤い鼻緒をちらりと見せて、音も立てずに、スル／＼と柔かい草の葉の、冷々と心地のよい堤の端にスラリと

立つた。

見れば其右の手には、三尺許りの柄の附た魚網を提てゐる。二十許りの、洗髪を、さつと後に投げて、腰まで垂た其中程を、ゆるく藁で引結でゐる。肩から袖へ渡つて、ばつさり掛た花藤の大房に、袖底と、胸に蝶をあしらつた墨染の濃淡が鮮かに出來つた。腰から裾の地をば、極めて薄く水色に仕上た絹縮緬の浴衣に、水引草の縫ひある薄色の絹ちゃみの腰帯を絡つけて、黒繻子と、燃える様な緋二翅頂の、麻の葉絞の帯を無雑作に結んで、雪の様な左の手で、右の袂をぬらさじと様にしごいてゐる。魚網の端から滴がポタりく足許に一連許りの玉をつゝつて、パッタリと止む。



女は目をすえて、身動もせぬ。

紅葉に名高く、つゝぢで知られて、夫で又鐘に聞えた此里の、數ある宿の、數ある女の中で、花の中の花とたゝえられた、錦水旅館の秘藏娘のお衣である。

「音。一寸茲へ出ておいでな。彼の方は、何旅館のお客様だか、お前見て御覧よ。」聲音は銀鈴の様。

お衣は葦の葉ごしにかう云て呼んだ。
姿は見えずに濁た聲が、行違ひに、水際からもれる。
「孃樣。お衣樣。其處に何してるの。網が無いぢやないか。イヤだよう。
子供ではない男の聲ではあるが、何故か音調が變に間がぬけて居る。
「チヨツ。つんぼだね。妾が今云た事が譯らないのかい。一寸こゝへ出ておいでつたら。」
もう焦れたお衣は、さまで怒つた樣子もなくて、聲丈け甲高に云ひ放つた。
聞えたか音と呼ばれたのは、ざは／＼云はせてゐると思ふ中に、ボイと身輕にお衣の傍へ飛び上つた。
「孃樣、何を見ろつて。エゝ、エゝ、何處を見るの。」と太い眼をギラ／＼光らせて、お衣を見上た。厚い唇がポカリと開いて、黄色い出齒の口許可笑しく、うつとうしい樣に額がせまくて、顔一面に、にきびか何かゝもじや／＼陣取て居る。其目の光りのどんよりとしてゐるのは頭腦の働きの不足を現はして居るのでもあらう。濃い髪を五分がりにかり込んである。二十に手の屆く年をして柄は闘拔て少さく、お衣と並べば肩迄しかない。
「彼方へゆく、二人連の方だよ。何處のお客樣で、何と云ふ方だか、お前が見たら分るだらう。」
音は、たそがれの色をすかして、頻に見て居たが、がつくりと頷いて。
「アゝ、あの人か。今此堤を話して通つた人だね。」
「さうだよ。孃樣と、阿母樣だよ。知て居るかい。」
「知て居る。あの人は秋山樓のお客樣だア。俺アたつた一度行た計りだのに、糸卷だの、箱だの、麥藁細工丈けでも、壹圓五十錢も買つてくれたよ。だから餘り嬉しかつたからね、山で大な百合をとつて持て行たら、あの孃樣が又銀貨を呉れたの。だからね。」
「お二人切りなの。外にお連れは無いのかい。」
話の腰を折られて、音は眼をパチ／＼させながら。
「エゝ。あれ丈け、二人切りだよ。だからねお衣樣、今度は何も貰はない約束で螢を澤山持て行てやらうと

思つてるの。いゝ思付だらう。」と哀な笑顔をお衣に向ける。

「さうかい。いゝねえ。」と氣のない返事をして、お衣は物おもはしげに、目をもう、何もない一筋道に注いだが、又氣をかへて。

「吾。」と笑顔になり。

「妾は一人だよ。孃樣。お衣樣つて、こゝに居るのは妾一人ぢやないか。」

「だつて、お衣樣は、もう孃樣ぢやないもの。」

「ぢや何なの。」お衣は戯談らしく笑ひかけて。

「孃樣で無かつたら何なの。」

「奥樣だア。もう奥樣ぢやないか、孃樣は新納樣處へ奥樣になりに行つたぢやないか。」

吾は草の上に、腰を下ろして、二本の足を投げ出した。

「オホヽヽ。ぢや何故奇麗に奥樣と云はないのだい。」

「イヤだ。イヤだ。俺アお衣樣を奥樣だなんて云ふのはイヤだアい。」

「大きな聲をおしでないよ。」

お衣は又森の方に目を上げた。

月はだん／＼落ちてゆく。

三

降る樣な星空には、うつすり天の川が現はれてゐる。涼しい風の過る度に、畑がサラ／＼と鳴つて、芋の葉の露がポロリ、しつとりとした夜である。秋の樣に虫が鳴く。蛙の聲も交て居る樣だ。

「孃樣。新納樣處へは何日歸るの。」

「たま／＼筆もち候へば、衣。衣子と――候はず。何處の誰やらの面影計にて候。」

「もう直だよ。」とお衣は　今の先、着た新納學士の手紙の、文句を思出て、ひとり打笑む。

「イヤだなア。直て、明日の事かい。エ、明後日かい。」としよんぼりとお衣を見上た。お衣は其に答ずに。

サア。網を返して上げ樣よ。」

「魚網なんか、どうだつて好いよ。直つて、何時の事なんだい。エ、孃樣。」

「オホヽヽヽ。可笑な顔をお為だね。其はあすさ。」
「あす。」
眞面目に云つては居れど、さうでもないと見えて鼻の心で笑て居るのか解らないが、音はもう、グッタリと成て、顔に痛ましい孤愁の色を浮べて、何やら物云ひたげに、唇計り震はせて居る。
「オヤ。お前泣くの。何故。」
とお衣は笑ひかけたが、何となく哀を催して、だまつて此孤兒の、薄い肩の四邊をつく〴〵と眺めた。
汗ばむだ縞の筒袖の、ゆきも、丈けも身に合はぬ、短かいのを着て、よれ〳〵に成つた兵古帯に、自分の與つた、結び籐の定紋付の手拭を大事さうにはさむでゐる。投げ出した兩足は、銅色に燒て、爪の黒い爪先には、むさくろしい泥を含むで、後へついた手首も、少い時からの勞働に、節高く、不規則に大くなつてゐるあゝ哀れなる此孤兒。我父母の愛なくば、お前は此里に居いて貰はれないかも知れないのだ。生みの親の面影も知らず。身は智慧足らずこの世に出でゝ――。お哀れの者よ。とお衣はホロリとしたが、音は、そんな事は常から少も苦にして居ないのであつた。「嬢様。眞實かい。」
「オホヽヽヽ。お前は何だねえ。妾が歸るのが、何して夫に悲しいの。」
「だつて。だつて。イヤだい。イヤだよう。」と鼻をならして。「夫で今度は何日頃歸るの。」
返事如何にと、目を据えた。
「ずうつと先の事だもの、今から解らないよ。」
「アヽイヤだなア。お衣様が居なくなる位なら俺アと涙組で。「俺アもう死で仕舞ふ。」と首を垂れたが、言葉尻が哀れにほそる。
「大變な事をお云ひだね。」
「嬢様。」と又首を上げて。
「俺ア死ふと思た事は、今迄に何度もある。だつて嬢様は薄情だもの。」
「オヤ〳〵。」
音は足をゆすぶつて、言葉をつぎ。

「嬢様が新納様と、櫻の咲た錦水館の庭で、永い事話して居た時、あの後の松林の中で、寢轉んで見て居たのを。知て居るの。」

「誰がさ。」と笑て。「お前がかい？。」

お衣は心程顔を染める。其顔に音は妬ましげに目を据えて。

「あゝ。新納様に澤山云はせておいて、嬢様は笑つて許り居たよ。」

「新納様が澤山、何んと云つて。」

「何だか知らないけれど、嬢様は。嬢様は彼の新納様が眞實に好きかい。」

「オホヽヽ。眞實にすきならお前どうするの。」

お衣は笑ある面を、心持ち傾ぶけて、音の顔を見た。艶なる眼光に射られて、音は身を顫はせ、其影を追ふ様に両手を展げて、よろよろと起き上つた。

顔にガッと熱がさいていつの間にやら眼も血走てゐる。

ざアと吹く川風に、葦の葉が强くゆれて、パラ／＼と雨の様に、又露をふり落す。

「もう解つた、ぢやア好なんだね。新納様は、えらい



學者だから、それで孃樣は好なんだ。好になつたんだ。」お衣が自分の言葉にどれ程、注意をして居るかと、目の隅から伺ひながら。「え〻孃樣。夫れに違ひはないよ。俺ア馬鹿だから。何の、音は何でもするんだけれど、皆が馬鹿だつて云ふから、馬鹿になつて仕舞つて馬鹿だから、夫で孃樣はきらひになつたんだ。」せき込む。

お衣は、次第にせまる、音の、怪しい氣配に目をとめた。

「夫な事は有りは爲ないよ。妾は今でも、お前が好きさ。だからお前とかうして遊に來てるんぢやないかね。」

「だつて、今日は遊んだつて、明日になつたら、新納樣處へ歸て仕舞ふんぢやないか。あ〻、つまらない。ア、、ア、。」

「夫なら妾が歸る時、一緒に連れて行て上げ樣よ。」

「イヤだよう。彼んな新納樣の傍へなんか、行きたかアないよ、ア、、ア、。孃樣は、學者が好なんだね。だつて知らないんだもの。馬鹿だからつて、誰も敎へて吳れなかつたんだもの。あ〻死で仕舞ふ。」

お衣は暫く音の顏を見て居た。音も無言で見返してゐる。

「音、今日はお前、餘程どうかしてゐるね、宅へ歸つたらお辰に何か藥を貰つて飮でおきよ。サア闇くなつて來た。もう歸らうねえ。オ〻これを返すよ。」とお衣は、魚網を草の上へ殘して、歩き出した。

ともすれば、お衣の眼を奪つた、彼の一筋道を行くのである。とぼ〲として音の足音が後につゞく。

お衣の顏は夕顏の花の樣に、只眞白に透通てゐた。

四

「音。先刻の孃樣は、何と云ふお名前なの。」

返事がないので、お衣はふりむいた。音は兩手をだらりと垂れて、足許計り見つめて從て來て居る。

「……。」

「お前は今日に限て、イヤに耳が遠いぢやないか。」音

つては、先刻の、秋山様のお客様は何と云ふお名前なの。」
あゝ。と音は漸く首を上げて。
「俺ア嬢様の獨言だと思つた。彼の嬢様の名は富――。富久様と云てゆくの。」
「富久様。さうかい富久呉――子様。さう。」



お衣は二つ三つ頷て又歩き出した。
水の音が聞えなくなつて、足許が大分明るくなつたと思へば、もう町近く來て居るので有つた。
お衣は足走に通りを横切て、又淋しい野路に這入つてゆく。
お衣は人目がうるさいので、何時でも裏手へ廻て庭の

はづれの小門から歸のに極て居るので。此町には旅宿が〆て五つある。其中で、構が大くて立派なのは秋山樓であるが、最もよく名が通てゐて、從て、一番繁昌するのは、お衣の錦水館で有た。あゝ女の美容は眞に建築の美、園景の勝にもました權成者である。

暗いけれども馴れた道、螢を仇に飛せて、さぐりもせずに、爪先上りに裏門まで來た。音がいつもの通り小走りに先に立て扉を開くと、お衣は、夜露に濕た長い袂を一ゆり、ゆすつて、門をくゞつた。振り返て見て居たが、いつもの樣に、音が續て這入て來ぬ。お衣は何故か暫くたまつて立て居た。遠くで風の音がゴウと聞えて、闇の中で、怪しくキヽと鳥が鳴いた。

「孃樣。」

「アイ。」

「孃樣。」音の聲で有る。

「……。」

「お衣樣。」

「エ。」

「左樣なら。」

アナヤと思ふ間に、小門の扉は外から、ガラリと閉された。お衣はハッと驚いた、

「音。どうしたの。何處へゆくのだよ。」と叫び樣。手早く扉を開いて半身を外に突出したが、四邊は眞の闇何にも見えぬ。稍有て又一聲。

「孃樣アン――。」と哀れな聲で、あてもなく遠くから呼ぶ。

語尾は風にむせむで、いとゝ細く。

お衣は惱天から冷水を浴びた心地で、ぞつとして、其處に立つすくむだので有つた。

空は何時か、墨を流した樣に、さながら惡魔の袖の樣な、眞黑い雲が廣がつて、キラ〳〵と輝いた、宵の間の星は皆奥深く包まれて仕舞ひ、松の葉をしごく風の音さへ凄く變て來た。

糸より細い箏の調が、ほのかに木立を渡てくる。

五

「阿母様。雨の様では御座いませんか。何処にいらつしやいますの、御母様。」

と呉子は、琴の爪をはづして縁側へ出て、頻に庭の方を透して見た。

池水は、雨に打かれて、小波を立てゝ居る。向ふは木立深々と、只真暗で、人影もなかつた。

呉子は、口の中で琴歌の一句くりかへして、つと庭下駄を爪かけて、雨ふる中を、ひとり庭にさまよひ出た。

今の先から、ツッと風が止むで、木の葉はピタリと枝にすひ付いた限り。しつとりとした夜氣がなくなつて、何かゝう、今宵此天地を呪ふとして、時を伺ふ魔神の息の様な生ぬるいイヤな氣配が籠てゐる。

呉子は物おもはしげに、足を運ばせて、一歩、一歩、小道を錦水館の方へとつて、小い石橋を渡り、汀に咲た杜若の白い花を袂によりながら、母を求めて、遂に築山の裾を廻つた。庭はもう茲でつきてゐる。前は松林になつて居て、其向ふは、すつと隣の、錦水館の庭なのだ。

「此様な処にいらつしやる筈はないわ。いやにじめじめと濕ばい處だ事。」と獨言を云て氣味悪さうに、足早に、二足三足引返しかけたが、「でも折角こゝまで來たのだから。」と思ひかへしたが、念の爲と云ふ見得で、身を屈めて、松林の中を透して見て居たが、何を見付けたのか、アッと叫ぶと同時に、もう足がもつれて、よろ〳〵と見る間に眞蒼になつた。

十秒。二十秒。聲をのむだ呉子は、必死の勇氣を揮ひ起して、も一度、そつと盜む様に、木越しに或る物の影を伺ふ。大な螢が一匹、舞い〳〵して居る其光を借りて。

其處には、お衣が佇立てゐたのである。

闇が禍たか、洗髪が祟たか。然しこれは呉子も少し慌てたので、如何に夏だからつて、浴衣がけの幽霊もないものである。

「奥様をお尋ねなさいますか。」

幽霊が物を言た。然し其聲は、眞實の幽霊の樣に、沈むで居たけれど、もう呉子は驚かぬ。氣の毒さうに、片手を袖の下へ入れて小腰をかゞめ。

「ハイ。さうですの。こちらの方へ參りは致しませんでしたか。」と丁寧に云ふ。

「先刻。其處の御緣側を、お出ましになつた方なら、すつと彼處の方へ、お越しになつた樣に見ましたよ。」

螢は遂にお衣の肩に休むだ。半面が青く光る。

呉子は又ぞつとして、

「さうで御ざいますか。有難う御座いました。」と會釋もソコ〳〵に、元の道に歸てゆく。

ぽつり〳〵と大粒の雨が落ちて來た。

何處とも知れず、大空の一隅に、ゴウとうなりを打たと思ふと、忽ちある丈けの梢が、ゆら〳〵つとゆらめいて、木の葉は一時にざアと逆に立ち、凄じく千切る樣な葉ずれの音を立てる。

六

珍らしい大荒で有たが、風雨は夜の明けると共に、水の瀬を早めて。螢の住家を多くして。空氣を清めて引上げた。

今日はカラリと好い天氣て有る。淺みどりの空心地よく晴れて、涼しい風がそよ〳〵と、卷上げた簾に音づれて、軒には青楓の影がうつる。

秋山樓の例の客は、今日になつて、俄に發足た樣子であるが、お衣はじつと部屋に籠たぎり、庭までも出なかつた。

幾日經ても、何處へも歸る樣子もない。

いつしか夏もすぎ、秋も半になつたが、音は彼時限り野にも山にも姿を見せぬ。

此町一つを自分の世界にして居たあの馬鹿が、何を目的にして、何處へ行たんだろう。まさか、あの晩の雨風に連れられて、一緒に天へ登つたのでもあるまい。

など〻暫くは人の噂にも登たが、いつか、其名も其面影も、果敢なく土地の人に忘れられて仕舞つた。

考へて見れば此町で、一生飼殺にされる筈の音が影を

隱くしたのも一角の不思議だが、もう此町の物で無かつた名物のお衣が、新納學士と別れて、とう〳〵錦水館に焦げ付て仕舞た方が、餘程不思議だと、それとなく探りを入れた物好も有つたとか。

個中の秘密を誰か知る。孤閨に通ふ荻の上風。枕淋しき鹿の遠音。聞くが中に、いつか此里にも冬が來た。

選　二等

秋の夜ごと

うたゝれの夢はあとなくさめはてゝ萩のみそよぐ里の一つ家入相つぐる鐘の音かすかに淋しさ何にかたとえん折ふし片折戸叩く音のして一ひらの玉章は散りぬ

今日見すばくやしからまし花盛り咲きしものこらず散りも始めず妾の歸宿たれ告げまゐらせしものか折もよしきのふけふ園の萩の秋の花のまっ盛りことに今宵は月もさぞや面白かるべきを久々にて一夜昔を語りたく是非音づれさせ給ひてよとのいつにかわらぬ香子の君の御やさしき御たよりさらぬだに戀しきものゝ行絶えて久しき今日たとへ御まねきなくともとわましものをとまだいえぬ旅の疲もにわかに忘れはてゝいそ〳〵と立出でぬ瀬尾の細道に幾分髪の昔しのびつゝたどりゆく頃は暮色漸うおほひ來りて野がえりの少女衆人の影あなたこなたに別れゆくが宵に藍に紫に黒に見る〳〵色どられゆく實に詩的と古里ながら山里の眺いと珍らしうやがて深尾野には出でぬ八千草にやどる露の玉もすそにさばきつゝ分け入れば秋の花の色やさしさに其まゝ打過ぎ難くて情なけれど手折りつゝ行くにいつしか常盤橋にかゝりぬ折しもかなた遠山の峯ほの赤らみしが見る間に秋色一痕の月さしのぼりけりこゝよりは程もあらじと心も足も急がれつゝ君が御宿近う走りゆき折戸そとおし開けば秋の夜の寂風にゆかし琴の音のまぢりてあはれ君が御不幸なる御身の上うす〳〵きゝ及びぬる妾は何となう胸せまりて思はずたゝずめばしらべはいよ〳〵身にしみて小督の昔も思ひ浮ばるゝよおとなしやかなる御使ひ女に導かれゆくに入るから香のかほり高うあはれ三年の前妾都に出で立たん夜見上げまつりし美くしの君の御姿は今いづこ花のかんばせ月の眉儘に影を止めたれども瑠璃をあざむく御黒髪をあたら切り下げ給ひし御いたわしの御さまや御床には戰場に花と散りましゝとき御背の君のみうつし繪に今もおりさし給ひけんか露をさながらの白ばらの一輪いとゞ物思ひあるさまにかたはらにはかたのみ御笛げに無量の想起さしめて我さへつらき心地するを悲しき御物語りも強ひて笑みにまぎらし給ふ香子の君さてこそ尊き人の妻君ながら御心のほども推計られてなか〳〵に堪えがたかりしふと思ひ出でゝ來れ來し花まゐらすれば

あなうれし君が情けも深尾野の花は我のみいかで眺めむ

とて神前の花瓶にさしそえ給ひつ始めて袖ぬらし給ひぬげに三年の後の今日あひまゐらせては計らずも只何も涙の種なりけり天地靜に窓外には一葉の外に音もなし御ちかひの萩の花はこなたにてまち上げて有ものなとしとやかに立たせ給ふに從まつれば廣き御園には一面の眞萩白萩薄く濃く恰ら綿敷たらんが如き古き昔の葉ども思ひ出られけり折しも誰をまつらんまつ蟲の聲しきりなるにぞあなめづらしと立寄れば石ふむ足駄の音秋夜の靜寂を破りし爲かはたと聲やみぬ御池を右に廻りし頃は月いよいよさえ渡りて御椽のあたり松が枝のあざやかにうつりて恰も墨繪かき流したらんやう花の露の美くしさはげにえも言されざりし只ちりの世遠くのがれにし心地して大空打おほぎつゝたゝずみありしにいざこなたへ入らせ給へとやさしき御聲によばるゝにふと心づけばうれし御茶室には我か爲めときく釜の湯のたぎる音高う香子の君はやつれにし御面にもつきぬ情を笑みにこめて我かたをかえり見させ給へり(天野貞子)

十一月號記事概要

十一月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢

内（定刊數……十二冊 / 增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵稅　一冊　二錢

廣告料

二十四字詰	特等	一等	二等	三等
一行	……	五十八錢	五十錢	四十二錢
半頁（附二行）	二十圓	十七圓	十四圓五十錢	十二圓
一頁（六十四行）	四十圓	三十三圓	二十八圓	二十三圓

▲等級の位置（切目等）は御照會次第御報可致候

註文規程

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢郵券相添申込あれ

明治四十年十月五日發行（第七卷第拾參號）

編輯兼發行人　松原岩五郎

印刷人　山田英二

印刷所　博文館印刷所（東京市小石川區久堅町百八番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話　三百三番 千十八番

本局　二千六百二十番 三千二百二十九番

●洗濯は之に限ります●

衣服の清潔は

徽菌の豫防也

登録商標



代價は……貳錢五厘より拾五錢まで

玉川は(殺菌力に富むでゐます衛生上最必要の品です

玉川は(經濟上徳用です些少の粉で何枚も洗へます

玉川は(絹毛織物綿布等を洗つて地質がいたみません

玉川は(手があれさゝくれの出來る心配がありません

玉川は(石鹸こ違ひておちがよいから汚が選ふございます

玉川は(洗ふに容易で奇麗になり手間がかゝりません

東京日本橋區本町三丁目(電本一七九四)

發賣元 合名會社 玉屋商店支店

根治經驗證

わきが

必ず全治して再發せず

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其部にある毒素を溶消し臭氣を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特効薬にして如何程頑固の腋臭も一回にて著効を奏し且つ絶對に再發せず

定價壹圓拾錢特別製貳圓拾錢

毛のはへる

スネクへ

めはへなわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまわたりのはげ●わけ毛落毛をとめるべき所に毛なき人用ひるも發生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

有力なる最新液にて

毛をはやしたき人は早く試みられよ

色の白くなる

ハーコロン

皮膚を漂白するを以て全身の凡てに白色艶美となる

分の力

主性

根治新治驗證

梅毒

キネール

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒を大小便にとり如何なる劇烈のものも必根治す

輕症は半劑重症も二劑用ゆれば必ず奏效す世間種々雜多の無效なる賣藥の比に非ず

藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑三圓郵券代用一割增

電話 下谷二五三五

專賣 東京下谷區… 出品

オリエンタル藥館

女(後付の一)

（後付の二）

少女世界 第二巻第十四號 定期増刊



拾月拾五日發行
定價金拾錢
郵稅金一錢

秋高くして燈火親しむべき今日この頃、少女諸子と女學生諸孃とのために、絶好の讀みもの『わが學校』があらはれました。清き趣味と多大の利益とは、一巻を繙く時に、おのづから湧き出づるでありませう。内容の一端を下に漏らします。

▲アメリカの女學生　日本女子大學々監　麻生正藏

▲イギリスの少女風俗　女子高等師範教授　宮川壽美子

◉少女芝居　新入生　巖谷小波作

▲むかしの女學生　高等女子實修學校長　山脇房子

▲將來のわが女學生　女子商業學校學監　嘉悦孝子

▲少女遊學の栞　記者

この外、全國の女學校だより、少女唱歌、寄宿舎生活、バザー、運動會、少女談話會、文藝會、音樂會、學校圖書館、學校園、少女幻燈會、創立紀念會、同窓會等、趣味津々たる記事が滿載してあります。學校生活にあると否とを問はず、全國の少女諸子は、速かに一讀せねばなりません。

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の三）


文藝俱樂部
第三十卷第十四號
定期增刊
十月十五日發行
全一冊洋裝菊判　正價廿五錢　郵稅貳錢五厘
講談落語
怪談揃
君子は怪力亂神を說かずといへり、され
ど此の世に因果應報のなからずやは！本誌が來る
十月十五日に發兌する定期增刊は、現代講談落語界の
一流の名手おの／＼十八人宛を選び、最も得意とする怪談を新たに口
演ぜしめたるもの、其の凄絶！なるはいはずもあれ、表紙、口繪、寫眞版、
卷中の挿畫、また現代名家の彩筆を競ふ。大膽者より讀むべく、臆病者
また見逃し能はざるべし。雜誌界一あつて二あらざる珍本、その奈何に面白くて、
しかも凄きかは、乞ふ是を發兌の日に知り給へかしとて、左に目次の概要を掲ぐ。
△江島屋……三遊亭圓窓
△雨夜の傘屋……錦城齋典山
△おすわどん……桂文治
△四谷の怪談……桑々齋桃葉
△乳房榎……三遊亭小圓朝
△釣天井……西尾麟慶
△螢見物……柳家小さん
△蛤吸ひ……邑井一
△仙臺屋……三遊亭圓右
△嫁の恨み……眞龍齋貞水
△染分け手綱……林家正藏
△江戸節おこん……一龍齋貞山
△いがぐり……三遊亭圓左
△幽靈證文……神田伯山
△おぬひの火……柳亭燕枝
△小幡小平次……一立齋文慶
△ねち兵衞……三遊亭圓遊
△紅葉上人……神田松鯉
△古葛籠……橘家圓藏
△實說皿屋敷……猫遊軒伯知
△雜錄怪談百物語……口演者一同▽

女(後付の四)

十月十日發行

太平洋 第六卷第廿一號 臨時增刊

現代實業家の書簡

▲收錄の活況▲筆蹟の活躍

▲肖像の生動▲口繪の奇趣

定價金拾貳錢 郵稅一錢五厘

本誌は尠からざる困難を以て之を蒐集せり何をか困難といふ、人は多くの場合に於いて其の私信を公開せらるゝことを慊ぶ者にあらず、況んや自他の事業に影響する所大なる實業家の書信に於いてをや吾人は聊か世に向つて誇らんとす、本誌なればこそ之を成すことを得たれと。

諸君は之を讀まざる可らず、讀んで之を刊行する本誌の眞意を解さざる可からず、而して本誌の苦辛に對して深謝する所なからざる可からず。

發兌元 東京市本町 博文館

（後付の五）

農業世界第二巻第十二號臨時增刊

農事獨習

十二月二十五日發行　○定價金二十錢郵稅貳錢

◎本誌特得の精巧優美にして學術的標本たる

◎三色版色刷石版寫眞版銅版數十餘葉挿入

内容の概要

△穀物の作方と收納貯藏方法
△蔬菜の栽培
△果樹の植付と手入
△牧草と飼料
△四季草花の培養
△山林有用樹木の仕立法
△家畜類の飼方と管理
△農林水産物の廢物利用
△虫害の驅除豫防
△家禽類の育成
△養蠶の方法と注意
△蠶種の選擇購入貯藏の注意
△魚類の蕃殖利用
△副業的農産物の利用法
△林産物製造
△水産物の製造と貯藏
△病害の療法と注意
△家畜病の治療

學理と實地とは兩々離る可らず、經驗に偏し、學理に傾くは最も避くべき所、現時の農家は斯業の學識なからざる可らず、農學の途にある者實地の心得なからざる可らず、學識なきの農家は杖なき盲人に等く、經驗なきの學生は寶の山に動き得ざるが如し、本書は則ち此の兩者に對し唯一の技となり、無二の動力たらんが爲めに發刊せられんとす、揭ぐる所は學理と實驗とを調和し、農家及學生の知得せざる可らざる斯道一切の事項を網羅し、行文又平易にして何人にも領解し得べく是非座右に備ふべき斬新有益なる良師なり

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の六）

最近受驗界

附 各官立學校 明治四十年度 入學試驗問題集

正價金貳拾錢　郵稅貳錢

受驗は學生諸君に取りての一種の死活問題也。而してこの難關を首尾よく擊破せんには勉强も大事なり膽力も亦必要なれど受驗界一般の狀態、並びに其背後に伏在せる暗潮に通して此等の實際智識を得ること、これ最要の事業とす。且つや、學校に依りては、それぐ特殊の受驗方法あり技術もあるなり。即ち「最近受驗界」に當代受驗者の必須科目を網羅して彼等に學問以外の一大便宜を與ふるものとす。

◎中學世界 定期增刊（本館賣切れ各取次店にて御購求を乞）



◎口繪水彩畫（一頁大）一葉◎

◎繪葉書一葉　寫眞版十數葉◎

（綴付の七）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

●博文館發行雜誌小賣前金表

⊙博文館雜誌御注文の節は左の前金表に依り御注文願上候
⊙振替貯金にて一圓以下御送金の節は手數料として二錢を增し御送附相願候

誌名	發行	一冊定價	郵税	前金		
太陽	毎月一回發行 定期增刊年四回	●一冊金三十錢	▲郵税三錢	四冊(郵税共)…金一圓二十九錢	八冊(同)…金二圓四十四錢	十六冊(同)…金四圓六十八錢
商工世界 太平洋	毎月二回發行 外に臨時增刊	●一冊金十二錢	▲郵税一錢五厘	六冊(郵税共)…金七十七錢	十二冊(同)…金一圓五十三錢	廿四冊(同)…金二圓九十六錢
農業世界	毎月一回發行 臨時增刊二回	●一冊金二拾錢	▲郵税二錢	三冊(郵税共)…金六十三錢	六冊(同)…金一圓二十三錢	十二冊(同)…金二圓四十錢
文藝俱樂部	毎月一回發行 定期增刊年四回	●一冊金廿五錢	▲郵税二錢五厘	四冊(郵税共)…金一圓五錢	八冊(同)…金二圓	十六冊(同)…金三圓九十錢
汽車汽船旅行案内	毎月一回發行	●一冊金十錢	▲郵税一錢五厘	三冊(郵税共)…金三十三錢	六冊(同)…金六十三錢	十二冊(同)…金一圓二十錢
寫眞畫報	毎月一回發行 外に臨時增刊	●一冊金二十錢	▲郵税二錢	四冊(郵税共)…金八十三錢	八冊(同)…金一圓六十一錢	十六冊(同)…金三圓十二錢
幼年畫報	毎月一回發行 定期增刊年四回	●一冊金十錢	▲郵税五厘	四冊(郵税共)…金四十錢	八冊(同)…金七十九錢	十六冊(同)…金一圓四十八錢

誌名	發行	一冊定價	郵税	前金		
少年世界	毎月一回發行 定期增刊年四回	●一冊金十錢	▲郵税一錢五厘	四冊(郵税共)…金四十四錢	八冊(同)…金八十七錢	十六冊(同)…金一圓六十四錢
少女世界	毎月一回發行 定期增刊年四回	●一冊金十錢	▲郵税一錢	四冊(郵税共)…金四十二錢	八冊(同)…金八十三錢	十六冊(同)…金一圓五十六錢
女學世界	毎月一回發行 定期增刊年四回	●一冊金二十錢	▲郵税二錢	四冊(郵税共)…金八十三錢	八冊(同)…金一圓六十一錢	十六冊(同)…金三圓十二錢
中學世界	毎月一回發行 定期增刊年四回	●一冊金二十錢	▲郵税二錢	四冊(郵税共)…金八十三錢	八冊(同)…金一圓六十一錢	十六冊(同)…金三圓十二錢
文章世界	毎月一回發行 臨時增刊年二回	●一冊金二十錢	▲郵税二錢	三冊(郵税共)…金六十三錢	六冊(同)…金一圓二十三錢	十二冊(同)…金二圓四十錢
英語世界	毎月一回發行	●一冊金十錢	▲郵税一錢	三冊(郵税共)…金三十一錢五厘	六冊(同)…金六十錢	十二冊(同)…金一圓十四錢
數學世界	毎月一回發行 外に臨時增刊	●一冊金十五錢	▲郵税一錢	四冊(郵税共)…金六十三錢	八冊(同)…金一圓二十四錢	十六冊(同)…金二圓四十四錢

女學世界
（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）
第七卷第拾參號
（明治四十年十一月五日發行 每月一回五日發行）

（定價金貳拾錢）